'95年宣教協議会

日本聖公会の証と使命

歴史への責任
と
21世紀への展望

講演者　ジョン・ポビー司祭（WCC神学部門スタッフ）

塚田　理司祭（立教大学総長）

1995年8月28日～31日　清里・清泉寮

報告書

日本聖公会'95宣教協議会実行委員会

目　次

はじめに 2
95宣教協議会日程表 3
実行委員会名簿 4
運営委員会組織図 4
参加者名簿 5
ゲスト参加者名簿 6
講師、証言者、発題者の紹介 7
開会宣言 9
会長　主教　仲村　實明
開会礼拝メッセージ 10
チャプレン　主教　古本　純一郎
日本聖公会 '95宣教協議会宣言 12
日本聖公会 '95宣教協議会共同ざんげ .. 17
宣言・共同ざんげ（英文） 18
主題講演
—日本の歴史と宣教理解— 26
司祭　塚田　理
特別講演【21世紀への教会の展望】
—あらゆる場を変革するために— 52
司祭　ジョン・ポビー
あらゆる場を変革するために（参考論文）. 60
司祭　ジョン・ポビー
聖書研究【「正義を行う」ことへの召し】... 76
司祭　井田　泉
夕の礼拝での証言
洪曼姫（ホン・マニ） 85
司祭　レックス・レイエス 89
発題　I
【日本聖公会の歴史への責任と応答】
日本聖公会の
歴史への責任と応答 95
主教　仲村　實明
戦時教育体験を通して気づいたこと .. 98
岩井　梅代
カイシャの論理が福音を空洞化する . 101
清　公一
原子炉と聖公会 104
相原　太郎
発題　II
【21世紀への展望】
—思いを巡らし働き始めるために—
「障害者」との共生 108
司祭　杣取　賢一
日高　実則
環境問題 111
山田　久美子
パートナーシップ 116
中尾　貢三子
三木　メイ
障害者　II 120
司祭　佐々木道人
質問と意見 121
閉会メッセージ 124
李　在禎（イ・ジェジョン）神父
ゲストグループ報告 127
ゲストの報告書からの抜粋
司祭　テリー・ブラウン 128
司祭　ピーター・リョン 135
司祭　レックス・レイエス 139
礼拝 142
宣教協議会ニュース 156
神の息（協議会日報） 176
関係新聞から
キリスト教新聞 190
聖公会新聞 191
アンケートの声 193
資料紹介 196

はじめに

準備期間を入れると約4年の願いと祈り、ひとりひとりにその願いを起こさせてくださってからは更に長い期間の積み重ねのなかで、この宣教協議会は行われました。戦後50年という記念すべき年、1995年。この年に至るまでできなかったという反省もあろうが、やはり、日本聖公会のなかに、このようなことがなされてきたという喜びを素直に受けとめたいと思います。

全国から集まった180名余りの内、多数の方々が、日本聖公会の伝道の課題として、先ず教会の在り方をキチンと正すこと、福音にしっかりと立った生き方を目指すこと、そのための戦争責任の問題であることを確認できたことは大きいことでした。また、全く戦争を知らない世代の人たちが、これは自分達の問題なのだ、これからの教会の問題と切り放せない大切な課題なのだと言うことを率直に、積極的に受けとめていたことが印象的でした。特に、スチュワードとして奉仕してくれた青年達の働きは特筆すべきものがありました。

協議会という方式で行う会議は、日本聖公会でも初めての経験だったために、最終日までに宣言を纏めていくことがとても困難でありましたが、各分団から選ばれた起草委員会が夜を徹して、それぞれのグループの意見を集約してくださいました。

また、ある参加者から指摘があったことですが、障害者に対して当然あるべき配慮（たとえば宿舎の部屋割りや点字資料の準備が不十分であったことなど）が欠けていたことは、準備をする側の責任で本当に申し訳なかったと思います。少数者に対するあり方を21世紀の教会の課題として取り上げようとしていた協議会でありながら、このような事態で、まだまだ至らなさを痛感した次第です。こうした批判をしっかりと受けとめつつ、真の福音を探り求めていく教会であり続けたいと願います。

外国からの参加者の方々も、日本聖公会のこの姿勢については大きな拍手を送ってくださいました。日本によって侵略を受けた地域からの参加者である韓国、フィリピンの代表の方々は、日本聖公会がこんなにも真剣に取り組もうとしているのかと驚かれましたし、欧米からの出席者は、自分達の植民地支配と伝道に関する深刻な反省の手がかりが与えられた、と述べていました。参加された各国の聖公会とより真摯に、深い関係が結ばれることを期待できると思います。

ここに、多くの方の努力によって宣教協議会の報告書がまとまりました。プログラムが多すぎて、消化できないといっておられた参加者の方は、もう一度読み直してください。参加されなかった方も、ぜひ、国と自分の信仰、いいかえれば、歴史の中にあって生きて働く神のわざをどうとらえていくかについて、思いをめぐらせてください。できれば、自分たちの教区、教会がどう生きて働いてきたのかを問い直す一助になればと願います。

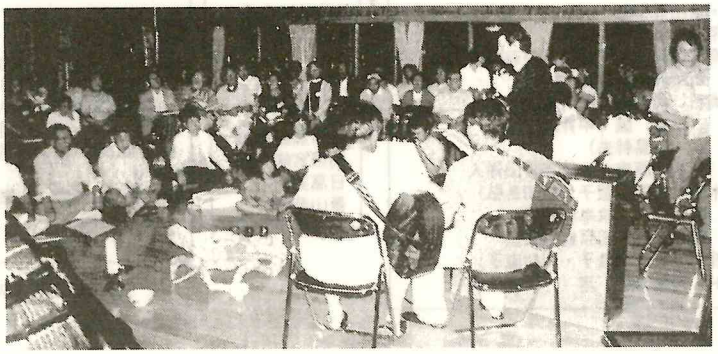
この宣教協議会がはじまる1週間ほどまえに「この協議会のために毎日毎日祈ってきました。どうかみ心にかなったものとなりますように」という熱い手紙をある主教様からいただきました。この祈りをはじめ、多くの人々の祈りによって支えられた宣教協議会であったことを感謝し、ご報告いたします。

1995年10月15日

実行委員長　司祭　宮嶋　眞

95宣教協議会日程表

8月28日(月)	29日(火)	30日(水)	31日(木)
			聖餐式
	朝の祈り・朝食		朝食 チェックアウト
	分団Ⅰ 主題講演を受けて 内容のわかちあい	特別講演 【To Transform Each & Every Place J・ポビー司祭	全体協議 まとめ…個人、全体
	聖書研究 井田司祭	分団Ⅲ 特別講演を受けて 内容の分かち合い	閉会礼拝 メッセージ：李司祭 （聖公会大学・韓国）
	昼食	昼食	
実行委員集合	発題―歴史を生きる教会 岩井梅代、仲村主教、 清　公一、相原太郎	発題―21世紀への展望 思いを巡らし 働きはじめるために 佐々木司祭、三木メイ、 山田久美子	
	ブレイク		
受付	分団Ⅱ ―発題を受けて… 日本聖公会の 歴史への責任と応答	分団Ⅳ ―発題を受けて… 日本聖公会の21世紀への 展望、提言、課題の明確化	
開会礼拝 メッセージ：古本主教 オリエンテーション	自由時間		
夕　食		夕　食 ―交流会― ゲストの挨拶	
主題講演 【日本の歴史と宣教理解】 塚田司祭 …質疑応答	分団Ⅱ 続き…	祈りの集い 黙想	
祈りの集い 証言―ホン・マニさん （韓国）	祈りの集い 証言―R・レイエス司祭 （フィリピン）		



◇実行委員会名簿◇

会　　長　主教 仲村實明

チャプレン　主教 古本純一郎

実行委員会　【各教区より】 司祭 広谷和文、司祭 影山博美、司祭 金子　功、岡野　峻、司祭 佐々木道人、司祭 相原俊次、司祭　渋沢一郎、司祭 原田文雄、司祭 西田真哉、司祭 桑原一郎、司祭 早川義也、司祭 鬼本照男

【関連委員会より】 糸井玲子、司祭 楠本良招、執事 西原廉太、司祭 野村　潔、三木メイ、八幡明彦、執事 山野繁子

礼　　拝　執事 加藤博道、景山恭子、司祭 宮崎　光、日高実則

事 務 局　司祭 宮嶋　眞(長)、司祭 井田　泉、執事 加藤博道、執事 香山洋人、司祭 楠本良招、執事 笹森田鶴、鈴木　慰、執事 西原廉太、司祭 野村　潔、司祭 前田良彦、目崎甲弍、八幡明彦

管区事務所　島田麗子、司祭 植松　誠

スチュワード　(中部)川村直子、(京都)飯田岳弘、(京都)鈴木恵一、(京都)中井珠江、(京都)矢萩新一、(京都)山下寛晶、(大阪)黒崎聖子、(大阪)中尾貢三子、(大阪)松本　誠、(九州)牛島幹夫、(沖縄)新崎和歌子

◇運営委員会組織図◇

運営委員会
司祭広谷和文・司祭鬼本照男・執事山野繁子・司祭原田文雄・竹内紀久子
司祭宮嶋　眞・島田麗子・司祭谷　昌二・司祭前田良彦・執事加藤博道

総　務
司祭宮嶋　眞・島田麗子
記録　目崎甲弍・執事香山洋人
・司祭宮崎光（山下寛晶・矢萩新一）
オプション　司祭西田真哉
渉外　司祭輿石　勇＝海外ゲスト
会場・機材　（松本　誠・中井珠子
・牛島幹夫）
資料・広報　執事西原廉太・執事香山洋人
（鈴木恵一・黒崎聖子・飯田岳弘）
登録・会計　阪田隆一・執事藤井慶一
生活・宿泊　鈴木　慰・司祭楠本良招
（中尾珠子・新崎和歌子・川村直子）
スチュワード　司祭野村　潔

分団
司祭前田良彦
司祭宮嶋　眞

礼拝
執事加藤博道
司祭宮崎　光
日高実則
景山恭子

声明起草
司祭谷　昌二
分団報告者
A司祭角瀬克己　B池住圭
C司祭大町信也　D井出和子
E司祭秋葉晴彦　F小林幸子
G司祭河崎　望　H司祭中野准之
I司祭山本　真　J司祭上原榮正
補　佐
執事西原廉太　八幡明彦
執事笹森田鶴
（スチュワード）

（　）内の氏名はスチュワード

◇参加者名簿◇

（教区別・五〇音順）

北海道教区

司祭　雨宮　大朔　　司祭　大友　正幸　　司祭　大町　信也　　三溝　千春
須田　明夫　　司祭　広谷　和文　　藤井　清

東北教区

司祭　井口　諭　　井出　和子　　司祭　影山　博美　　司祭　越山　健蔵
司祭　涌井　康福

北関東教区

司祭　秋葉　晴彦　　打田　茉莉　　司祭　金子　功　　菊池　邦杳
司祭　木村　直樹　　司祭　輿石　勇　　長谷　範子　　W.F.ハナマン
司祭　広石　信　　松浦　志保　　松本　幸子　　目崎　甲弍

東京教区

秋山　幸美　　糸井　玲子　　司祭　今井　烝治　　岩井　梅代
江種　寅夫　　大井　優子　　岡野　峻　　小川　加代子
景山　恭子　　執事　加藤　博道　　執事　香山　洋人　　神崎　和子
菊地　萬木　　小林　幸子　　司祭　佐々木　道人　　執事　笹森　田鶴
司祭　下条　裕章　　鈴木　慰　　司祭　関　正勝　　司祭　杣取　賢一
主教　竹田　眞　　司祭　塚田　理　　畑田　謙司　　速水　昌子
聖職候補生　日高　実則　　執事　藤井　慶一　　藤平　淑子　　司祭　前田　良彦
松浦　順子　　松田　義夫　　司祭　宮崎　光　　執事　八木　正言
柳堀　素雅子　　山梨　英夫　　執事　山野　繁子　　八幡　明彦
司祭　吉村　庄司

横浜教区

相沢　緑　　司祭　相原　俊次　　相原　太郎　　岩間　芳子
甲藤　善彦　　聖職候補生　鎌田　雄輝　　司祭　河崎　望　　阪田　隆一
聖職候補生　田中　英和　　中原　千津子　　宮崎　道忠　　山田　久美子

中部教区

池住　圭　　菊田　よね子　　清　公一　　司祭　楠本　良招
倉戸　ツギオ　　司祭　渋沢　一郎　　島田　麗子　　竹内　紀久子
司祭　立川　浩三　　司祭　土井　宏純　　執事　西原　廉太　　司祭　野村　潔
原　恒二　　樋浦　久江　　松村　真理子　　松本　普
司祭　森　一郎

京都教区

司祭　井田　泉　　神田　ちか子　　岸本　裕一　　久保　寿子
聖職候補生　黒田　裕　　聖職候補生　小林　聡　　佐々木　靖子　　司祭　谷　昌二
司祭　塚田　道生　　司祭　原田　文雄　　平岡　義和　　廣瀬　洋子
司祭　三浦　恒久　　三木　メイ　　司祭　柳原　義之

大阪教区

尼子　美喜	荒川　真紀	司祭　磯　晴久	司祭　植松　誠
司祭　宇野　徹	呉　光現	司祭　金山　昌照	北川　規美子
栗山　義信	栗山　禧子	佐治　孝典	主教　高野　晃一
田原　敬司郎	司祭　鍋島　守一	司祭　西田　真哉	畑野　栄一
浜野　淳	司祭　原田　光雄	牧口　一二	松山　献
司祭　宮嶋　眞	司祭　山本　眞		

神戸教区

司祭　池原　貞雄	司祭　桑原　一郎	司祭　瀬山　公一	司祭　角瀬　克己
司祭　藤井　尚人	主教　古本　純一郎	司祭　吉田　雅人	

九州教区

主教　飯田　徳昭	執事　石原　絹子	佐山　みち江	司祭　柴本　孝夫
司祭　中野　准之	司祭　早川　義也	司祭　廣石　修一	

沖縄教区

新垣　聖子	司祭　上原　榮正	司祭　鬼本　照男	司祭　高良　孝誠
主教　仲村　實明	司祭　中山　眞	宮城　一郎	

◇ゲスト参加者名簿◇

日本キリスト教協議会	総幹事	大津　健一
日本カトリック教会		小林　敬三
米国聖公会	「正義と平和」担当	The Rev. Brian Grieves
カナダ聖公会	アジア太平洋地区担当	The Rev. Dr. Terry Brown
英国CMS	南・東アジア地区担当	The Rve. Dr. Peter Leung
英国USPG	東アジア担当	Ms. Cheri Newton
フィリピン聖公会	管区事務所総主事	The Rev. Rex B. Reyes, Jr.
		Miss Bronwen P. Sagayo
大韓聖公会	聖公会大学校総長	The Rev. Dr. Jaejoung Lee　李　在禎
		Ms. Hong Manhee　洪　曼姫
WCC	UNIT1:神学部門主事	The Canon Dr. John S. Pobee

◇講師、証言者、発題者の紹介◇

【主題講演】

塚田　理司祭　……新潟県高田市の出身。立教大学、聖公会神学院を卒業後、英国オックスフォード大学セントピータースカレッジ大学院に留学、Ph.D.を受領。聖公会神学院教授、立教大学教授を経て、現在、立教大学総長。

【特別講演】

ジョン・ポビー司祭（Revd.JohnPobee）

……アフリカ、ガーナの聖公会司祭。1993年、南アフリカ連邦共和国ケープタウンで開かれた全聖公会首座主教会議、全聖公会中央協議会の全体講演の講師として招かれて講演した。現在は世界教会協議会（WCC）神学部門で活躍中。

【証　　言】

ホン　マニ（洪曼姫）さん

……大韓聖公会オモニ会前会長。戦中、お父さんが独立運動で活躍、投獄された。1994年3月来日、日韓の歴史を学ぶ会（於目白聖公会）で講演された。

レックス・レイエス司祭（Revd.RexReyes）

……北フィリピン教区／マウンテン・プロビンス（山岳州）出身。聖アンデレ神学校（マニラ）卒業。現在、フィリピン聖公会総主事の要職に就く傍ら、マニラ市郊外にて、主に北部ルソン出身の人々のためのコミュニティづくりを行っている。また、東南アジアの諸教会との交流やネットワークづくりにも深い関心を持っている。

【聖書研究】

井田　泉司祭　……聖公会神学院専任教員、京都教区司祭。

【閉会メッセージ】

イ　ジェジョン（李在禎）神父

……大韓聖公会ソウル教区司祭、韓国聖公会大学学長。

【発題―歴史を生きる教会】

岩井　梅代さん　……練馬聖ガブリエル教会員、女性が教会を考える会メンバー、GFS元会長。

仲村　實明主教　……沖縄教区主教

清　公一さん　……名古屋聖ヨハネ教会員、高校教師。

相原　太郎さん　……逗子聖ペテロ教会員、大学院生。

【発題―21世紀への展望】

山田久美子さん　……静岡聖ペテロ教会員、YWCAアジア国際環境会議委員長

三木　メイさん　……京都聖三一教会員、女性が教会を考える会メンバー

佐々木道人司祭　……東京教区聖ルカ礼拝堂チャプレン、教区宣教委員長、「障害者」プロジェクトメンバー

宣教協議会々場

開会宣言

会長　主教　仲村實明

皆さん今日は。日本聖公会の七つの委員会、今、六つになりましたけれども、その方々が一所懸命になってこの会を開催するに至るまで導いて下さいました。実に二回の総会を経たのであります。各教区から選ばれた実行委員の方々にも本当にご苦労さまでしたと申し上げます。それから事務局の方々、管区事務所の方々に心から感謝申し上げたいと思います。

この会のために塚田総長先生、それからW.C.C.のポビー先生を特別講師としてお迎えできますことをも併せて感謝申し上げます。それから日本キリスト協議会の方々、カトリック協議会から、それからアメリカ聖公会、カナダ聖公会の代表の方々もお迎えしております。それからイギリス聖公会のC.M.S.、U.S.P.G.からもお迎えすることができました。フィリピン聖公会から二人の代表の方々、大韓聖公会からも二人の代表の方々をお迎えして、この会が開けますことを皆さまと共に喜びたいと思います。

日本聖公会主教会では去年の春でしたかね、「日本聖公会の現状及び将来に関する主教会の見解」を出した事がありますが、日本聖公会の体質はどうも牧会型なんだ、内向きでいけない、伝道型にしたいということをかねがね申し合っておりました。けれども何時まで経っても「日本聖公会はこれでいいんだろうか。明日の日本聖公会はこれでいいんだろうか」と。いつまでたっても日本聖公会のことしか考えない。相も変わらず内向きですね。なぜ外向きに、「国家としての日本はこれでいいんだろうか」と考えないんだろうか。この前の参議院選挙で投票率は50%を割ってしまった。どうしてなのか。それは官僚主義がいけないんだ。そこに原因があると思うのです。官僚は「休まず、遅れず、働かず」。言われたことだけをする。命令があれば人をも殺す。「私は貝になりたい」という映画をご覧になったと思いますが、捕虜になったアメリカの兵士を殺す場面がありましたね。天皇の命令で人殺しもする。けれども命令がなければ何にもしない。その典型が小野田さんですね。命令がなかったから30年もフィリピンのルバング島に留まったとか、横井庄一さんもそのいい例だったと思うんですが、その体質が何時まで経っても直らないですね。政治家が悪いんでないんですよ。天皇を中心とする官僚主義が日本を駄目にしているんでないでしょうか。

私たち、内向きを止めて外向きになろう。自分のために働く教会は滅びる。これは1963年のあのカナダのトロントで行われたMRIのキャッチフレーズでした。30年以上前のことですよ。30年前から言われているのにまだ変わらない。自分のことしか考えない。自分のために死ぬというのは30年も前ではないですよ。2000年前、イエス様の教えです。自分はどうなってもよいからこの日本がよくなるようにとの生き方になる。そうしたら日本聖公会は若い人たちの魅力ある教団になるだろうと思うんです。どうかこの会がですね、そういう風に古い牧会型の日本聖公会から脱皮して伝道型の日本聖公会に蘇る、その契機となればと願って私の開会の言葉とします。

開会礼拝メッセージ

主教　古本　純一郎

詩篇の第133編に「見よ、兄弟が共に座っている。何という恵み、なんという喜び。」このように詩篇の作者は歌っておりますが、東から西からそして南から北から、主にある兄弟姉妹がこの清里の山に集いまして、今ここにこのように共に座っている、この恵みと喜びを共にかみしめたいと思います。今日この時を迎えるに至りますまで、さまざまな問題と、紆余曲折がございましたが、実行委員会、事務局の皆さんの情熱と努力、また全教区、教会、聖職、信徒の励ましと祈りに支えられまして、このように実現にこぎつけることができましたことを覚え、皆様と共に感謝を致したいと思います。しかし何よりも背後にありましてこの協議会を導き、可能にして下さったお方、全ての者が一つになることを望んでおられる主なる神様に対して、心からの感謝と賛美を捧げたいと思います。

この協議会を始めるに当たり誠に当然なことでありますが、参加する私たち一人一人がお互いに心しておきたいことを、私はヤコブの手紙から二点だけ提案しておきたいと思います。

その一つは、語るよりも聞くことを優先させるということであります。主イエスは多忙な宣教の合間をぬって、よく山に退かれました。その目的は祈るためであり、父なる神様のみ心、み言葉を聴くためでございました。弟子たちをつれて山に登られた時も、弟子たちと宣教方策について協議するためではなく、祈りと静想の時を持つためでございました。「私の愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。誰でも聞くに早く話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。」と聖ヤコブは戒めております。私たちは語りたいこと、主張したいことを、お互いに沢山もっていると思います。しかし、まず、聴く、学ぶということを優先し、大事にしたいと思うのであります。

先日、数人の聖職がこの協議会にふれまして、「協議会とはいってるけれども、既に一部の者たちによって結論が出ていて、これを説得し承認させる会に過ぎないのではないか。」このように話しているのを耳に致しました。

私は、先主日の旧約日課に選ばれました預言者エレミヤを通して語られたお言葉を思い起こしたのであります。「私はただ近くにいる神なのか、と主は言われる。私は遠くからの神ではないか。誰が隠れ場に身を隠したなら、私は彼を見つけられないというのかと主は言われる。天をも地をも私は満たしているではないかと主は言われる。」

これは申すまでもなくその意味するところは、神は私たちが理解し捉えうる方、あるいは、私たちにとって誠に都合のよい方ではなくして、私たちの理解と知識を遙に超えてお

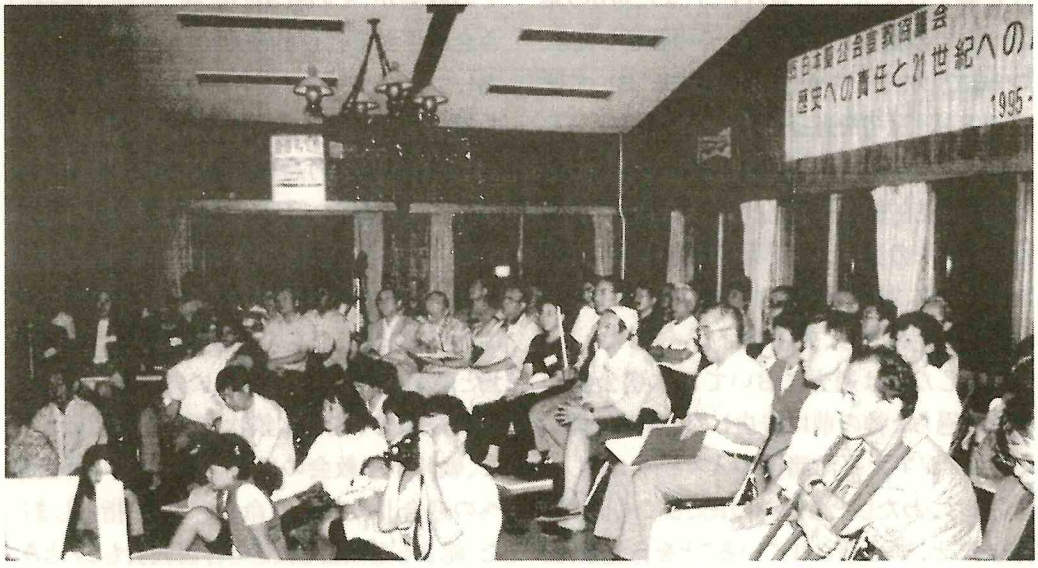
られる、偉大で畏るべき方であられる。神のみがどこにもいまし、全てのことを悉く承知しておられる唯一のお方である。これに対しまして私たち人間の知識と思いは、偏って浅く真実を掴むことは難しいのであります。

例えば、弱者と言うが一体本当の弱者とは誰なのか。女性司祭の問題に致しましても、私たちに二者択一をすることは正しいことか。あるいは可能なことか。どのような問題を取り上げましても、さまざまな思いと解釈が存在するのであります。それ故にこそ私たちはお互いに謙虚でなければならないと思います。他者の異なる考えや意見に対しては寛大であり、十分に耳を傾けるべきであります。神は講師、説教者、発題者を通して、あるいは私たちの隣にいる友人たちを通し、また、意見を異にする人たちを通して、それだけでなく、この美しい大自然を通して私たちは語りかけて下さる、その神の言葉に耳を傾けたいと思うのであります。

第二のことは、聴くだけで終わることなく、み言葉を行う人になることであります。聖ヤコブは、「み言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて聴くだけで終わる者になってはいけません。自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず自分の心を欺くなら、そのような人の信心は無意味である。」このように勧めております。

「これまで何度も私たちはこのような協議会を持って参りましたが、しかし何も変化がなかったではないか。時間と経費の浪費ではなかったか。」という声を聞きます。聴くだけ、語るだけ、話し合うだけ、そして決議するだけで終わってはならないのであります。神の前に祈り、心を一つにして話し合い合意したこと、決めたことに対しましては、私たちはそれを持ち帰って、教区、教会の聖職、信徒の皆さんに報告し伝える義務がありますし、ここに参加している一人一人が、まずその遣わされた生活の場において実践をすることであると思います。

どうかこの協議会が日本聖公会にとって、新しい歩みの力強いスタートでありますように願ってやみません。



日本聖公会 '95宣教協議会

宣　言

1) はじめに

「それゆえ、主は恵みを与えようとして
　あなたたちを待ち
それゆえ、主は憐れみを与えようとして
　立ち上がられる。
まことに、主は正義の神。
なんと幸いなことか、
　すべて主を待ち望む人は。」

（イザヤ書30:18）

1994年5月日本聖公会第46（定期）総会は、95年宣教協議会の開催を決議しました。この決議に基づき、1995年8月28日から31日、わたしたちは、<戦後50年>の節目にあたり、「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」をめざして「日本聖公会の宣教－歴史への責任と21世紀への展望」という主題のもと、この協議会に集いました。主題講演（「日本の歴史と宣教理解」）や聖書研究（「正義を行なうこと」への召し）、また祈りの集いの中での韓国、フィリピンからの証言を聞き、いままでわたしたちが、自らの信仰において歴史の総括と反省を怠ってきたことを確認しました。さらに特別講演（「あらゆる場を変革するために」）、現在も痛みを負わされている女性や障害者からの証言および環境問題からの問いかけを受け、21世紀へ向けて働きはじめるために課題を明確化し、提言を行ないました。

わたしたちは過去において日本聖公会が犯した過ちを神の前に告白し、日本が侵略してきたアジア太平洋諸国の人々と神に赦しを請います。わたしたちが神の民として<正義を行なうこと>へと召されていることを自覚し、世界の分裂と痛み、叫びの声を聞くことのできる教会へと変えられることを祈り求めます。

生きておられる神、
生きて働いておられる神の霊が
　わたしたちをここに集められました。
証しのために、祝いのために、
　たたかうために。
あなたのいのちの中で、
　悔い改める力を与え
わたしたちを新たにしてください。

（礼拝のなかでもちいられた祈りより）

2) 日本聖公会の歴史への責任と応答

わたしたちは、人類の愛と一致をめざして十字架につけられたイエスと共に死に、イエスと共に復活の新しい命に生かされる信仰の決断において、初めて真に隣人と出会い隣人を愛することができる新しい神の共同体（＝教会）へと招かれています。しかし、しばしば制度としての教会が、その教勢の拡張、体制の維持のみをめざす自己目的のために、この福音を歪曲してしまいます。イエスが共に苦しみ共に歩む道を示された隣人に出会うことなく、愛と連帯の関係を見失う過ちに陥ってこなかったか、わたしたちは問い続ける責任を負っています。

五十年前の1945年、わたしたち日本聖公会は、天皇制国家日本の敗戦と植民地支配の終焉という大きな歴史的転機に立ちました。その年の総会で、佐々木鎮次主教は告示において、戦時下の教会の反省を述べる中で「国策への迎合」「教会の使命の忘却」を指摘しました。総会も主教会も教区も各個教会もこのとき、

戦時下に預言者的働きをなしえなかったことを徹底的に反省し、日本が侵略支配した隣人へ心から謝罪し、それを通した真の和解の関係を模索する機会を、神から与えられていたのです。

しかし、日本聖公会は、「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」などをもって祈り、他民族支配や戦争への協力をキリスト教の名において肯定したという過ちを顧みることなく、1947年二十二総会において、1938年版の祈祷書を正本として復活採用しました。その祈祷書には、天皇の支配を神の御旨とみなす「天皇のため」「紀元節祈祷」などの祈祷文がありました。さらに1959年改正まで、祈祷書の公会問答において「隣に対してなすべきことは如何」の答えとして「…天皇陛下とその有司(つかさ)に従い…」と教え、聖餐の前の全公会の祈りにおいて「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈り、早晩祷では天皇への祝福を唱和することを義務づけていました。このように日本聖公会は戦後処理を自覚的にできなかったことは明らかです。

その後日本聖公会は、祈祷書改正において、「紀元節祈祷」・「天皇のため」の祈り等を削除してきましたが、国家の意志を神の意志とする信仰の決断をしてしまったことについて、根本的な反省をいまだ表明していません。今回、協議会に集ったわたしたちは、教会として、歴史への責任を自覚する原点がここにあることを確認いたしました。

日本聖公会は、その設立以来、福音に反する国の政策や時局にたいして妥協を続け、それを徹底的に拒んだ経験をほとんど持っていません。明治憲法下では「安寧秩序を乱さず臣民たるの義務に反しない限り」の「信教の自由」をもってよしとし、皇国臣民化教育、神社参拝政策、「八紘一宇」の名による侵略戦争正当化などの国策にとりこまれ、気づいたときには抵抗の余地のないところにまで来ていたのです。日本聖公会が主に英国・米国・カナダ聖公会とのつながりゆえに「官憲の圧迫」を受けた時期がありますが、その経験にもかかわらず、わたしたちの教会は、抑圧されたものと共に立つ姿勢をうみだすことができませんでした。

皇国臣民化政策の結果として引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、戦後は米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られ、1972年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄からの問いかけがありました。しかし、その後も本土側が応答することを怠ってきたことを、日本聖公会は反省しなければなりません。

この協議会において、韓国やフィリピンの聖公会に属する隣人たちから、民族的な苦難のなかでのいのちがけの信仰について証言を聞きました。そしてわたしたちは、日本聖公会が歴史的事実を知らず、知ろうとせず、知らせずにいたことを改めて認識しました。わたしたちは、加害者となり、福音から離れていた自らの教会のあり方を検証しなおす必要を痛感します。日本政府・国会は、植民地支配・侵略戦争をした日本国の加害性および天皇制の責任を明白に言い表すことができずにいますが、かつてこれに加担をした教会は、そうした国のありかたについても責任を負っています。

> こうして天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。
>
> （ルカ11:50）

協議会に参加したわたしたちは、日本聖公会が戦争に加担した責任を痛みをもって自らのものとし、敗戦後、すみやかにこの責任を明らかに表明できなかった戦後責任を確認します。それゆえわたしたちは、日本聖公会が植民地支配と侵略戦争を支持・黙認し、戦後は被害者への国家としての謝罪と補償を実現する努力を怠ってきた事実を明らかにし、その罪責を神の前に告白し、被害を与えた隣人の前に謝罪し、共に懺悔します。また、わたしたちは、日本聖公会が全体として告白・謝罪・懺悔を行なう必要性を痛感します。とりわけ日本のうちにあって、歴史的に支配や戦争の被害を受け、今日も差別を受けている在日韓国朝鮮人をはじめとする他のアジアの人々、沖縄の人々、アイヌをはじめとする先住民族、被差別部落民、障害者、女性たちと共に歩む努力を通して、日本の歴史と現状についての認識をただすというわたしたちの責任を受けとめるものです。

戦後日本聖公会は、隣人のいのちを脅かす差別、経済収奪、核政策、環境破壊などに対して、同調こそすれ、預言者的な声をあげてきませんでした。わたしたちが歴史を問うのは、そうした現状を変革し、未来へ向かう決断をするためです。教会の交わりのうちに、「小さくされた者」の叫び声を聞かずして、わたしたちはイエスに従う教会ではあり得ません。この世の権力によって歴史の中で周辺に追いやられた人びとと共に生きる観点を、今わたしたちの信仰の中心に据えなおさなければなりません。アジアからの問いかけに耳を傾け、日本のうちにある社会的少数者と共に歩むことを通して、わたしたちは不正に気づく感性を回復し、神の宣教のわざに応答する信仰者としての決断をするように、今、神の招きを受けています。

3）21世紀への展望

「福音伝道の十年」の中間年にあって、わたしたちは、教会が＜神の宣教＞のために存在することを改めて確認します。この場合の＜宣教＞とは、歴史の中で働く神の召しと導きのもとに、今ある状況を固定化させず、絶えず変革のプロセスを大胆に歩むことを意味します。人権・正義・環境は宣教課題の中心です。わたしたちは「小さき者」とおとしめられ、苦しんでいる人々の社会的立場、諸権利の回復をめざす教会となることを決意します。日本聖公会の中にも、様々な場で貴重な働きがなされています。わたしたち日本聖公会は、この宣教の召命への応答を常に新たにし続けなければなりません。

わたしたちは、社会から排除された人々、抑圧された人々と共に被差別状況とたたかいます。そして、支配者の物語にではなく、民の物語に聞きつづけます。そこから、わたしたちは、わたしたち自身の＜物語＞を語ります。自らの言葉で日本聖公会の歴史と現在、そして未来を

語ります。こうした努力をして初めて、わたしたちは主イエス・キリストの福音を受肉化できると信じます。また、わたしたちはこの世界、この社会の中でより預言者的使命を果たすことが求められています。とりわけ、日本聖公会は、差別、抑圧を生み出し支えている社会構造自体を変革するための地の塩、世の光とならなければなりません。わたしたちの参与する＜神の宣教＞とは、これら全てを包括するものであると理解します。

個々具体的には、わたしたちはとりわけ以下の諸課題について取り組む必要を認めます。

第一に、礼拝、説教、聖書研究等が再検証され、より豊かにされなければなりません。毎主日の礼拝での説教が、宣教を励ます力となることを願います。また信徒使徒職の働きが、より認められるべきと考えます。信徒と牧師の関係をより開かれたものとすることが、信仰共同体をよりダイナミックなものとします。

第二に、教育の問題があります。変革のプロセスを継続させるためには、様々な場、様々な方法での教育が不可欠なものであると考えます。教会教育、神学教育の場における歴史教育、人間教育、生命の尊厳を保証する教育、すなわち＜宣教を担う者を育てる教育＞の実践が必要です。

第三に、差別されてきたあらゆる人々とわたしたちが真に一つの食卓を囲むために、教会は自己変革を求められています。わたしたちの教会は、在日韓国朝鮮人、被差別部落民、アイヌをはじめとする先住民続、沖縄の人々、滞日在日外国人、障害者の声を聞き、共に生きることのできる場でありたいと願います。

第四に、わたしたちは、キリスト教の伝統が、長い歴史の中で女性差別の源となってきたことを反省し、女性の人間としての尊厳が回復されるために働くことを明らかにします。現状では、わたしたちの教会は＜会議性＞を持ちながら、女性の教区教会の意志決定への参与は極めて不十分なものです。聖書の読み直しと機構的改革が必要です。さらに、女性の司祭按手の実現は、21世紀に向かう教会の変革において日本聖公会が直面する重要問題であることを認めます。

第五に、環境をめぐる問題があります。第8回全聖公会中央協議会（ACC−8）は、「被造物の保全」を明確な宣教課題として定義しました。「核」をはじめとする環境問題へ関わり実践することは、とりもなおさずわたしたちの生活全体を変えることを意味します。

第六に、わたしたちは、自らの罪を悔い改めと赦しにより救われた者として、また生命の尊厳の立場から、死刑囚に心を向けます。また、第45（定期）総会で決議された「死刑の執行停止を求める要請」を実現するために、さらに、この問題について学び、死刑の速やかな廃止を願います。

上記の課題に具体的かつ誠実に取り組むためには、様々な＜ネットワーク＞を生み出す必要があることを確認します。宣教課題、方策に関する情報を教区、教会間で分かち合い、各個教会・個人を励まし、支えるためのネットワーク、課題別のネットワーク等が考えられます。これらのネットワークが、エキュメニカルな広がりも視座に入れつつ、地域宣教のための教会間協力へと発展するものとなることを願います。また、聖公会をはじめとする海外の諸教会との関係が、より一層実質的なものとなることを願います。

4)提案事項

上記の諸点を確認しつつ、日本聖公会宣教協議会参加者一同は以下のことを提案いたします。

- 主教会、各教区、各個教会で、戦争責任告白の必要性について協議を持つこと。
- 戦争責任に関する宣言を日本聖公会が表明するプロセスを進めること。
  - 歴史的事実に関する学びを各教区、教会で進め、歴史認識を共有する。
  - 組織としての日本聖公会の戦争責任を具体的に明らかにし、共同で用いる告白文案を協議、起草する。
  - 「特別共同懺悔」の式文を検討する。
  - 日本が植民地支配、侵略によって被害と苦痛を与えた国の人々に対して謝罪表明をする。
  - 戦後もなお引き続く責任を明確にし、表明する。

これらを含めた日本聖公会としての戦争責任に関する宣言を教区、管区委員会などが、積極参加することにより起草し、次期総会議案として提出する。

以上を促進するために、宣教協議会実行委員会が選出するプロジェクトチームが支援する。

- 各11教区が、日本が侵略した国の教会と姉妹関係を結び、積極的に出会いの場を作ること。
- 宣教協議会に出席しなかった主教も含めて、協議会の内容を共有し、主教会としてのフォローアップを検討することを求めること。
- 今回の宣教協議会のために準備された「歴史を生きる教会」ワークブックをさらに各教会、個人、日曜学校などで用いやすいように改訂し、普及すること。
- 日本聖公会関係では「元号」、「日の丸」、「君が代」の使用、町内会費の神社への寄与分の支払いなどの天皇制を支えることを拒否すること。
- 日常に根ざした戦後補償運動に取り組むこと。
- アジア・太平洋の植民地支配と侵略戦争の被害者への国家による謝罪・補償の実現にむけ努力すること。
- エキュメニカルな宣教に関わる人々をはじめとする、アジアの人々と出会える場をさらに拡大すること。
- 宣教協議会後、教区間、課題別ネットワークを作ること。
- 総会等の会議では点字、手話、要約筆記等を必ず用意すること。
- 日本聖公会関係学校で、平和と人権の視点から教育の指針を作ること。
- 立教大学原子力研究所原子炉の稼働停止を求めていくこと。
- 子どもたちの人格形成に大きく影響する公教育(私立も含む)の内容に、国家が介入することを許さない運動をしていくこと。

わたしたちは、以上の宣言を、各個教会、教区、管区や教会内外のさまざまな場において、受け止め、実現して行くことを決意し、'95日本聖公会宣教協議会の名において採択します。

1995年8月31日

日本聖公会 '95宣教協議会共同ざんげ

1995 日本聖公会宣教協議会

1) 司式者　私たち(日本聖公会宣教協議会参加者)は、日本聖公会が祈祷書の中に「天皇のための祈り」を記載し、公の礼拝の中で長年にわたりこれを用いてきたことの誤りを心に刻みます。

会衆　「わたしはあなたの神、主であって、あなたはわたしのほかに何ものをも神としてはならない」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦しください。

2) 司式者　私たちは、日本聖公会が「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」「紀元節祈祷」などを用いて公に礼拝し、アジア太平洋地域の人々の命を奪う戦争に加担したことを心に刻みます。

会衆　「あなたは殺してはならない」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦しください。

3) 司式者　私たちは、日本聖公会が戦後50年の長きにわたり、日本の侵略戦争によって血を流したすべての人々、ことにアジア太平洋地域の人々に対して、国家と教会の責任を明らかにせず、自らの経済的利益と繁栄にとらわれて隣人である人々をむさぼり続けてきた罪を心に刻みます。

会衆　「あなたはむさぼってはならない」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦しください。

4) 司式者　私たちは、日本聖公会が日本社会の中において差別を受けている人々、女性、障害者、在日韓国朝鮮人をはじめとする外国人、被差別部落の人々、アイヌの人々、沖縄の人々の痛みや叫びを聴かず、共に歩んで来なかったこと、また教会の中においても気づくべき多くの差別があるにもかかわらず、それに気づかず、知ることなく無視し、人々に今でも苦しみを与え続けていることを心に刻みます。

会衆　「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦しください。

一同　正義を行うために召されていることを、理解せずわたしたちは歩んできました。どうかこの現実から立ち上がり、つくりかえられ二度と誤った、祈りをすることなく新たにあなたの道を歩むことができますように。主イエスキリストのみ名によってお願いいたします。　アーメン

司式者　もし、あなたが真実と公平と正義をもって、「主は生きておられる」と誓うなら、諸国の民は、あなたを通して祝福を受ける。　(エレミヤ書4:2)

Declaration from the 1995 NSKK Mission Consultation

1. In the Beginning

Yet Yahweh waits to give you grace; he rises to show you compassion. For Yahweh is a God of Justice. Blessed are all who hope in him. (Isaiah 30:18)

In May 1994 at the 46th NSKK synod it was resolved that the NSKK Mission Consultation would be held in 1995. Thus, between August 28 to 31 in this 50th year of the end of the Asia-Pacific war, we gathered together for a consultation seeking "the Church living in Christ who works in history, in the world, in society, and among people." The theme of the consultation was "The Mission of NSKK — its responsibility in history and its vision toward the 21st century." At this consultation we listened to the keynote address ("The Mission of the Church and the History of Japan"), had Bible study ("The Calling to Do Justice") and, during the services, heard the testimonies of guests from Korea and the Philippines. Going through all these programs, we acknowledged that we had failed to reflect on history through our own faith. During the special address ("To Transform in Each and Every Place") we felt challenged as we heard reports on the environment and witnesses given by women and the disabled who continue to suffer in this present age. We tried to clarify for ourselves the issues and made some proposals in order to start working towards the 21st century.

We confess NSKK's past wrongdoings and ask God and the Asian-Pacific people who suffered under Japanese invasion for forgiveness. We pray and ask that we may realize that as people of God we are being called to do justice. May our church be tranformed into the Church that can hear the cries and sufferings of a divided world.

The living God,
the living, moving Spirit of God
has called us together
in witness,
in celebration,
in struggle.
Give us the strength to repent, and renew us in your Risen Life.
— from the prayers used in the Mission Consultation

2. The Responsibility and Responses of NSKK to History

When we decide in faith to die with Christ (who died on the cross for human love and unity) and to live with Christ in his risen life, we are being called to the new community of God (the Church) where we can meet our neighbors and, for the first time, love them in a true sense.

The Church as an institution often distorts the Gospel, living only to perpetuate itself, develop its power, and keep its house in order. We must constantly reflect on our daily encounters and remind ourselves to love and be in solidarity with our suffering neighbors to whom Jesus reveals Himself.

Fifty years ago, in 1945, we of NSKK were standing at a turning point in history: the defeat of the Tennoh's nation and the end of Japan's colonization of her neighbors. In the synod of that year, Bishop Chinji Sasaki pointed out "the church's fallacious attitude towards the policy of the nation" and "the church's obliviousness to mission" as he spoke about the attitude of the church during the war. God gave the synod, the House of Bishops, dioceses and each church the opportunity to reflect on our failure to be prophets during the war. We were also given the chance to sincerely apologize to our invaded and oppressed neighbors. That would have been a wonderful opportunity for us to work towards true reconciliation with our neighbors.

But as we see in the form of "Special Prayer Service for Shina-Jihen (China Incident[1])" and "Special Prayer for Dai-Towa War (Great Asia War[2])," NSKK had been praying for victory. NSKK did not reflect on its misdeeds — that we had approved the occupation of other nations and had contributed to the war in the name of Christ. Instead in the 22nd synod of 1947, NSKK decided to use the 1938 prayer book again as the official book of common prayer. In this book we find prayers like "For Tennoh," "Prayer for Kigensetsu (Empire Day[3])" which acknowledge that Tennoh's reign was the will of God. And until the book was revised in 1959, NSKK had taught in Catechism that in answer to the question "What is it you should do for your neighbor?" her members were to answer, "... to obey Tennoh and the rulers..." Before Holy Communion, NSKK had the priests say, "May God bless all who have sovereignty especially our Tennoh..." and in the morning and evening prayer it was church duty to pray for blessings to Tennoh. Thus, it is clear that NSKK has failed to deal with many issues after the war.

NSKK eliminated "Prayer for Kigensetsu," "Prayer for Tennoh," and so on when we revised the book of common prayer. However, NSKK has not issued any declaration resulting from basic reflections on the assumption that the nation's will was God's will. We who gather at this consultation acknowledge that, as a Church that assumes responsibility for its past actions, we now have to face the fact that NSKK has not reflected on its wrongdoings during the war and has not issued any statements.

Since its establishment, NSKK has been compromising the Gospel's ideals by repeatedly giving in to the nation's policies. NSKK unquestioningly accepted the "freedom of faith" article in the Meiji Constitution. The article was adopted by the Meiji government on the condition that no one was to disturb national peace and order and people were not to go against their duties as people of Tennoh. NSKK was also drawn to accept other national policies that implemented an education that made the people obedient to Tennoh, enforced worship at the shrine, and justified Japan's war effort under the name "Hakko-Ichiu (the Whole World Under One Roof.[4])" When NSKK had finally realized these, it was no longer in a position to resist. At one point NSKK experienced "oppression by government officials" because of its relationship with the Church of England, ECUSA, and the Anglican Church of Canada. In spite of these experiences, we, the

churches of NSKK, failed to stand in solidarity with the oppressed.

NSKK also heard from the Okinawa Diocese about stories such as the massacre of Okinawa residents, forced group suicides which were initiated under the national policy of making all Japanese Tennoh's people, and threats to establish US bases after the war. The Okinawa Diocese asked NSKK "to understand our history and our situation" when they moved into NSKK from ECUSA in 1972. NSKK must reflect on its failure to respond to the Okinawa Diocese's plea.

During the consultation we listened to the testimonies of our neighbors who belong to Anglican Churches in Korea and the Philippines. These churches maintained their faith at the risk of losing their lives among a distressed people. We now admit that NSKK did not know the historical facts and has not made any effort to learn them or make them known. We strongly feel the need to reexamine the attitude of churches who strayed from the Gospel to become oppressors. The Japanese government and the Diet has not admitted Japan's misdeeds during the war and has not assumed responsibility for actions carried out under the Tennoh system. The churches who used to cooperate with the government are also accountable for our nation's attitudes.

> *But the present generation will have to answer for the blood of all the prophets that has been shed since the foundation of the world. (Luke 11:50)*

We, the Mission Consultation participants, acknowledge that NSKK took part in the war and, soon after Japan's defeat, failed to assume responsibility for its actions during the war. Therefore, we clearly admit that NSKK supported and approved of Japan's invasion of other countries, and that after the war we failed to apologize and give compensation to the victims as a nation. We confess to God all these misdeeds and apologize to our neighbors whom we persecuted. We also strongly feel that NSKK as a whole needs to confess, apologize, and repent. We cannot know Japanese history and correct the present situation unless we try to walk with the oppressed in Japan such as other Asians (especially Koreans in Japan and those who suffered during the war), the people of Okinawa, indigenous people (especially Ainu), Buraku people, the disabled, and women — all who continue to suffer from discrimination.

NSKK has not lifted its prophetic voice against discrimination, thus threatening the lives of our neighbors. It has not spoken against economic exploitation, nuclear policies, the continued destruction of the environment. Instead NSKK sided with the aggressors and exploiters. We need to examine history so we can transform our present and direct our future. Without inclining our ears to the people in our church community "who are made small," we cannot claim ourselves to be Church. We have to center our lives in our faith which moves us to live together with the marginalized in history.

Through listening to the rest of Asia and by walking together with the social minorities in Japan we may recover our ability to discern evil. We are being called by God to choose as a

faithful people to do God's work in mission.

3. Vision towards the 21st Century

Standing in the middle of the "Decade of Evangelism," we now acknowledge that the Church exists for "God's mission." To exist for God's mission implies that we should have the courage and flexibility to change and be changed as God leads us through history.

Human rights, justice, and the care of our environment are the main issues of mission. We resolve to become a Church which aims to regain the rights and social status of the distressed and oppressed people. In NSKK we see many valuable works going on in various places. We in NSKK have to continually renew our reponses to the call for mission.

In solidarity with excluded and oppressed people, we fight against discrimination in its various forms. We listen to the stories of the oppressed, not those of the oppressors. And then we may begin to tell our own stories. With our very own words, we talk about the past, present, and future of NSKK. Through these efforts, we believe we can finally make the Gospel of Jesus dwell among us.

We are being asked to accomplish our prophetic mission in this world and in this society. NSKK must especially become the salt of the earth and the light of the world to change the social structure which produces and maintains discrimination and oppression. We understand that God's mission (in which we participate) includes all these things.

We especially acknowledge the need to address the following issues:

a. Liturgy

Liturgy, sermon, Bible studies, etc. have to be reexamined and enriched. We hope that the Sunday sermons empower mission. Lay ministry should be given greater recognition. Making the relationship between laiety and clergy more open will help energize the community of faith.

b. Education

In order to continue the process of transformatin, education in various places utilizing various methods is necessary. In order to ensure the dignity of human lives and to educate those in mission, we need good theological, historical, and humanistic education.

c. Self-transformation

The Church is now required to transform herself so we can sit around one table with many people who have been discriminated. We as Church want to become a place where all people — Koreans in Japan, Buraku people, indigenous people like Ainu,

the people of Okinawa, permanent and temporary migrants, the disabled — live together.

d. Dignity of women

We reflect that in its long history Christian tradition has been the source of women's discrimination. We make it clear now that we will work to restore the human dignity of women. In the present situation we value "conciliarity," although the participation of women in decision-making processes in Church or diocesan meetings is very limited.

We need to reread the Bible and reform our structure. We also acknowledge that the ordination of women to the priesthood is a very important issue NSKK is facing now in the transformation of its Church as it enters the 21st Century.

e. Environment

The ACC-8 defined "Integrity of Creation" as a clear issue for mission. To be involved in environmental issues like the nuclear issue calls for a radical change in our lifestyles.

f. Capital punishment

We who are saved through repentance and forgiveness respect life, and so we focus on priseners on death row. At the 45th synod we resolved to learn more about the issue of capital punishment and work for its abolition.

In order to deal with these issues effectively and honestly, we need to develop various networks. Through networking, dioceses and churches can exchange information about their mission and direction. We hope this networking will bring about ecumenical cooperation between churches as they carry out their local ministries. We also hope that the relationship within the Anglican Communion and the relationship between NSKK and other oversea churches becomes closer and more meaningful.

4. Proposals

In acknowlegement of the above points, we participants of this NSKK Mission Consultation make the following proposals:

a. To have the House of Bishops, each diocese, and each church discuss the need for confession and the need to assume responsibility for the war.

b. To have NSKK begin the process of issuing a declaration about responsibility for the

war.

- In each diocese and each church we study the historical facts and accept our nation's history.
- We clarify NSKK's institutional responsibility for actions during the war and draft an official confession.
- We examine the "Kyodo Zange (Penitential Order)."
- We apologize to the victims from those countries that suffered under Japan's colonization and invasion.
- We clarify our responsibilities to the present and future generations for our part in the war.

Diocesan committees and provincial committes draft a declaration of responsibility for the war, including all the issues above, and propose the draft to the next synod as a bill. In order to carry out the above the project team elected by the Mission Consultation committee should support it.

c. To have churches of each diocese build a sistership with those in the countries that Japan invaded and to create opportunities to meet with those churches.

d. To share the proceedings of the consultation with the House of Bishops (including those bishops who were not at the consultation) and to seek their involvement.

e. To revise the workbook "Church Living in History" made for this Mission Consultation and encourage each individual, church, Sunday school, etc. to use it.

f. To have NSKK reject all those symbols of the Tennoh System such as the use of "Gengo," "Hinomaru," "Kimigayo,"[5] and to refuse to pay the portion of the village contribution that goes to the jinja (shrine.)

g. To make the movement to compensate war victims part of our daily life.

h. To strive to obtain an official apology from the State and to work for the compensation of Asia-Pacific victims of Japan's colonization and invasion.

i. To create opportunities to meet Asian people who are involved in ecumenical mission.

j. To network with NSKK dioceses over various issues.

k. To include braille and sign language in conferences like the synod and to have the

summaries and notes accessible to the disabled.

l. To create for schools with NSKK ties educational guidelines that are oriented towards peace and justice.

m. To ask Rikkyo University's Nuclear laboratory to stop the operation of its nuclear reactor.

n. To create a movement to limit the State's involvement in public education (including private schools) so that the Japanese children's personalities are not so heavily influenced.

We accept the above declaration and resolve to realize these ideals in each NSKK church, diocese, province, and others. We solemnly make this declaration in the name of 1995 NSKK Mission Consultation.

31 August 1995

Notes:

1 China Incident - total scale China-Japan war provked by the July 7th battle near Beijing. Japan called the wars "incidents" in China because it did not declare them officially.

2 Great Asia War - naming of the Asia Pacific War by the Imperial Japanese government. It implies the understanding of the character of the war as "liberating Asian nations from the colonization of the West." The word is being used even today by those who deny the historical fact of Japan's aggression.

3 Empire Day - the anniversary of accession of the fictitious Emperor Jimmu. It has created the belief in the divinity of building of the nation of Japan and justified the Tennoh to be the supreme divine authority. People were forced to worship the Tenno through the Kigensetsu ceremonies.

4 The Whole World Under One Roof - the ultra-nationalistic slogan used during the war to justify the imperialist idea of conquering other nations with Tennoh-centered ideology.

5 Gengo - the Imperial calendar based on each Tennoh's reign. Hinomaru - the rising sun flag. Kimigayo - the de facto National Anthem. Imperial Japan forced both Japanese and the people of occupied nations to respect them in daily life and especially every official ceremonies including church services. The Ministry of Education obliges the public schools today to use the same in the school ceremonies.

Penitential Order (Kyodo Zange) of 1995 NSKK Mission Consultation

Celebrant: We, participants of this NSKK Mission Consultation, engrave in our hearts that NSKK had included the "Prayer for Tennoh" in the Book of Common Prayer and, for a long time, used this prayer in the official services.

People: O Lord, pardon and deliver us from this sin against your commandment, "I am the Lord your God who brought you out of bondage. You shall have no other gods but me."

Celebrant: We engrave in our hearts that NSKK was involved in the war, using prayers such as "Special Prayer Service for Shina-Jihen," "Special Prayer for Daitowa Senso," and "Kigen-setsu Prayer."

People: O Lord, pardon and deliver us from this sin against your commandment, "You shall not commit murder."

Celebrant: We engrave in our hearts that NSKK has not carried out its responsibilities towards all those who suffered and died during the war, especially the Asian-Pacific victims of Japanese aggression. We also engrave in our hearts that we have been sinfully seeking economic prosperity at the expense of our neighbors.

People: O Lord, pardon and deliver us from this sin against your commandment, "You shall not covet anything that belongs to your neighbor."

Celebrant: We engrave in our hearts that NSKK has failed to hear the cries of those discriminated such as women, the disabled, foreigners like Koreans living in Japan, Buraku-people, Ainu, and the people of Okinawa. We also engrave in our hearts that even in our churches, there have been so many other forms of discrimination that we have failed to recognize. Because of our ignorance, we continue to cause great suffering.

People: O Lord, pardon and deliver us from this sin against your commandment, "Love your neighbors as you love yourself."

All: We have been walking without understanding the call to do justice. Help us, O Lord, that we may repent and rise from our present situation. Transform us, O Lord, that we may not pray in a wrong way. May we follow your path to glory in the name of Christ. Amen.

Celebrant: "And if you swear, 'As the Lord lives,' in truth, in justice, and in uprightness, then nations shall bless themselves in him." (Jeremiah 4:2)

主題講演

日本の歴史と宣教理解

司祭　塚田　理

皆さん今晩は。今日戦後五十年という大変私たちにとっていろいろな点で重たい意味を持つこの時に、私たちが日本の宣教について一緒に考えようということで宣教協議会が開かれ、その主題講演の講師としてお招きいただいたことを大変光栄に思います。また同時に、責任の重大さを感じるのですが、その責任を十分に果たせるかどうか、必ずしも自信がございませんが、皆さんに補っていただきながらご一緒に考えることができればと願っております。

日本の歴史、そしてまた日本聖公会の歴史を振り返るということは、とてもこのわずかな時間の中で申し上げることも、またお互いに考えることも到底できません。今出来ることはほんの一部分かと思います。しかし、幸い既にこれまで準備された資料の中にもいろんな報告がなされていますから、是非そういったものをご参考になっていただければと思います。また私自身もいろんなところに書いておりますので、後程でも参考にしていただけたら幸いです。

私のお話しの出発点を、戦後、日本聖公会の再建総会ということで開かれました1945年12月の第21臨時総会の佐々木主教のメッセージとしたいと思います。

日本聖公会は御存知のように日本キリスト教団に参加しなかったことによって、解散命令を受けました。そして、日本聖公会はすべて全国的な組織を継続することを禁じられまして、各教会が一つ一つ個別の単立教会となったのです。当時、私の父も牧師をしておりましたが、中部教区の教役者の集まりを開くために山奥の旅館に集まり、会議中は必ず誰か一人が廊下で張り番をして宿の人など誰かが来ると急いで話題を変えて、お茶飲み話をしているように装いながら教区の会議を開いたというような話を、父親から聞いた憶えがあります。このように大変困難な時代でした。日本聖公会の組織を政府の力によって壊滅させられたために、被害者という意識が非常にその頃日本聖公会の中に強く残りました。しかし、もっと私たちが歴史を振り返ってみれば、果たして単なる被害者に過ぎなかったのか、それともそういう道を歩まざるを得なくなってきた事の背景に私たち自身の責任はなかったのか、というような反省が必要ではないかと考えます。

第21臨時総会は、戦時中に解散された日本聖公会をもう一度立て直そうということで、再建総会と言うふうに呼ばれて招集されたわけです。さて、その時総裁主教であった佐々木鎮次主教が、その総会の冒頭に告示を述べられました。私が知る限り、日本聖公会が公式に戦争中の責任について言及したのはこの時だけです。ですからそういう意味でこれは大変重要な出来事だと私は思います。しかし、他方、佐々木主教の頭の中には、再建総会と言うことですから、日本聖公会の解散、ならびにその前後にキリスト教団合同の問題があったため、解散と合同問題と言う観点からだけで反省がなされているという点にひとつ大きな問題があります。

さて、この総会の告示では三つの点が問題点としてあげられておりますが、私はこれをもう少し整理すると、四点になるのではないかと思います。先ず、佐々木主教の告示を読んで見ましょう。

「反省すべき点として指摘申し上げたいことは、第一、国家と教会との関係について明確なる信仰的見識を有すべきであったと思います」というふうに言っておられるのですね。国家と教会との関係について、はっきりと認識しておくべきだった、明確にしておくべきだった。それがはっきりしていなかったために、その後続けて、「特に全体的国家観の台頭する時期に、多くの教会人が時流に押し流されて、教会が魂の世界の主位をいかなる意味において堅持し得るかを忘却し去った点に大いなる誤りがあったと思います」。

以上の指摘には、教会と国家との関係をはっきり認識していなかったために、国策に迎合したこと、そして、そのために教会の使命を忘れてしまったことが挙げられています。この第一の点のところで二つのことをおっしゃっているのではないかと思いますので、これを(1)「国策への迎合」と(2)「教会の使命の忘却」とに分けてみました。

佐々木主教は第二の点として、「主教制を一つの機構と見てその存続が教会の生命の伝統を保持し、教会が付与するそのサクラメントの基礎たる重要性を明確に把握していなかった誤りがあったと思います」と述べてま

す。これは合同に賛成した人たちが聖公会の伝統である主教制をそっくり合同教会である日本基督教教団の中に持ち込みたいと考え、総会にも教区会にも諮らずに、一部の人たちの間だけで相談の上、7名の主教(監督)を按手して日本基督教団に参加したのです。佐々木主教は、この行動は主教制を単なる人間的な機構、ファンクションとして見做し、そのサクラメント的本質を見失った考えであると批判したのですね。彼は、主教制というは教会のサクラメントの基礎であり、教会の本質に関わることだとしたのです。私はこれを(3)「主教の権威への不服従」といたしました。主教会の合同しないという決定にもかかわらず合同した人たちが、日本聖公会の三分の一くらいおりました。この問題は後で二、三年尾を引くことになりました。

佐々木主教が挙げている第三点は、「合同運動の熾烈化するや教会人として平素夢想だにしなかった、信義を欠く行動が輩出したことであります」。これは日本聖公会の主教がスパイであるとか、司祭の中にスパイ的な行為をしている者がいるとか、あるいは合同に参加しないことは反日本的行動である、というような訴えを警察に通報した信徒のいたことを指しているものと思います。

いずれにしても、戦争中日本聖公会の組織が解散され、内部分裂を起こすに至ったこと、これらの経緯の反省として、以上の点を佐々木主教が挙げておられたわけですから、私は日本聖公会は再建の原点、出発点として、以上の点をやはりきちんと押さえるべきべきではなかったかと思います。しかし、その後の日本聖公会の歴史を見れば、本当にこの佐々木主教が不十分ながらも挙げたこれらの点について、日本聖公会が果たして検討したんだろうか、反省したんだろうかということについて、私は疑問に思わざるを得ないわけです。

ところで、敗戦直後後、ポール・ラッシュ、私たちがいるこの清泉寮はポール・ラッシュ先生によって始められたんですが、元立教大学の教授がアメリカ占領軍の情報将校として来られました。彼は、日本聖公会の状況あるいは立教学院の状況を見て、立教学院がキリスト教に基づく教育を行うという寄付行為を廃止して、皇国日本の国体に則る教育をするというふうに変えたことに対する責任を問うのですね。そして、彼は連合軍情報局を通じて、これに協力した人たちを追放処分にしました。

更に彼は日本聖公会の再建策を提案しています。これはあまり知られていませんが、これは日本語に翻訳されて、その後の日本聖公会の再建の基本線とされてきました。その後の十年ぐらいの歴史は、このポール・ラッシュ提案に基づいて進められたと言ってもいいほど、非常に綿密にしかもよく考えられた提案をなさっておられます。私自身も振り返ってみると、いかにポール・ラッシュ先生が作った道を歩んで来たのか、ということが分かります。あるいは日本聖公会の各地の教会の復興がいかに彼のラインに沿って、またいろいろな外国の伝道協会がこの路線に沿って日本聖公会を援助したかということがわかります。そして、この路線に乗ることによって、結局、戦争中の日本聖公会の責任を自ら問うことなく、再建の道に私たちは進むことができたわけです。進むことができたということは、良かったという意味では必ずしもありません。結局、自らの責任を問うことなく、日本聖公会はその後の追い風に吹かれて前進し、日本聖公会も多くの人々を教会に集めるような、そういう教会になっていったわけです。

さて私は以上に挙げました点について、皆さんとごく簡単に考えてみたいと思います。

Ⅰ　国策への迎合

(1)　天皇制絶対主義体制下におけるキリスト教

「国策への迎合」とは一体何を意味したのでしょうか。あるいは、教会と国家の関係を明確にしなかった、とも佐々木主教は言っておられますが、その後日本聖公会はこの問題に取り組んだことがあったでしょうか。もちろん、個人としてなさった方はいるかも知れませんが、聖公会として取り組んだことはなかった、と私は思います。私は日本の歴史を振り返ると、国策とは結局、一言で言えば、天皇制絶対主義体制であったと言ってよいのではないかと考えます。そして、元国際キリスト教大学教授の武田清子は、キリスト教を阻むものは天皇制だというようなことをおっしゃっていらっしゃいますが、佐々木主教はこの天皇制について、あるいは教会と国家の関係について不明確であった、教会はそれを明らかにすべきだと言ったにもかかわらず、その後日本聖公会はその国策の一番の原点、あるいは中核をなして来た、天皇制絶対主義体制について一体どういう反省をしたのか、という問いに私たちは直面すべきであった、自ら佐々木主教の言葉に基づいて考えるべきだったというふうに思うんですね。実際天皇制の厳しい状況が迫るにつれて、日本聖公会は祈祷書を改正してきました。日本聖公会の祈祷書は、ほぼイギリス聖公会の祈祷書、そして部分的にアメリカ聖公会の祈祷書をそのまま翻訳したものでした。しかし、ずーっと日本聖公会の歴史を振り返って、ひとつ著しく変わって来たところはどこかというと、「天皇のための祈り」です。他の所はほとんど翻訳のままです。そして、改定はほとんどしていません。しかし、「天皇のための祈り」だけは、当時の状況に合わせて変わって来ています。例えば、一番最初の祈りでは、これは元のイギリスの祈祷書と同じなのですけど、「神よ、国王を救い給まえ」という所を日本聖公会の祈祷書では「天皇を救い給まえ」となっていました。しかし、「天皇を救いたまえ」という表現では不敬罪に当たるととがめられることを恐れたのでしょう、日本聖公会は自の意志でこれを変えました。時局に迎合して変えたといっていいでしょう。これまで私たちが何時もやって来たことは、時局を先回りしてその時代に合わせて来たように思います。私たちはこのことをよく反省すべきだと思います。こうして「救い給え」の代わりに「さきわい給え」と致しました。「天皇をさきわい給え」、こうすれば官憲の目の厳しさを逃れるれることが出来るだろうと、皆が考えたわけですね。私は、これは自発的、意図的な改定であったと思います。ですから責任があると思います。時局を十分認識して、日本聖公会は祈祷書の重要な部分を代えました。この祈りだけではありません。他にも「皇室のための祈り」など、関連するものを代えたのです。

「日本聖公会議長、総裁名出保太郎、大阪憲兵隊特高課長にたいする答申」(参照)を後でゆっくりご覧ください。これは昭和13年大阪憲兵隊に各教会の指導者たちが呼ばれて、天皇とキリスト教の神とはどういう関係にあるかとか、勅語とバイブルの関係はどうかとかいろんなことを聞かれました。その時これが、日本聖公会の総裁主教の回答です。皆さんこれをよくご覧いただきたい。そして、こういうことがあの時代お互いにとがめることもなく認め合って来た、ということを私たちは、十分に認識する必要があると思います。

参照:日本聖公会議長総裁・名出保太郎～「大阪憲兵隊特高課長に対する答申」より

第3 我天皇と基督教の神との関係

至尊の御事に付いては過去50年伝道の生

涯に於て未だかって問はれし事なく従って公けにも私にも口にせし事も書きし事もなくして今日に至る、是れ実に世界の何国人も理解し能わざる絶対の信念(感情の超越)なり。御神勅に依て御位に即かせ給ひし皇祖皇宗より万世一系の現御神として統治し給ふ世界無比の国体ここに在り。

第5 勅語とバイブルの関係

勅語は国民として絶対に服従遵奉すべきもの、バイブルは霊魂の救いを得る要道を載せられたる書物なり。

第6 教育勅語にある教育方針と基督教主義に依る教育方針との差異

明治初年の頃に設立せられたる所謂ミッション、スクールは何れの学校もその規則中に基督教を徳育の基本とす、の語あり、聖書は正課として用ひられたるが、明治23年教育勅語の発布せられしにより何れの学校も全国皆之に統一せられミッション、スクールも皆之に従ひしたり。而して宗教教育を情操の涵養と信念の養成のために有志の間に科外教授をなす。(公立学校に於ても同主義)然るにいちぶには尚従来の如く教育勅語を奉ずるは無論なるが、それに聖書を正課として用ふる学校あり、此等の学校もその方針等差異あるに非ずして寧ろ道徳の実践上の力となさんとする主義に外ならず。

第12 基督教と日本精神との関係

基督教と日本精神とは全く相一致す。」

(同志社大学編『戦時下のキリスト教』「昭和13年のキリスト教運動」p。97。)

(2) **皇室神道の国教化政策**

国策ということでは、皇室神道の国教化政策を第一に挙げるべきでありましょう。これもまさに天皇制に関係します。皇室の神道、臣民教育、教育行政における日本の国策は、皇室神道を徹底的に植え付けることに終始しました。これは国家権力の政策としては大変巧妙な日本人の臣民教育政策と言えます。まさに、マインド・コントロールの一番の原点、最強の手段は教育ですよね。日本の小学校教育から始まってですね、日本人のマインド・コントロールが「国民(臣民)教育」の中で行われて来たのであります。これにはもちろん教育勅語とご真影、また君が代は有力な手段でありましたし、紀元節、その他の皇室祭礼の遵守、神社参拝、あるいは運動会、遠足もその手段として使われました。運動会、遠足はどういう意味があるのかというと、そこでは強兵を作るための団体的訓練を施すとか、遠足に行ったときには通りかかった神社に参拝させて国家への忠誠心を養おうとしました。そして敬祖と敬神は、皇祖神である歴代天皇を崇敬することに直結するものとされ、これによって国民を精神的に統一するということで、遠足も、運動会も皆国策に沿った教育指針として示されたわけです。こうして日本の子供達は、小学校からずーっとマインド・コントロールを受けて来た。私もその一人であったわけです。(<親孝行→先祖崇拝→神社参拝→天皇崇拝=愛国心、忠誠心>これが当時の教育理念でした。)

(3) 宗教政策～プロテスタント系諸教会の合同強制政策

第三点として宗教政策が挙げられます。先程申しましたように、政府はプロテスタント系の諸教会の合同を強行致しました。日本聖公会は確かにこれに抵抗したのですが、ただ私は、過去をずうっとさかのぼってみると、結局、日本聖公会だけでありませんが、日本のキリスト教会は国の政策に順応させられて来たのです。私はこれを国家の権力による押収、即ち差し押さえられた、と言いたいのであります。

まず帝国憲法によって、「天皇は神聖にして犯すべからず」とされ、それを前提にして「国家の安寧秩序を妨げず、また臣民たるの義務に背かざる限り」信教の自由を認めるとされて来ました。「国家の安寧秩序を妨げず、また臣民たるの義務に背かざる限り」という条件の中で信教の自由が認められたと言うことですから、ここに宗教を取り込む大きな枠組み、即ち国家の安寧秩序という大きな枠組みの中に宗教は置かれたのであります。私たちはまず、帝国憲法の発布（1889年・明治22年）から既に私たちの宗教的な位置付け、日本国家における宗教的位置付けが始まった、という事実を認めることが重要であります。この憲法の基礎に立って、教育勅語が日本人の教育理念とされて来たのであります。

しかし、その当時多くのキリスト教会の人々は、帝国憲法によって日本の宗教、特にキリスト教は信教の自由を得た、と言って大変歓迎致しました。極少数の、私の知る限り本当に一人二人の宣教師が、憲法の「国家の安寧秩序を妨げず、また臣民たるの義務に背かざる限り」という部分について疑念を持ち、これについて意見を吐露しておりますけれども、大部分の宣教師や日本人聖職、信徒はこれを歓迎したのです。更に1912年（大正元年）、この年政府は、三教、即ち仏教、神道、キリスト教の三つの宗教の代表者を集めて、国家的ないろんな政策に協力するように要請致しました。この時、キリスト教会は非常に喜びました。我々キリスト教はいままでいろいろな面で、迫害されたり白眼視されて来たけれども、これでやっと仏教と神道と並んで三大宗教の一つとして公認された、ということで大変喜んだのであります。

しかし、これは私に言わせれば押収されたことになります。日本における宗教は国家体制の中に固く位置付けられたという事実を見抜く力を持たずに、キリスト教徒達は表面的な「公認」によって自ら喜び、歓迎したのであります。それは根本的に制限され、国家の都合によっていつでもどうにでも左右される欺瞞的な自由に過ぎなかったのであります。

(4) 八紘一宇～侵略戦争

「八紘一宇」という言葉を私もさんざん聞かされたわけですが、これは何を意味しているのでしょうか。それはいわば覇権主義、侵略戦争の原点になるもので、天皇が全世界を治めて一つの家にすること、天皇の下で世界全人類は一つになるのだというわけです。「人類は一つの家族」と聞くと立派に聞こえますが、その頂点には天皇がいるわけです。これが八紘一宇という考えです。この下で大東亞共栄圏という考え方が生まれました。そして、大東亞共栄圏におけるキリスト教伝道ということが各教会の課題になったわけです。日本聖公会は既に朝鮮、台湾伝道を行い、また更に満州伝道にも人を派遣致しました。こうして八紘一宇の考え方に沿って、これをなんら批判することなく、むしろ占領地の無学で貧しい人々のためにキリスト教を伝えて行くことが我々の使命だ、とこういうふうに考えたわけです。確

かに本人たちは懸命に福音を伝えることに努力したのですが、結果的には八紘一宇に沿った日本の占領地治安対策の一貫として利用されたのであります。

有名な南京大虐殺事件というのは御存知だと思いますが、あの時、ロンドンのアルバート・ホールで日本南京大虐殺に対する抗議大会が開かれ、当時のカンタベリー大主教がこの大会の議長を務めました。この時英国教会の系列である日本聖公会は、これとつながっているのではないかということで、大変窮地に立たされました。時の日本聖公会の主教は、英国大使館に行ってカンタベリー大主教という立場の人がこういうセンセーショナルな報道に惑わされて南京大虐殺抗議大会の議長を務めたことは、はなはだ迷惑である、宗教と政治は分離して考えてもらわなければ困る、というようなことを伝え、かつこのような抗議をしたことを新聞社等にも声明を出して、いわば身の潔白を証ししました。このように、私たちの教会は、教会の真の立場を伝える機会が与えられたにもかかわらず、その機会をすべて国策に迎合する形で応じた、とこういうふうに言わざるを得ないのであります。私はここで幾つかの反省点を申し上げたいわけですけど、まずこれまで申し上げたことを次の七つの点にまとめて申し上げたいと思います。

第一に、日本のキリスト教は、聖公会を含めて、根底から天皇制国家によって押収されたということであります。これを私は特に天皇個人のこととしてではなく、天皇を国家の根源に据えるという民族的、国家的、社会的体制というものを、私たちはあまり軽々しく考えてはいけないということを強調したいと思います。今日象徴天皇制になったから私たちはこれでいいんだ、と考える人たちも多いのですが、もし皆さんがあの「人間宣言」といわれている天皇の宣言をお読みになれば、とてもそんなことは言えないと、私は思います。ただ時間が十分にないので、これについては割愛するしかありません。ただ象徴天皇制になったからこういう恐れはなくなった、と安易に考えてはならないことをもう一度強調したいのであります。

第二に、宗教、そして教会がいかに自分の周囲の思想や見解に左右されるかということの危険性を十分に認識すべきであります。

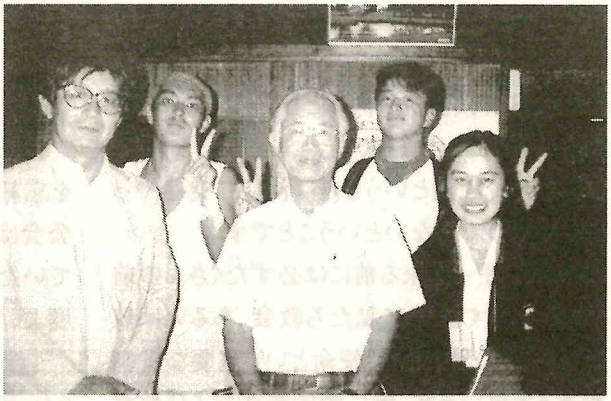
私たちはよく見ている積もりでいますが、実は周りの意見、これに動かされることがいかに多かったかについて、私たちは十分に反省すべきだと思います。

第三に政治が、いかに宗教、即ち信仰の自由、心や精神の自由、思想の自由に介入してくるか、ということを十分注意すべきであります。日本ではしばしば宗教と政治を分けて考えろ、と言われていますけれども、これは過去の欧米における教会と政治との関係から生まれた体制に対する批判や反省から来たものでありますが、しかし、実は政治は極めていろんな形で、巧みに宗教の領域に介入して、これを動かし、利用しているという事実を私たちは十分に見極めなければいけないのであります。

第四に政治権力、要するに時の政府が国家的な利益と称して教育を管理し、こうして国家に委ねられた教育が国民各人の価値観、人格性、社会的責任などに関していかに歪曲されるかという点であります。そして、それはまた若い世代の宗教観にも極めて重要な影響を与えていることを認識すべきでありましょう。

私は現在立教学院の責任者としてかかわっていますが、今日でも、政治、もっと具体的に言えば文部省によって許認可権を握られていることによって、私たちが本当に追求したいと思うことがしばしば制約されることを実感しています。私たちの私立学校は本来自由で

あっていいはずではないでしょうか。私たちは自分達の子供や将来の世界を担う人たちにとって最も理想とする、あるいは最も望ましいとする教育を実現するために多くの努力を重ねて私立学校を建て、また維持発展させようとしています。しかし日本では、この努力は必ずしも正当に評価されず、また不必要と思われるような多くの条件を課せられています。許認可権を文部省に握られ、私立学校はいろんな形で文部省、あるいは他の所轄庁によって介入されます。ですから率直に言って、文部省がなくなることが、行政改革の第一ではないかと思っています…。しかし、他方で、私立学校側は自由に競争すると互いに学生生徒の獲得などの存亡のリスクを負うことになるので、官僚の手を借りて、保護を受け、競争原理から逃れようという姿勢がいつまでも無くならないというのが、日本の教育界の情けないもう一つの顔であります。実はこれは宗教界の姿でもあります。これらは日本社会の反映であると言ってもよいでしょう。



第五に、外部の声を聞くことの重要性であります。戦前でもかなりの日本人教役者や信徒達は宣教師たちから、かなりいろいろなことを聞いていたはずなんですよ。また他方では、宣教師達は日本人の国民感情にかなり遠慮もしていたので、そのような雰囲気の中で、はっきりと言いたくても言えなかったことも確かであります。しかし、朝鮮半島で日本がどういうことをやっていたのか、そして朝鮮のクリスチャンたちがどういうことを考えていたのかということは、在日の英国人宣教師達は在朝鮮宣教師達からよく聞いていたはずなんです。ですから、例えば今井寿道も朝鮮の状況などについては英国人から聞いていたはずですし、彼は実際に夏休み中に数年にわたって伝道旅行に行っていて実情も知っていました。ですから、彼の当時の発言は元田作之進とはかなり違っていました。しかし、結局日本聖公会全体としては、ほとんどそのことは十分に理解されず、また取り上げられないまま、日本の支配下で朝鮮半島で起きていたいろいろな問題について気づかず、あるいは無視して、政府の言うままに信じて来たわけです。ですから今日反省すべきことは、私たちは外からの声に謙虚に耳を傾ける必要があるということであります。日本に戦争責任について、外からの声を聞くことがどんなに難しいことか、大臣達の失言事件が繰り返されていることによく見られるのではないでしょうか。大臣ばかりか日本聖公会の中でも、同じような発言が聞かれます。外の声を聞く、すなわち自分自身を他者の眼から見るということは決して易しいことではないのです。

第六に、重要な情報と決定を一部の人にのみ限ることは大変危険であるということであります。

たとえば、日本聖公会の合同問題の真相については、ほんとうに一部の人たちしか知らなかったのであります。大部分の信徒達には知らされないないままでことが進み、結局聖職に言われるままに合同したり、非合同の道を選んだりしたのであります。恐らく今日でも、似たような状況が教会の中に数多くあります。情報

が限られることによって、一部の人たちが決定権を握り、あるいは管理支配することになります。これは、教会の共同体としての本質（会議性）を壊すことになります。

第七に、危機というものは決して突然やって来るものではないということです。

危機がやって来る前には必ずたくさんの前兆があります。ここに私たち教会、あるいは教会の中での預言者的使命という重要な役割があると思います。既に帝国憲法および教育勅語から始まって、日本におけるキリスト教の位置付けがなされてしまったという事実、ここからその後の日本のキリスト教の歩みが始まったということを考えますと、決してある日突然、キリスト教信者が非国民とされ、私立学校においてキリスト教教育が禁止され、合同問題が起き、あるいは日本聖公会が解散されたわけではなくて、私たちの教会もこのような国家の横暴を許す体制に迎合し、同調して来たのだ、そしてその帰結としてこのような悲劇的事件が次々と起きたということを、もう一度よく反省し、歴史を振り返るべきだと思います。そのためには私たちは、とかく無視されがちな少数の預言者たち、あるいは私たちの気に入らないことを語り、苦い言葉や行動を起こす預言者に気づくことは大変重要ですが、それが誰であるか多くの私たちの目に見えて来ないんです。また、教会の外にも預言者がいるということも、私たちは頭に入れておく必要があると思います。旧約聖書をご覧になれば、決して預言者はある特定の血筋とか祭司とか由緒ある血筋から出現するのではなく、野にいる羊飼いが突然預言者として召されているんですね。そういうことが起きているんですから、預言者がなにか血筋がいい人物とか、学問に優れている人物とか、あるいは聖職者に限るとか、決してそういうことではないことを私たちはよく認識しておく必要があります。

II　「教会の使命」はどのように理解されたか

佐々木主教は、日本聖公会が「教会の使命を忘却した」と指摘しています。では、日本聖公会は「教会の使命」をどういうふうに理解していたのかということを、戦後私たちはもう一度よく反省すべきだったと思います。

「伝道とは何か」日本聖公会は勿論最初から伝道を強調し、そのために一所懸命やって来ました。しかし、伝道と言えば、最近までそれは教会自身の拡張運動というふうに考えられて来ました。そして、教会は言ってみれば神の救いの一手販売店、総代理店、教会の外には神の救いの手も恵みも与えられず、教会がすべてを一手販売しているんだとこういうふうに思っていたのです。ですから教会が発展すればそれがそのまま人々の救いの拡大になるのだ、とそうストレートに考えていました。

もうひとつ、「教会とは何か」ということを考えますと、日本聖公会では外から与えられた教会、即ち英米の教会を受け継ぐもので、これが本物の教会だと考えて来ました。当時の日本聖公会のいろいろな指導者たちは、まだ自分達は信仰の日も浅く、信仰のことについても十分に知らないので英米の教会、本物の教会の事を勉強してからいろいろ日本の事情に即した在り方を考えるべきだ、と考えていました。祈祷書の改正もそうでした。日本の祈祷書を作るには、やはり先ずよく勉強をして、本物のキリスト教を修得してからだ、とこう言って日本聖公会は伝道を始めてから110年間、組織を成立してから72年間自分の祈祷書を作らなかったんですよ。その間、天皇に関連する祈りだけを変えましたが、そのほかは全部翻訳そのものでした。通常礼拝の時に身につける祭服も、今日に至るまで同じものを使っています。ずいぶん昔の事になりますが、英国

の物真似ではなく日本的な祭服を考えたらいいんじゃないか、という所謂「祭服論争」というのがありました。このことについて今井寿道も書いていますが、いずれ日本的な祭服を考えるのは当然としても、我々の信仰も歴史も浅いからもう少し勉強して我々のものになったら祭服を考えましょう、ということになりました。それから今まで全然変わっていないわけです。

私は十年ぐらい前に、余談ですけど、親しい神父さんに面白いことがあるから来いと言われて六本木にあるフランシスコセンターに行きました。すると、明治神宮から借りてきたという神主さんの装束姿で三人の司祭さん達が聖餐式の共同司式をやってました。これはまた奇妙なものでしたが、しかもその人たちが皆外国人であったというわけで、なおさらどうかなと思ったのですけれども…でもそういう試み、物まねではなく自分たちのものにして行こう、自分たちの文化の中でどういうふうにキリスト教を受け止めるのか、理解するのか、表現するのか、少なくともリスクといってもいいかもしれない、そういうチャレンジを果たして私たちは一体やったんだろうか、ということをやはり反省してみる必要があると思うんです。

「福音とは何か」　私たちは「福音」とは教え継がれた聖公会の信仰、聖公会の伝統、これが福音だ、こういうふうに考えて来ました。こうして私たちはいわゆる母教会の姿から抜けることができなかったのであります。佐々木主教が問いかけたその教会の使命とは何かということが結局、本物の宗教、欧米の教会のことを学ぶということだけで終始したという事の反省があって、初めて私たちは教会の使命を認識できるんじゃないか。

「教会制度とは何か」　私は教会の本質は「キリストと共に生きる運動体」だと考えています。教会は制度ではなくて運動体です。その運動を持続させていくためには制度はある程度必要ですね。しかし、制度は運動のための道具であり、潤滑油であります。

このことについて注意を促した外国人の宣教師達もいました。中国で働いていたロランド・アレンという人は現地の教会の自由な発展を認めるべきだ。英国やアメリカの制度やいろんなものを持ち込んでそれを守らせることは好ましくない。聖霊の働くままにすべきだ、と主張したために、彼は伝道団体から危険人物として見られ、とうとう帰されてしまいました。日本でもケリー神父という当時聖公会神学院で数年間教鞭をとった人がいました。彼も古い英国教会やアメリカ聖公会の伝統とか、制度をそのまま踏襲することに対して警告を再三発しています。結局彼も一匹狼で、あんまり他の宣教師達に歓迎されずに帰ったんです。そういう人たちがいました。いましたが、私たちの先輩たちは彼らから殆ど学ぶことが出来ずに、まず本物の教会、本物の信仰をそのまま踏襲することが正しいことだと思っていたわけです。これは、まさに植民地教会の姿にほかなりません。

III　「教会の権威」「主教の権威」

佐々木主教の挙げた教会の権威、主教の権威への不服従とはどういう意味だったのでしょうか。

佐々木主教は、主教会の非合同の決定に反して合同した人たちを批判致しました。それらの人たちは、その当時、殆ど「背教者」として扱われたのであります。そのため、その後日本聖公会に復帰して来た合同派の人たちは、大変気まずい思いをして来たわけです。日本聖公会の中にはそれまでは、いわゆるハイチャーチとローチャーチと言われているカトリック的な伝統と福音主義の伝統の二つの大きな流れがあって、今から見れば見苦しいぐらいにお互いに喧嘩をしていました。しかし、

彼らはそれでも同じ屋根の下で、同じ祈祷書を使いながら礼拝を一緒に守っていくそういう教会であったんですね。しかし、この合同問題の後、合同した人は主教の規律、権威をないがしろにした背教者ということで扱われましたから、それ以後、日本聖公会の中に福音主義的な考え方をもつ人たちは非常に弱い立場に置かれました。その後の日本聖公会の流れをご覧になれば、福音主義の伝統は随分弱くなりました。私自身はカトリック的伝統に親近感を持つ人間ですけれども、でも現状にはちょっと残念に思いますね。果たして、佐々木主教が理解したそういう主教の権威でよかったのかどうか。私はもう一度考えるべきだと思いますし、また世界の聖公会でも現在このことが問い直されています。弁明や検証の機会を与えられずに、日本聖公会の中の二つの伝統はどうやら共有されるという状態ではなくなってきたような感じがあります。しかし他方、今日の日本聖公会はカトリック主義的傾向が強いと言っても、どうやら単なる保守的伝統主義を主張するだけの教会になって来た感があるばかりでなく、主教および司祭が恰も神の代行者であるかのような権威(本当は、これは権力)を振りかざしているような姿が眼につきます。

佐々木主教の挙げた「信義に反する行動」については、ここでは何も言うことはありません。ただ、「主教の権威」の主張はしばしば権威主義もしくは権力主義と同意語となって来たのではないでしょうか。本物の「権威」を持たない人ほど権威主義の力に頼り勝ちであります。権威は決して権力ではないということを、私たちは心すべきでありましょう。私たちは、日本聖公会の主教やその他の聖職者たち、そしていわゆる有力信徒達もこのような陥穽に陥らないように心から祈るばかりであります。それにしても、自らの反省が勿論一番必要な事でありましょう。

世界の聖公会は、教会が権威主義、権力主義から解放され、真の権威は仕えることにあるとの反省がなされてきました。また、権威は単に聖職者にのみあるのではなく、信徒の中にもあることを強調しています。更に、教会組織においても主教にのみに権力が集中することが主教の権威ではなく、すべての教会員の会議への参加による共同体の権威を強調するようになっています。こうしたことを、私たちはこれからの反省の手掛かりにしたいと思います。

Ⅳ　検証:戦後の日本聖公会の課題

以上に申し上げて来た佐々木主教の指摘した反省点というものを、日本聖公会はその後この五十年間これを自分の課題として受け止めて来たかどうか、これが私がここで皆さんと考えたい検証ということです。これらはむしろ皆さんご自身でお考えいただきたい。ただ私はご参考までに、いくつか指摘するだけに止めることにしたいと思います。

(1)「国策への迎合」への反省

i　合同問題について

合同参加者の復帰式というのが1948年5

月12日に行なわれました。これが行われるまでには戦後3年かかりました。それでは、この3年間に一体何が起きたのでしょうか。結局、合同派と非合同派との間に本当の対話がないままで、伝道協会の肝入りで「まあまあ喧嘩しないで納めてください」ということで、この人たちはなんとか戻ることになったのです。復帰式の原案は、主教の権威に背いた教会の背教者であるという断罪が前提とされて、背教者としての懺悔の文言が入っていましたから、復帰者達にとっては極めて屈辱的なものでした。そのためとても受け入れられないというので、大変もめました。そこのところをやや曖昧にしたのが、1948年に復帰式で使用された式文であります。私はこの式に、確か東京の青山の聖三一教会で行なわれたと記憶しますが、当時まだ大学に入ったばかりで事情はよく分からなかったのですけれども、でも非常に一種異常な雰囲気のあったことを今でも憶えています。

しかしもっと大事なことは、エキュメニズム、教会合同、教会の一致とは何だったのか、ということであります。日本聖公会は、既に日本聖公会組織成立以来法憲の中に、日本聖公会は日本における教会の一致を目指すこと、聖公会というすばらしい名前は、日本における全公会的な教会、すべてのキリスト者が一つとなる、そういう教会を目指すという意図でつけた立派な名前です。しかし私たちが戦争中の、もちろん政府の介入などもあって、この一致の運動は必ずしもうまく行かなかった。私は、特に合同問題の後遺症で、その後日本聖公会はエキュメニカル運動には大変冷たくしてきたのではないか、と思います。もちろんエキュメニズム委員会を作ったり、エキュメニカル運動その他のところに委員を出しており、私もその委員を何度か務めましたが、その委員会にも特定の任務を与えることもなく、ただ他教会との付き合い程度に済ますという姿勢を日本聖公会はとってきたのであります。本当に教会の一致、キリスト者の一致を私たちの戦後の課題にしたのか、本当に私たちはその後の反省の中であの合同運動を捉え直すことをして来たのかということを、私たちは自ら問い返すべきだと思います。

ii　祈祷書の改正（1959、1990）

祈祷書の改正がようやく1959年に行なわれましたけれども、そこで戦後初めて「天皇のための祈り」など、天皇関連の祈祷文を検討する機会があったはずですが、結局ほぼ従来のまま残されたのであります。そして、つい最近になって何となしにと言ってもよい程に十分に討議することもなく、これを廃止しました。私は賛成反対どちらの意見にせよ、とにかく、きちんとこの問題について歴史を振り返りながら検証すべきだったと思います。もうお祈りを廃止したからよいのだ、とこういうことではないと思います。

iii　象徴天皇制

あるいは、今私たちは何となく象徴天皇制で満足しているように見えますが、本当にこれでいいのでしょうか。私たちは、もう一度教会と国家、あるいは政治と宗教というコンテキストで、かつてこの関係を私たちの課題として明確にすることを怠った責任を問われています。これが、佐々木主教の「国家と教会との関係について明確なる信仰的見識を有すべきであった」という指摘ではないのでしょうか。

iv　神社参拝問題

神社参拝についても同様ですね。元田作之進は立教大学の学長、そしてその後東京教区の主教でありましたが、彼は神社参拝を肯定し、これを教会員に勧めました。彼は、神社参拝は宗教的行為ではなく、祖先を敬うものであるから、これは認めても構わない、というふうに論陣を張っています。今日私たちは

政治家達の靖国神社公式参拝問題、歴代首相の伊勢神宮初詣とか、国費による大嘗祭の問題とかいろいろな問題に直面してきましたが、一体これらをどうふうに位置付けて行けばよいのでしょうか。

これまで教区や総会のレベルで反対決議のような形でですね、靖国神社国営化反対という決議をしていますが、本当に教会の中でその問題点が十分に認識されて来たのかどうかということになりますと、私は疑問に思いますね。そして多くの、聖公会だけではありませんけど、どの教会でも天皇の問題とか、政治と宗教の問題については、できるだけ当たらず障らずに済まそうというのが、私たち日本のキリスト者達の態度ではないでしょうか。もしこのまま過ごしたならば、佐々木主教が言っているような問題にいずれまた直面することになります。気が付いて見たら私たちの周囲に「皇国キリスト教」を標傍する人たちが再び出現するというような危機が「突然」やって来ないとは言えないと私は思います。

v　植民地政策への反省

佐々木主教は「国策への迎合」を指摘していますが、私たちの教会は「八紘一宇」という日本の国策に添って、植民地政策に協力して来ました。ようやく何年か前に日本聖公会と韓国聖公会の共同セミナーというのが始まりました。私たちがこのために積極的に、一所懸命かかわろうとしている多くの人々がおられるという点では、評価されてよいと思いますが、しかしそれにしてもそれまでに随分と時間がかかりました。そして、まだそれは日本聖公会全体の関わりと反省となっていないことも事実であります。

日本はかつてのような植民地を持ってはいませんが、国際問題の中でPKOとかPKFなど、そういう国際関係の中で私たちの取るべき役割は一体何なのかこういうことについて改めて問われています。果たしてこれらはキリスト者として無視したり、軽視したりしていてよいことでしょうか。教会の使命の中で考えておくべきことではないでしょうか。

(2)　「教会の使命の忘却」への反省

i　「与える教会」(本国)と「受ける教会」(植民地)の関係の反省と精算

佐々木主教は「教会の使命の忘却」を指摘しましたが、これについて考えてみたいと思います。日本聖公会は戦後どういうことをして来たか。日本聖公会は幸いにも、いわゆるアングリカン・コミュニオンという世界大の教会に所属していることによって、いろいろと海外の教会からの刺激、海外の教会からのいろいろな反省や教訓、あるいは指針を受けて来ました。もしこれがなかったら、日本聖公会は現在のような姿をとっているだろうかと思いますね。私は日本聖公会にとってやはり一つの大きな転機を、あるいは日本聖公会だけではなくて、アングリカン・コミュニオン、全聖公会全体にとって一番大きな転機となったのは1963年のトロントの大会と考えています。このアングリカン・コングレスは「与える教会」と「受ける教会」という関係を廃して、あのMRIですね、「相互責任と相互依存」というスローガンを掲げたわけです。この時、本国と植民地という関係を断ち切る、そういうアングリカン・コミュニオンの再出発があったと思います。私はこのことの意味を本当に日本聖公会がどこまで十分に受け止めて来たか疑問の点が多いのですが、それでもその後の流れの中で徐々にこの態勢になって来たと言えるでしょう。しかし日本聖公会が例えば自立自給と言ったのは決して戦後になって言ったわけではないんですよ。戦前、戦中から、日本聖公会が元田主教と名出主教がそれぞれ東京と大阪の最初の教区主教になった時から自立自給の教会になるんだと言って来ました。しかし、それか

ら本当に自立自給になるまで自らの手でこれを断行したことは一度もなかったのであります。戦後間もなく八代斌助主教が第23総会で、今は戦争のために復興が必要なので援助が必要だが、早く自給しなければいけないと告示で述べましたが、しかし自分の口から「援助をお断りします」と言ったことはないんですよ。日本聖公会は、1957年にまずアメリカ聖公会から「援助を止めたほうが、日本聖公会にとってよろしいんじゃないんでしょうか」とこう言われて、みんな大変なショックを受けました。またカナダ聖公会も大削減を1970年に提案して来ました。一番これに依存していた中部教区は大恐慌を来しました。私も当時中部教区に所属していましたのでよく憶えていますが、その時の教区会は大変深刻だったんです。果たして給与は出せるだろうか。どうやって自立できるんだろうか。でも結局、打ち切るよと言われて、初めて日本聖公会は自立に向けて真剣に取り組むようになって来ました。

ii　自立自給の教会

MRIの提案（1963年）によって、相互責任・相互依存ということでお互いに助け合うということになり、日本聖公会は何を助けてほしいのか、他の教会に対して何を助けることができるのかというリストが作られました。しかし、大久保主教がよく笑い話で言っておられたんですが、当時MRIを推進していたアメリカ聖公会のベイン主教が、北関東教区を訪問されたときに日光にご案内したところ、境内の木にたくさんの紙切れがぶら下がっていました。そこでベイン主教が「あれは何か」と聞いたら、「あれは人々が自分の願い事を書いてあそこに縛っておくと、願いが叶えられるのだ」と言ったら、ベイン主教は「そうか、そうするとあれはMRIツリー だな」と言われたという話があります。要するに、日本聖公会はアメリカ聖公会、カナダ聖公会から援助を打ち切るよと言われたんですが、今度はMRIのリストでもってまた援助をもらって来たんですよ。出すよりも受けるほうが沢山でしたから、暫くは余り以前とは違わなかったのです。しかし、時が経つにつれて、やむを得ず独り立ちせざるを得ない状況に追い込まれたのです。

iii　教区区域

また今私たちが属している教区組織はどうですか。あの教区組織、今、北関東教区、東京教区、横浜教区、これらの教区の区域分割、これを見て不自然に思われませんか。誰があんな区域を決めたんですか。あれは昔の伝道協会の歴史を知らなければ、どうして今のようになっているのか到底分からないですよ。どう見ても理由なんて全然つけられないでしょう。しかしその後ですよ、日本聖公会総会は教区の区域変更の検討委員会を何度も立てました。わたしの知る限り、二、三回ほど委員会を作っているんですよ。その度に「時期尚早」という答申でしたね。お手の物ですね。結局、結論を得ずに今日まで来ているんですよ。日本聖公会として、教区はいったいどうして十一でなければいけないのか。区域をどう分けたら日本全体の宣教態勢として最も望ましいのか…本当に考えたのでしょうか。これも結局、昔の依存関係をずっと引きずっているんですよ。かつての伝道協会の縄張りをそのまま継承したに過ぎません。そして私たちもまた、未だにこの区画は大事だとお互いに言い合って、再三再四問題提起をされたにもかかわらず、これを変える勇気をもっていないわけですよ。戦後五十年たって何をやって来たのかと聞きたい出すね。

iv　母教会の家父長制の精算と日本聖公会の宣教の協働

教区区域一つ見ただけでも、私たちはいかに私たち自身が清算しなければいけないこと

があるかに気づきますね。あるいは日本聖公会全体として日本のことをどう考えるのか、教会の使命を一緒になってどのようにすればよいのでしょうか。MRIといって、外国の教会と相互責任・相互依存の関係を保つと言っているけれども、十一の教区の中の相互依存は一体どうなっているのでしょうか。現在、海外の教会に日本聖公会の代表を派遣してますね、「カナダで総会があるから日本聖公会の主教さん、総主事さん出席して下さい」、「オーストラリアであるから出席してください」ということで人を派遣しているようですが、そんなことよりも、例えば、東京教区会が開かれる時に横浜や北関東教区の代表者も加わって、一緒に何を共同してできるか、助け合うことができるかを検討すべきでありましょう。相互依存・相互責任の関係作りは、すぐ身近にあるのではないですか。あるいは教会間、隣の教会同志でどうしているでしょうか。まあ、勿論少しづつは交流しているかも知れませんけれども、こういう相互責任・相互依存の関係作りは、遠くのところだけは何か外から刺激されてやっているけれども、実はなかなか自分自身の問題として考えられていないのです。それに近ければ近いほど、責任も負担も大きくなりますね。ですから教区区域というのはごく簡単な問題のように見えますけれど、私たちの反省材料が沢山その中に含まれているということが、分かってきますね。私たちの課題は、日本全体を包括的に、また戦略的に、共通の宣教の課題として協働することであります。

(3) 主教制と主教の権威

次に、教会の権威、主教の権威についても少し考えてみたいと思います。

日本聖公会は重要な決定事項は総会で議論して決めるというのが、法憲・法規で決められています。1968年のランベス会議以来、日本聖公会は過去二十数年間にわたって女性聖職についてどう考えるのかについて報告するように催促されていました。しかしこの件についての議論は、主教会から一度も総会に提案されたことはありません。主教さんたちは主教会直属の委員会である教理・礼拝・組織委員会に議論するよう依頼しましたが、その時の結論は時期尚早でした。実は私もその委員の一人でしたが、その結論の出し方と取扱い方に疑問を持ち、公表などの提案もしましたが取り上げられず、結局それを契機に辞めさせていただきました。あるいは、委員を続けるべきだったかも知れませんね。この点では責任があるかも知れませんね。その後もこの件は主教会ならびに上記の委員会で議論されてきましたが、その結論はいずれも時期尚早でした。主教会はそれ以来20年間、この同じ返事をして来たんですよ。ようやく最近になって、総会の中から女性聖職を考える委員会の設置議案が出されて、初めてこれが総会にかけられたのであります。

しかし、日本聖公会主教会は自らの意志でこの問題を、この大事な教会全体の問題を総会に諮って考えようとしたとは思えないですね。主教会は、この教会全体に関わる重大な問題を自分たちだけの権威で処理できるとお考えになって来た。私は日本聖公会が法憲法規を持っている限り、総会で議論すべきであったと思いますね。そういう責任を主教会は持っていたはずです。あるいは各教区で議論

すべきだったと思います。

しかし、ともかくようやく今日その段階に来ました。二十年たっているんです。その他、聖公会以外の教会との完全相互聖餐、その中には例えば南インド教会、北ヨーロッパにある古カトリック教会(19世紀末、教皇不可謬の権威の教義に反対してローマ・カトリック教会から出た教会)、あるいはスカンジナビアの地域のルーテル派の教会、これらの教会と日本聖公会は完全相互聖餐の関係を結んでいます。完全相互聖餐というのは、私たち聖職信徒すべての交わりなんですよ。私たち一人一人がこれらの教会と交流する、私たちは相互に聖餐にもあずかれる、聖職者も司式が許される、そういう関係を持つことであります。こういう関係ですから、私たちはこれについて、当然それで良いかどうかを議論すべきであったのです。総会でこれを諮るべきだった、と私は思います。しかし日本聖公会主教会はこれについて一度も総会に諮ったことはありません。そうしてただ総会の始めに主教会の告示として、こういうふうにしましたという報告をしただけで終わっているんです。私は、主教の権威を尊重したいと思いますけど、主教の権威というのは勝手に教会を代表して全部決めていいというようには法憲も法規も認めていません。教会というのは主教達だけで出来ているのではなくて、信徒も含めた私たち皆の教会、そういう教会ですから、私はこういう態度をして来た主教会は一体教会とはなんと考えているのか、信徒会衆を何と考えているのだろうか、信徒は主教が決めれば後について来ればよい、それでいいんだとお考えになっているんだろうかと思わざるを得ないのです。これが主教の権威であるというお考えだったんだと言わざるを得ませんね。

今日、世界の教会は会議性、コンシリアリティー (conciliarity) ということを言っております。会議性とは、教会員は皆同じキリストの体の肢、有機的な共同体である、ということが教会の本質である、という意味であります。聖パウロが言うように、各々肢体に分かれて機能が違うけれども、一つの体を形成している。自分の方がお前よりも偉いよと言わない、体の部分、手、足、目こういうものがお互いに助け合いながら体ができているのですね。

このような会議性を組織化した制度が会議制度ということです。すべてのメンバーがそれぞれ発言し、皆が決定に参加する機会を持つということなんです。教会にはもちろん秩序を維持し、運動体として動かして行くためにある種の秩序が必要ですから、教会制度は必要ですが、しかしその本来の意図は運動体が円滑に、また継続的に運営され、発展されることにあります。このことをもう一度私たちは考えながら、主教の権威とか、教会全体の在り方というものを検討すべきだと思います。

v　現代社会における教会の使命

時間がなくなりましたから、適当にはしょらなくてはならなくなったのですが、幸い準備委員会が沢山の資料を作成して下さっていますから、是非これらを参考にして頂ければ幸いです。

(1)「歴史の中に働く神」

私は特に皆さんに、第二次世界大戦後どういうことが問いかけられて来たかを考えて頂きたいと思います。

ところで、聖書の中で証言されて来た神は「歴史の中に働く神」ということでした。、創世記12章1節では神はアブラハムに向かって、「あなたは国を出て、父の家を離れ、親族に離れ、私の示す地に行きなさい」。あるいは、出エジプト記では、神はモーセに「わたしの示す地に行きなさい」と言われました。キリスト教の理解する、そして聖書の神は、まさに「歴史を

動かす神」、「歴史の中に働く神」なんです。そして、この神は私たちに向かって「この世界に出て行け」と命じています。人間の歴史理解の原点は「神に召されて出て行く」こと、これが聖書のメッセージだと私は思います。しかし今から反省してみるならば、私たちの教会は、「神の示す地」ではなく、「日本国の示す地」に赴いたのであります。

(2) 「伝道」とは何か

伝道は、これまで教会自身の拡張運動であるかのように考えられてきました。この理解こそが、日本聖公会を発展させるために国策に妥協させたんですよ。人々に受け入れられやすくして、教会を拡張するために妥協して来ました。しかし、まさにそのことによって、私たちの教会はつぶされたのです。教会中心主義、教会の拡張主義に基づいて、人数の増加とか、何らか影響力の獲得というようなものだけを、あるいは社会に認められるということだけを念頭に置くなら、私たちは神の宣教、神の救いを宣べ伝える代わりに、自分自身を宣べ伝えていることになるのではないか、こういう反省が私たちに必要だったのであります。このように、戦前国策に妥協した聖公会について、私たちは深く反省しなければならないと思います。

(3) 「福音」とは何か

福音とは一体何か。私たちはこれまで母教会から与えられて来たもの、そこで示された神学とか、教義とかこういうものを後生大事に守って来ました。しかし今、私たちの生きているこの社会の中で、この日本の中で福音とは何なのか、と。これについて忠実に、真剣に考えて来たか。私は、説教の課題はここにあると思います。聖書の背景や言葉の解説に留まるのではなくてですね、聖書が私たちにとって今、何を福音として語っているかを説明、解説し、そして励まし、示すことが説教だと思います。ここにも多くの司祭の方々がおられますが、お互いにこのことをよく頭に入れながら考えなければいけないと思います。聖書の歴史や言葉の解説とか釈義をしている方が一番簡単なんですよね。しかし今、置かれているそれぞれの状況の中で聖書を解明する、開示、開いていく、聖書の言っている中身を開いていく、示していくということが、私たちの宣教の課題です。またこれは個々の信徒の生活や周囲の人々に対して今生きていることの意義や価値、またどのように生きることが神の使命として与えられているかを語りかけなくてはならないのであります。

(4) 教会とは何か

私たちはこれまで領土拡張、そういう領域的概念にとらわれて来ました。さっきの教区の区域を見ればよく分かります。教会とは領域、領土として理解されてきたのです。主教さんたちは自分の領土を守ろう。教会、信徒、司祭も自分たちの領土を守っていこう。こういうふうな発想の原点は結局領域的概念であります。もし教会が運動体であれば、何も特定の場所にこだわらずに、あちこちともっと動いていいはずですね。い

わば機動的な運動体にならなければ、「出て行きなさい」という神の宣教に応じることができません。封建的社会の中で考えられた教会の領土を守り、拡張しなくてはならないという考え方では神の宣教の業に応じることはできませんね。

先程も申し上げましたように東京を中心に考えてみたら、もうこれまでの県境とかそんなものはないでしょう。私たちの生活はもはや領域的には区分出来なくなっています。新潟あたりはもう東京経済圏ですよね。私は今、毎週のように各地に行っていますが…昨日も九州から帰って来たんですが、九州まで一時間半。人々の目は東京の方に向いているんです。そういう時代の中で、一体私たちは教区組織とかこういうものをどういうふうに考えてくのか。これまでの伝統や慣行というものをどういうふうに考えていくのか。こういうことに根本的発想の転換が必要になっているんですよ。勿論、私は教区組織が全く不要と言っているわけではありませんが…

(5) キリスト教の真理性とは何か

私たちはキリスト教は絶対の真理で、正しい宗教だ、と主張するのは大変結構ですが、しかし、私たちの周囲の人たちにそのことの真実性をやはり納得の行くように示さなければなりません。たとえば、遠藤周作が自分の小説の中で、彼の言い方だと、洋服を着たクリスチャンから和服を着たクリスチャンに変わるのだ、といって一所懸命努力しています。彼は、これが自分の日本人に対する伝道なのだ、と言っているのです。私は彼の考えの全てに賛成するわけではありませんが、その問題提起については真剣に受け止めるべきだと思います。

私たちが今、周囲にいる人たちに福音とはどういう意味なのか、それが私自身の日々の生活の中でどういうふうに関わっているのか、これを明らかにしなければ説得力は全くないですね。私たちが聖書を読む時に最も大事な点はそこにあると思います。あるいは、教会の役割がそこにあるんだと、思います。ぜひこの点を皆さんに考えて頂きたいと思います。

このようなことを考えますと、私たちは、福音を語るに当たって、私たちの周囲の環境や状況についての深い理解と洞察が求められます。福音は真空の中で語られるのではなく、社会的・文化的・政治的、更には宗教的諸状況の中で語られるのであります。このことから、次に述べる「宣教の神学」の課題が出て来るのであります。

(6) 宣教の神学

「神の宣教」という言葉は、今度も宣教協議会という言葉が使われていますが、1960年代後半から急に頻繁に使われるようになってきました。そして、それがとかくこの世界に対して関心を向けることを強調してきたために、だから社会派だ、とやや批判的に見る人たちがおります。教会中心とか、福音中心の考え方の人たちにとっては、宣教の神学を唱える人は社会派だということになるようです。この種の人たちから、宣教の神学は政治とか社会の問題に全部心を奪われて、教会の本質、福音の本質を忘れていると、こういうふうによく言われています。しかし、私たちは日本の歴史を振り返り、そして佐々木主教の言葉で言えば、国家と教会の関係をよく見なかったことから「教会の使命」を忘却してきたことを学んできました。あるいは、国家神道に支配された教育によってマインド・コントロールされてですね、私たちが自分達の信仰、また教会というものがどのように国策によって、また社会によって歪められたのかを知りました。こういうことを考えますと、社会との関係に関わることなしに、私たちは福音を考えることも、語ることも出来ないんですね。

そこで少し「神の宣教」について考えてみましょう。聖書によれば、神様は世界を創造し、被造物が神の意志に従って生きることを望んでおられます。創造物語にあるように、この世界の創造には神の霊が世界を覆って天地が創造され、また人間は神の像に似せて、神の息を吹きかけれることによって誕生したのであります。このように、神様はすべてのものに直接に働きかけ、命を与え、それらを愛し、また世界の中に生じる多くの罪悪を裁きつつ、他方では赦し、また絶えずすべての被造物を見守っておられます。このような世界に対する神の働きかけが「神の宣教」であります。教会はこの神の意志を悟り、神の働きかけに応答すると言う仕方でこの世界に奉仕するのであります。これが<神－世界－教会>という図式で示されている理解であります。

他方、すべての人間は、そして神に選ばれたイスラエルの人々すら神の意志に反する罪を犯してきたにもかかわらず、再三再四神の贖罪の恩恵によって導かれてきました。そして、遂に神様はその独り子イエス・キリストを遣わし、その犠牲的愛の業によって罪の根源を絶ち切り、すべての人々が神の子として再生する(復活する)恵を与えられたのであります。神様はこの世を愛し、御子をこの世に与え、十字架上で命を捨てるほどにこの世を愛したのです。このことによって新たに生まれる恵にあずかった人々、すなわち教会はキリストの体に結びつけられることによって、キリストと共にこの世に仕える使命を与えられたのであります。この理解を<神－教会－世界>という図式で表します。

ある人々は、<神－世界－教会>の考えを強調する人たちを「社会派」と呼び、<神－教会－世界>の理解を「福音派」と呼んで、両者があたかも対立しているかのように語っています。

しかし、私は両者は対立するとは考えていません。確かに前者はこれまでの教会中心的発想や教会の領域的拡張に力を入れてきた教会全体の姿勢に対する鋭い批判と問題提起をしていますが、それだけをとって見ると、「福音派」の人々が指摘するイエスによる神の救済の出来事が二次的に見え、そのためイエスの福音が軽視されていると批判されて来ました。そこで私は以前から、これら両者を統合的に考えるという趣旨で、三位一体的に理解してはどうかと考え、次の図式のように考えることを提唱して来ました。

神

／＼

教会－世界

即ち、神様は常に、教会の仲介なしに、ご自身の創造物である世界に語り、導き、命を与え、祝福しておられる。しかし他方、神様は教会を通して恵みと導き、祝福と赦しのしるしを与えて下さる。こうして、「神の宣教」の業は直接に、あるいは教会を通して、この世界に対して働きかけておられるとの認識を持つことができます。両者は決して他を排除したり、神の働きを独占的に伝えるものではありません。

「宣教の神学」において、社会的関心が強調されているのは、これまでキリスト教があたかも福音宣教の独占的仲介者であるかのような主張に対する反省と共に、教会の本来的使命は自らの勢力拡張ではなく、神の宣教の業への応答、すなわちこの世界に対する神の愛と救いの働きに協働して、＜イエスの受肉の延長＞として世界のために奉仕することにある、との認識に立っているからであります。

Ⅳ 日本聖公会の今後の課題

私は反省とか、責任を問うということは過去のことにだけにこだわるのではありません。司会者も言及されていましたが、非常に神学に通じた、すばらしい指導者であった西ドイツのヴァイツゼッカー元大統領の述べられた言葉はまさに聖書、キリスト教の理解だと思います。過去を忘れたら私たちの現在も、未来も見えなくなる。しかし、過去の責任を自ら問うということは、現在そしてこれから未来への展望を開くためなんです。私はここ(レジュメ)に　～

過去から目を離すことなく、現実を忠実に見つめて、未来の希望に向かって歩もう　～

というスローガンを掲げました。未来に向かわなければ反省は出て来ないのです。ですから昔はよかったと思ってる人に、反省はないのですよ。これから先に行こうとしている人には反省が必要なんです。戦争責任を問いたくない人はいっぱいいます。しかし、その人たちは先が見えない人たちです。この人たちは歴史を逆行させようとしているようにさえ見えます。これから先どう行こうとしているのかと、私は聞きたいですね。私たちは自分達の過去の責任、過去に何をやって来たかを十分に検証することが、今後の大切な指針になるんだと思います。そこで私は次の四点を具体的な課題としてあげてみました。

(1) 教会とは何か

私たちは再度「教会とは何か」という問いに答えなければなりません。私たちがこれまで見てきた教会の過去の歩みは、神が示す地ではなく、日本国の示す地に赴いたということではないでしょうか。教会は天皇制絶対主義体制の前に立ちはだかることを怖れたために、却ってそれによって屈服させられたのであります。この問題に正面から取り組むことなしに私たちは前に向かって進むことができないのであります。

教会とはこれから来るべき世界の雛形になることであります。雛形になるには私たちの教会の姿はいささか淋しい思いもしますし、まさにそれ故に反省しなければならない点がたくさんありますね。そうです、反省をすることの中で、私たちが本当に罪を懺悔し、また赦しの力を与えられて、私たちは来るべき世界を指さす者になっていかねばならないのです。

今日、私たちの社会では、家族を始めいろいろな意味での共同体は崩れています。しかし、人間は共に生きることによってのみ生きることができます。共に生きることによって、未来を生み出しています。そういう視点から、私たちは私たちの教会を自ら顧みる必要があると思います。特に私は、今日どこへ行っても共生

が叫ばれていますが、共生ということは一人一人の権利を認め合うことなんですよ。それは各自が決定に参加する権利を認めるということなんです。先ほど申し上げたように、勝手に一部の人が決めるのではないんですよ。なぜなら私たち一人ひとりは神の前で一人の人間としての人格性と尊厳性を認められているからです。ですからみんなで決めるのでなければ、共生にはならないんです。家族の中でも、私たちは今家族が崩壊していると言われていますけれど、家族の中では本当に皆で決めているんだろうか。親父だけが決定者なんだろうか。親だけが決定者としての権利を持つのだろうか。子供の権利はどうなのか。教会の中ではどうでしょうか。私たちは隣国民との共生、アジア諸国民との共生、さらには地球的レベルでの共生に加わっているでしょうか。こういうことを考えないと、これからの私たちの新しい社会が描かれて来ないだろうと思います。

(2) 伝道とは何か

今まで私たちは、どうやったら、いかにして伝道するかということに関心を向けて来ました。いかに苦い薬や神からの厳しい問い掛けをオブラートに包むかとか、砂糖の衣を着せて飲ませるとか、そういうことで伝道の方策というものを考えてきたのです。しかし私は今や、その福音の本質が実際に、また具体的にどういうことを意味しているかを問われているのです。一つには先ほど遠藤周作のことを申しましたが、聖書研究や神学の営み、その他の中で、福音の意味が日々の私たちの生活にとって何なのかをよく考えるというプロセスが大変大切だと思います。

共に生きるということはどういうことかを尋ねることは、福音とは何かという問いへの答えにつながることにもなると思いますね。そういう意味で、この協議会でも取り上げられるようですが、人権擁護、生命、あるいは環境にかかわる問題が、福音とは何かということの中で把えらえられることによって、人々に、私たちの周囲の人たちに福音を語るのであります。私たちは、「キリスト教は何か難しいことばかり言ってるけれど、よくわからん」というような反応がないような形で、伝道をしたいと思います。

またそのためには、聖職者の養成とか、聖職者の再教育、神学者の養成も必要です。神学教師を養成しなかったら一体次の世代はどうなるんですか。今私たちはそういう危機に直面しているんですよ。もう遅すぎる状況ですよ。現在、立教大学のキリスト教学科の教員の中で聖公会員は半分しかいないんですよ。簡単に教育者を養成することはできないのですよ。大変な時間がかかるんです。お金もかかるんですけどね。そして本人の努力も必要なんです。こういう人たちを養成することをもっと真剣に考えないと、日本聖公会は後継者の養成もできなければ、本当に今課題になっている、伝道とは何か、福音とは何か、こういうことの担い手を養成することもできなくなります。

(3) 次代の教育をどうするか

私は今教育の現場におりますので一層感じますが、現在日本の教育はこれでいいのでしょうか。過去の日本の国策に操られた、皇国日本の教育体制の中で私たちが育ったわけですが、そういう教育がどういうものであったのかということを、私は身に染みて感じています。多分皆さんもそうでしょう。その私たちが、一体今教育界の中で、どういうことをやろうとしているのか、これからどういう教育を私たちの社会の中で求めようとしているのでしょうか。キリスト者の教員養成こういうことを考えなくていいのでしょうか。今どこのキリスト教系の学校もクリスチャンの教員を採用することに大変苦労して、苦労して、苦労してそれでも得られない。なかなか厳しいですね。特に、大学に

なったらもう殆ど得られないのが現状です。日本のこれからの教育をどうするかは、私たちの緊急課題であります。現在、オウム真理教が問題になっていますが、あれは日本の教育は何か、という問いかけですよ。日本の教育を背景に生まれた社会問題です。現在の日本の教育を支配しているのは、国家管理から始まって、社会全体にみなぎる管理体制であります。ですからこれを破らなければならないと、ここで言っても、わたしたちにはなかなか歯が立たないのですが…

私も現在私立大学連盟の常務理事をしていますから、私立大学が置かれている日本社会の状況がよく分かりますし、またこれにいつも大きな疑問を持っています。例えば、今立教大学で新しい学科を作ろうととすると、どうしても先ず文部省に頭を下げて伺いを立てることが必要になります。文部省に許認可権を握られているために、いざとなると私たちは情けないことに大きなことを言えない。ここでは勝手なことを言っているけれどもね。自分でも情けなくなりますね。でもこれは、私たち皆が許している体制なんですよ。日本中がね。そして、結局自分たちが処理できないから、その面倒なことは官僚に任せようとするのであります。

日本でもアメリカのまねをした大学基準協会というのがあります。これは大学がお互いに、この大学は本当に大学としての基準を保っているかどうか、そのような資格があるかどうかを相互に審査しようというわけです。アメリカには、文部省というのはないでしょう。ところが日本では、相互批判というのはできないわけです。「やあ、あの先生だからちょっと遠慮しておこう」とか、次の時に自分がやられてかなわないとか、いろいろな思惑で相互批判をすることを避けようとするのです。基準協会では、今度相互評価をやろうというので、来年からこれを導入することになっているんです。そこで相互評価 ～

この大学の教員はその資格があるかどうかとか、どういうカリキュラムを持っているか、それはどういう内容か、こういうことが点検評価されることになります。しかしこれをやるということになると、突然皆んな身構えちゃって、それぞれの学校の独自性がありますからとか、何とかかんとかいろいろと理由を述べて、とにかく批判を逃れようとしてり、言い訳を探すわけです。他方、相互評価を担わされる委員の方も出来るだけ柔らかく、本当のことはオブラートに包んで話しをする。こんなことをしているものですから、文部省からもっと基準協会はしっかりやれと言われたりして、もう全然話にならない。だからこれはやっぱり私たち自身の責任ということになりますね。私たち自身がそういう国家管理の教育というものを委ね、育てて来たと言っても過言ではありません。

教科書だってそうでしょう。自分たちで教科書作るのが大変だから、教科書検定におんぶして作っているんですよ。私立学校は検定教科書を使わなければいいんですよ。多分、受験の準備とか、いろいろあるんでしょうが…ほんの一部のところだけ、副読本で自分たちで作ったものとかを使いますけど、殆どおんぶし

ている。そんなことをしているから、私たちはもやもやした思いをしながら文部省に行かなければならないのです。これは私たち自身の責任ですね。勿論これはクリスチャンだけではありません、日本中全体が国家管理教育体制を認め、育てていると言ってもよい程です。

かつて、各自治体には教育委員会があって、住民達の選挙によってその委員を選んでいました。それはアメリカの占領下で作られたわけですが、結局住民は選挙に行かず、こうして自らの選ぶ権利を放棄して、全部官製の教育委員会となり、上から決めてもらうようにしていまいました。こういうことをして来たこの結果、こういう教育の結果が、今、オウム真理教という問題になって来たのではないでしょうか。あるいは経済優先の価値と目的に支配されて、とにかくそういう発想の下で教育をやって来たから、こういう結果になったのではないですか。私はこういうことについて、本気で私たち自身の問題として取り上げるべきだと思います。なぜならこのような教育体制の下で、人間の価値や尊厳性が無視され、環境が破壊され、すべてが経済効率や経済発展が優先されるという尺度によって、私たちの生活も教育も完全に管理され、支配されるようになったからであります。これはまさに宣教の課題です。

日曜学校も聖書のお話しだけで終わってはなりません。日曜学校は、大人も含めてコミュニティ・サービス、すなわち自分たちのいる地域社会のために奉仕する学校になってほしい。聖書の話を少しずつやって、あめ玉をしゃぶらせて帰らせるというような学校をいくらやっても、「昔、日曜学校に行ったことがあります」と言う人たちが結構沢山いますが、でもそれはそれで終わっているんですよ。私たちはすぐに、教会拡張のことを考えてしまうから礼拝堂は礼拝のためだけと考えますが、多くの教会は一週間何にも使われずに空いているんではないですか。すぐにそれが伝道になるか、教勢拡張につながるかなんてけちな考えでなくて、もっと積極的に、本当に私たちの人間性回復、共生に繋がるような事のために地域社会にサービスするという事をもう少し考えたらどうでしょうか。そういう意味で日曜学校の脱皮っというのを考えてほしい。そしてそれは子供だけでなく、大人も含めてですね。これもまた神の関心事のはずですね。ということは、これは宣教の課題ということです。

(4) エキュメニカルな運動に向かって

日本における宣教の課題を 日本聖公会だけでやれるなんてとんでもないこと、とても力のないことは私たちお互いによく知っています。また、教会はキリストの体として一つでなければならない、という使命を与えられていることは、皆さんがよくご承知の通りです。それでも、それぞれの教会が、何か自分たちだけが本当の教会だと主張したり、密かにそのように独善的に思い込んできたことが、結局、戦争中の合同運動の失敗につながったのだと私は思います。そして、教会の一致というのは全人類の一致を指し示すものであります。先ほども申しましたように、教会はこれからの世界の雛形なのです。クリスチャン同志が一つになれなくて、一体世界全人類がどうして一つになれるのでしょうか。勿論私たちは力をつくして教会の一致のために働くはずですが、しかしこれは私たちの作りだすものではないということもよく記憶すべきことであります。むしろ神様が私たちを一つになるように招いておられるのです。そして私たちが唯一のキリストを目指すとき、私たちは一つにされるのです。そして、その時、クリスチャンもクリスチャンでない人も、すべての人々がキリストによって一つになるのであります。

以上、私たちの現実の課題ということで思いついたことを挙げさせていただきましたけれど、もちろん他にもたくさん課題があると思います。ただ、私の挙げた課題を皆さんの参考にして頂き、それらがこれからの皆さんの議論のきっかけになれば幸いに思います。

用意したレジュメをかなりはしょったり、十分にご説明できなかったかと思いますけど、私の講演をこれで一応終わらせていただきます。ありがとうございました。

【質疑応答】

司会：日本の歴史と宣教理解という事についてお話しをいただきました。非常に多岐にわたる問題と、非常に重い課題というものを背負って出発したような気が致します。明日私たちはこの問題について、各分団で分かち合をしていくわけです。その中でもう少し聞いておきたいなということ、時間はないのですが、今日から始まったばかりですから時間を厳守するということで21時には夜の集まりが、祈りの集いがあるということを頭に置きながら、聞いておきたいことがありましたら、三分間だけあります。

質問：いろいろ聞きたいことがあるのですが。横浜教区松戸聖パウロ教会甲藤でございますが。時間がないので二つに絞ります。一つはですね、日本聖公会は何やってる、何やってる、と先生、プリーストなのに何いってるんだ、何いってるんだと途中まで思っていたんですが、どうもその場合の先生のおっしゃりたい日本聖公会というのが、どうも主教会の事らしので、それは分かりましたので聞きませんけど、教区制の問題ですね、それは松戸を始めるときもう25年も前から、口を酸っぱくしていっておりまして、昔決めた縄張りで何をやってるんだと言い続けて来たんですね。それについては、東京、横浜教区が共同プロジェクトを作って、先生教区会に横浜の人来ないと言いましたけれど、私は毎年東京教区の教区会に横浜の松戸から行っております。先生いらっしゃらないことありましたけれどね。お忙しいから。そんなことどうでもいいんですけれど、一信徒としての立場でとしですね、どうも教役者、聖職者同志の近親憎悪みたいなものがあるような気がしてしょうがないのです。その点についてどうお考えなのかということが一点。というのは、先生はやっぱり会から抜けなければよかったんです。教区制の問題を僕ら25年も前から言っているんですから。明らかに抜けなければよかった、と思うからこういうことをあえて申し上げるのです。

もう一点はですね、ポール・ラッシュさんの敷いた路線で大体進んで来たという受け止め方で、そこに恐らく総てのことがいろいろあったという事だろうと思うんですが、私は参加動機に、外資によって取得した基本財産の上にあぐらをかいている事をどう総括するかっていうのが、この協議会の課題だろうと書かせていただいた。天皇制の問題一つ採りましてもね、どうも私の思うところ、先生もよくご存じじゃないかと思って聞くのですが、欧米から天皇制を聖公会に残せ残せと言うような、ささやきがあったんではないか、というような気がしてしょうがないんですよね。英国と全然形が違うんだけども皇室を持っている。このへんは分からな

い。ですから、外資ばかりでなくてですね、そうした、その日本の聖公会の今反省しているようなことの中に、やっぱり欧米的な一つの思考が働いているんじゃないか。その二点をお伺いしたい。

塚田：第一点は大変厳しいご批判のようですが、聖公会とは私自身、自分の事を含めて言っているんで、別に主教会だけを責めているんではないですよ。ただまあ主教さんたちにもよく認識していただきたい。特に重要な課題を、要するに総会という場所が皆で考える場所なんですから、そういう場所で多くの問題を考えるべきではないかと考えていますから、主教だけの責任でなくて、そういうことを問わなかった総会の責任でもあるんですよね。だから、そういう意味では何も主教たちだけが、責任だとは言いません。がしかし、指導者ですからね、教導職にあるんですからやっぱり主教の責任はあると思いますね。主教の権威とか、教導職としての務めを考えれば…そして、私自身も司祭の一人としてやはり責任があると自覚しているつもりです。

さっきは教理・礼拝・組織調査委員会から私は辞任したことを申しましたが、辞任したからその問題に全くかかわらなくなったわけでなく、自分なりの責任を取る仕方で、発言もし、書いても来ているし、また別の委員会には参加してやって来ていますから、必ずしも逃げたとは自分では思っていませんが、それで十分に責任を果たしたかどうか、十分でなかったろうと言われれば、そうかも知れません、と申し上げるしかありません…

天皇制の問題ですけれど、天皇制の問題については、ビカステス主教は日本聖公会組織成立のときの中心的役割を果たした主教ですが、彼は天皇を英国の国王と同じように考えて、そして日本がキリスト教を国教にする日が近いのではないか、ということを書いていますから随分楽観的に考えていたと思いますが、多分、鹿鳴館時代以降そういうふうな雰囲気が多少あったのでしょうね。そして彼は、その時に一番いいモデルは英国教会、そういうふうに言ってるんですよ。それから、帝国憲法の発布の時にもこれを歓迎しています。だから何も日本人だけでないんですよね。しかし、私も自分の本の中でも書きましたが、例えばサイルという宣教師とか、女性の宣教師の中にも、この問題について違った角度で批判的にあるいは非常に疑問視、あるいは問題にしている人たちもいます。

それから、当時英語を使用する会衆の教会であった聖アンデレ教会のメンバーに東京帝国大学の言語学の教授でチェンバレンという人がいました。彼は"Things Japanese"という厚い本を書いています。彼はその中で日本の国家神道のことに触れていて、これは天皇および天皇の祖先を神として拝み、また日本人が日本人を拝む宗教、即ち日本教だと書いています。何年か前に山本七平が『ユダヤ人と日本人』という本の中で日本教という表現を使って話題になりましたが、一番最初に日本教と言ったのは、チェンバレンなんです。このように、早くからそういうことを察していた人たちはいるんですね。他にもSPG系で来ていたチャモレーなどもその一人です。この人も英国大使館でチャプレンをしていて、当時の大使館筋から得た情報を元にして親しい友人たちだけに宛てたマル秘の私信があります。その中で、彼も日本の状況について憂慮していることが言及されています。そういうことを感じている外国人もいたわ

けです。

しかし、このような考えを持っていた人たちの意見は当時全くと言ってもよい程表に出て来ませんでしたから、あなたの言うように、発言していた人たちは日本人のメンタリティというか、その雰囲気を察しながら話していたわけで、決して本音は見えなかったでしょう。しかし、私たちは過去の出来事に対しては、外国人の責任にするよりは、自分たちの責任として受けとめ、検討すべきではないでしょうか。

司会：質問することによって、私たちの知らないことが、どんどん出てくるような気が致します。もう九時過ぎてますけれども、もう一つだけ質問を。

質問：沖縄教区の高良と申しますが。検証(4)のところの日韓共同セミナーのところまでは聞いたんですが、次の沖縄問題はちょっと眠っていたんで、先生の沖縄問題について一言聞きたいんですが。

塚田：わたしがしゃべると沖縄問題は、なんだそんな認識かと言われそうなんで本当は避けたいですね。それで省いた面もないわけではありません。あなたが眠っていたからでなく、私が言わなかったのです。ここには仲村主教がおられますが、彼に聞けば一番よいと思っています。私は仲村主教の意見に大体賛成ですから。ただ私は沖縄の問題というのは、日本の中でね、少数者、民族差別、そういう歴史を原点にして出て来てる問題だと思っています。ですから、戦時中の出来事、ああいう極めて悲惨な出来事などもそのような背景の中で起きたんだろうと思いますし、ですからこれは同時に、日本人の少数民族に対する責任、そういうことにも繋がって行くことだろうと思います。

沖縄聖公会が生まれたのは、アメリカ聖公会の下でした。日本聖公会は全然責任を持たなかったのですよね、ずっと。日本の伝道の歴史を見れば、聖公会関係の宣教師が最初に上陸したのは沖縄ですけれど、しかし、その後も日本聖公会は伝道の責任を取ることはなかった。そういういろんな背景を考えますと、私はやはり、沖縄の問題というのは、私たちの内なるさまざまな少数者への差別こういった問題に繋がっている問題と考えています。個人的にはいろいろな思いもありますが、これ以上のことは勘弁してください。

司会：大変発言しにくいようですが、沖縄教区、沖縄聖公会と言っていた時代からアメリカ聖公会が沖縄に対して示した好意というもの、考えなければならないことがたくさんあると思いますけれど、それはまたどこかで勉強しましょう。

（注：これは宣教協議会における講演に基づきながら、多少加筆訂正させて頂きましたことをご了承ください　―　塚田　理）

特別講演

21世紀への教会の展望

あらゆる場を変革するために

日本聖公会をアジアから、世界から位置付けること

司祭　ジョン・ポビー

はじめに一言お礼を申し上げたいと思います。今回お招きいただきまして本当に感謝しています。多くのガーナ人にとって日本は非常に遠い地でありまして、行きたくても行けません。私はこのような機会を与えられ、日本に来ることができましたことを感謝しております。

皆さまに前もってレジメがお渡ししてありますが、むしろそれは脇に置いて、いま私が語ることをお聞きいただきたいと思います。講演を頼まれた者がレジメのようなものをあらかじめ用意しませんと、何も準備していないように思われますので、レジメはお出ししましたが、今はそれとは別のお話をいたします。

昨日、私はこの協議会に私と同じように招かれて参加している外国の方々に話したのですが、私がこの協議会に貢献できることは、みなさまに混乱を引き起こすことだけだ、と申しました。すでにこうして皆さんに混乱を起こさせています。長い文章を用意したのに、それは使わない、などと言っているのですから。通訳の輿石勇先生にも感謝いたします。先生は聖霊の助けによって、私の不十分な英語の表現を適切な日本語に訳してくださることを信じております。

ペンテコステの出来事のように、皆さまがここでの経験を通して、神の言葉をそれぞれの言葉で語ることができるようになることが一番重要なことではないかと思います。

では、ちょっと真面目になりましょうか。私は一人のガーナ人としてお話をしています。皆さまは日本人で、私とは全く違いますね。しかし私は、ガーナの聖公会の司祭で、皆さまと同じ聖公会に属すると共に、同じ一人の人間です。このこと自身がひとつの譬ばなしです。つまり日本聖公会はもっと大きな全体の中の一部であって、この世界の片隅に閉じこもっているわけではないということです。この集まりには、アメリカ、カナダ、ガーナ、韓国、フィリピンなどいろいろの国の方々が来ておられます。これは、世界の聖公会の状況を示すものでもあります。教会は各々の個別の場所において、キリストの一つのからだ、一つの教会になるように召されているということです。ただ、聖公会員になることが最終的な目的ではありません。最終的な目的は神の宣教のための神の民になるということです。日本聖公会は1859年に設立され、厳密には、法憲法規が規定されたのは1887年ですが、それ以来長い期間

にわたって宣教活動をしてきました。しかし、宣教という言葉は、非常に身近な言葉であるにもかかわらず、その意味がすぐに忘れられてしまうということを、私はよく承知しております。もし、私がこの部屋を歩きまわってお一人お一人に宣教とは何か、とお訊きしたとしますと、おそらく皆さんから全部違った答が戻ってくるのではないかと思います。そういう意味で、皆さんはミッション（宣教）という言葉を御存じではあるのですけれど、ここで私に少しそのことについて発言させて頂きたいと思います。けれども宣教とは何か、という公式的定義を申し上げたいとは思っておりません。申し上げたいのは、宣教を構成するいくつかの要素についてお話ししたいのであります。宣教とは……であるというふうに定義すれば、学者たちに袋叩きにするチャンスを与えることになるかもしれません。けれども宣教の要素は・・・である、ということになれば、それなりに皆さんを納得させることができるでありましょう。

宣教を構成しているのは八つの要素であると私は考えています。

1. 最初の要素は宣教はプロセスであるということです。私たちの生活の中にはインスタントコーヒー、ラーメンなど即席でできるもの、即座に答が出るもので満ちあふれています。しかし宣教は、十分に計画され、神を待望し、忍耐のいる長い過程です。けれども何よりもまず、神を待ち望まなければなりません。もし、あなたが私のようなヨーロッパに住んでいるアフリカの黒人だとします。すると彼らはアフリカの人は神を知らないのだから、改宗させなくてはならないと考えます。でも、そうではなく、神のなさろうとすること、その結果をまず待つということがとても重要なことなのです。それが宣教です。

私には、神を待望するということが宣教にとって非常に大切なことに思われます。なぜなら、まさにそれは宣教における霊性ということと深くかかわっているからです。それにもかかわらず、宣教における霊性ということは、今まで十分に話し合われたことがありません。宣教の目的は霊である神ですから、宣教の起動力は神の霊にほかなりません。ですから日本の皆さんにまず伺いたいことは、皆さんの教会の起動力となってきた神の霊性とはどのようなものかということです。皆さまが、キリスト者である自分が一体何者なのかとお考えになるとき、また宣教のために建てられた教会とはと考える時、それを促す霊性が非常に重要なものとなります。

2. 次の要素は、あらゆる共同体の中の共同体を建設するということです。なぜなら、教会の宣教の業は、人間も含めてすべての被造物が、ただ一人の創造者である神の家に招かれているということです。聖書の中には、いろいろな共同体の中の共同体ということがしばしば言及されております。よく引用するのは黙示録の7章7節であります。いろいろな違う人々、異なる言葉を使う人々が歌をもって神を賛美すると書かれています。別の表現をいたしますと、宣教とはすべてを包み込む、包括的なものだということです。はじめにペンテコステの話しを半分冗談のように申し上げましたが、このペンテコステの物語をよく見ますと、神の霊が降されることによってすべての人が神を賛美するように、また神の言葉を聞くようになったということを表わしているのです。

3. 宣教は共同体の中に共同体を建てることですが、それは宣言・告知、伝えることによります。宣言するということは、新約聖書の定義に従えば、良いおとずれを他の人々に告げ

る、あるいはイエス・キリストの物語を人々に告げる、ということであります。このことは新約学者たちはケリグマと呼びます。私たちが良いおとづれと言うとき、ともすると人々によりよい生活をなどと考えますが、それはケリュグマではありません。皆さまに伺いたいと思うのですが、皆さまの教会の牧師たちは説教の中で、皆さまにきちんとケリュグマすなわちイエス・キリストの福音を伝えているでしょうか。

4. さまざまな共同体の中の共同体を、弟子達をつくることによって建設することです。これは時に伝道と呼ばれます。しかし私は、この言葉を安易に使いたくないのです。この言葉があまりにも違った意味で用いられているからです。なぜ「福音伝道の10年」という呼び方をなさるのかよく分からないのです。むしろ「宣教の10年」と呼ぶ方がよほど聖書的だと思います。とはいえ、そう呼んでいる聖公会から私が離れようという訳ではなく、こうしてとどまっていますから、ご心配なく。

5. 神のみ旨に服従する中で、社会的行動を通して共同体の中の共同体を創ることです。イエス・キリストは、たんに説教をなさったのではなく、空腹な人を御覧になると彼らを養われました。

今申し上げた3. 4. 5.の要素が実は宣教を構成しているのであります。この三つがなければ宣教にはなりません。ところが西洋人たちが「宣教か福音伝道か」などとよく議論しているのを聞きます。あるいは「社会的行動か、伝道か」という議論であります。それは時間の浪費です。もし宣言すること、弟子にすること、あるいは神への服従によって社会的行動をすること、この三つのどれが欠けても宣教にならず、このように理解することによって宣教を包括的に受け止めることになるのです。

6. 今まで申し上げました事がらは、すべてのことを神の支配という視点から見るということです。実は神の支配ということが宣教の最終目的であります。神の国の成就、あるいは神の支配に入ると言うと、皆さまは、では早く死ぬのかと思われるかもしれませんが、そうではありません。そうではなく、神の国というのは非常に具体的な六つの特質からなっているのです。

それは、第一にイエス・キリストの十字架に象徴される犠牲的な愛ということです。第二の特質は真理ということでありまして、イエス・キリストは、「私は道であり、真理である」と述べられています。第三は義と公正、ギリシャ語ではディカオスネー、ヘブル語ではツェダカーと申しますが、多くの人々は、このどちらか一方を強調する傾向があります。例えば解放の神学では、公正と訳される部分のみを強調しますので、私は賛成しかねるのでありまして、義がないところには公正はないし、公正がないところには義もないのであります。したがって義と公正は分かち難い一つのことだと思います。それに加えて、自由、和解、そして平和を加えるべきでありましょう。

塚田先生のお話に戻りますと、今、皆さまは、グループに分かれて、和解が必要とされる領域の問題について謝罪ということを話し合っておられます。どのようにしたら本当の和解を実現できるかということを模索しているわけですが、それがまさにこのことの過程にあるということであります。今申し上げた六つの特質ですが、宗教的な価値を持つと同様に、政治的にも非常に重要な意味を持つ事がらであります。時に、宗教的な人々はいつも祈ります。またこれは経済の問題、これは政治の問題であって私には関わりがない、と言う場合があります。そのような考え方は、私に言わせ

れば異端であります。

7. 宣教を構成する七つ目の要素は、すべての場所を変革するということであります。もし神の国が何らかの意味あるいは価値を持つとすれば、それは社会を変革するということにのみかかっているのであります。それはすべての場所を変革するのであって、どこかだけを変革するのではありません。

8. 人々は外国に出かけて説教をすることがありますが、そういう時、自分たちの社会を見直してみて、そこに神の国の価値が本当にあるかどうかを検討してみなければなりません。そこで八番目の要素は外に出かけていく…例えば外国に行って福音を述べ伝えるというような……それと同時に自分自身に問いかけるということ、つまり外へ、と内へ、との両方向を持つということであります。

いま皆さんは、平和、和解というようなことを求めて議論している、そのような過程にあるのですが、それは今の私の定義にしたがえば、どちらかといえば内向きの、自分に問いかけるという局面にあると思います。

もし誰かが百年間、何かの仕事に携わったとすれば、そこには語るべき歴史、あるいは語るべき歴史の遺産が残ります。

自分の歴史から様々なことを検討するということが非常に重要であります。もちろん他の人々の経験から学ぶべきことはたくさんあるのですが、しかし日本聖公会が百年の歴史をもっているのであれば、神は既にその中で働いてこられたのであって、これから私たちはどこへ向かって進むべきかという指針は、既にその歴史の中で神が語っておられる筈であります。例えば、アフリカの教会の人が第三世界の教会に招かれて語るような場合、自分たちがアフリカでどんなに力強い宣教をしているかということを語ります。しかしそれはあなたがたの物語ではないでしょう。それはその人、あるいはそのグループの物語なのです。ですから私は、自分が見聞きしたあちらこちらのことを皆さんにお話しするのではなく、皆さまとご一緒に、皆さまが宣教のために招かれている、その召命について検討し、見極めたいと思っているのです。

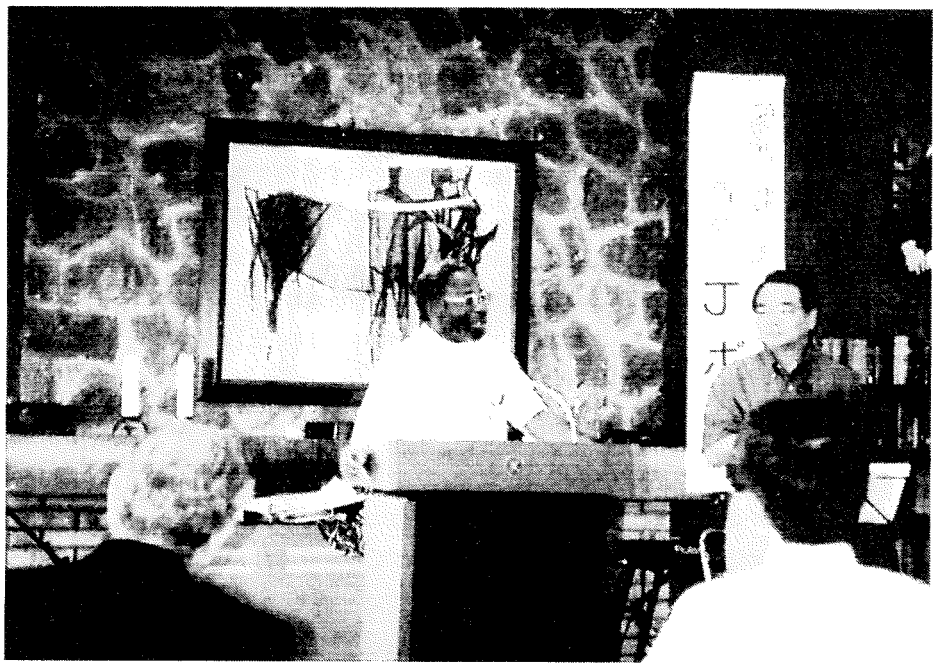
この歴史の遺産ということに関して私は二つのことをお話ししたいと思います。今から申し上げようとすることについては、主教さまたちにお赦しをえなければなりませんけれど。二日前の塚田先生のお話の中に、主教職について、特に主教職の権威とか主教の指導性、責任ということが出てきました。具体的に歴史を見てみますと、チャニング・ムーア・ウイリアムスという方が主教に聖別されましたが、彼が聖別されたのは日本に行って宣教活動を始めるためでありました。つまり、歴史が語ることは、主教は宣教の中心にあるということであります。一昨日のお話しの中では、その主教の権威が日本聖公会の歴史の中でどのように経験・体験されたかが語られました。私たちは時々、主教たちの目の届かないところで、彼らがどのように行動すべきかと語りあったり、批判したりするのです。

教会の中で明確にするべきことは、教会の中でどのように指導性が行使されるべきかということであります。それを明確に検討するという宿題を私たちは与えられているのではないでしょうか。その宿題をするのには二つの方向があります。一つは今日、指導性・リーダーシップをどのように理解するかということであります。私たちは、誰かに、たとえ親からであっても命令されたくないと言う気持ちを持つ時代に生きています。ですから、神の国に相応しく、今日の社会的状況に相応しいリー

ダーシップのモデルはどんなものなのかを明らかにしなくてはなりません。その宿題は、あなたがた自身がやることができるものであります。私はそれを代わってすることはできません。勿論アフリカの経験、いろいろな国のいろいろな経験が役に立つことはあるでしょう。しかし、あなたがたの物語の中でそれをするためには、あなたがた自身しかありません。ですから、私の提案は、宣教のための指導性のあり方はどんなものであるべきかと言う課題を探究することだと思います。

もう一つの方向性ですが、私は主教たちを尊敬もし、またその権威を喜んで承認するものです。けれども聖公会の信仰の中に、すべての信徒は司祭であるという伝統があることを確認したいと思います。ですから、すべての信徒が司祭職であるという原則の中で、主教が宣教のため何かをするだけでなく、私たちすべての信徒が司祭であるという役割、それを補うような主教職と、それから教会全体の奉仕職との関係を考えることです。私たちは主教の特別な役割を認識するべきですが、同時に、私たちは神へのすべての信徒の奉仕職ということも考えなくてはなりません。そこで問題になるのは、司祭であるすべての信徒を宣教のためにどのように整えているか、どのように装備しているかという問題であります。これが最も重要な問題です。なぜなら、社会を大きく変革させ得る場面に存在しているのは、いわゆる信徒と呼ばれる人たちであり、そこでは牧師たちは出る場がないということです。

別の言い方をすれば、信徒全体が担っている宣教の使命とは何であるとお考えですか。私たちは時々、宣教は牧師だけの責任であるという議論をしがちであります。実は、教会に属するすべての人々が宣教のために召されているのです。また別の問ですが、牧師は信徒の牧会をしますね。では牧師を司牧するのは誰でしょうか。誰もしてくれませんね。ですから牧師も過ちを犯し、時に新聞種になってをしまいます。私がここで言いたいことは、互いに責任を担いあう相互責任ということと、



互いに信頼する相互信頼ということです。例えば天皇制の問題に直面した時、主教はどこにいたのか、何をしていたのか、というようなことが言われるのですが、それは世の中の一般の人たちのあり方を反映しているわけです。私たちは、指導者に対して石を投げる前に、自分たち自身を振り返ってみようではありませんか。つまり、人を批判する前に自分自身を反省する必要があるということです。

歴史の遺産ということと関わって申し上げたい第二点ですが、実はアングリカニズムはその歴史的なつながりから、往々にして西欧の影響を与えようとする傾向にあります。初期の宣教師たちの考えの中には、伝道のためには文化的な改宗が必須条件だとしばしば考えたものです。ですから、そこで各国の教会のアイデンティティの問題が起こってきます。あなたがたの教会はアメリカ聖公会に同一性を求めるのか、あるいは英国教会に同一性を見いだすのでしょうか。私はこの二日の間にそのような傾向を皆さまが持っておられるような感じをもつのですが。よく学問の世界、特に宣教論を語る人たちの間で、オルタナティブな社会(とってかわるべき社会)ということが論じられます。今の社会から、そうではないもっと別な社会にしたいと言う時に、実はそれは同一性の犠牲の上に成り立つのです。つまり私が黒人であること、ガーナ人であること、ある部族に属する人間であることそれらすべてを犠牲にして初めて別の社会を造るということになるのです。キリスト教に改宗するということの一番大きなつまづきの石の一つは、教会の外来性です。宣教のわざをなすときに重要なことの一つは、あなたがたは他の人々と共に日本人としての同一性を持つということです。

さて、私たちは何を目指して、どこへ進んでいけばいいのでしょうか。たった今申しましたように、福音と文化の領域が大変重要であります。あなたがたは日本の中でイエス・キリストをどのように受け取るのかということです。これが、もう一つのあなたがたの宿題です。つまり福音と文化の問題です。聖オーガスチンは、『二つの本が重要である。一つは生活の本、もう一つはいのちの本ー聖書である』と申しました。生活を語るのでなければ、聖書を語るべきではないとうことです。

これからどこへ向かうのかということの第一の宿題は、福音と文化の問題を批判的に取り上げることです。

宣教を展開していく上での第二の課題は、多元主義です。英国で宣教を語る場合には、英国の教会の場合にはクリスチャンが絶対多数であるわけです。もっとも今教会に行く人の数はずいぶん少なくなっていますけれど。しかし日本では、キリス者の人口はわずか1%です。ですから、宣教活動の仕方が異なるのは当然であります。私たちは英国教会からも米国聖公会からも学ぶことは多くあるのですが、それがそのままあなたがたの教会、あるいは私の国のお手本にはならないのだということを申し上げたいのです。この多元主義を探究する上で三つの道があると思います。

a)聖書の中に出てくる「信仰に忠実な残りの者」と言う表現を日本における宣教という文脈の中で、その意味と内容を掘り下げることです。これまた皆さんだけができる宿題です。

b)人類学を再考すること。その背後にある事実を再考することです。すなわち神はすべての人をお創りになった。その事実を受け止め直す必要があることです。

c)エキュメニカルな視点を持つことです。私たちは、全世界とすべての被造物の一致と革新のために、キリスト者の一致を求めています。このようなエキュメニカルな動きは日本ではどのように見えているのでしょうか。

私はこれまでに福音と文化、あるいは多元主義が宣教の中で非常に重要な要素であることをお話ししてきました。

ここで第三に、死の文化ということを加えたいと思います。私たちが宣教をしようとする世界の現状は、死の文化、つまり様々な苦痛の原因であり結果でもある暴力、人種差別のような排除、そして虚偽といったものが支配している文化です。そのことを配慮すべきであります。宣教とは人々が神の独り子イエス・キリストを信じ、キリストの中に豊かな生があるという良い知らせをもたらすことですが、死の文化があなたがたの目の前にあるのですから、それを問題にしないなら、宣教のことなど語ることはできません。

もう一つ加えたいことは、今私たちの周辺には著しい宗教的、霊的な渇望があるということです。教会にはたぶんまだ席が余っているのですが、人々はその渇望を満たそうと、いろいろな場所に出入りします。私の指摘が正しいかどうか分かりませんが、最近日本の外にも報道されているオウム真理教ですが、それはこの社会の中に、宗教的・霊的渇望が非常に強くあることの現れではないでしょうか。ですから、私たち自身が真の宗教と霊性を強め、養っていくとことが求められていると思うのです。

そろそろまとめていきましょう。最後に私が申し上げたいことは、もし皆さまが今まで私が申し上げたことを指標にしてくださるならば、一番大切なことは、教育であります。宣教のための教育であります。おそらく日本聖公会の宣教の問題として、この教育の問題は、もっともっと力を入れなくてはならない領域として残されているのではないかと思います。これが最も大切です。このことに最優先で時間を割くべきであります。多くの人々が様々の問を持ち、答を待っています。その問に答えるためには教育が必要なのであります。私自身ジュネーブでWCCの神学教育に携わっておりますが、だからそう申し上げるのではなく、本当に教育が宣教にとって重要だと心から信じていますので、申し上げるわけです。これは何も日本だけの問題ではありません。世界中で宣教のための教育の問題が充分取り上げられていないのです。ですから十分な教育の装備を身につけないまま、宣教に従事することが起こっています。ことに神学教育に携わる方々に申し上げたいのですが、私たちが十分な準備をし、宣教のために証をするために、新約聖書という文書が残されています。新約聖書が礼拝や宣教の文脈の中で説かれてきたでしょうか。そうでないなら、奇妙なことです。また組織神学は、教会がその時代の問いかけに応えていくためになされてきたはずであります。例えば、ドイツの神学者カール・バルトは好んで引用されますが、彼の神学は、ナチ体制のもとで提起された問題を解決するためになされたということを、人々はなかなか思い出しません。いきいきとした生命を持つ神学は、宣教的視点を持つものでなければなりません。宣教的視点は、神学校で行われるすべての営みの中心におかれなければならないのです。神学に宣教的視点は絶対に大切です。フィリピンでは神学校（セミナリー）が墓地（セメトリー）になってしまっているという冗談があるくらいです。学生たちは宣教についての大きな希望を持って神学校に入るのですが、いざ入ると、早く出てしまいたいと思うようになってしまいます。なぜなら、そこで行われている教育がしばしば命のない状況になっているからです。神学校で学ばれた方は、例えばQ資料、L資料、福音書の四資料説というようなことを勉強されたでしょう。けれど、それが最終的にどのような意味を持つのか、神の宣教のためにそれが本当に学ばれていないなら、それは馬鹿らしいことと思われるでしょう。宣教的視点に立った神学のみが地に足のついた学びを可能にするのです。

【質疑応答】

Q) 宣教する国の文化を、排除ではなく包み込んでいくことは大切なことでしょうか?

A) 神の言葉は慰めと審判の両方を含むものであります。すべてのことは、私たちはすべて神の前では罪人であるという事実から始まるともいえます。宣教とは、人々がその創り主のもとに帰ることを励ますものであります。宣教の過程の要素として六つのことを申し上げましたが、それは私たちのしようとすることが、神の意にかなうものであるかどうかを判断するための基準として挙げたつもりです。例えばある文化においては、双生児は良くないものとして殺すべきだというようなことがあるとします。そのような事実を神の言葉に照らしてみる時に、そのことを私は受け入れることはできません。そのために、あらゆる共同体の中の共同体を建てると申し上げたのでありまして、すべての文化、主義・主張は非常に排他的なものであります。もろもろの共同体の中に共同体を創るということから照らしてみると、排外的な生き方を肯定することはできません。ナチ政権下のユダヤ人虐殺、アフリカにおける部族闘争、世界の各地でなされている暴力行為などを認めるわけにはいきません。人間は社会をつくる時に過ちを犯すものであります。

数年前私は、ガーナで主教按手式に列席しました。式は英国教会的な礼拝形式で行われておりました。それはそれで良かったのですが、ところがある時点で、アフリカの音楽が始まりました。すると人々は急にいきいきとして、それまで教会のまわりをうろうろしていた聖霊が教会のただなかに入り、まるで教会は神の霊で満たされているような感じを持つことができました。私は説教の前の音楽をとても大切に考えています。その国の独特の音楽などが宣教の強力な武器になることは確かであります。

Q) 私たちが歴史的なことで、反省や謝罪を考える時に、どのようなことが神学的に重要ですか?

A) 神学的視点と実際的な事がらとの間に一貫性をもつということだと思います。神の国の光に照らして、自分達の過去を振り返ることが大切だと思います。また、それぞれに与えられている賜物を用いることも大切だと思います。ドイツのボンヘッファーもナチスのことで苦しみ、ヒットラー暗殺に関与したわけですが、彼は「クリスチャンになることは人間になること」と書き残しております。宣教の業、あるいはキリスト者の働きはすべての人を人間にするということであります。

もう一つのことは、啓蒙主義に関することであります。これはすべてのものは理性で処理できると考えるのですが、本当にすべてのものが理性で解決できるわけではありません。また啓蒙主義では、人間の生活を公私に分けて、宗教を私的な領域に閉じ込めてしまうことになります。それは観念的には可能であっても、実際に分けることができるでしょうか。例えば戦時中の主教の果たした役割について考える時、私たちは啓蒙主義から解放されなければならないと思います。

あらゆる場を
変革するために

司祭　ジョン・ポビー

ここに掲載した論文はポビー師が協議会の講演にあたって纏められたものです。内容について講演と重複する部分がありますが理解のために掲載します。

決して若くはない

今回の会議は、「ミッション95」(1995年宣教協議会)と銘打たれている。日本聖公会の今日の宣教を考えようとしているのであり、また1859年に米国聖公会によって最初の宣教の種がまかれて以来の一世紀以上にわたる日本聖公会の宣教をふりかえるのである。実際、日本聖公会を成立させた法憲法規は、1887年総会で採択され、またそこで同時に日本語の祈祷書も採用された。日本聖公会は百年の歴史がある。他の聖公会と比べれば確かに若い教会であると言えるかも知れないが、百年という長さは決してそれほど若いとは言えない。その歴史は教会に命と形を注ぎこむ経験を生み出してきた。私のような外部の者が日本の教会について尊大に語ろうなどとは思わない。しかし、私は皆さんに敢えて語ろうと思う。それは皆さんが私を招いてくれたからではなく、私たちは一つのコミュニオン、交わりに属する者であるからである。

語るべき物語—歴史の遺産

決して若くはない教会だが、語るべき物語はある。その物語を語るということは、それ自身のアイデンティティを明確に表現し叙述す

ることを意味する。詩編第44編には示唆に富んだ内容がある。

『神よ、我らはこの耳で聞いています。
先祖が我らに語り伝えたことを
先祖の時代、いにしえの日に
あなたが成し遂げられた御業を。』
（詩編44:1）

物語を語って下さい。宣教への皆さんの関わり合いを。神の宣教の中での働きを。皆さんのこれまでのあり様を、今のあり様を叙述するために。そこから学び、その光において、再び方向づけるために。皆さんの過去はこの協議会、この教会に与えられた課題と決して無関係ではない。愛すること、学ぶこと、聴くこと。歴史をめぐるこれらの態度は、宣教にとって欠くことのできないものである。学ぶということが基礎とされなければ真の宣教は決してなしえない。宣教する教会とは、学び続ける共同体でなければならないのである。この学ぶことにおける大切な一つの側面は謙遜になるということである。どのような場合も、変革はアイデンティティの変化を含む。そのアイデンティティは、他の人をキリストの中に、またキリストを通して発見していくことを含むものである。それは複雑な社会の現実である。

皆さんの出発の物語は、米国のチャニング・ムーア・ウィリアムスと共に始まる。彼は日本における宣教を開始し、1866年に主教に按手された。当時、エピスコパシー（主教制）は宣教の中心であると理解されていた。教会とは宣教的体であると理解されていた。それゆえ、私は敢えていくつかの問いを投げ掛けたい。教会、即ちキリストの体、そして神の民は、どれだけその宣教的召命を深刻に受けとめていたであろうか。宣教が聖職者や宣教協会に任されていたことはなかったか。キリストの一つの体に属する一人一人は、彼らがたとえどこにいようとも自らの宣教的召命をどれだけ感じていたであろうか。どの程度、またどのような意味で主教制は宣教の中心になっているか。主教という存在は、宣教のアヴァンギャルド（前衛）というよりもむしろ職務、制度を維持し、教会の構造を存続させるためにあるという理解が教会には多くあることをどう考えるのか。

歴史のまた別の面について考えてみよう。アングリカニズムとの継続性についてである。歴史的根拠からか、アングリカニズムは教会の役割というものを「神の加護の下で、非西欧文化の中へ民族的（国家的）アイデンティティを教え込む」公的宗教として見がちであった。「宣教師たちは、社会改良の基盤として個々の教会を作ることを企図した」のである。こうしたことから、アングリカニズムは西欧の代理人として働いた。日本におけるアングリカニズムもまた西欧文化の代理人として仕えてきたのである。日本における聖公会宣教は、日本を西欧化させるための道具として「教育」を用いた。例えば、立教大学、大阪、東京における女子校は、なかんずく西欧的価値の中心である価値宗教、倫理的原則を教え込むことから始めた。その背後にある前提とは、文化的転換こそが教会を拡張させていくためには不可欠なものである、ということである。しかしながら、この発想は抵抗に出会うことになる。当初、言語と文化は手強い障壁であった。近代化をもたらした明治維新（1868年）でさえ、西洋の技術、商業、装いへの開花をめざしたにもかかわらず、文化的融合を決して受け入れることはなかったのである。

歴史的に、宣教の要素とは福音を伝え、教会を建て、日本にとっては全く異質な文化的価値を教えることであった。その意味では、キリスト教は別な文化として位置付けられたものであると言えよう。それは教会生活の中で女性がリーダーシップを取り始めた、ということに

最も鮮明に表れている。

私は歴史について審判を下そうとは思わない。しかし、先述した宣教方法論と理念を思い起こしつつ、前世紀にナイジェリアで作られたものを参考までに紹介したい。モジョラ・アグベビ(Majola Agbebi)氏はこう書いている。「キリスト教をアフリカに根ざしたものとするためには、ネィティヴ(現地の人)の手で水がまかれなければならない。ネィティヴの手斧で折られなければならない。ネィティヴの土で耕されなければならない…。赤子が大人にするように、外国の教師たちのエプロンのひもに永遠にすがり続けようとするならば、それは呪われたものとなる。」大切な点は、あらゆる文化に神の御言葉を真に受肉させなければならないということである。それは継続されるべき課題であると信じている。

福音伝道の十年

今回の協議会はアングリカン・コミュニオンにおいて1988年から始まった福音伝道十年の脈絡の中で開かれている。ヴァチカン公会議のように、他教派も宣教や新たな福音化に倍の努力をしてきたことは特筆すべきことである。百年前から存在してきた教会、もしくは聖公会全体で見れば16世紀以来存在してきた教会にとって、福音伝道の十年を宣言することなど奇妙なことのように思えるかも知れない。宣教のない教会などありえるのか、という問いが起こるが、確かに教会のしるしの一つは、証しする共同体として招かれているということである。『だからあなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守ように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』(マタイ28:19−20)鍵となる理念を思い起こそう。「行け」—広範囲にかつ集中的に、「弟子にせよ」—福音主義、「洗礼を授けよ」—サクラメンタルな生活、「教えよ」—教会問答。「教える」中味には、人間について、福音についての両方、即ち三位一体の重要性が含まれる。「宣教」とは複雑な概念である。宣教とは変革される生であると同時に、それはサクラメンタルなものでもある。それはまた声を出すようにダイナミックなものでもある。

教会は宣教する。宣教という感覚のない教会とは、その教会が死んでいないならば、矛盾するものでしかないということを強調させて欲しい。福音伝道十年の力となったものは何か。第一に、人間とは象徴やシンボリズムの上に生きるということである。象徴的な時−例えば教会暦、そして象徴的な出来事−例えば通過儀礼、象徴的な人物−例えば祭司、預言者。十年というのはその意味では象徴的な時であり、宣教する民、証しする共同体とは、私たちが教会となるための象徴的な出来事である。そう考えるならば、現代世界に対する神の宣教の真の象徴として日本聖公会はあるであろうか。

仮にパリッシュ(個々の教会)の会議のアジェンダを皆さんが見るとしよう。たいていのアジェンダは宣教について何も語ってはいないであろう。会議に提出される大抵のアジェンダは、教会の第一の使命である「宣教」に正しく言及することなく、ただ制度、体制を維持するための道具となっている。この「十年」の間に私たちは、自分たちの会衆の中で何をなすべきかを真剣に探し求めるよう招かれている。教会の主要な課題、すなわち「宣教」を直接的に語っているかどうかをこの「十年」は問うているのである。それは私たちの現在のプライオリティーとは何かという問題でもある。日本に生きる教会として私たちは正しいプライオリティを持っているであろうか。

また別の重要な問題は、歴史的に、宣教は往々にして他の事柄、すなわち、ミニストリー、さらには帝国主義、植民地主義、国家主義等々とも混同されてきたということである。ある地域のリーダーにとっては、宣教師たちの働きは、バタ臭いものであったり、西洋臭いものであった。言い換えれば、キリスト教はずっと「西洋」というものと同一視されてきたのである。同時に、日本には、西欧化を押しとどめようとしたり、キリスト教の日本化を図ろうとする運動も多くある。それはまた日本聖公会の課題でもある。自治、自給、そして自伝(自らの力で伝道する)に加えて、イエス・キリストの福音を日本人固有の形で表現することは不可欠である。福音をめぐる議論、文化をめぐる議論とは、ある意味では、文化的事柄を福音の本質から解明していくことである。日本聖公会は米国聖公会によって伝道された。当時それは、初期の宣教師たちが知っていた教会モデルで始められるように期待されていた。では日本聖公会はそれをどのように扱ったのか。それは固有の伝統によってとらまえられたのか。「神の家」における場を見いだしてきたのか。私は日本聖公会がもはや若い教会ではないと前に述べたが、日本聖公会はその自らのアイデンティテイーを見いだしてきたのだろうか。

別の見方をしてみよう。日本聖公会は、日本文化における精神的世界観、即ち、現世と先祖礼拝のような霊的世界の現実とが相互に依存する観念、ときっちりと携わってきたのか。日本聖公会はいわゆる「家」に対する日本人の感覚とどれだけ向き合ってきたのか。ヨハネの黙示録にはこのような箇所がある。「この後、私が見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って…」(黙示録7:9)。神の御計画の中で、神の玉座の御前に、私たちは、他の人々と同じ姿ではなく、自らの文化的アイデンティティと完全さをもって現われる。アフリカ人はアフリカ人として、日本人は日本人として、英国人は英国人として、アメリカ人はアメリカ人として。しかしながら、それでもエルサレムでの聖霊降臨(使徒言行録2章)の出来事のように、共通の言語で語るのである。この十年の内に私たちに提示された課題は、日本人として、あるいはガーナ人として、「一つの神の家」の中へといかに私たちは成熟されていくのかということである。

宣言、福音伝道、そして服従としての宣教を共に

宣教をめぐって、三つの言葉が用いられることに驚くかも知れない。その三つの言葉とは、福音伝道(evangelism)、証言(witness)、宣教(mission)である。私は福音伝道という言葉はあまり好きではない。なぜなら、これはよく違った意味として用いられるからである。福音伝道というものがその相応しい脈絡に置かれないならば、他者を打ち倒すためのイデオロギーと化し得るからである。放送メディアを用いる伝道者に往々にして見られる弱点はここにある。必要以上におおげさな悲劇を語ることがあるのである。それゆえ、私は「福音伝道の十年」よりも「宣教の十年」の方がより相応しいと考えてきた。

確かに、"mission"(宣教)という言葉は聖書の言葉ではない。それはラテン語の「ミッシオ」(missio)から来ている。「遣わす」という意味である。しかし、たとえ、"mission"という言葉が聖書の中に登場しないとしても、その理念はまさに聖書のものである。先程、私が引用したマタイ28:18以下はこのことの根拠でもある。「派遣する」(send:apostollein,pempein)、

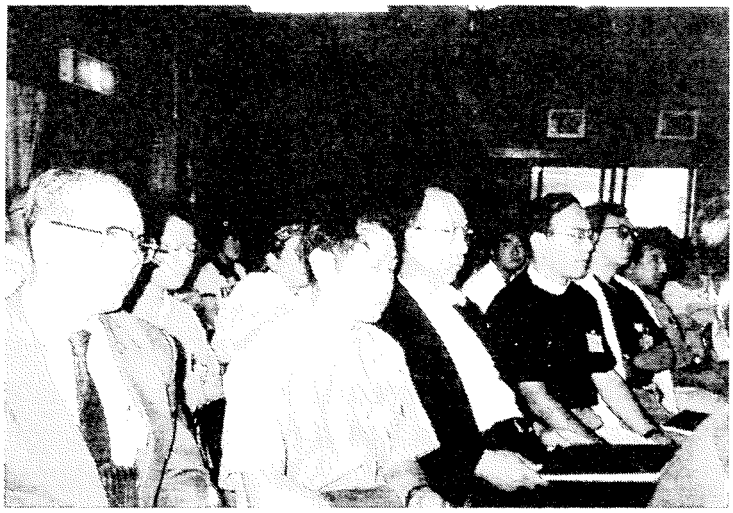
「増える、拡がる」(auxano－使徒言行録6:7)、「宣言する」(proclaim: euaggelizein,kerussein)、「証人となる」(bearwitness:marturein)、「人をとる漁師」(マルコ1:17、マタイ4:19)、これらは、まさに聖書的伝統であると言えよう。宣教には三つの働きがある。第一に、「宣言」－キリストにおける神の物語<良き知らせ>を語ること－、第二に、「福音伝道」－宣言の結果として弟子たちを作ること－、第三に、神の命じたまうこと、もしくは私たちが社会活動と呼ぶものへの服従、である。この十年の中での私たちの関心は、これら三つすべてに注がれるべきである。ポイントを逃さないために、私たちは「宣教」によって意味することが何であるかを明確にしなければならない。私たちが福音を宣言する場である「世界」を理解しなければならない。そのプロセスとはコミュニケーションの一つであるからである。私たちは、人々を自らの変革と自らの世界の変革へと結びつける方策を発展させるべきなのである。

ここで、宣教の実際的な定義をさせていただきたい。宣教とは宣言を通して、弟子を作ることを通して(福音伝道)、また社会への働きかけ(別の言い方をすれば、神の命じたまうことへの服従)を通して、キリストを信じる人々が神の働き／神の宣教に参与し、神の主権によって導かれつつ世界を変革し、種々の共同体の中から共同体を築き上げていくプロセスである。1926年にベルギーのラ・ズーテ(La Zoute)で開催された世界宣教会議はこう明確に宣言した。「人々は独自的な社会構造の中で生きるが故に、福音伝道と社会的福利、活動を分離させ続けることはもはやできない。」宣教という言葉を語る際に大切なのは、宣教の多面的性質を強調することである。様々なグループや個人がそこには含まれる。人々が奉仕の多元性をキリストを通して神の名において共有していく時、宣教は大切なものとされる。このことは、宣教の場となる世界を知らなくてはならないことを意味している。その世界とは地域的なものであり、かつグローバルなものである。私たちは、世界が私たちに何を語っているのかを謙遜に聴かなければならない。

今日における宣教への挑戦

首座主教会議, 1995年3月

1995年3月に、イギリスのウィンザー・カバーランドロッジにおいて開かれた、聖公会首座主教会議は牧会書簡を発表した。その中で、世界は、悲しむべき紛争、人員や兵器の大量の消費、地雷、ルワンダでの苦しみ、ブルンディ、リベリア、シェラ・レオーネ、ナイジェリア、スーダンなどの痛みに直面していることが述べられている。また、ますます深刻化する貧困や抑圧に苦しんでいる人の存在について書かれ



てある。「多くの国は債務にがんじがらめにされている。私たちは世界の人口の20%が世界の80%の富を支配し、また20%の人々が世界経済のほんの1.4%によって生かされているという事実に直面して悲しむ。4万人の人々が…その殆どは子どもたちだが…毎日飢餓や予防できるはずの病気で死んでいく。私たちは、富んでいる人々に富は信託であり決して権利ではないこと、また多くの人々の絶対的な貧困は究極的には少数の人々に報復としてふりかかることを思い起こしたい。世界の中で教会は人間の性に関する問題に直面している。教会の全ての部門でこれらの問題に関して不必要な対立や偏見を避けながらキリスト者としての私たちの生活の中で、神の御旨を明確に理解したいという心を持ちつつ、正直にまた正しく立ち向かっていくことを勧めたい。」

この牧会書簡の引用は地域的また世界的な宣教への挑戦を示唆してはいないだろうか。私たちが受け持つ広い意味での神の宣教に眼を向けることが、私たちに求められている。このことについては、また後で述べることにする。日本聖公会は首座主教の声明の中で自分自身をはっきり表明しただろうか。G7を構成する国として確かにこのことは皆さんにとって挑戦であろう。

共同体

日本聖公会はそれ自体決して一つの島としてあるのではない。それは世界に七千万人のメンバーを持つ共同体の部分としてある。この人々の集合体の中に、債務、貧困、地雷、世俗化、物質主義、性の問題、地域紛争などが見られる。アングリカニズムは、痛みながらゆっくり前進している多様性の中の一致である。そのことに関してみなさんに共同体の一部としての自己理解があることに注目していただきたい。

最初に日本聖公会という表現によって皆さんはアメリカ聖公会とだけではなくイギリス聖公会、西アフリカ管区、ナイジェリア聖公会、パプア・ニューギニア聖公会とも共通の歴史を持っている。そのことは私たちが自分の回りのことに無関心でいられない一方、自分の門外にいる人々への思いを持ち続けるということである。どのような外国人嫌いの行いも告白的共同体ということによって挑戦を受けることになる。問題はいかに自分たちの大切なアイデンティティを失わずに共通の歴史について私たちが自分達を表現できるか、ということである。

二番目に、そのことを認めることによって自分たちの国、そして世界の運命を守るための公益があることを私たちは主張する。私は自分たちが大切にしている生活の質や市民生活で享受する恩恵のことについて話しているのである。どの聖公会信徒にも、日本やガーナや韓国でも、期待する公益とは何か。もし皆さんにも他の地域の共同体の人々の不健康について無関心であるならば、それは本当の共同体と言えるだろうか。

三番目に、共同体において私たちは共通する良い生活、即ち、精神的また文化的に質のある生活を志向する。しかし共通する良い生活の中味とは一体どのようなものか。

四番目に、共同体(コミュニオン)と伝達(コミュニケーション)と言う言葉が同じルーツから出ているということは、意味のないことではない。共同体の中に存在するということは共同体の中に生きる人々と対話することへの努力やその必要を意味している。日本聖公会の西アフリカ聖公会または西インド諸島管区やルワンダ聖公会との対話はどのようなものだったか…どの様にして私たちの共同体を分裂に向かわせる種々の事柄を越えて、しっかりし

たコミュニケーションを維持できるだろうか。

五番目にリーダーシップの問題である。リーダーシップは共同体の共同体をつくりあげる上で重要である。リーダーシップは聖職者だけに限られるものではない。リーダーシップの概念は国または人々、または彼らの世界の大きな歴史的物語の中に位置しており、それ故にリーダーシップを理解するためには、人々の持っている躍動的な力、夢、過去に根ざし、また新しい世界に予想される、恐るべき困難に向けられた未来を理解する必要がある。リーダーシップは民主主義的責任を反映する草の根的な組織作りの中に根ざしていなければならない。日本聖公会のリーダーシップの型は日本において適切なものとなっているだろうか。リーダーシップの形は現代の日本という脈絡の中に取り入れられなければならない。リーダーシップがこの時代にこの場所で宣教のために効果的な先陣を切ることが出来るということが大切なのである。

社会学者マックス・ウェーバーがリーダーシップについて語っていることを思い出してみよう。なぜなら、宗教的リーダーシップが台頭しているからである。彼によれば、カリスマ性を持ったリーダーシップは、道徳的・政治的リーダーシップが危機に陥っている時、つまり伝統的な意義や目的に不安を感じたり、人々が権力への道を閉ざされたり、個人的および社会的将来に対して悲観的となる時に出現してくる。このようにカリスマ的リーダーシップは、人々に昔からの伝統を明確化し、新しい道への希望を持たせ、または過去との決別を呼びかけることによって、人々の進むべき方向を定めていくために出現してくる。その場に適切なリーダーシップのモデルは、意義と目的と深く関わっている。

あらゆる場における宣教

日本聖公会の歴史において、日本への最初の宣教師達は、アメリカ合衆国、英国及びカナダよりやって来た。これは長い間行われてきた宣教の一例であって、日本は古い文化を持つがゆえに新しい国とは言えないが、これがいわゆる古い教会から新世界への一方通行的なやり方である。1963年にメキシコで開かれた世界宣教師会議において、六大陸における宣教について話し合われたが、各教会は宣教の送り手であると同時に受け手でもあるということが示された。どの教会も、宣教師を受け入れると共に、宣教を行う会衆でなければならない。それぞれの教区または教会が、宣教の送り手であると同時に受け手でもあるというのが有効な考えである。これこそが、私たちが与えそして受け続けてきた交わりの本質なのである。これを行うためには、管区等が、何を与え、何を受け取る必要があるかということを明確にしなければならない。日本聖公会は、世界の教会に何を与えなければならないのだろうか。そして日本聖公会は、何を必要としているのだろうか。更に日本以外のどこが、日本聖公会が差し出すものを必要としているのであろうか。そしてこのような資源を分かち合うにはどのような構造が最も賢明で効果的であるのか。

では特に日本の状況について見てみよう。

多元主義の状況

レンスキーは多元主義を「相容れない信仰を持ち、それを実践する組織化された宗教団体が、同じ生活共同体及び社会という枠組の中において共存している状態」であると定義づけた。

日本の人口の42%が仏教徒であり、51%は神道であるとの記録がある。キリスト教徒はわずか1%以下である。ここで、宣教を行うのに

重要な事実が二つある。ひとつは多元主義の状況において行うことと、日本の人口の中の圧倒的少数であるという状況で行うことである。この二つの状況の中で宣教を行う力は、キリスト教が主宗教で力があるという立場で宣教を行うのとは訳が違う。このことは、日本聖公会では、キリスト教が優勢を占める他の国の教会の方法論が通用しないということを意味する。多宗教の国家、地域及び世界の中の少数派として宣教を行っていくにはどのような方法があるだろうか。

ある人たちは、多元主義が問題だと言う。私自身は、多元主義には両面性があると言いたい。それは現代の事実である。伝達革命（ラジオ、旅行時間のスピード化、テレビ等）は、世界、諸文化そして諸宗教を私たちのまっただ中に持ち込む。多元主義からは逃れられない。そこで重要になるのは、いかに多元主義に対応するかと言うことである。国粋主義や、外国人ぎらいなど、多元主義への対応のいくつかは、究極的には自己敗北となるほどの計り知れない苦痛や流血を引き起こした。帝国主義や植民地主義は、ある意味においては多元主義を拭い去り、単一文化に置き換えるという意図がある。太平洋戦争（第二次世界大戦）の終結後50周年を記念する日本はまた、その帝国植民地支配の終結をも祝っているのである。

それでは、この多元主義の現状における宣教をどのように思い描くことができるだろうか。先に私は、歴史の中で福音伝道がどのようにイデオロギーに変わり、排他主義へとなっていったかを話した。宣教の出発点は、この世界にただ一人の創造主がおり、この全世界は、神のためにあると確信することである。マタイによる福音書28章の宣教任務の序文には、「天と地の全ての権威が私に与えられた。」（18節）とある。これは、全ての宣教活動の目標が唯一の創造主である神にあることを言っているのである。この宣教に関する前提から引き出される結果がいくつかある。まず第一に、宣教にあたって近付く相手の人の尊厳を忘れては宣教計画は有り得ないということである。なぜなら非キリスト者であっても神の創造されたものであるから、彼らも尊厳と威厳を受けるのに相応しい者なのである。宣教に従事する者は、他者、自分たちとは異なる人々との出会いの中から聴こえてくる声に耳を傾けられるような努力をしなくてはならない。対話の方法論は絶対的に必要なものである。

二番目に宣教は神の主権の視野に立って共同体の共同体を造り上げる過程でなくてはならない。

三番目に神学が宣教を支えるものでなくてはならない。どのような神学が日本聖公会の宣教活動を支えているのだろうか。

暴力と平和

私たちは今年、第二次世界大戦の終結50周年を記念している。もしCNN（ケーブルニュースネットワーク）が信頼に足るものであるならば、日本はその精神心理から戦争の幽霊を追い出す必要がある…真珠湾、韓国、芸者、慰安婦。皆さんの精神心理を取り巻く全ての葛藤の象徴として二つのことがあげられるであろう。広島の平和公園の中に立っている碑と赦罪と償いの二語をめぐる葛藤である。広島の平和公園の碑は、原爆の投下を記念して建てられている。その碑には『安らかに眠ってください。過ちは決してくりかえしませんから』と記されている。この祈りは宣教の持つ最も重要な使命の一つについて語っているように思われる。すなわち、平和の追求という神の国における価値について語っている。この力強い祈りが世界では、あたかも聞かれていないような感じがする。前ユーゴスラビアで、

朝鮮半島で、トルコで、ルワンダで、ブルンディで、スリランカで…。平和は世界から身をかわしているようにさえ見える。どのようにして日本の教会は日本国内だけではなく神がご自分のものと仰っている世界の平和を促進させることが出来るだろうか。

平和は多面的商品である。多くの人にとって平和は戦争のない状態である。平和を直接的また間接的暴力のない状態と考えてみよう。「自分の肉体的また精神的な現実が、本来持っている可能性よりも低いと思ってしまうほど人々が影響を受けている時、そこに暴力がある」。直接的暴力は、時には個人的暴力とも言われるが、戦争がその例証となる。間接的な暴力とは組織的暴力とも呼ばれるが、社会的不正によって説明される。

このような暴力理解によって、平和は個人的道徳や正しい社会的、政治的な制度を必要とする。平和を追求することは多元的な脈絡の中で優先順位の整理と価値観の転換を求める。キリスト者にとって、そのような価値観の転換は聖霊によって可能とされる。「聖霊の働きなしには私たちは何一つ良いことは出来ない」(参照:ローマ7:18−24)。私たちは神の聖霊の助けについて知りまた体験しているであろうか。聖霊への信仰告白が、神の国の特徴である平和を追求することにどのように反映しているだろうか。私たちは自分の回りに暴力の痕跡を多く見る。1995年6月23日、CNNは日本の情景を放映した。そこではローマカトリックの司祭が家のない生活困窮者のためのセンターで朝食の炊き出しをしていた。多分、富める日本にあっても貧しい人々が沢山いるのであろう。大変重要なことは、社会組織は人々から、キリスト教の中心的な確信である、全ての人が神の姿に似せて創られそれ故に威厳と自由とが与えられている、ということを強奪しているということである。それが暴力の一つの現れであり平和がないことである。故に炊き出しをするだけでは十分とは言えない。もっと大事なのは神の似姿が与えられている一人ひとりを育てていく方法によって社会を改革していくことである。それは人間と人間の抱える課題を単に統計として数字、即ちGNPやGDPによってあらわすことを避けることである。私たちは決してそこで止めてはならない。私たちはそれらを神の全ての創造と子どもたちに相応しい人間の尊厳という目標に向かう道へのステップとして見なくてはならない。

アフリカ系アメリカ人の神学者コーネル・ウエストは「いつでも二人が本当の楽しみ、喜び、そして愛を見出した時、星は微笑みかけ宇宙は豊かにされる。しかし、その楽しみ、喜び、愛が黒人の性に関する神話として語られる限り、人間関係への根本的な挑戦はそのまま解決されずに残る。かわりに私たちが持つものは、同じ原理に立った白人の黒人の肉体への接近である。しかし黒人の性に関する神話はまだ非神話化されないまま…。」と言う。

黒人のかわりに私たちは人間に対して破壊をもたらすどの様な問題をもそこに入れ替えられる。どのような神話によって、日本社会は日本にいる人や世界の人々を隅に追いやり貧乏にしてきたのだろうか。

1995年5月、庭野平和賞受賞者となったムスクマラスワミ・アラム・ヴァラタナタン博士は、東京での授賞式において、「2000年までの包括的平和」と題した記念講演会を行った。その中で、彼は包括的平和の八つの側面について提案した。即ち、①武装解除②紛争解決③自然環境の回復④貧困撲滅⑤創造的教育⑥家庭の愛⑦地域的民主主義⑧世界会議、である。ここではその一つひとつを解説することは出来ないが、これらを総合的に捉えることが出来るように最大限の努力がされるべ

きだ、ということだけをつけ加えておこう。

産業社会における宣教

私は日本を外から見て、高度産業社会と認識している。世界中で、遠くアフリカでさえ、日本の電子産業が話題になる。日本の自動車産業の発展ぶりも目を見張るもので、特にこの6月にはアメリカとの争いになっている。日本の成功物語は、同時に他者への脅威でもある。新幹線は諸外国の羨望の的であり、みながコンピューター・チップを賞賛している。ニッサンやトヨタは、遠くや近くの国々でのビジネスの代表的なものだ。日本のでの宣教は高度産業化社会に向けてであるとされる。産業化された社会では、多様な文化・宗教が隣り合って存在する。絶望的な貧困もあるかもしれない。AIDSのような病気や労働の不安定性はどうであろう。都市においては伝統的な道徳に対する挑戦もあるだろう。新たに産業化した社会は、産業化の論理による危機と脅威に直面しているといわれている。

しかし、この国には、とても農村的な社会も見いだされる。そのため、我々は宣教方策を、大都市の産業社会に向けたものと、とても農村的な農業社会に向けたものとに区別しなければならない。

すでに1928年世界宣教会議は、宣教を展望するのに、都市生活者と農民を設定する必要を明らかにした。そのヴィジョンは「都市農村宣教（URM）」という世界教会協議会のプログラムに発展した。25年のURMの働きの後、神の宣教に関して六点を確認した。即ち、

1. 神の宣教はいのちの宣言である。
2. 神の宣教は民衆(people)から出発する。
   (a) 宣教は民衆とは誰かという理解から出発する。
   — 民衆は神の形につくられている。
   — 民衆は文化・宗教的な歴史伝統のうちに存在する。
   — 民衆は神の権威(power)に仕える者(Steward)である。
   (b) 宣教は「苦難の中にある民衆」から始まる。
3. 神の宣教は政治を真剣にとりあつかう。
4. 神の宣教は行動である。
5. 宣教は神の国をめざす変革のための行動である。
   (a) 正義のために、抑圧された者を解放すること
   (b) 正義のための組織化／力のための組織化
   (c) 参与を命じること
   (d) 抵抗を命じること
6. キリストの方法による宣教

これらの聖書的に正しい確認事項を深める時間はないが、これらの事項を真剣に研究することをお奨めしたい。少なくとも第四福音書

においては、宣教がいのちの宣言であり、言葉と行ないによるもので、民衆が神の宣教に加わるときに、民衆はあふれるいのちを受けるのである。(ヨハネ20:31)

このいのちの宣教を追求するための前提として、神の民による行動をそこなうような伝統的な考えかたを変更しなければならない。しばしば「宗教を政治の外に置こう」「宗教を経済の外に置こう」などと言われる。これは啓蒙主義文化というものに教会が囚われていることの現われである。これらの主張は実際には、創造主がすべてのいのちの主であるということを否定するものである。啓蒙主義文化は懐疑主義を産み、善悪の問題は個人的な好き嫌い、感情的好み、文化的選択の問題に矮小化されてしまった。我々は文化的相対主義の時代を生きている。キリスト教宣教は、こういうイデオロギーに立ち向かい、それを追い出さない限り、これ以上進めないだろう。パンとバターの問題もまた宗教的、精神的問題なのだ。現代経済・産業の目標である消費社会は、経済的、生態的、心理的にも破綻の状態にある。それゆえに、人々はこの内なるバランスを取り戻そうと、「ウリムとトンミム」(旧約時代の占い)のようなものに頼るのだ。私たちは、自分たちの宮から出て多くの苦しみが存在する人間の経験の宮に入らなくてはならない。

自由市場イデオロギーはその名前が示すような自由なものではない。特権を持つものが、貧しい者を犠牲にして、その特権を守り拡大するからだ。それゆえ、富める者はさらに豊かに、貧しい者はさらに貧しくなる。自由市場経済は、自己利益に基礎をおいているのである。

日本は豊かな国であるにもかかわらず、すべての者が豊かなわけではないという徴がある。日本の証券市場は大変な混乱にある。日本の銀行は危機にある。人口は急速に老齢化している。2020年には日本人口の4分の1は65才以上になる。公的年金を受けられる年齢が60才から65才に引き上げられようとしている。企業は、労働力コストを切り下げ、就職時に自動的になされてきた終身雇用契約をいまや解除している。五十代のサラリーマンが退職を求められている。NTTはすでに3万人の仕事をなくし、2000年までにはさらに3万人の仕事をなくす予定という。ボーナスや超勤手当も削られている。こういう背景のもと、多くの人々が仕事と経済的見通しの不安を抱えている。人々は不安でいのちの豊かさをもとめてあえいでいる。

宣教の目標は人々が命を得られることであるとするなら、宣教の過程は、単に「教会的」ではありえず、信じる民が生きる世界へのかかわりなくなされるものではありえない。それは教会が生きている社会・政治的現実のなかでの信仰でなければならない。一個人や一つのグループが国や世界を救うことはできない。私たち全てが、様々な異なる方法で貢献し、資源や権力がひどく一極集中しているのをひっくりかえし、生態系破壊、経済不平等、家父長制、人種主義、同性愛嫌悪などの悪の力に抗すべきである。つまり「いのち」をめぐるエキュメニカルなヴィジョンと展望が必要なのだ。このことは後述したい。

産業社会についてもうひとこと。新たなテクノロジーが、仕事を奪い、国家的な、あるいは人類的な絶望をもたらしている。どうすれば、絶望を避け、人々が希望のなさを越えて行くことができるだろうか。希望の福音が、宣教ということなのだろうか。私たちは、「効率の神」の限界について、産業との対話を持つべきなのだろうか。人々の最低限の雇用を維持するために不当な労働を促進して行くべきなのだろうか。人々がよりうまくやれるような道を追求することは、望ましくないのだろうか。

神の民は、社会の産業・経済的な設定を牛耳ることには、慎重でなければならない。教会は、経済と産業が全人類の幸福に仕えるべきであってその逆ではないということを強調すべきである。それゆえ教会は、産業経済のイデオロギーと発展にたいして熱狂的でも冷淡でもありえない。

宗教的な渇望

先ほど啓蒙主義文化と政治経済の偏りについて述べたが、それにもかかわらず霊性と宗教にたいする渇望がある。日本の人々は、神道で生まれ、仏教徒として死に、結婚ではキリスト教式という。この1995年には、麻原彰晃率いるオウム真理教という怪異に出会わされることになった。この問題はいまだ審理中で、全貌はまだ明らかではない。しかし、この指導者はハルマゲドンを予言したばかりか、世の終わりを設計しようと意図していたということが分かってきた。それで、今年3月20日、東京地下鉄での神経ガス攻撃があり、5月5日の新宿駅青酸ガス事件と続いた。彼らは1994年6月松本のサリンガス事件も計画・実行したという容疑をかけられている。

我々の目的のために、二つのことを指摘したい。まずこの教団がもつ財産である。10億ドル以上の資産をもつと推定される。信者が信仰のゆえに、あるいは教祖への信頼の上に献金をしたことは間違いない。二点目は、その信者であるが、博士号を持つ最優秀の頭脳の持主をも引き付けたということだ。彼らは通常兵器、科学兵器、細菌兵器、麻薬を造りだした。教団メンバーで医師である林侑夫は、東京地下鉄でのガス攻撃を実行したと認めている。

これらの事実は、日本の人々が、教会によっては満たされていない、精神的・宗教的な渇望を心に抱いている事を示している。教会は、真の宗教から逸脱したこのようなものが成功している事について、負うべき責任がある。アンソニー・スペースによって書かれたアイリーン・M・クニイの報告によれば、「事実が暴露されても、地下鉄事件直後でさえ、日本国民は、現時点で警察が信じている内容は予想もできなかった。紫のパジャマ様の服をきた男は、スリラー小説の悪玉が抜け出してきたかのようだ。終末と破滅の予言を実現させるために金と科学者と忠誠な信者を操る誇大妄想。こうした出来事は、満たされる事のない精神の深い渇望があることを示している。」と伝えている。

今日の宣教は、多くの人々の精神的渇望に答えようとしている。とくに科学・技術の文化といえども超自然的世界を追放することが出来ず、人々は「霊」を欠き、それを求めるというようになっている。変革のための宣教は、その原動力として霊性を必要とする。聖書によれば「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」(ヨハネ4:24)。問題は、この時代の霊性とは何なのか、ということだ。我々は、新約聖書から今日にそのまま飛ぶわけにはいかない。我々は何でもかんでも英米の霊性を日本やガーナに持ち込むということもできない。日本のキリスト者の霊性はどんなものだろうか。宣教、即ち、伝道、宣言、神の命令への服従について語ることも、次のような問い抜きには無意味だろう。即ち、この状況、この時代、この場所で主は私に何を求めているのか。それが神の民の宣教を時と場所に応じて働かせる霊性である。日本で、東京で、沖縄で、工場で、産業社会で、市場で、主は私に何を求めているのか。そして「誰を遣わすべきか。誰がわれわれに代わって行くだろうか。」と言う声を聞くだろう。そこで「私がここにおります。私を遣わしてください」(イザヤ6:8)と答えるべきなのだ。霊性なく

しては、真剣な宣教はありえない。

このように考えると、宣教は神の民全体の職務であって、宣教団体や聖職者、宣教師のみのものではない。私たちはシナイの荒野で神に呼びかけられたヘブルの民の伝統に行き着いたのだ。「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあって、私の宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」(出エジプト記19:5−6、参照：Ⅰペテロ2:9)。我々は、今日の信徒(Laity)概念と区別された「民(Laos)の神学」を発展させねばならない。神の民、即ち聖職と信徒が、共に神の宣教に参与するのである。ここでは宣教は、神と人類の仲保者として、神を知り、救いを世界の国々に取り次ぐ任務である。

福音と文化

霊性の探求においては、人々の文化の問題を明らかにしなければ先へは進めない。文化とは、つかのまの行動パターンや価値ではない。それは状況から生まれ出たのでないとしても、少なくとも関連している意味と価値の世界である。小さなダンスや衣裳といったものにとどまらず、人のアイデンティティの深みに達するものである。制度と価値が不可分であるように、構造と行動は関連している。コーネル・ウェストによれば「文化は経済・政治と同じ様に構造であって、家族、学校、教会、シナゴーグ、モスク、コミュニケーション産業(テレビ、ラジオ、ビデオ、音楽)などの制度に根ざしている」。同様に、経済政治は価値から影響を受けるばかりでなく、良い生活・良い社会という特定の文化的理想を提供もする。

こういう観点のもとでは、宣教は、裁きと希望の福音を、特定の場所の文化に結び付けることが必要である。そうしてはじめて、日本の人々は受肉を経験することが出来る。聖公会(Anglicanism)の基盤は、米国聖公会(Episcopal Church of the U.S.A.)が仲介した時期においても、非常に英国的であった。ただ名称をアングリカンからエピスコパリアンに変えることで、英国的なもの、教会伝統の特質が代わりはしない。宣教における私たちへのチャレンジは、いかにして真に聖公会的であると同時に真に日本的であり得るかということだ。どのような構造、制度が二つの文化を反映することができるだろうか。いかにしてわたしたちの宗教的なキリスト教的生活は生来(native)の認識・存在論に調和できるだろうか。例えば、日本人はアフリカ人と同様に親戚関係を重んじる特徴を持つ。親戚関係は社会的負担と責任を担うものである。キリスト教会に属するということは更なる負担を意味するのだろうか、それとも二つを統合する方法を皆さんは発見したのだろうか。教会における権威のパターンは、伝統的な日本の権威パターンをどう反映し、あるいはチャレンジし、あるいは調和しているのだろうか。教会において日本の芸術とともにあるために最善をつくしただろうか。というのは芸術は感情の表現にとどまらず、対象の中に在る重要な形への感情的な応答でもあるからだ。芸術のシンボリズムは、意味ある礼拝、儀式、美と善の探求において最もふさわしい。

神の民のエキュメニカルな召命

オウム真理教がガス攻撃をするにあたっては、聖公会信徒もローマカトリック教徒も区別はしないし、キリスト教徒であると神道、仏教徒であるとを問わない。神戸の悲劇的な震災はキリスト者であるかそうでないかを問わない。共同の互いに結びあった運命を持つ一つの人類であり、一人の神により創造され、それゆえ一人ひとりが神の子なのである。聖書によ

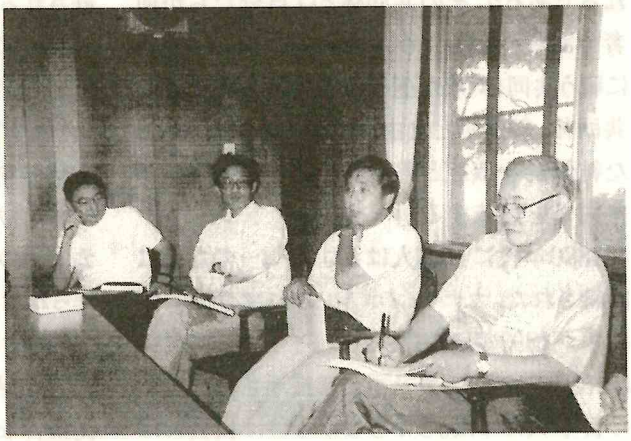
れば、善人にも悪人にもひとしく雨を降らせる神である。これがエキュメニカルな命題の出発点である。一つの創造主、一つの世界、「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、手のもの。」(詩編24:1)

私は、アングリカン・コミュニオンの一管区である日本聖公会の協議会で講演をしているのだが、私たちの信条のはじめの確認を忘れてはならない。世界教会協議会の総幹事であるコンラッド・ライザーは、かつてこう書いている。「オイクメネは、関係性についての動的な概念であって、キリスト者と教会の交わりということを越え、全被造物の中での人類共同体に広がる。人の住む世界としてのオイクメネが、神の生ける家族(オイコス)に変えられることが、エキュメニカル運動への召命なのである」。この変革は、黙示録21章1節のいう新しい天と新しい地であり、私たちすべての宣教活動がこれに関わっている。宣教はあらゆる部分において、エキュメニカルかどうかということによって試される。私は聖公会がいつも現代エキュメニカル運動で活発であったことを思い起こし、誇らしく思う。何人か挙げれば、カンタベリーのウィリアム・テンプル大主教、マイケル・ラムゼイ大主教、チチェスターのベル主教がいる。「信仰と職制」運動は、カナダ生まれでフィリピンで生活したアメリカ人主教・チャールズ・ヘンリー・ブレント(1862−1929)を抜きには語れない。とても聖公会的な「ヴィア・メディア」が、私たちをエキュメニズムに関わらせる。

いくつかの結論を述べたい。先ず、聖公会員であることは、宣教の終点ではなく、それは神の主権への途上である。宣教とは、人々を聖公会員になるように誘うことではない。それは、いかなる制度的教会の一つよりも大きな神の家族と神の国の中で、人々を正しい位置に招くということだ。次に、宣教は教会の一致を進めねばならない。コイノニア(交わり、共同体)が教会論の基本であるべきだ、ということが新たに強調されており、私たちは教会の一致のために働かねばならない。私の考えでは、これによって教会とその働きの信頼性が試される。教会は、和解の使命を帯びているという主張(Ⅱコリ5:19)と、他方でキリストの一つのからだを分裂させているということの間の矛盾が明らかにされる。三番目に、その教会の一致はそれ自体が結論ではなく、エキュメニカル運動の主張においては、世界の一致と刷新のためにそれがある。我々が分裂している限り、教会を越えて世界に向けて和解を説くだけの権利は持ちえないのだ。

四つめに、エキュメニカルな教会の召命は、教会の宣教が人々、文化、宗教、人類、世界の和解にも関心を持つ事を示している。一致と和解を画一性から区別するように注意したい。

五つめに、日本聖公会が例えば教会協議会などの今日のエキュメニカル機構や対話に参加して、真剣にエキュメニカルな召命に応えているかどうかを、あえて問いかけたい。もし行なっているならば、対話の結果を得ているのか、それとも際限ない委員会作業に終



始しているのだろうか。どちらにせよ、教義に反しない限り、我々はことがらを共に行なう努力をするよう求められている。私たちは社会的な挑戦において、共に働いているだろうか。

ミニストリーの形成・宣教

宣教を目的とするなら、宣教のためのミニストリーの形成と宣教は真剣にとらえられなければならない。西アフリカのシエラレオネのフリータウンの聖公会主教故プリンス・トンプソンは1985年に次のように述べている。「神学教育は私たちの神経中枢である。それを喜んで背負おうとする我々の姿勢こそ、キリストにおける私たちの成熟さを示している。」しかし、私が現在座っているところ、つまりWCCのプログラム・エキュメニカル神学教育、これは神学教育のプログラムを通じての神学教育ファンドと繋がるものであるけれども、私自身は教会が神学教育とそのミニストリーの形成に十全に参与しているとは言えない。

そして行って教えるという宣教は、神の民の宣教の使命にとってプログラムの形成が基本であるということを意味する。サム・アミルサム主教は1986年に次のように書いている。「私たちには神の国を目指すカリキュラムが必要だ。そのカリキュラムこそ、私たちが神学教育の共同体を作り上げるための洞察を与えてくれるであろう。その共同体とは自分たちが何者であるかを見つめ、正義を求める人々と共に戦う共同体、また生徒と先生が共に学べる共同体、創造性と自由が養われる共同体、また神学的な取組と霊的な葛藤が統合される共同体を意味する。」

1880年代に日本人はミニストリーのために訓練された。カナイ・ノボル、タイ・マサカズ両執事が1893年に按手された。イサク・ヨコヤマは1887年にアメリカで司祭に按手された最初の日本人だった。しかしながら彼は教会にほんの少し奉仕したに留まり、期待に応えるまでには至らなかった。

ここで私は形成プログラムが知的な事柄のみに留まらず、人々の心の響き、希望、恐れを聞き、彼らから学び、創造的な冒険的な方法で神によるキリストにおける喜びの知らせを対話しようとするセンスを持つように望む。これはもし宣教が知的な人々にとっての展望であり、教育のプログラムの他の活動の展望であるならば可能である。更に教会の宣教のために備えられなければならないのは神の民全てである。私たちは宣教共同体の機能を失うことなくどのように神の民全てのミニストリーと宣教を養っていけるだろうか。どのような構造がそれを養っていけるのだろうか。そして神のためにどのような可能性を備えているのだろうか。

日本聖公会の法憲法規は日本語の礼拝が採用された後で採用されたという事実にもとづいて、私は上記のことを述べた。ここで教会の命と業の大変重要な意味を持つ礼拝の問題に戻りたい。ことに神学的な訓練を受けていない人々のために。礼拝を通して人々は宗教に近づくことができる。そのときにのみ人々は自分たちが住む世界において宣教する彼らの責任を引き受ける事が出来る。オーソドックス(正教会)の世界から言葉を借りることが許されるなら、毎日の状況の中で信仰を生きるということは「礼拝に次ぐ礼拝」となる。ここでいくつかの問題がある。一つは伝えられた礼拝をどのように採用するか、つまり異なった文化の中で作り出され異なった文化へと伝えられてきたもの、ことに非ヨーロッパあるいはラテン語の世界、そして変わり行く世界の中で作られた礼拝をどのように採用していくかという課題である。礼拝をそれぞれの文化の中に根付かせて行くことは、福音伝道の重要な前提条件なのである。明らかにその風土に根付

いた礼拝はこのゴールにおいて必要不可欠である。その言葉は神秘の感覚と主に属する尊厳を失わない限りにおいて現代語でなければならない。自由と対になった伝統の感覚は実行への合言葉である。人々が満たされるのは礼拝において彼らが他の人々を一つの群れの中に導き入れようとするように力づけられる時である。その群れとは、聖なる集まりのためではなく、全ての被造物を創り変える神の仕事に参与する目的のための群れであり、キリストを通して全てのものを神に結びつける群れである。

私がまだ挙げていない多くの課題がある。一つには青年の課題である。青年は未来の教会と言われている。しかしここでもう一度考え直してみよう、彼らは今日の教会の力なのである。私たちがペンテコステの日に預言者ヨエルの言葉「あなたたちの息子と娘は預言し、若者はまぼろしを見、老人は夢を見る。」(使徒言行録2:17)と聞いたように、私たちは老人の夢と青年のまぼろしと預言を必要としている。青年への私たちの態度を考え直すためにもこれらのことを必要としているのである。

青年に関するこの問題を考える上で二つの仕事がある。まず初めに青年も年長者と同じく神の似姿を身に帯びているという新しい人類学を私たちは必要としている。この新しい人類学を持たずして神を適切に語ることは出来ない。二番目の仕事は青年に関する私たちの見方を考え直さねばならないということである。日本には大河内清輝くんといういじめによって1994年11月27日に自殺をした13歳の少年の話がある。ここで青年の純真さの問題を挙げてみたい。青年は果たして純真だと言えるのだろうか。この話の報道の中でこの少年の友達の何人かが多額のお金を持ってくるように強要し、また川に連れていき頭を水の中につっこむといういじめをしたということである。私はこの話を日本あるいは日本人を批判するために言っているわけではない。しかし、このような不快な事件が神の民の宣教の場において、述べられねばならない深い悪を示していることを警告していると思えるのである。報道はこの大河内くんの事件が特異ではなく日本の学校に多く見られる現象であることを明らかにしている。

このいじめの話は従順という文化の氷山の一角に過ぎない。清輝くんは「僕からお金を取った人を責めないで。僕は黙ってお金を渡した。彼らの要求を断わることもできた。」という遺書を残した。高山氏は次のように言っている。「出る釘は打つ、あるいは弱さのゆえに個人を村八分にする、グループから孤立させるという国粋主義者の倫理を強め、より残虐なかたちで出てきたものが日本の青年に見られるいじめである。」。宣教にとって不可欠な社会的倫理が従順ということであっても、従順が国粋主義者の倫理になるということはない。私たちは常に次の聖書の箇所をおぼえていなければならない。「私たちは人ではなく神に仕えなければならない。」

ゲストとして(また日本の専門家ではないので)私にはいくつかのことが見えるだけにすぎない。しかし私は皆さんが神の民のミッショナリーの使命の光に照らして皆さん自身を批判的にみることができるようにとの願いを持って、一つ二つのことを申し上げたに過ぎない。皆さんのゴールは皆さんが犠牲的愛、正義、真理、自由、和解、平和といった神の主権に従って、全ての場をまた全ての人々を変革するために、神の有用な僕となるということである。

「正義を行う」ことへの召し

司祭　井田　泉

1 はじめに

今、司会の方がおっしゃった資料集のことについて少しお話しします。この6年ほどの間、私は十人くらいの人たちと一緒に、1945年までの日本と朝鮮のキリスト教関係史の資料編集の仕事をしてきました。それが今週『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』という名で新教出版社から刊行されるはずです。900頁近いものになりました。その資料集から一つだけ印象的なものをご紹介します。それは、1930年代後半、日本が朝鮮の教会に対して神社参拝を強制したとき、朝鮮の長老派、平壌(ピョンヤン)の山亭峴(サンジョンヒョン)教会という教会に対する日本当局の弾圧を伝える新聞記事です。この教会の牧師朱基徹(チュギチョル)は神社参拝反対で逮捕されており、信徒たちは毎週力を合せて礼拝を捧げていました。その教会に対して当局は、「宣教師に説教させるな」「何日何時までに神社参拝を決定せよ」と次々に命令してきます。そんな中である日曜日、ある長老が説教することになっていました。ところがその礼拝の前に婦人信徒数人がその長老のところに来て、こう言ったのです。「私たちは姿勢のはっきりした、命懸けの説教を求めている。あなたのような姿勢のはっきりしない人は説教しないでほしい」。それでその長老は「そこまで言われて説教できない」と言い、その日の礼拝は混乱状態になった。こういうことが当時の『東亜日報』という一般新聞に書かれていました。山亭峴(サンジョンヒョン)教会はやがて強制的に閉鎖されてしまいます。この教会の朱基徹(チュギチョル)牧師は拷問による衰弱の果てに獄死しました。こうした歴史資料は、私たちの教会のあり方について深く考えさせるものを持っています。

さて、昨日の開会礼拝でイザヤ書第11章1-5節が読まれました。救い主とはどのような方であるかを語っている箇所です。そこに「正義」という言葉が出て来ました。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。……彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。……正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」

この時間、まず初めに「正義」という言葉が聖書でどのように用いられているかを尋ねてみたいと思います。

2 神の民の出発と「正義を行う」ことへの召し

新共同訳で「正義」と訳された箇所は、旧約聖書に96、新約聖書に14、計110箇所あります。旧約聖書続編には33あるので、これを含めれば聖書全体には143箇所になります。

新共同訳聖書で「正義」と訳された最初の箇所は次の所です。

創世記 18:18-19「アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。』」

アブラハムとサラから始まった神の民への召命がここに示されています。その神の民への召命とは、一言で言えば「主に従って正義を行う」ことです。これは創世記第12章のアブラハムへの主の召命、「あなたは祝福の源となるように」(12:2)の再確認でもあります。ここで注意したいのは、アブラハムの子孫、つまり神の民イスラエルのみが祝福されて他はどうでもよい、というのではなく、世界のすべての国民の祝福が関心の的になっていることです。「あなたがたは私に従い、正義を行うことによって、世界に対する祝福の器となれ。」これが主の召命でした。

アブラハムとその子孫、神の民は、世界の人々が祝福に満たされるために仕える器、道具として召された。そしてそれは、神の民が「主の道を守り、主に従って正義を行う」という歩みをすることを通して実現して行く。もし神の民が「主の道を守り、主に従って正義を行う」という生き方をせず、それを踏みにじるのであれば、それは神の民の使命に逆らうことになり、自らの祝福を損なうばかりか、世界に対する神の祝福をも損なうことになってしまう。

ところで、このように「主に従って正義を行う」ことへの召しが述べられているこの聖書の箇所には、特別な文脈があります。ただ創世記18:18-19の言葉がそこだけ急に教えとして出て来たというのではなく、創世記第18章全体の流れの中でこのことが語られている点に注目したいのです。

アブラハムが主の呼びかけを聞いて歩み始めてからおよそ25年の歳月が過ぎました。子孫への祝福の約束も受けたのに、子供は与えられない。すでにアブラハムは99歳、サラは89歳。ある日、暑い真昼に、アブラハムの天幕の前を3人の旅人が通りかかりました。アブラハムは旅人を迎え入れ、サラとともに接待をしました。そのとき3人の旅人の1人が、「来年の今頃、サラには男の子が生れているだろう」と言います。アブラハムへの神の約束がここでようやく実現しようというその重要なときに、先ほどのこと、つまり「正義を行うことへの召し」が語られたのです。

主は彼に言われました。「1年後、あなたがたに子供が生れる。子孫が与えられる。そこには私があなたとあなたの子孫に託する大切な使命がある。『主の道を守り、主に従って正義を行う』ことをあなたは生れる子供に必ず教えなければならない。そしてそれを代々受け継がせていかなくてはならない。主に従って正義を行うことを通して、あなたとあなたの子孫は祝福を世界に広げていくのだ。」

そしてそこで言われた「正義」というのは、抽象的な、漠然としたものではありませんでした。主がアブラハムのところに来られたこの時の目的は、ソドムとゴモラの罪の現実を確かめることでした。このことが重要です。

「その人たちはそこを立って、ソドムを見下ろす所まで来た。アブラハムも、彼らを見送るために一緒に行った。主は言われた。『わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があろ

うか。アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。』

主は言われた。『ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡(ぎょうせき)が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。』」(創世記18:16-21)

「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫び」「わたしに届いた叫び」。これはこの町の中で苦しんでいる人たちの叫びではないでしょうか。あるいはこの町の故に苦しみを強いられている人々の訴えではないでしょうか。フォン・ラートという人によれば、「訴える叫び」と訳されたもとのヘブライ語「ゼアーカー」というのは法廷で用いられる専門用語で、「権利を著しく侵害された者が挙げる助けを求める叫び」という意味なのだそうです。

そこには正義が踏みにじられている、という現実があった。性的犯罪を含めて、あってはならない虐げ、不法、暴虐がこの町に行われていて、その故に苦しむ人たちの叫びが天に届いた、ということではないでしょうか。

ソドムとゴモラから上がる訴えの叫びを聞かれた主は、その現実をご自分で見て確かめようとされます。

天から地上へ、人の姿となって主はおいでになりました。ソドムに行くその途中、主はアブラハムの天幕を尋ねられました。アブラハムの天幕はヘブロンの北、マムレという所にありました。標高約900メートル。ソドムへは、そこから東へと山道を下ります。山道の途中、死海とその東のほとりのソドムを見下ろすことのできる場所で、あのアブラハムと主の対話がなされます。そしてアブラハムと別れて、主はソドムにまで道を下っていかれます(創世記18:22-33)。死海の水面は標高マイナス約400メートル。ということは、マムレからおよそ高低差1300メートルも道を下って(ちょうどこの清里から

東京に下るくらいの高低差)、主はソドムの現実、その罪と、そこにうめき叫ぶ人のことを確かめようとされるのです。

このような時に、このような緊迫した事態を前にして、主なる神は、アブラハムとその子孫が正義を行うべきことを求められました。彼は「主に従って正義を行う」ことへの召命を受けました。ソドムの悪、ソドムの不義に無関心であることは許されません。

神の民イスラエルに対する主の召命は「正義を行う」ということでありました。そのことは初めから、アブラハムの時からこのようにはっきりとしていた、ということを聞きました。旧約聖書全体を通じて「正義」ということは非常に重視されています。特に詩編やイザヤ書にはたくさんの例があります。いくつか例を見ましょう。

詩編 37:28「主は正義を愛される。主の慈しみに生きる人を見捨てることなくとこしえに見守り、主に逆らう者の子孫を断たれる。」

詩編 116:5「主は憐れみ深く、正義を行われる。わたしたちの神は情け深い。」

イザヤ書11:1-5「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳にするところによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。」

これはさっきも聞いた言葉です。メシア預言の一つで、主イエスを指し示す大切な箇所でもあります。「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」は堅信式の式文に引用されている言葉で、主イエスに注がれ、主イエスを生かしていたその同じ霊が私たちにも注がれることを祈ります。救い主の働きは「弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する」ことです。この世界の現実の痛みや悪とは別に、というのではなく、まさにこの世界の中にある苦しみや悪の支配の中で、正義の実現のために救い主は働かれるのです。

イザヤ書 30:18「それゆえ、主は恵みを与えようとしてあなたたちを待ち、それゆえ、主は憐れみを与えようとして立ち上がられる。まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。」

「まことに、主は正義の神。」正義の実現をうめくように、渇くように切望している人々の思いがここにはこめられています。

ところが現実はどうか。

イザヤ書 59:15「まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる。主は正義の行われていないことを見られた。それは主の御目に悪と映った。」

主イエスは「御心が天に行われるとおり地にも行われますように」と祈るように私たちに求められました。それはイエスが「御心が地に行われていない」ことをご覧になったからです。

ところで、かつてアブラハムに対して主が与えられた約束と使命に対して、その後の神の民イスラエルは繰り返し背き、それを踏みにじってきました。

後の時代、預言者エレミヤは、神がこのソドムとゴモラの町の名を挙げてこう語られるのを聞きました。

「わたしは、エルサレムの預言者たちの間に、おぞましいことを見た。姦淫を行い、偽りに歩むことである。彼らは悪を行う者の手を強め、だれひとり悪から離れられない。彼らは皆、わたしにとってソドムのよう、彼らと共にいる者はゴモラ

のようだ。」(23:14)

そしてエレミヤは、もう一度神の民の出発点に、最初の召命にイスラエルを立ち返らせようとされる神の声を伝えています。

エレミヤ書 4:2「もし、あなたが真実と公平と正義をもって、『主は生きておられる』と誓うなら、諸国の民は、あなたを通して祝福を受け、あなたを誇りとする。」

イスラエルが真実と公平と正義を踏みにじったので、みずからの祝福も台無しにし、諸国民の祝福も台無しにしてしまった。しかしもう一度、主はご自分の民を建て直そうとされる。

エレミヤ書 7:1-6「主からエレミヤに臨んだ言葉。主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。『主を礼拝するために、神殿の門を入って行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。……』」

立派な主の神殿を誇りにし、立派な礼拝を献げながら、現実には正義を踏みにじり、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げ、無実の人の血を流し、異教の神々に従っている。「このようなことを続けて、自ら災いを招いてはならない」と、主なる神はエレミヤをとおして呼びかけておられました。

ここまでをまとめます。主は正義の神であって、主がその民に使命として託されたことは、「主の道を守り、主に従って正義を行う」ということです。そしてそれは一般的、抽象的なことではなく、極めて具体的なことだ、ということです。苦しみが満ち、悪が支配しているこの世界にあって、正義を実現するために神は働いておられる。私たちはイエス・キリストによって召された新しい神の民です。私たちもまた「主の道を守り、主に従って正義を行う」という召しを受けています。それは、世界に対する神の祝福の器とされることです。

3 イエスが記憶した人々

旧約聖書に示されたこのように激しい正義への求めは新約聖書に流れこんでいます。新約聖書において「正義」と訳された箇所は必ずしも多くはありませんが、例えばこのような主イエスの言葉に注目したい。

ルカ 11:42「それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。薄荷(はっか)や芸香(うんこう)やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行うべきことである。」(マタイ 23:23参照)

「正義の実行と神への愛」これこそ行うべきことだ、とイエスは言われます。マタイのほうでは「律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実。……これこそ行うべきことである」となっています。ところでこの言葉に続いて、非常に気になることがイエスの口から語られています。

ルカ 11:50-51「こうして、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。それは、アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血にまで及ぶ。そうだ。言っておくが、今の時代の者たちはその責任を問われる。」(マタイ 23:35-36参照)

ここで気づくのは、イエスが歴史に関心を持っておられた、ということです。単に関心を持っていた、というのではなく、歴史に起こったあのこと、その人々のことを忘れては今の自分の生きることも働きも考えられない、というほ

どに、かつての出来事を胸に刻んでおられた。その人々を記憶するからこそ、今このように生きる。その人たちのことをイエスは自分の身にまとっておられた、と言ってもよいでしょう。そうでなければ、ここのイエスの言葉のものすごい激しさを理解できません。その人たちとは、「アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血」と言われているように、不当に苦しめられ、殺されて、血を流して死んでいった人たちのことです。

アベルの殺害は聖書に記された最初の殺人事件です。あの創世記第4章の物語。アベルはその兄カインに憎まれ、野原でカインに撃ち殺されました。アベルの流された血が土の中から神に向かって叫びました。神はその叫びを聞いて、カインに「何ということをしたのか」と問われました。もう一つ、「あなたたちが聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血」というのは、歴代誌に出て来る話です(これとは別の説もあるようですが)。紀元前9世紀、主イエスよりも800年くらい前のことですが、ユダの王ヨアシュは家臣に命じて、主の神殿の庭で祭司ゼカルヤを石で撃ち殺しました。祭司ゼカルヤが神の霊に動かされて、王の偶像崇拝を厳しく責めたからです。ゼカルヤは死に際してこう言いました。「主がこれをご覧になり、責任を追及してくださいますように」(歴代誌下24:20-22)。これはヘブライ語の聖書(旧約)に出て来る最後の殺人事件です。

「アベルの血からゼカルヤの血」ということは、聖書(旧約)に記され伝えられた最初の殺人から最後の殺人までのすべてということです。多くの多くの人々がいます。その中には、士師記第19章に記されたベツレヘム出身の側女のことも含まれているはずです。イスラエルにまだ王がなかった時代のこと。その女性は、何か耐えられないことがあったからでしょう。夫のところを去ってベツレヘムの実家に戻っていました。夫は彼女を連れ戻しに来ました。旅の途中、ギブアの町で日が暮れました。2人はある老人の家に迎えられて夜を過ごすことになります。

士師記19:22-30「彼らがくつろいでいると、町のならず者が家を囲み、戸をたたいて、家の主人である老人にこう言った。「お前の家に来た男を出せ。我々はその男を知りたい。」家の主人は彼らのところに出て行って言った。「兄弟たちよ、それはいけない。悪いことをしないでください。この人がわたしの家に入った後で、そのような非道なふるまいは許されない。ここに処女であるわたしの娘と、あの人の側女がいる。この2人を連れ出すから、辱め、思いどおりにするがよい。だがあの人には非道なふるまいをしてはならない。」しかし、人々は彼に耳を貸そうとしなかった。男が側女をつかんで、外にいる人々のところへ押し出すと、彼らは彼女を知り、一晩中朝になるまでもてあそび、朝の光が射すころようやく彼女を放した。朝になるころ、女は主人のいる家の入り口までたどりつき、明るくなるまでそこに倒れていた。

彼女の主人が朝起きて、旅を続けようと戸を開け、外に出て見ると、自分の側女が家の入り口で手を敷居にかけて倒れていたので、『起きなさい。出かけよう』と言った。しかし、答えはなかった。彼は彼女をろばに乗せ、自分の郷里に向かって旅立った。家に着くと、彼は刃物をとって側女をつかみ、その体を十2の部分に切り離し、イスラエルの全土に送りつけた。これを見た者は皆言った。『イスラエルの人々がエジプトの地から上って来た日から今日に至るまで、このようなことは決して起こらず、目にしたこともなかった。このことを心に留め、よく考えて語れ。』」

士師記はこの物語の結びに、この事件を知った人々の言葉を記しています。「このことを心に留め、よく考えて語れ。」イエスは、この

人のことを心に留めておられたはずです。この名も知れない女の人の声なき叫びを聞いておられた。イエスの中に、その人の血の叫びがこだましていた。イエスは、不当に踏みにじられ、殺されていった人たちのことを記憶しておられた。その人たちの死を忘れたり、無駄にしたりすることは断じて許されないと、激しく誓っておられた。そういうことではないでしょうか。

律法の中で最も重要な正義と慈悲と誠実、正義の実行と神への愛。これをおろそかにし、罪なき人々の貴い血が流されてもこれに抗議の声を挙げず、かえってこれを正当化してきたそのような歴史の責任が今のあなたがたにふりかかる。今のこの時代の者たちが、流された血の責任を問われる、というのです。

かつて主なる神は、アブラハムの時、神の民を「正義を行う」ことへと召されました。そしてその時、正義を踏みにじっていた町ソドムは神の審判によって滅ぼされました。はるかに時代は下って、主イエスは悔い改めのない町をこのように責められました。

「……カファルナウム、お前は、天にまで上げられるとでも思っているのか。陰府にまで落とされるのだ。お前のところでなされた奇跡が、ソドムで行われていれば、あの町は今日まで無事だったにちがいない。しかし、言っておく。裁きの日にはソドムの地の方が、お前よりまだ軽い罰で済むのである。」(マタイ11:23-24)

ところで、ソドムよりも、カファルナウムよりも、日本の罪は軽いのか。これが、今の私たちの問題です。

ここで私たちは、遠い昔のどこかのことではなく、あの韓国ほかアジア諸国に対する植民地支配、アジア・太平洋戦争においてわが国がなしてきたことに直面させられるのではないでしょうか。ソドムの罪は広く、単に性的犯罪だけではなかったと思われます。しかしソドムの広範な罪の中に性的犯罪も含まれていたとすれば、日本という国がなした広範な罪の中に、性的犯罪が、日本の侵略戦争のためにアジアの女性たちを性的奴隷(「慰安婦」)として踏みにじった犯罪が含まれていることを忘れることはできません。その人たちの叫びをイエスは聞いておられるはずです。そして、その時代にあって、私たちの教会、日本聖公会がどのようなあり方をしていたかを振り返ることは、誰かに強いられてではなく、自らの責任としてなすべきことではないでしょうか。

宣教協議会のために用意された資料を実際に見てみましょう。まず『支那事変特別祈願式』(「歴史を生きる教会——ワークブック」10頁)。日中戦争開始3ヶ月後の10月2日、日本聖公会教務院が全国の教会で用いるようにと配布した礼拝式文です。日本政府の指示に

沿ったものでした。

「此式ヲ早・晩祷ニ代用スル事ヲ得」

説教については次のように定められています。

「『国民精神総動員』ノ趣旨併セテ非常時信徒ノ本分ニツキ説教ヲナス」

これだけでも大変なことではないでしょうか。説教は神様の意志を示すものではなかったのか。それがいつから国家の意志を示すものになったのか。これは神様への背信行為ですよ。このことの重大さにおののかなくてよいのか。

「　我ら天皇陛下のため祈るべし

天地の主なる神よ。願くは恩恵をもつて僕らの祈祷を聴召し、我が今上天皇をさきわひ、聖霊をもつて導き、御力をもつて護り給へ。……願くは陰謀・反逆・その他平和を妨ぐるもの絶えて無からしめ、宝算（天皇の年齢）永く、宝祚（天皇の位）遠く栄え、終に限りなき生命の冠冕を受くることを得させ給へ。主イエス・キリストに頼りて冀がひ奉つる　アァメン」

「　我ら銃後に在る者のため祈るべし

全能の神よ。今われら銃後にある者のために祈り奉つる。願くは挙国一致、堅忍持久、総ゆる困難を打開して所期の目的を貫徹することを得させ給へ。願くは常に事態の推移に即して、直ちにこれに応ずるため、絶えず献身犠牲の覚悟に欠くる所なからしめ給へ。……」

もう一つ、日本聖公会祈祷書の紀元節特祷（「歴史を生きる教会――ワークブック」66頁）。

「天地の主なる神よ。主は往古より万国を治召し、その盛衰をつかさどり、稜威と栄光とを顕し給へり。殊に我国を恵み、建国の偉業を成就せしめ、今日に到らせ給へることを感謝し奉る。今この佳節に方り、皇祖皇宗の威徳を懐ひ、宝祚の長久・国運の隆昌を祈り奉る。願くは国民挙りて責任の重きを感じ、祖先の忠誠を顧み、献身犠牲の精神に活き、只管国威の発揚と共に、全世界の平和と万民の幸福とに尽すことを得させ給へ。これらの祈願を讃め称ふべき救主イエス・キリストの御名に頼りて献げ奉る。アアメン」

これは、アベルの血からゼカルヤの血を記憶された主イエスの道とは全く異なったものです。これらの祈りや礼拝は、血を流させてきた中心的存在である天皇への忠誠を、神の名によって求めるものです。天皇制国家に尽す責任、「献身犠牲の精神」を説いています。その時は国家の力に強制されてそうせざるを得なかったのだとすれば、なぜその力が打ち砕かれた時に、涙を流して嘆くことができなかったのか。私たちの教会は祈るべきでない祈りをし、隣人の苦しみをいっそう増し加えることをした。50年前にそのことを懺悔しなければなりませんでした。それを50年の間放置してきた。こういうことは「社会派」の問題ですか。信仰の問題ではないのですか。

昨晩、大韓聖公会の洪曼姫さんの証言を聞きましたが、その中で日本政府のやり方について触れて、「謝罪する内容もはっきりしないような言葉だけの謝罪などしてもらいたくない」と言われたことが心に残っています。私たちの教会も同じことを言われているのではないでしょうか。中途半端にそのかっこうだけするならしないほうがよい。歴史の反省をするなら本気でしたい。

歴史を振り返るとすれば、今私たちは誰のどんなことを記憶しなければならないのか。私たちにとってのアベルとは誰か。私たちにとってのゼカルヤとは誰か。私たちにとっての士師記第19章の女性とは誰のことでしょうか。強制で軍隊慰安婦とされた人たちのことを思い

ます。その人たちの叫びを聞こうしないことは、主イエスを受け入れようとしないことではないでしょうか。しかし反対に、その叫びを聞くことは、主イエスを受け入れることではないでしょうか。私たちは、神と隣人の前に、私たちの教会の事実に直面しなければならない。私たちの誤りを告白、懺悔しなければなりません。歴史への責任を考えるなら本気で歴史の事実に直面しようではありませんか。

神の民は、神の最初の召命に、あの「主に従って正義を行う」という召命に逆らったままでは生きることはできない。イエスの弟子は、イエスから離れたままでは生きることはできないのです。

4 おわりに
——イエスの死を体にまとう

ルカによる福音書第11章から、主イエスご自身が歴史を心に刻み、踏みにじられ、殺された人々をご自分の身にまとっておられたことを思いました。ところで、私たちはイエス・キリストを信じる者として、イエス・キリストに従おうとする者として、イエスのことを心に刻み、イエスを身にまとう者であります。イエスご自身が、踏みにじられ、殺された方です。パウロはこう語っています。

Ⅱコリント4:7-11「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、4方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。」

「イエスの死」の「死」と訳された言葉は「殺すこと」「殺害」というニュアンスの言葉です。

殺されたイエスの死を体にまとう。それは苦しく辛いことではあるけれども、しかしそこに、それをまとう私たちの体に、イエスの命が現れる、というのです。そしてイエスを記憶することは、イエスご自身がその身にまとうように記憶しておられた、命を奪われた人々のことを記憶する、ということと一体です。そしてそれは、イエスの命に共にあずかる道なのです。

最後に、要点を3つ申し上げます。

第1は、私たちは神の民として「主の道を守り、正義を行う」ことへと召されている、ということです。私たちの教会はこのことを長く見失い、誤りを犯して来た。しかし、私たちの具体的な反省と、懺悔、告白を通して、神は新しく「正義を行う」ことへの召しに応えるようにと、私たちを促しておられるのではないでしょうか。それは共に祝福にあずかる道です。

第2は、叫びを聞くことなしに私たちの働きはない、ということ。主イエスは歴史の中の苦難と死、不当に殺された人たちを身にまとっておられた。私たちも歴史から目をそらさず、歴史の責任を引き受け、人の叫びを聞き続けるものでありたい。このことを離れてイエスの宣教と働きはありませんでした。私たちも同じではないでしょうか。

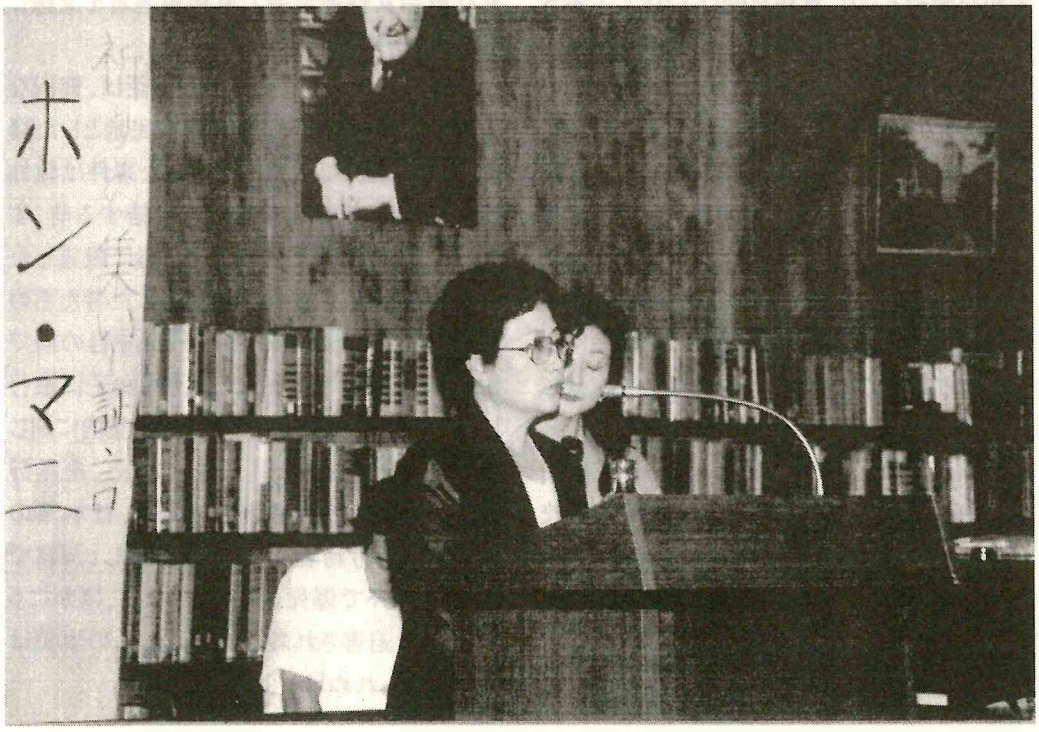
第3は、イエスの死を、イエスが殺されて死なれたことを、自分の身にまとうこと。それは、歴史の中で死んだ人々、殺された人々のことを記憶することと1つである、ということ。これは辛いことであるけれども、それこそがイエスの命にあずかる道である、ということです。

証　言

洪曼姫（ホン・マニ）―大韓聖公会ソウル大聖堂

韓日関係史を短い時間で話すことは、大変困難なことで、しばしば過去の歴史をめぐる抽象的な議論におわることもあります。そこで、私はまず植民地支配下に生きた私自身と周辺の人たちから見聞きした事を話すことでこの時間をはじめます。

1900年を前後し日本は何度も韓国を侵略した末、1910年ついに韓国の国権を強制的に奪い、韓国の魂とすべてのものを手当たり次第抹殺して、36年の間韓国人は、言うに尽くせぬ苦しみを経ました。識者の家に生まれた私は日帝下でもとても悲惨な生を送りはしませんでした。それでも植民地で生まれたひとりの被支配人者としての苦しい生活は、私も例外ではありませんでした。わたしの祖母は、韓国が日本帝国により外交権を奪われ武装解除された韓日併合されたた併合の頃、韓国聖公会の初代信徒として鎮川（チンチョン）教会の伝道婦人であり、わたしのおじさんは英国人宣教師が経営した鎮川の愛人病院の医師であり、わたしのオモニ（母）はその病院の看護婦でした。それほど良い環境が簡単ではないときだったが、わたしのアボジ（父）は便利さよりは時代的民族的痛みを骨まで感じ、初等学校を卒業し中学校に神学し、1919年3・1独立万歳事件が起こったとき、今の京畿中学校学生としてこの運動に加わり、一年間の獄苦をなめました。その後東京の早稲田大学に学び、母国に帰り高等普通学校に教鞭をとったが、要視察人という監視に耐えかね



て、教師生活をやめ、いなかで農村啓蒙運動にはいり、農村の人々を教え、オモニは病者たちを助け治療する歳月を力の限り送りました

私の兄弟は、そういうなかで生まれましたが、学校に入学する前には平凡な父母の愛の中に育ちました。しかし国民学校にいくと、学校では日本語を学び、家に帰ると韓国語で生活する矛盾の中に暮らすようになり、学年があがるにつれ感情が変わっていくのに気付いた。学校に行けば国語時間が日本語時間だが、家に行けばアボジはハングルと漢文を教えた。絶対に忘れるなと。

戦争が加熱すると生活必需品が不足し、クラスにその物品、運動靴やノート、鉛筆、そして弁当などが配給になりましたが、クラスの十%程度が割り当てられただけで、その配給は愛国献金をよく出す子にだけ恩恵があたえられ、愛国献金を出せない大部分の子どもたちは大きく傷つきました。人心が薄くなり家毎に銀製品や真鍮食器などがすべて供出され、物資難はひどくなり、食糧と全ての物資がわずかな配給となり、食糧を受けようとして歩き回ることになり、その手段として恐るべき方法がとられたその頃、はなはだしくは、豆の油を絞ったカスさえも食糧だとして配給されました。内鮮一体、皇国臣民としての全ての忠誠を強要し、朝に起きれば天皇がいる東を向き拝礼をせよと教え、教室には日章旗と並んでかけられた二重橋に礼をさせた彼らは、実際は韓国人と日本人をことあるごとに差別して、二民族の間の感情の悪化を煽っていました。

学年が上がるにつれ、私たちは午前には授業、午後には仕事にでましたが、農村の学校では子どもはもっと仕事をしました。道路をつくる砂・砂利を掘ったり、五月には田植え、山に行き松の枝刈り、木の根掘り、草むしり、木の皮とりなど、松油は飛行機の油、木の皮は服を作る言った。このように幼い生徒達も労力動員をしながら昼食はおろか、朝・夕もおかゆで生き延びる子も多かった。

第二次世界大戦が終わりにむかうころ日本は韓國から多くの労務者、学徒兵、そして女性たちまでも軍需工場で稼がせるといって連れていきはじめたが、連れていかれた女性たちが挺身隊という軍隊「慰安婦」にされるという噂が立つや、娘もつ親たちは相手をよく調べもせずに娘を急いで嫁がせた。わたしのおじさんも二十前の二人の娘を非信徒の男に嫁がせ、当時の教会の規定により領聖体権を得ました。のみならず、信徒家庭で育った姉さん達も、頑固できむづかしい儒教の家庭でむづかしい法道を守ろうと苦労しました。

原爆投下当時、日本に労務者としていたわたしの親戚の兄さんが、なにもなく無事に帰って来ましたが、結婚して生まれた子どものうちひとりは生まれつきお尻に絶間なく腫瘍ができて化膿し、末の子は口蓋裂症でした。彼らの症状が被曝二世にあらわれるものと確信を、私は教会女性連合会で直接被害者を支援しはじめてから気付きました。

私がここで話している程度の話は、贅沢な人の話にすぎません。日帝が植民地とした諸国、特に韓国でおこなった残酷な事件は数知れなません。韓日合併を強制締結する前、すでに一国の王妃を王宮内で凄惨に殺害したことから、独立万歳事件に関連した者たちの口を割らせるためその幼い子どもを目の前で殴り殺し、軍人等が民家に入り婦女子に暴行したこと、ひとつの村の人々を教会堂内に閉じこめて火を放ち銃を撃ち殺したこと、南洋群島のあちこちで敗戦消息を聞き、日本軍の「慰安婦」と労務者を崖から突き落し、洞窟でダイナマイトで爆死させたことなど、ほかにも日帝下で迫害され殺された人たちの事例は一々数えられぬほど多いのです。

もうひとつ忘れてなら無いのは、日本の治下での平凡な人々の悲惨な生活です。私が今までわたしの経験を話して来たのは、それが過去のことではなく、いまも生々しく記憶された経験のなかでのできごとだということを言うためなのです。いっしょうけんめい農作業をした作物をほとんど奪われ、草の根・木の皮で生き延びねばならず、多くの労力動員と供出をしても生活必需品さえもらえなかった名のない民の凄惨な生活は、わたしたちの注目を引くいろいろな残酷な事件よりもどうかするとより骨身にしみる歴史の悲劇的すがたです。彼らの生が忘れられてはなりません。むしろそれを記憶し思い起こすことが、即ち日韓関係を正しくなり立たせる歴史認識の課題なのです。

しかし現実はもどかしいばかりです。いまだに日本内のある極右人士らは日本の支配が韓国の発展に寄与した側面もあると主張し、その例に農業生産の増大と産業発展を挙げている。しかし統計によれば、1912年からから1930年まで約20年間、韓国での米生産は10%の増加をみせましたが、日本輸出量が2倍ちかくに増加し、韓国人一人当たりの米消費は42%も減少した。力を尽くして作った農産物を全て奪われ、空腹で、文字どおり延命せざるを得なかった。食糧だけでなく、すべての物資の戦争徴発が増えた後の事情がより悪化したのは周知のことだった。それにもかかわらず日本の韓国支配がアジアの解放をもたらし韓国の発展の肥やしになったなどという日本の歴史認識がいつまでも続くのははなぜでしょうか。まだ植民地支配を経験したわたしのような世代が大部分生きており、その惨状をあきらかにする証人と証拠があるにもかかわらず、変わることない日本のこのような歴史認識が正しい健全な韓日関係の定立を阻害するもっとも大きな要因なのです。

結局健全な韓日関係の定立は歴史にたいする正しい理解と教育から、始まることができます。問題は基本的に今までの日本の歴史歪曲と教育回避に起因するのです。特に最近日本の若い青年と会うと、彼らが過去にたいし本当に知らないということを気付かされます。彼らがアジアの他の若者らとあったときに感じさせられるのは明らかな認識の差、越えることのできない壁であり、彼らはむしろ他のアジア人を面倒くさい理解出来ない存在とおもってしまいます。歴史歪曲をする人々はあるいはこれを望んでいるのかもしれません。彼らは隠したい歴史が時間と共に忘れられることを望んでいるだろうからです。しかし他のアジアの総ての人々が記憶している状態で日本だけが忘却して何の意味があるのでしょう。日本が真にアジアで主導的役割をしたいならば、過去のことにたいする真相究明と真実を知らせる作業が先ず初めになされねばなりません。

過去の歴史が正しく広く知られるようになった後には、必ずそれにたいする反省と謝罪がおこってくるでしょう。私は今段階としての日本の謝罪について、肯定的に考えません。何を謝罪すべきなのかも不明確な状態での謝罪では無意味なことだからです。なによりも日本国民が自分たちが何をなぜ謝罪すべきかもわからない状態で謝まることは納得できないでしょうし、韓国民もまた謝ることを心から受容することはできないでしょう。従って過去にたいする真の反省と謝罪は先ず、歴史の真実にたいして日本の主権者たる日本国民の認識が先行してこそ、可能なことだと思います。その後にこれを根拠に賠償問題や謝罪の受容、赦しが正しくなされ得るでしょう。

日本が何を反省し謝罪すべきかの問題について一言加えたいのはその方向性についてです。現在も日本の右翼人士は「日本が真

に反省すべきことは、戦争を起したことではなく、戦争に敗れたこと」であると主張しているのを知っています。これは日本人がこの問題について方向を誤って解釈している事を克明に示します。私たちが求めるのは、太平洋戦争自体とその勝敗についてではないのです。冷静に見れば太平洋戦争はこれ以上奪う土地がなくなった帝国主義列強のあいだの植民地争奪戦に他なりません。その勝敗の問題は参戦した国ぐにの間の問題にすぎません。私は日本が米国とソ連など連合軍に謝罪する必要はないと思います。かれらは帝国主義の覇権のために全人類にぬぐえない苦痛を与えた同じく戦争犯罪者だからです。日本が頭を垂れ謝罪すべき対象は戦争の敗北をもたらした連合軍ではなく、日本の植民地統治と戦争過程で苦痛を受け何の理由もなく連行され死んでいったアジア植民地の国民たちにたいしてです。

私たちが過去の歴史にたいする正しい認識、反省と謝罪を論じるのは究極的には正しい未来を追求するためです。過去わたしたちの被害をあげて、物質的賠償を得るためではなく、この地域の恒久的平和と共同発展のためなのです。したがって過去の歴史と反省、謝罪の問題は韓日両国間の関係だけでなく、広く東アジア地域の共同繁栄と言う巨視的・長期的観点で見なければなりません。東アジアの国家も互いに助けあいともに発展できる緊密な関係を発展させる必要がたかまっています。この関係は「大東亜共栄圏」の垂直的関係ではなく水平的関係の中でなされねばなりません。

日本はすでにアジアにおいて主導的役割をしめ大きな影響力を行使し、国連安保理常任理事国への進出まで試みています。しかしこのような影響力は日本がこの間つみあげた経済力に基づくだけで、実際日本は、アジア周辺国家からも尊敬はおろか疑心のまなざしで見られています。その理由はもちろん明らかです。過去自分たちをそれほどまで苦しめ、50年が過ぎる今まで謝罪どころか歴史歪曲と暴言を繰り返す国家を誰も信頼できないのです。さらにいまや憲法に反して外国に軍隊まで派遣しようとし、唯一の被爆国だとして反核を掲げる平和の使者のようにふるまいながらも、世界最多のプルトニウムを保有しているという二重的な行いを見せる日本を、どうして簡単に信じられるでしょう。日本が真に経済力にふさわしい地位を世界秩序の中で獲得し世界平和と人類の共同繁栄に寄与したければ、まず周辺国家、とくに過去日本の苦痛を受けた国ぐにに認められ尊敬されねばならないでしょう。それは日本の過去にたいする正しい理解と真摯な反省、謝罪から始まるのです。これらが先行しない限り、彼らが日本の発展をはばむ石となり、日本は永遠に道徳性を回復出来ず、さらにアジアの共同発展を阻害する最大要因になることでしょう。

いまも世界各国は表向きでは人類平和を叫びながら互いに戦い、核兵器を開発・実験し、平和を脅かしています。神の創造の意志に従なら美しい世界に愛と平和を享受して生きていくことのほかに、よき思いの人々の願いは果てがありません。このときキリスト者の課題がなにかはわかっています。この宣教協議会を通してキリスト者がひとつとなり、民族と国家を越えてまことの神の国をこの地にもたらすよう、新たな半世紀にむけての機会になる事を祈りつつ、証言を終わります。

フィリピン聖公会からの証言

司祭　レックス・レイエス（フィリピン聖公会）

はじめに、フィリピンから私たちが、この宣教協議会に招かれたことを栄誉と感じておりますことをお伝えいたします。個人的には、私はこの場において、以前からの友人たちに出会う機会が与えられ、旧交を暖めることができましたことを、たいへんうれしく思います。私は、少なくとも三つの理由によって、この協議会に出席できましたことを栄誉と感じております。

一つは、少数民族の一人としては、皆さんの前で話すことに、多少の戸惑いがあるのですが、私の教会のメンバーのほとんどは少数の先住民族であり、フィリピン聖公会は私の国ではマイノリティーであります。その二重にマイノリティーであるフィリピン聖公会に属する者が、同じくマイノリティーである日本聖公会の方々にお話をするということであります。

二番目は、労働力が唯一の資源と言われるような状況にある私たちの国を代表して、巡礼の意味を込めて、私が来ているということであります。

三番目は、日本が過去において、私たちの国に対して行なった様々な事柄を話すために、ここに招かれたということです。

私が小学生の頃、学校の教師がよく第二次大戦の話をしてくれました。そして時々は戦争の映画を見せてくれましたが、その中では、いつもアメリカが勝者で、日本はいつも敗者でした。私たちは、また日本の軍歌をよく教わりました。日本人旅行者が来ると、私はその歌を歌いましたが、日本人たちに「そんな歌は知らない」とよく言われたものでした。

何年か後、私が日本人学生たちの観光案

内をした時、そのリーダーは私に、戦争について説明する必要もないし、戦跡に案内する必要もないと語りました。

私の伯母は、フィリピン人の抗日ゲリラの一人と結婚しました。彼は、多くのフィリピン人とアメリカ人捕虜が犠牲となった、いわゆるバタアーン死の行軍の生き残りでした。もし彼が日本人と同室になるような機会があれば、その日本人を殺したいと思ったことでしょう。

戦争が始まる前に、日本にいた宣教師のおかげで、三人の日本人が村作りに協力するために、私たちの村に来ました。その内の一人は、私の祖母と結婚しました。二人の間に子供はできませんでした。やがて彼は祖母を残して日本に帰りました。ずいぶん後になってからですが、1978年、私の父は日本で、この義理の父に再会するができました。私の祖母は、その後、再び結婚することはありませんでした。そして、この義理の祖父もまた、二度と結婚しませんでした。1974年、私の祖母は亡くなり、義理の祖父は1978年に、日本で亡くなりました。今、彼らはフィリピンの山の中に、二人一緒に葬られています。

私は、1982年から1983年にかけて、神学校の実習生として、ミンダナオ島の海岸地方に派遣されました。そこでは、いつも魚の頭が食事として出されました。それで私は、なぜ魚の頭ばっかりなのか、シッポはどこに行ったのかと尋ねました。彼らが海の方を指差すと、実際、そこには日本の大型トロール船の姿が見えました。その船では、フィリピンで「ハコネ」「ホッカイドウ」「ハカタ」といった銘柄で有名ないわしの缶詰にするために、獲った魚をすぐに、頭と胴体とに切り離し、頭は海に捨ててしまうのです。ですから、私たちがいわしの頭だけしか食べないのも、またしばしば、フィリピンのいわしに頭がないのも、決して不思議なことではないのです。

また私たちの国では、多くのいわゆる女性のエンターテナーの問題を抱えております。彼女たちはしばしば妊娠中絶をしたり、子供を生んだりして、フィリピンに帰ってきます。また、最近では、お年寄りの女性たちの問題、つまり従軍慰安婦の問題が、よく新聞などで報道されています。彼女たちは正に戦争の犠牲者であると言えます。彼女たちは人生の晩年に至るまで、沈黙を守り、そのことを恥として耐えてきたのです。

私がこのようなお話をしましたのは、昨夜、証言された洪曼姫さんの苦しみと怒りを共有したいと思ったからです。けれども、フィリピンの場合、私たちは、そうした問題について、日本だけを非難することはできないのです。私たちは、90年間にわたるアメリカ支配や、また365年間にわたるスペイン支配の下での苦しみについても告発しなければならないのです。歴史は日本がフィリピンを侵略した1942年に始まったわけではありません。長い間この三ヶ国のために私たちが苦しんできたことは事実でありますし、苦しみは、おそらくこれからも続くでしょう。しかし、私たちは、それぞれの国について、非難を続けるべきでしょうか。私たちは、今では、お互いに友人となっているのです。このような歴史的状況に置かれた友人として、私たちは何をなすべきなのでしょうか。誰が、私たちを怒りと憎しみから解放してくれるのでしょうか。解決の鍵はどこにあるのでしょうか。

昨日、仲村主教が協議会の開会を宣言した際に、直ちに私は、この協議会は忘れ得な

いものになるだろうと直感いたしました。私たちは、共に復活と変容の体験を求め、この協議会に参加しているのだと確信したからです。ですから、私たちは、パウロやヤコブやヨハネのように、「主よ、私たちがここにいることは良いことです」と申し上げたいと思います。

次に、私たちのフィリピン聖公会についても、幾つかの反省するべき事柄について、お話したいと思います。

最初に申し上げたいことは、フィリピン聖公会は、宣教活動について、身体、心、魂に関する三つの働きとして受けとめてきたということです。それらは、具体的には、病院、学校、そして教会の働きとして示されてきました。私たちは、長い間、そのような働きに満足してきました。それは聖公会の人々にとっては、とても効果的でもありました。何故なら、結果的に多くの聖公会員は、他のフィリピン人よりも英語も上手く話せるようになったからです。私たちはアメリカに渡ることをいつも夢見ていましたし、アメリカ聖公会にできないことはないと思っていたのです。しかし、結果的に、そのことは世界の他の聖公会の人々に、フィリピン聖公会と協働関係を結ぶことをためらわせることになったのです。その理由は、フィリピン聖公会は、いつでもアメリカ聖公会の傘の下にあったからです。

私は、三代目の聖公会員でありますが、私たちの世代に属する多くの人々が、今、教役者として、あるいは、信徒として教会の働きを担っています。私たちの多くが、自分達の教会と国家が歩んできた歴史の意味について、今、ようやく疑問を持ち始めています。

1977年、フィリピン聖公会は、それまでの非常に心地よい生活から呼び起こされることになります。突然、フィリピン政府は、フィリピン聖公会員をこの国の市民とは認めないということを通告してきたのです。その理由は、聖公会員の多くがルソン島北部の山岳地域に住む先住民族なのですが、彼らが政府の所有地を占拠しているということでした。実は、政府は、電力供給を増やすために、その地域に大きなダムを作ろうとしていたのです。それによって、人々は代々住み慣れてきた土地からの移住を強制され、生活や文化が破壊され、恐怖におとしいれられました。

人々は「主教さん、助けてください！」と叫びました。それは人々が単に助けを求めているのではなく、むしろ教会が何かをするべきであるという強い要求だったのです。人々はそのダム建設に抵抗しましたが、政府は軍隊を派遣し、それによって多くの血が流されました。しかし、主教の力では、この問題を解決することができませんでした。そこで主教は、人々の叫びが世界中の教会に届くように働き掛けました。世界中の教会の人々が、その声に耳を傾け、実際、多くの人々がフィリピンを訪問し、実情を調べることになったのです。最終的には、様々な救援活動も行なわれました。そして政府は、これらの人々は少数民族ではあるが、世界中に多くの友人を持っていることを知り、あわてて撤退したのでした。

私たちは、この出来事から大切な教訓を得ることができました。正義と平和を叫ぶ人が危険分子であるとは、聖書のどこにも書いていないのです。むしろ、キリスト者は、正義と平和のために働くよう召されているのであり、もし私たちが正義と平和のために働かなければ、神は私たち一人一人に厳しい審きを与えるのだということを、聖書は伝えているのです。私たちは歴史に働く神が、私たちを正義と平和の道に導いていることを知りました。しかし、この正義と平和の道を歩むことは、決してたやすいことではなく、むしろより困難な道を歩むこと

になるのです。

1990年、フィリピン聖公会は、世界の聖公会の中で、一つの管区として独立いたしました。多くの不安、恐れ、疑問がありましたが、それは私たちにとって、同時に、大きな喜びでもありましたし、チャレンジでもありました。最初の首座主教となったアベリオン主教は、「フィリピン聖公会が管区として独立したということの意味は、私たちの主イエス・キリストの身体全体を、身体の枝である私たちが、よりはっきりと見るために招かれたということなのです」と語りました。主に協力し、従うように招かれることによって、神の恵みと力が与えられ、私たちの歩みの中に、神の指し示す道標を見いだすことができるのです。私たちは、様々な恐れや不安を乗り越えて行かなければなりません。また、これまでの伝統、制度、ライフスタイルに依存したり、無批判に受容したりする姿勢は、今日、反省される必要があります。

私たちは、誰か他の人々の模範になることはできません。むしろ人々の喜びや不安の中に身を置きながら、キリストの器として歩むべきではないでしょうか。私たちの法憲法規を、コンクリート製の塀を建てるための律法と見做してはならないのです。むしろ、私たちが建てようとするものの骨組みではないかと思うのです。

首座主教の着座式の時に、私たちは、私たちの宣教の方向をもっと明確に見定める必要を感じました。私たちは、今後、人々のためではなく、人々と共に働く必要があることを確認しました。フィリピン聖公会も、戦争や様々な暴力によって犠牲を強いられ、多くの苦しみを経験してきましたが、そうした苦しみを通して、私たちの教会は、平和を作り出す者になる決断をしたのです。

昨日、塚田理先生が、非常に厳しく、しかしすべてのキリスト者が直面しなければならない大切な課題について、問題提起をされました。先生はまた、福音書は「出で行く」ということの大切さを語っているとおっしゃいました。それは全くその通りだと思いますが、私は次のことをつけ加えたいと思います。福音書は私たちに、「目を醒まし、立ち上がって、歩きなさい。そしてあなたの十字架を負って、私に従ってきなさい」ということを語っているのではないでしょうか。

1990年以来、過去5年間にわたって、私たちは、立ち上がる努力をしてきました。そして、平和を作りだす者の一人として数えられるよう願って歩んできました。様々な苦しみの経験を通して、私たちは、平和の問題について語る場として、教会を開放したいと願うようになりました。その結果、世界の友人たちとの関係も新たにされ、更に意義深いものになってきました。エキュメニカルな協働もそうですが、世界中の聖公会との交わりや協力関係は、基本的に、平和への懸け橋を築くためのものなのです。

私たちの国は、今、内戦によって引き裂かれておりますが、私たちはこの内戦が解決することを祈り、またその最善の解決策を見出だすために、絶えず話し合いを求めています。戦争による最終的な犠牲者は、いつも子供や女性たちですから、私たちは争いを止めさせなければならないのです。それは、容易なことではないし、失望したり、挫折したりもしますが、私たちはその働きを続けなければならないのです。教会は、これまで対話の雰囲気を作り出すことに貢献してきました。私自身、こうした取り組みの過程に関わることができましたことを感謝しています。また私は、この取り組みの中で、様々な役割を担い、協力をして下さった他の全てのキリスト者に対しても感謝

申し上げたいと思います。

以上のような事柄から、私たちは、次のような三つの教訓を与えられました。

1)私たちは、アメリカの植民地主義をもたらした同じ船に乗って、フィリピンに聖公会が伝えられたことに、ようやく気づかされました。このことは私たちにとりまして、とても辛いことでした。いろいろな意味において、聖公会は、フィリピンにおける長い抑圧の歴史を担ってきましたし、その意味で、罪を犯してきたと言えます。今、私たちの世代は、私たちの教会がどのように始まったのかについて知れば知るほど、辛い、悲しい気持ちになっています。けれども、真実を知るということは、私たちを誤った憶測から解放してくれます。どんなに辛くとも、自分自身を知ることは解放されることなのです。フィリピン聖公会が設立されて90年経った今、初めて、私たちは次の歩みについて確信が持てるようになりました。なぜなら、私たちは、自分達の国家と教会の歴史をより正確に見ることができるようになったからです。今、私たちは、私たちの歴史と今日の状況の間にある様々な関連性について理解するようになってきました。

2)私たちは、多くの協力者を得ることによって、私たちの教会は更に開かれますし、また役に立つようになるのですが、そのための可能性を探り続け、またその経験を積み重ねてきました。私たちは、一人では何もできないのです。網を引くためには他の人の力が必要ですし、他の人々にとっても私たちの力が必要なのです。協力者の間にどのような違いがあっても、私たちはお互いに神の似姿に創造された存在なのだということに、気づき始めました。

近年、日本の青年達が、しばしばフィリピンを訪れるようになりました。彼らが自分たちと異なる世界を知ることは、とても望ましいことだと思います。私たちは、日本の皆さんが持っているような設備は持っていませんが、だからこそ、私たちは、日本の青年達に、すべての

人々が神の似姿に創られていることに気づき、共通の人間性を味わうことのできる、よりよい場を提供することができるのではないかと考えています。

3)フィリピン聖公会で働く教役者や信徒の多くは、比較的、年令的にも若いので、彼らは、今、人生の最盛期にあると言えると思います。神への奉仕ということでも、最も充実している時期ではないかと思います。そのような時期だからこそ、私たちは、新しい洞察力を深め、勇気ある行動を広げ、そして神の働きや人間の必要に答えるため、新しい、革新的な方法を見出だすことができるように思います。そして最終的に、私たちは、聖公会の様々な束縛からも自由になるだろうと思うのです。私は主教制を尊重していますが、しかし、私たちは洗礼によって、全ての信徒が司祭とされていることの重要性を強調したいと考えています。未来は、主教たちや年配の方々が独占するものではありません。未来は、全ての人々によって担われるべきものです。皆さんの未来は、皆さんのものですが、未来に向かって歩むその道筋において、私たちは、お互いに深く結びつけられているのです。

神様が、日本聖公会を、また日本の国を、そして私たちの全てを祝福して下さいますように。どうもありがとうございました。

発　題

日本聖公会の歴史への責任と応答

仲村　實明　主教

こういうシャツを着ています。これは先月ロサンジェルスで聖公会のアジア系のアメリカ人の集まりがあって、呼ばれて沖縄問題をそこで訴えてきた時のシャツであります。アメリカでは太平洋戦争終結後50年、ベトナム戦争集結20周年ということだったんですが、日本は上は国会から各キリスト教会、4月10日だったですか、カソリック教会はじめ9団体が戦責告白をしておりますし、日本キリスト教団は23年前にもう戦責告白をしております。バプテスト連盟からもありとあらゆる教派がしているのに、何故聖公会だけはしないのかということだったんですね。今度の「福音と世界」誌にも2ケ月にわたって戦責告白がでております。その告白文を全部見てみましたけれども、どれも例えば我が国が間違ったことをした時に教会は世の光、地の塩の役割を果たさないで、おめおめとそれにのめり込んでしまった。だから悪かったという告白で満ちています。その陸海軍の大元帥であった天皇の罪については、国会もあるいはキリスト教会の諸団体も言及しておりません。

ですから23年前に教団が悪かった悪かったと言っておるけれども、何もならんじゃないかと批判されていますが、私もそう思います。一番上の人が涼しい顔をしていてですね、下の方々が悪かった悪かったというのは二重の差別ではないかと私は思うんです。ですからもし私たちがそれをするならば、天皇の罪責についても追求すべきだと思うんですね。

我が国が間違いをした時に、教会もというけれども、明治6年の2月24日に太政官第何十号だったですかキリシタン邪宗門の高札が撤去されたといわれておりますが、キリシタン禁制は周知の事実なんだ。これはこのままなんだ。けれども諸外国と条約を改正するためには、どうしても必要だから、一応この高札だけは撤去することにしておこうということであって、昨日塚田先生が仰っていたように、安寧秩序を乱さない限りにおいてという条件つきだったのです。ですから明治の初め頃には既に宣教師たちはきていたんですが、浦上4番くずれといわれている様に、クリスチャンたちがあちこちで捕えられて、津和野へ連れていかれて拷問されて死んでいったというできごとを見た時に、宣教師たちはみなびびっていただろうと思うんですね。キリシタン禁制の高札が撤去されたにもかかわらず、彼らはこれで自由になったんだと思ったんでなくて、最初は日本にきている自国の人たちの宣教のために、そして

徐々に日本人にということでございましたから、初めから日本のキリスト教会は地の塩、世の光の役割を果してこなかったんだということがいえるんです。戦前は先程、井田先生のお説教を聞きながら怒られたような気がしたんですが、やはりあの頃お上に反対するとすれば自殺行為であって、やっぱり私たちは戦前の人たちのやったことを非難はできないだろう。責めることはできません。しかし、あの戦争が終わって自由になった時に私たちは果してあの敗戦を生かしえたかということですね。未だに同じ緒を引っ張っているということが、現在私たちが悔い改めねばならない大きな問題だと思うんです。この前、これもアメリカでしゃべってきたこよなんですが、エノラゲイ(最初の原爆搭載機)が原爆を広島・長崎に落としたお陰で日本の方々も全滅しないですんだ。アメリカの兵隊たちの犠牲者も少なくて済んだ。だから原爆はよかったんだ、よかったんだという説に対して私がいったことは、それは戦場の理論なんだ。戦争をするにはやられる前にやる。機先を制する、真珠湾の奇襲攻撃もこれは兵法としては立派なんだ。沖縄戦で壕(がま)の中に潜んでいた時に、しっ!といって静かにできる子供たちは助けられたけれども、しっ!といっても聞かない赤ちゃんたちはいつに間にか静かにさせられた、ということはその場で首をしめられて殺されたわけです。上の子を救うために下の子は死んだ。大の虫を生かすために小の虫を犠牲にした。これは戦場の理論、戦場では許されるでしょう。自分が生きのこるためには、人の肉を食べた。これも戦場では仕方がない、許されるでしょう。しかし、平和になってからも俺は人の肉を食ったよ。私は上の子供を救うために下の子の首を絞めましたよというお母さんはいないだろうと思うんですね。それはもう涙流してごめんなさい、ごめんなさい。あなたを殺しちゃってごめんなさいね。もうお母さんは食事ものどにとおらない位い泣いて謝って子供の位牌に手を

合わせていると思うんですね。友達の肉を食って生き残った人たちも、友達のために冥福を祈ってごめんなさいといって謝るはずなんです。だとすれば原爆を落としたアメリカは広島にきて犠牲者に手をあわせなくはならない。あれは良かったなんてとてもじゃない人間のいう言葉ではないではないか。ということを言いたいんです。

同じ理論で歴史をどう考えるか。あの戦争によってインドは、ビルマはイギリスから独立した。あの仏領インドシナと言われていたところの人たちはフランスから独立した。インドネシアはオランダから、フィリピンはアメリカから独立した。日本のお陰だという人たちがいるんですよ。まあ歴史としてそういう歴史もまんざら嘘ではないだろうと思うですね。しかしあの戦争でもし日本が勝っていたら、東南アジアではひどいめにあっていただろうと思うけれども、とにかく日本は幸いなことに負けたからですが、それにしても百歩ゆずって、2,000万の人たちが死んでいるんですよ。この人たちに対して私たちは本当にあの戦争はよかったと、口が裂けても言えないと思うんですね。これはもしそいう人がいるならば、それは人間の皮をかぶった悪魔だと私はいいたいんであります。戦場の理論でなくて、平時の理論は99匹を残して1匹の羊を求めるキリストの理論が必要です。私たちはこうして歴史の中に生きているわけですが。じゃあ宮内庁は私は宗教法人化したらいいじゃないか。絶対じゃなくて天皇を相対化すればいいじゃないか。人さまの宗教ですから、これは宗教の自由ですから廃止しようなんていうことはいえない。ですから、静かにどうぞ宗教法人化して下さい。そういう風に変えていったらいいなと私は思います。私は例えば法律を変えてきた経験があります。たとえば私ね、ここにいる中山司祭が沖縄で働いています。彼はアメリカ人ですよ。中山という姓のアメリカ人なんですね。ラフカディオハーンが小泉八雲に変えなければ、日本の国籍は取れなかったという現在の法体系が問題だと思うんです。キムとかパクとかいう名前の日本人がいてもいいんじゃないか。何で金田とか金山とかに変えなくてはだめなのか。だったら名前を変えてまで私は日本人になりたくない。だったら指紋押捺せよ。この法律はとてもではないがおかしいと思うんですね。これは私たちが努力することによって、直していけると思うんです。私がどういう法律を直したかと申しますと、沖縄の若い女の人が20年前にアメリカ人と正式に結婚して、この兵隊がベトナム戦争で死んだ場合、残った子供はアメリカ人ですから日本の小学校にも行けないし、健康保健にも入れなかった。いよいよ貧しい生活を強いられて気の毒だった。正式に結婚していなければ私生児として日本の学校に行けたし、健康保健にもはいれたんですよ。法律がおかしいんですね。で、どういう法律だったか、その時は。日本人の男とドイツ人の女が結婚して、アメリカで子を生んだら、3つの国の国籍が与えられる。逆に日本の女とドイツの男が結婚、して日本で子供を生んだらどの国籍も得られない。無国籍なんです。戸籍法がおかしいじゃないか。これに対してみんなで、いろいろな団体と協力して闘って、日本の女の人から生まれた子供は18歳まではどちらの国籍も取れるという風に変えたために、それが成功した。助けることができた。同じ理由でもっと頑張って今いったように、パクという名前でも日本の国籍が取れるように。それは在日の人たちにとって救いとなるだろうと思いますし。宮内庁を宗教法人化するまで、頑張りましょう。私たちは少数派、差別されている側、弱い者、抑圧されている側に立つことによって、キリスト様の道を共に歩みたいと思います。終わります。

発　題

戦時教育の体験を通して気づいたこと

岩井　梅代

私は満州事変、日華事変を経て、太平洋戦争に向かう日本社会で学校教育を受けてきたものであり、また太平洋戦争の終わる間際の数年を母校平安女学院で教師をしてきたものでもあります。そういう立場から、日本の教育制度がどのように、あの天皇制国家の中に組み込まれて行ったかということを、幼い時から肌身に感じてきたことを含めて語りたいと思います。敗戦後7～8年のことですが、私は幸いにも米国聖公会のスカラシップを得て、ある大学の教育学科に身を置いた経験があります。その時に「社会と学校教育」というコースをとりましたが、そのテキストの中でわたしがハッとさせられた文章がありました。それは“制度化された教育は、それが一部をなしているとその文明社会に、常に錨を下ろして繋がれるものである”という一文でした。その時は、米国に来て、日本で自分の受けた教育に男女の格差が非常にあったことに気づいていました。カリキュラムから設備に至るまで低かったのです。ですから当時はそういう観点から日本の教育を考えていたわけででした。

しかし、その後帰国してGFSに関わるようになって、1967年の秋に、日本聖公会訪韓使節団－後藤主教が団長でしたが－にGFSから参加するようにと勧められて加えて頂きました。そしてソウル教区に迎えられたわけですが、最初の日にGFSの歓迎会をなさると韓国の会長さんからご案内を頂きました。会場となる公園で待っていたのです。

GFSのメンバーたちやリーダーたちが一所懸命に場所を設定したり、準備をされていました。すると突然男性の青年たちが数人私のまわりにさっと集まりました。そして彼は「あなたは日本の官民、教会、日本聖公会の人たちが、私たちの韓国、教会、クリスチャンをどのように扱い、何をしたか知っていますか?」と問われました。私は予期してもいなかったことだったので、ドキンとして何も言えませんでした。それでも正直に「あまりよく知らないのですが」といったのです。そしたら「それでいいのですか?」と問われ、答えられないでいるのを察して、韓国のGFS会長がとんできて下さいました。「さあ、始めましょう」と言われて、私は開放された思いではありましたが、その後のあちこちの見学、人々との触れ合いを通して、日本の官民がしたこと、そして教会の不十分であった対応を

知ることになったのでした。

その時気づかされたことは、どうして私は知らないできたのか、そして知らないでおられたかということでした。それはショックでもありました。ですから帰国後に書いた報告にも、触れられないでいたのですが、いつしか自分が受けてきた教育を見直すことに結びついていったのでした。

立教女学院奉職中に頂戴した「立教女学院100年史資料集」の中に戦争時代という章があって、昭和6年満州事変、同12年日華事変、同16年太平洋に突入し、同20年敗戦に至るまでのほぼ15年間は戦いの明け暮れであって、この間の教育“つまり戦時教育の特色を一口で言えば、皇国民の練成ということに尽きる。皇国民の練成とは日本人としての心構え、国を守る実践力をきたえ養うことである。”と書かれていました。私が受けた公的教育はまさにこの間であり、教育者としての関わり始めもこの間に入るのでした。幼稚園の3年間は、まだ米国からの女性宣教師もおられた平安女学院付属幼稚園で、英会話のレッスンも土曜日にあり、祈りで始まり、祈りで終わる楽しい毎日でした。尋常小学校の6年間は、娘でもあった私には、全能の主なる神と日本風土に広がる神社神道の八百万の神との間で、相剋に悩む時期となっていきました。教室に備付の図書は神々さまの物語ばかり。いざなみといざなぎ国生み物語、いなばの白兎と大国主命、天照大神と天の岩戸、八岐大蛇と素戔嗚尊など。天照大神は皇室の祖神であると授業時間で話されると、日曜学校にも来ている男の子たちが、「お前んとこは西洋の神さん拝んでいるんやろ、おいらは日本の神さんじゃ、わかってるか?」とすごんでからかうのでした。遠足の行き先にも神社参拝が多く、修学旅行も行先は伊勢神宮。

府立高等女学校の5年間は、ある宮家の息女が在籍されていた事もあって、授業内容は充実したものでしたが、教育勅語が面前にくり返しはだかることになりました。学校の儀式－入学式とか卒業式－それから国の祝祭日には、必ず天皇、皇后のご親影が飾られて、校長が教育勅語を奉読、教師と生徒は頭を垂れ前かがみの姿勢で拝聴するのでした式辞はその後です。それは式当日だけではなく、前日にも平行演習がありましたから、1年に12～13回、それから5年間繰り返されるのでした。登校、下校の際には校門のそばにある奉安庫－御親影の安置されている場所－に礼拝することが義務付けられていましたし、祝祭日の前後に必ず、桃山御陵、橿原神宮参拝が、しかも全校生徒、教職員が参加。他の男子校、女子校も励行していました。

父に礼拝する時の納得できない気持ちをよく話したものでした。十分な解答であったかどうかは別として、その時の助言は、「残念なことに、キリスト教も神という同じことばを使うので紛らわしいが、キリスト教では天地の造り主、全能の父なる神であり、神社の神々は人々の先祖であって同じ人間であること、日本にも他の外国にも先祖を尊ぶ習慣は昔からあるのだから、そのように割り切って、祖先に礼儀を尽くすことだと思えばいいのではないか」ということでした。しかし割り切れない思いを内に秘めての学校行事への参加であったと思っています。

天皇が臣民に直接に下賜するという形式をとった教育勅語が主張している、教育の目的とは何なのでしょうか。“我が臣民克く忠に克く孝に、億兆心を一にして世々その美を済せるは、此れ我が国体の精華にして、教育の淵源亦実に此に存す”、即ち我々国民が心を一つにして天皇に忠節、親に孝養を尽くしていることが国家の繁栄につながるのであって、それこそが教育の根本なのであるとすれ

ば、隣国、殊に韓国に神社を建立し、参拝を強要し、日本語で教育することの強行、キリスト教の迫害などにつながったのも不思議ではないと考えられるのです。個人としての人間の尊厳、他国との友好共存など入る余地もないものでした。

平安女学院の専攻部に戻った時には、信仰と精神の自由を取り戻し、ほっとしたものでした。GFSの課外活動を通して社会福祉の施設ともつながり、講演会やバザーを開催、また宣教師の先生方と世界の友情をテーマに劇を作って実演など、公立教育との違いを身をもって体験していたと言えるでしょう。しかし太平洋戦争が始まってから、教師として戻った平安では英語は敵国語として授業できなくなり、校舎の一部は学校工場に徴用され、外部の二ケ所の軍需工場も含めて、生徒と共に動員される毎日になりました。そしていつの間にか奉安庫が廊下のつきあたりに設置され、神棚まで校長室の入り口に置かれ、当局からの強要を感じさせる校長の苦渋に満ちた表情と説明がありました。皇国民の練成教育がまさに行われていたと思っています。“一旦緩急あれば、義勇公に奉じ、以て天壌無窮の皇運を扶翼すべし”とばかりに男子学生は学徒動員、特攻隊人間魚雷に挺身することを本望とさせられたのでしょうか。

戦後50年を迎えての今、改めてかつての学校教育が皇国の存続体制に組み込まれていったことを思い起こします。象徴天皇制とはどういうことか、私たちとの関係は？日本の風土に依然として沢山根を下ろしている神社、NHKは毎日のようにそのお祭り風景を全国に流しています。

私たちキリスト者がこの風土の中で何をどう克服して、宣教に取組むべきなのか教えて頂きたい気持ちで一杯です。

発題

カイシャの論理が福音を空洞化している

清　公一

本日、この重要な会で私が発題いたしますことが適当かあやしいところですが、高校教師として、一信徒としてそれなりに経験してきましたので、ありきたりの立場からとしてお赦しをいただきたいと思います。

勤務しておりますのは今年創立80周年を迎える女子高校で全国的に見てもごく普通の学校だと思います。尾崎咢堂が講演した演壇なるものが残っておりまして、昔は自由な校風があったようです。60年代はじめに大争議がありまして、組合は分裂しイデオロギー対立が職場をおおい、とげとげしい雰囲気と共に保守化してしまいました。愛知県では公立志向が強く、私学の地位は低いレベルにあります。こんな中で社会科を担当してきました。

さて、現今「歴史に学ぶ」ことの重要性が叫ばれており、それに伴って高校での歴史教育はどうなっているのかと関心が高まっていますので、日本史学習の一部について申しあげます。現在高二まで進んでいます新カリキュラムでは日本史はAとBという二つの課目になっています。日本史Aは標準2単位で近代・現代を重視するとのうたい文句になっています。しかし受験にはとても対応できませんので普通高校では大抵標準単位4の日本史Bを履修させます。これは原始・古代から現代まで通史的に扱っております。この4単位と申しますと、文部省では年間35週として140時間（50分授業）で履修することとしています。しかし現実には学校差はありますが110時間ほどしかとれません。それに土曜休みが授業時数を一層圧迫しています。ですから例えで申しますと、日中戦争、アジア・太平洋戦争などの事実をきちんとおさえようとしましても、37年盧溝橋事件あたりから45年敗戦まで機械的に割り振りますと3時間ほどしか授業にあてられません。もちろん教師が比重の置き方を工夫して、古代・中世あたりはあっさりと済ませて近現代に時間を重点配分することはできます。しかし今後生き残りを計らなければならない中レベル以下の私学ではどれだけの生徒を「有名大学」に合格させられるかが最大の戦略となっています。ですからまんべんなく通史学習させなければ入試に対応できないという枠がはまってきます。また受験戦争の緩和をも担って定着してきた推薦入試制度ですが、結果的には競走を激化させています。この制度は一般に調査書の評価平均を判断基準といたしますから、高校側へ公平な成績評価を出すよう均一化の圧力がかかります。そのためかつては各教師が良く言えば個性的に進めていた授業は急速になくなってきまして、共通進度、統一テスト方式が一般的になりまして教師の創造性が発揮できる余地は大変狭くなってきました。これは教師管理の点でも実に有効に働いています。そうしますと先ほどの天皇制軍国主義体制期の学習はどうしても通り一遍となることを強いられます。

さて教科書のことですが、高校では各校独自に採用が決定されます。一般に独自教材のみで我が道を行くことが難しく、自然「教科書で授業」という現状です。教科書は文部省検定済

みの枠がありますが、やはり出版社によってそれぞれ特徴があります。少し指摘してみます。圧倒的シェアを占めるY社ともう一つS社をあげてみます。たとえば「ポツダム宣言」あたりではY社は「日本政府が対応に苦しいんでいる間に、アメリカは8月6日広島に、ついで9日長崎に原子爆弾を投下した。また8月8日、ソ連はまだ有効期限内にあった日ソ中立条約を無視して宣戦布告し、満州・朝鮮に侵入した。こうした情勢のもとで、政府と軍部首脳は御前会議で、昭和天皇の裁断によりポツダム宣言の受諾を決定し、政府は14日これを連合国側に通告した。」S社は「これに対し、政府や軍部は宣言の検討はすぐには行わなかった。この間、原子爆弾を開発したアメリカは、軍事的被害をくいとめ、戦後世界での優位を得るためにソ連の対日参戦の前に日本を降伏させようとして、8月6日に広島に原爆を投下し、その結果約12万人の命が失われることとなった。―中略―鈴木貫太郎内閣はようやくポツダム宣言の受諾を本格的に検討したが、彼らにとって重要だったのは国体護持すなわち天皇制がまもられるか否かであった。」歴史とは現代の課題を過去に投げかけることだとすればY社とS社の間には相当な歴史観の違いがあると考えざるを得ません。他にはS社は「大東亜共栄圏の実像」というテーマを設けて、朝鮮での皇民化政策、神社参拝や学校でも日本語使用の強制、創氏改名、総動員体制、強制連行、徴兵制・挺身隊、従軍慰安婦を記述。また中国での三光作戦、七三一部隊など全体像をまとめてその虚像であることを述べています。

長い引用になりましたが、このように教科書の内容に差異がありますが、授業では教師の裁量でそれなりの展開をいたしますので、教科書の違いが歴史教育の成果に決定的影響を及ぼすとは思われません。しかし、全般的に言えば膨大な知識の詰め込み、45人前後の生徒への一斉講義式授業ですので受け身に立たされる生徒に拒否反応がいろいろ出てきます。その他深刻な問題をかかえ現制度としての学校は末期的症状をきたしていると考えられます。「戦後責任」が問われる中でよく耳にすることですが「そんな事実は学校で習ったことがない」というものです。これは教師側が真剣に受けとめなければならないことですし、また現今の教育への諸条件の中では必然的な結果でもあると思います。しかし、これはあるローカルTV局が20代の青年に行った調査結果なのですが、日本の過去のアジアでの戦争に対して50%以上が「侵略戦争」と認識しているのです。これを少ないと見るかどうかですが、私などは「イイ線」を行っているのではないかと受け取りました。これだけでなく最近若い方々がいろんな所で良い働きをしているのが目につきます。現にこの協議会を縁の下で支えてくださるスチュワードの若者たちがそれを現していると思います。負け惜しみを込めながらですが、教師もまあやっているんじゃないかと思っています。学校教育での諸矛盾が深まっていますが、これら生徒・学生がまるごとひしがれ、つぶされてゆくわけではなく、生き生きした動きも沢山あります。

ところがこのような若者達、特に男子は学校を卒業して『就社』して時が経ちますとその人間観・歴史観はどんどん変貌してゆくと感じられます。「カイシャ」の洗脳パワーは恐ろしいと思います。とにかく「カイシャ」のみそぎ研修とかセミナーとかすさまじいもののようです。佐高信の著書に「伊勢研修館」で行われる「修養団」の三泊四日の講習会の様子が出てきます。これには日本のトップ企業を中心に約三千社が社員を参加させているようです。その内容は五十鈴川に全身つかる水行・童心行・体操・美化作業・静座・瞑想・呼吸法・講話・相互研修・反省行(灯火のつどい)などが巧みに組み合わされているそうです。この水行というみそぎ研修は「こざかしい理屈を捨て、バカになって物事に挑むきっかけをつかませる」(研修センター所長)のだそうです。日立に勤

務する35歳の男性の感想文はこうです。「私は水行を通じて二つのことを感じることができました。一つは自分はまだ弱い人間であること。イェーというかけ声とともに水に入り、目を伏せて和歌<五十鈴川　清き流れの末汲みて　こころを洗え　あきつしま人　明治天皇>を歌うとき、6月の水にもかかわらず私の身体はガタガタふるえていました。しかし目を開くと他の方々が水に入っていられる後ろ姿が見え、その途端にふるえがピタリと止まります。また目を伏せ、自分が一人になるとガタガタふるえてしまう。その時私は自分はひとりでは弱いのだなと感じました。もっと強くならねばと痛感しました。私の感じたことの第二点は水行する人々の後ろ姿を見ながら、これらの人々の存在が私にとって大きな支えである感じました。ひとりで進むのではなく、まわりの人と一緒になって生きていくということがより一層大切なのだということを切に感じました。」このような特別な短期研修でなくカイシャは日常的なレベルで滅私奉公を奇異に感じないカイシャ人間を養成してきているのです。このようなカイシャ生活の中で特に多くの男性は、少なくとも学校生活期にか細くも身につけてきた歴史認識・人権感覚にフタをしてしまうか、または、全く無感覚になってゆくのは当然ではないでしょうか。「会社は憲法番外地」「民主主義は工場の門前で立ちすくむ」という言葉があります。カイシャというところはあたかも治外法権が適用されている世界のようです。日本社会固有のカイシャの論理を身につけた人々が大量に生産されている世界のようです。

さて教会です。教会にはこういう論理を身につけた信徒が大きな部分を占めています。彼らは福音ではなくカイシャの論理で信仰を語ります。福音を述べようとする聖職をカイシャの論理でたしなめ、平然としています。聖職はそれに迎合しているではありませんか。逆のはずです。福音はハッキリとそれをNoとしているのではないでしょうか。「聖公会の教勢が伸びないのはカイシャのように能率的にやらないからだ」と信徒が説教しています。聖職は「信徒こそは宣教の主体である」とさも民主的にふるまいながら反論しないのです。憲法には会社とか企業という語はありません。だからといってカイシャに憲法の精神が不必要なわけがありません。聖書にも会社という語は見つかりません。だからといって教会がカイシャの論理に対応できないのでしょうか。

日本聖公会は戦争中、またそれに至る時代に罪を犯しました。そして戦後も、戦争責任に苦しむ信徒を福音によって真剣に受けとめてこなかったという罪を犯しました。そのため、いまも悪夢に苦しめられ、告白できなく、しかも赦しを求めている信徒がたくさんいるハズです。こういう教会ですから近隣のアジア・太平洋の兄弟姉妹にも思いが至りませんでした。日本が朝鮮戦争・ヴェトナム戦争を踏み台にして経済的欲望を際限なくしている時、カイシャの論理と福音とに引き裂かれている信徒をどう受けとめてきたのでしょうか。教会はカイシャの挑戦をどう受けとめ、対決してきたでしょうか。むしろ日本聖公会として、過去に天皇制に迎合してきたように、カイシャ資本主義に迎合してきたのではないですか。カイシャの論理に苦しむ労働者やサラリーマンを放置してきたのです。そして彼らをカイシャ側に追いやってしまったのではないですか。あの産業伝道はどう生かされていますか。

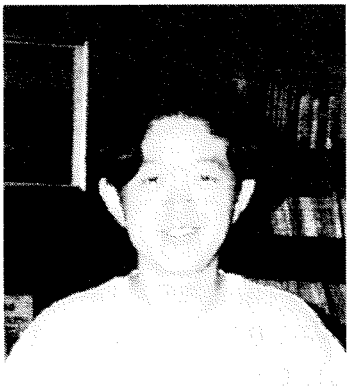
冷戦が終わったと言います。そして資本主義・市場経済の勝利がうたわれ有頂天になっていますが、私たちの社会はさらなる欲望本位主義路線を突っ走っています。このような時こそ小さいながら聖公会は資本主義経済の現況をきちんと批判し、神の正義を宣言しなければならないのではありませんか。日本的高度カイシャ資本主義からの「解放の神学」を打ち立てる方向に希望を見出すことができるではないでしょうか。以上、天に唾する思いで申しあげました。

発　題

原子炉と聖公会

—戦争・原子炉奉献・今日—

相原　太郎



日本聖公会は、日本の国は今までどこに立っていたのでしょうか。今どこにいるのでしょうか。そして、神はどこにどのように働いているのでしょうか。

・立教大学原子力研究所が設置されている武山（現：横須賀市長坂）

武山の人々は、戦前までは自給自足の生活を行っていました。しかし、戦争が始まると、海岸近くに住んでいた人たちは、強制的に他の土地へ移動させられ、食糧増産にかり出されました。そして、空いた土地を強制連行されてきた朝鮮人労働者が埋め立て、そこに日本の海兵団が設置されました。そこから、強制連行された朝鮮人や学徒出陣の学生隊を含めて、多くの人々が戦地へと出発しました。

敗戦後、この敷地は米軍に接収されて、朝鮮戦線のために利用されることになりました。横須賀市では、朝鮮特需の影響によって経済的に繁栄することになりました。特需景気のあと、大量の労働者解雇が始まり、横須賀市では景気維持のため、産業誘致が必要になりました。

そんなころ、日本政府から日本原子力研究所（現在、東海村）の武山への設置の話が飛び込んできました。原子力産業地帯建設による経済効果ゆえに、横須賀市は市民を巻き込んで誘致活動を行いました。しかし、建設予定地近辺の漁業組合などには反対の声も根強かったことを忘れてはなりません。

結局、武山には研究所は設置されませんでした。実はこの原子力研究所は最初から東海村に建設される予定だったのですが、政治的配慮により武山への建設を示唆したというものにすぎなかったのです。

そして、武山の米軍キャンプ地はもともと住んでいた武山の人たちや、埋め立てをさせられた朝鮮人強制労働者に渡されず、国の土地となりました。大部分は自衛隊の駐屯地となり、一部が産業地区と公共利用地区となりました。

・聖公会による原子炉寄贈・奉献

ヒロシマ・ナガサキから10年後、米国聖公会ワシントン教区会で「世界平和に協力するため原子炉を作る能力の乏しい恵まれない国に、原子炉を寄付する募金を募集する」という提案なされました。それを受けて9月の米国聖公会総会において「米国聖公会が募金50万ドルを募集し、極東地域の大学として25万ドル支出できる施設に対して原子炉を寄贈する」という提言がなされました。この総会に日本代表として出席していた八代斌助主教は、立教への誘致を強く訴えました。議案を持ち帰った八代主教、立教大学の松下正寿総長、また米国聖公会の司祭であるウィリアム・G・ポラード博士らが原子炉の立教への誘致に動き出しました。

さて、原子炉の設置場所をどこにするかについて、立教大学理学部教員の武谷三男氏は次のように話しています。「発電原子炉の場合よりも危険性は少ないが、やはり、人口密度の高いところそして、水源地は絶対に避けるべきだろう。」

そして目が付けられたのが武山でした。横須賀市の態度としては、原子力の平和利用は国策的なものであり、特需後の景気回復の必要性もあり、新たな産業が誘致されてくるならばあえて反対しないというものでした。立教大学は関連産業の建設計画を掲げて横須賀市に建設を申し入れることになりました。

しかし、漁業関係者を中心に反対の声もあり、何度も地元での説明会が開かれました。その説明会において、ある漁師は次のように発言しました。「研究所ができて文化が進み、工場ができて横須賀が発展するということにわしらは反対はできん。若い者やこれからの時代の者は研究所や工場でお世話になるようになるかも知れない。しかしわしらは魚を取ることしか知らないんだ。」

結局、住民側も受け入れを承認し、横須賀市議会において立教大学原子炉の武山での建設が満場一致で承認されました。

それを受けて、マイアミで開かれた米国聖公会総会において、1959年の日本聖公会宣教100年祭を記念した原子炉寄贈募金決議案が可決されました。

その後、計画は着々と進み、「賛美歌のコーラスが流れるおごそかな雰囲気のうちに松下総長がクワ入れを行い、原子力平和利用の第3の火が来秋には点火されることが神の前で誓われた」地割式や、原子炉の建物のまわりをプロセッションが行進して始まった開所式が行われたりしました。開所式の中では、米国総裁主教リヒテンバーガーの奉献の祈りが八代斌助主教によって捧げられました。「原子炉奉献のため。全能の神よ、主はその栄光をもろもろの天のうちに現わし、アブラハムには燃ゆ

る柴のうちに、エリヤには、いと細き静かなる声のうちに現したまえり。また、このわれらの時代には大いなる原子力のうちに、自らを示したまう。…父と子と聖霊の御名によりて、我らこの国の人々の福祉と神の栄光のために、ここの原子炉を主に捧げ奉る。」

ちなみに1985年には、立教大学原子力研究所アネックス落成式が行われ、建物祝別の祈りが捧げられ、聖歌300番を歌いながら建物内を祝福してまわりました。

さて、この研究用の原子炉は現在も運転中です。しかし大学側では最近の資料を見ると、経済的な理由のみにより売却する方針を打ち出しています。いちおう廃炉についても検討されていますが、使用済核燃料の処理などについては政府の施設への引き渡しを前提としています。現在の政府の政策では使用済核燃料は再処理され、そこで排出される高レベル廃棄物はひとまず六ヶ所村に保管されることになります。そしてその後の最終的な処分先はまだ決まっていません。

・原子炉稼働＝罪

さて、原子力開発がなぜ本質的に罪なのかについて触れておく必要があるでしょう。原子炉を稼働させるためには、ウラン採掘から放射性廃棄物処理にいたるまで、事故がなくても、日常的に犠牲者が必要となります。採掘現場やそれぞれの核の工場においての被曝労働者の存在があり、日常的な放射能のたれ流しによる生活者の被曝があります。ウラン鉱山開発、アジアへの原発輸出、核燃サイクル施設開発という国策による生活の場の消滅や、廃棄物の押し付け、それによる経済的・肉体的また精神的荒廃があります。核廃棄物は安全な処分方法が原理的になく、何百万年もの管理が必要であり、未来の人に対して強制的に危険な労働を強いることになります。また、核武装の危険もあり、また管理社会にもなります。そして、事故が起こればその地方が消滅します。原子炉を止めなければ、苦しむ人はいつまでも生産され続けることになります。

このような弱者切り捨ての原子力開発、生活が強制的にねじ曲げられる構造的な暴力は福音に反する罪的な情況と言えるのではないでしょうか。

・当時の状況における反省

さて、このように原子炉の稼働そのものが罪であるとすれば、日本聖公会は、当時、原子炉の設置に協力したことが間違いであったことを反省しなければならなくなるわけであります。というのも、このような原子力の設置という罪的なことを神がよしとするはずがなかったのではないか、と思うからです。ということは、私たちは、当時、神に向かって歩むことができてはいなかったのではないでしょうか。たしかに、原子力が将来のエネルギーとして有効だと思われていた時代ではありますし、その時に、正しいことに気がついていた人は少なかったでしょう。しかし、原子炉設置のとき神はどこにいたのでしょうか。このような人々を苦しめる原子炉の設置のとき、神は祝福していたはずはなく、むしろ、苦しんでいたのではないかと思います。その時、私たちはそこに耳を傾けることができなかったのではないでしょうか。

・日本聖公会の立ってきた場所
（武山、原子力開発地域からの視点）

戦時中・原子炉奉献のとき・そして現在、武山からあるいは原子力開発によって苦しむ現場から日本聖公会を見ると、私たちがどこに立ってきたのか、そして今どこに立っているかが象徴的に見えてくるような気がします。

かつて、日本聖公会は国策である侵略戦争を賛美しました。そして朝鮮特需期には国策である原子力開発に加担しました。そしてまた、現

在の日本聖公会も、弱い人たちを切り捨てる国策としての原子力開発体制を容認・あるいは無視しており、このような罪的な情況から歩み出ることに積極的に関わろうと努力しているようには思えません。そういう日本聖公会が、「戦争中の国策への讃美のようなことは昔のことで今はもうないのだ」、あるいは「戦争が間違っていたことは今なら言えるけどあの時は仕方なかったのだ」、と簡単に言い切ってすませられるでしょうか。原子力開発に苦しむ住民たちのように構造的に虐げられている人たちにとって、日本聖公会は、侵略戦争讃美の姿勢がそんなに変わっていないと見えるのではないかと思います。神の名によって堂々と戦争に協力し、それを問題として引き受けられずに来た戦後の日本聖公会の無責任さや無関心さ、虐げられた人たちの苦しみを共有できないという体質と同じ根が立教の原子炉の問題には存在するのではないでしょうか。

1988年のランベス会議の報告には、神の宣教の現場は、汚染された世界でもあり、キリスト者は環境とその中の人々の主である神に出会い、仕えなくてはならず、そして汚染や廃棄物に対しての闘いは必要であり、それは神への信仰の直接的表現であると記されています。ところが、日本聖公会では、虐げられている人を積極的にサポートしようとすると(原発のことを考えれば分かるように、それはとりもなおさず政府への批判や、正義のための行動に参加することになるわけですが、そして、それはランベス会議においては信仰の直接的表現とされているものでありますが)、「社会派」という不思議なレッテルが貼られて、福音からはずれた人にされてしまうわけです。そのような日本聖公会が、虐げられ、無視された人々の苦しみを担い、キリストの教えを保持し、シャーロームの場を創造する神の働きに参与し奉仕する者と言えるのでしょうか。歴史の犠牲者となって重荷を負わされている人たちには向かおうとせず、まず自分たちの心の平安を追い求め続ける教会に、主の平和、神の平安が訪れることがあっていいはずがありません。

神は犠牲者の苦しみによって支えられた平穏な場を崩し、今までの構造から脱出させることによって、新たな共生の場を創造しているのではないかと思います。そして私たちには、現在の原子力開発のような偽の安定の場から旅立ち、虐げられた人々と共に神の創造に参与し、真の平安、シャーロームへと向かう者となることが求められているのではないでしょうか。

したがって、私たちは虐げられた人たちと出会い共に生きることを始めたときにそこにおいて神と出会うのではないかと思います。貧しく虐げられた民衆の叫びの中に、神の創造の働きを見ることができると思います。人間を踏み台にして神を見ようとしても、そのようなところで神を見ることはできない、むしろ神はそこで踏み台にされた人間ではないでしょうか。

私たちはこのように、原子力開発の社会構造を放任してきました。しかもそれに加担しました。日本聖公会は原子力の問題に対してなおいっそう積極的に取り組む責任を感じるべきだと思います。そして、私たちが反原子力開発に取り組むとき、今も開発に加担し続けている立教炉という「恥」を抜きにはできないと思います。原子炉によって苦しんだ人たち、今、苦しんでいる人たち、そしてこれから苦しまなければならない人たちの中に立場を移し、視座を変えなければならないと思います。そして、私たちは、神に奉仕するものとして、原子力によって苦しめられている人たちと共に、原子力の問題に取り組んでいくべきでありましょう。

私たちは、現在もあの戦争讃美の日本聖公会と同じ体質をかかえていることを反省し、虐げられている人たちと共に歩む教会へと新たにされなければならないのではないでしょうか。

発　題

21世紀への展望　―思いを巡らし働き始めるために―

「障害者」との共　生

司祭　杣取　賢一

障害者のグループの発題をします前に、発題をしますわたしたち、三名の紹介を代表で指せていただきます。先程、司会者の方がわたしたちの紹介をして下さる時に、佐々木先生を中心にして、とおっしゃいましたけれども、発題の中心はここにおられる日高実則さんです。東京教区の聖職候補生で日本聖公会神学院在学中です。次に佐々木道人司祭、聖路加国際病院のチャプレンです。最後に、わたし、東京教区池袋聖公会の牧師の杣取賢一です。わたしたちの共通項は、東京教区の中に「障害者」プロジェクトというものがありまして、三人ともそのプロジェクトのメンバーで一緒に活動しております。

最初に一言だけ話させていただきますと、この協議会参加のため、日高さんとわたしは高田馬場から一緒に清里まで来ました。日高さんとは部屋も同じですので、これで丸二日間、ほとんど一緒に過ごしました。その中で三点気付いたことがあります。

一つは、この建物の構造の問題です。わたしたちの部屋は新館の一番奥の101号室です。わたしたちも皆さんと一緒で、自室と、この会場であるホール、分団が持たれます部屋、食堂を一日中行ったり来たりするのですが、非常に階段が多いし、距離もあります。そして、建物の中の通路の枝分かれがすごくありますので、さあ、次はどこそこの部屋に移って下さい、といわれても日高さん一人では、チョット無理かなという気がします。特に、皆さんご承知のように、礼拝の時のピアノ伴奏の大体すべてを日高さんが弾いておられますので、打ち合わせのため、ホールまで何回も来なければなりません。礼拝の時は時間に必ず来ておられなければなりません。この二日、日高さんあまり寝ておられない。送れては行けない、という緊張があると思います。ですから、この建物全体が目の不自由な人にとって、歩く、移動するということにおいて、「やさしくない」建物だなあ、という印象をわたしは持って

います。

二点目に、この協議会のスケジュールの時間配分のことについてです。相当に時間が詰まってスケジュールが組まれています。このことは、皆さんも感じられているかと思います。わたしたちも、場所を移動する時、例えばトイレに行くとか、時には忘れ物を部屋に鳥に帰るとか、ただ移動するだけであっても、この時間の詰まり方と、人の多さで、次の集まり、次の集まりに、次の集まりに少しずつ遅れてしまいます。決して怠けているわけではなく、急いで動いて遅れてしまう。多少時間に遅れてもいいですよ、という人もおられますが、遅れる方はつらいです。この協議会の最初のプログラムのオリエンテーションの時、例えば12時から食事、午後一時からホールで講演があり、分団が午後三時とプログラムに書いてあれば、午後一時にはこのホールで講演が始まっている、三時には分団が始まっているという意味ですよ、とプログラムの時間設定についての説明がありました。わたしたはその時は、時間を守るように言われているのだと、単純に思いました。しかし、ひとつのプログラムのボリュームの大きさに対して（食事中でも）、日高さんと一緒に動きながら、移動・休息時間がほとんど取られていまい事に気付きました。当然、頭の中を整理する余裕などはありません。

それから、三点目、とても言葉にするにが難しいのですが、一番目と二番目に申し上げたことを合わせて考えていただけると有り難いのですが、この協議会が非常に「疲れる」と言うことです。もちろん皆さんも疲れておられる思いますが、近くにいまして、日高さんすごく疲れておられるのが分かります。わたしはこの宣教協議会がぱっぱと動ける人よりも、ぱっぱと動けない人が「より疲れる」構造を持っている、あるいは、そういう集まりになりかけているんじゃないか、と思っています。

前置きが長くなりましが、三点をわたしが感じましたので、申し上げさせていただきました。日高さんのほうのお話しに移りたいと思います。（拍手）

日高　実則

ご紹介をいただきました、東京教区の日高でございます。

実はわたしはピアノを弾くことは特に緊張しないのですが、こういうことを話すのはなかなかむずかしくて、非常に緊張してしまいます。

長い間教会生活をしていく中でいろいろ体験することがありまして、その中で、教会の中に「障害」者、あるは弱い人、弱くされている人、少数者の立場がなかなか認められることがむずかしいし、受け入れられることがむずかしいな、ということをわた

くしの体験の中から感じてきました。実際、わたくしがそういう意味でしばらく教会を離れていたということがあります。ただ、現在は現場に直面していることが大切と考えて、教会と神学校と両方で生活しているわけです。

そして、7月25日からの約2週間、神学院の実習で、横浜教区の静岡聖ペテロ教会で実習をさせていただきました。橋本克也司祭がいらっしゃるところですが、橋本先生は中途失明で、何年か前に視力を失った方です。そのような状況の中、教会生活をされてきたことをわたくしも学ばせていただこうと思い、そこを実習地とさせていただいたわけです。そこで体験したことをお話ししたいと思います。

橋本先生はご自身が視力がないのですが、本当に自分ができること、できないこと、自分自身のありのままを受け入れる、というふうに考えて生活をしておられるのです。「障害」者が自分の「障害」をそのまま受け入れていくということは非常にむずかしいことで、なかなか苦しいことがあります。けれども、その教会の中での2週間を通して感じましたことは、その教会員に「障害」を「障害」を負った方、車椅子の方、あるいは精神的な「障害」をもっておられる方、知的な「障害」を負った子供が幾人も来られています。教会に関わるすべての方々も本当に受け入れ、そういう人たちが来ていることを非常に喜いとして受けとめておられます。それは、やはり橋本先生がそのありのままで生活している姿を通して、次第に信徒の方々もそういうふうになっていくのです。多分そこまでいくのに、時間はかかったという気がいたします。

その中の一人の方のお話しをしますが、精神的な「障害」を負っていらっしゃる方です。20代ぐらいの方です。

静岡聖ペテロ教会でも礼拝の時には、はじめに鐘を打ちます。教会によっては鐘を打つことひとつとっても、非常に厳格に決められていますが、聖ペテロ教会では、その一人の、精神的「障害」を負っていらっしゃる方に、鐘を打つことをまかせています。そして、そこでは33回打ちますが、打つ時にはわたしも一緒にいたのですが、打ち終わった後、「今日は落ち着いて打てた?どうだった?」と、彼がよく聞いてきました。「今日は聖書を読んできたから心が落ち着いてよく打てたような気がするけれどどうですか」とか、彼が聞きます。わたしは、「本当に落ちついていい音だったよ」とか答えます。彼は喜んで鐘を打っています。そして、それが喜んで教会に行くことにつながっています。

そして、もう一つの例をお話しします。それは知的「障害」の子どものことです。日曜学校も来ますが、晩祷にも必ず来るんですね、毎日。その子供が晩祷の時に日課を読むのですけれど、日課の箇所からずっとはずれてもどこまでも読んでいっちゃう。ほんと困っちゃうくらい終わらないのですが。でも皆さん黙って待っている。そして読み終わったところが日課の終わりになります。そういうふうに皆が自然体で受け入れている。それで一緒に、共に

礼拝していく。あるいは例えば主の祈りをしている時でも、自分の席でなく、いろいろなところで唱えていたりするわけです。それでもわりとゆるされています。どうしなければならないということがない。はじめから決めてしまうということは、いかが、と僕は思っています。わたしたちは、それぞれの賜物を与えられているわけですけれども、弱い、あるいは「障害」者の一人一人の、いろいろ物理的な問題はあるとしても、人間一人の存在の価値をお互いに認めあえる、真の教会に変わっていかなければいけない、と思っています。そして、共に生きるということは、少数者が教会の中で保護されるということではなくて、お互いに与えあう関係であり、近い存在でいられるというイメージを持っています。

それからもうひとつは、先程も杣取さんが建物の問題を言っていたのですけれども、本当にお年寄りにも「障害」者にも、あるいは健康な方にも「やさしい」教会、こう言いますと誤解を受けてしまいますが、誤解をおそれずに言わせていただければ、「やさしい」教会であること、もちろん精神的な部分もそうですけれども、設備とか、施設なども含めて、あらゆる人たちが主体的に生活できる場所であることが大切です。

それと、もうひとつは教会においても、さっき杣取さんが時間ということをおっしゃっていましたけれども、教会の中でも非常に忙しいです。そして次から次といろんな用事ができたりします。礼拝の中でも一緒に唱えたり、式文を読んだりする時に非常に早かったりすることがあります。いろんな会合も長かったりしますが、本当に「やさしい」時間、ゆとりがあって「やさしい」時間、そういう人たちが疲れてしまわないような時間の取り方というのも大事であろうと思います。そうすることによって健康な方も、それから「障害」者もお年寄りも、若い方々も、共に教会で生活をしていけるのではないでしょうか。そのようなイメージとして「共生」を捕らえています。

皆さんが、是非これから「障害」者の、あるいは弱い方のお友達となって、近い存在でいていただくことを願っています。そしてここにいらっしゃる皆さんが、そのことを他の方に是非伝えてくださるようにお願いします。

まとまりませんが、このようなイメージを持っていただければ幸いだと思います。

どうもありがとうございました。

（拍手）

環境問題

山田　久美子

今、偶然ですが、日高さんが来てくださった静岡聖ペテロ教会の会員の山田と申します。それで、今日はこのレジュメというか、平岡さんが書いてくださったものを既に読んでくださっているとは思います。わたしはこういうふう

ないろんな事実があるということよりも、何よりも、環境問題とは一体なんなのかということをちょっとお話しさせていただきます。皆様は、環境問題といいますと、自然を守るとか、珍しい動物を守るとか、そういうことであるというふうにお考えになっていらっしゃる方が、まさかいらっしゃらないと思うんですが、そういうふうに誤解される方は非常に多いと思います。今、地球的な重要な問題である環境問題というのはすべて、すべてと言っても過言ではないと思いますが、産業革命以降に起こってきた近代的な工業化による問題です。それ以前にはですね、いわゆる環境問題といわれる程の問題は、農業による自然破壊以外にはありませんでした。ただ、決して農業が悪いとは言っておりません。そしてまたわたしは産業化がいけないとも言っているのではありません。もうすでに産業化されていますし、産業化は今後も更に進むわけです。ただ、その過程の中で今現在大きな問題となっているのは、人口が多くすぎるということと、一部の人に富と資源が集まっているということです。そしてその一部の人に富と資源が集まっている、その一部の人はわたしたちです。

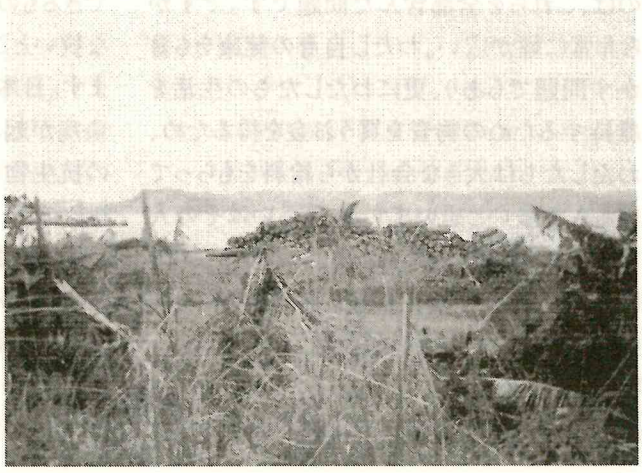
サムエル記下の12章1節のところに、ナタンという人がダビデ王のところを訪れて、そして悪い金持ちの話しをするところをご存じだと思います。貧しい人が愛していたたった一頭の羊を奪い取って自分の勝手に使ってしまう。

わたしたち日本人は今現在その金持ちです。そしてナタンはダビデ王に対して、この悪いのはあなただと言っている。つまりわたしたちは、ダビデ王はその前になんですか、ウリヤの奥さんを取ってしまったのですね、ウリヤを殺して。そしてそういうことをしているわけです。そういうことをしているので、わたしは別にナタンの立場で皆さんを告発しているのではなく、わたし自身がダビデ王であり、わたし自身がとんでもない悪い金持ちであるということをよくわかって、このお話しをさせていただいているつもりです。それでわたしたちにとっての環境問題とは何かと言いますと、小さくて、貧しくて、虐げられているものたち、それは人間には限りません。人間以外の生き物もそうですが、そういうものたちを無視したり、そういう人たちの苦しみをほったらかしにしておくことが、これが果たして良いことか、これが神さまのみ心にそうことなのか、わたしは環境問題というものを何も考えずにいるということを、おそろしいことであると思います。

特に、工業化の過程で、まず第一に起こってきたことは、富の集中によって、ある一部の人たちが土地も空気も水も勝手に使うということが起こったわけです。そしてその土地も空気も水も勝手に使うことによって、つまり土地が汚れる、空気が汚れる、水が汚れる、そういうことを無視して工業化を進めたことによって、わたしたちの世界はだんだんひどい状況に陥りつつあります。最初にわたしが人口が多すぎると言いましたが、人口が多すぎるというのは、今、住める、住んでいられる状況の中で

は、多すぎます。例えば、アメリカ人がしている生活を、今地球の人全員がしますと、計算によりますと、確か2億人しか生活できない。で、わたしたちは58億いますから、56億は死ねと。そういうわけにはいかないのですね。そしてそういうわけにはいかないということは、わたしたち全員がアメリカ人のような生活をするということはできない、ということです。このような状態に陥っていて、しかも更に一部のひとに富が集中して、貧しい人がどんどん増えて、なおかつ、貧しい人と富んでいる人の格差がどんどん、どんどん開いていく状況の中で、新しい工業技術が開発されればされるほど、それによる公害は貧しい人、弱い人の上にかかってきています。具体的にこの例の中にも挙げていますが、ダイオキシンというものを取り上げて書いてございますが、これはベトナム戦争で使われた枯葉剤の中に入っていた物質です。皆さん、そう聞くとベトちゃん、ドクちゃんのような体のくっついた双生児が生まれてしまう原因になった物質であるということはお分かりになると思いますが、それだけではありません。わたしたちの日常の生活の中でポリラップを使いますね、食べ物が残った時。あれはほとんど塩素化合物を含んだプラスチックでできています。塩素化合物を含んだ物質をある程度の高温で燃しますとダイオキシンが発生します。現在の調査では、日本ではアメリカにおけるダイオキシンの規制値の2500倍の量のダイオキシンをわたしたちは日々空気と水と食物から取り入れております。そしてこのダイオキシンは規制されておりません。厚生省はまだだれも被害が出ていないから規制しないと広言しております。

これは何もわたしたちの国に限ったことではありません。しかし、少なくとも、わたしたちの国は20年前にひどい公害紛争を経験しまして、そしてたくさんの犠牲者がでました。そしてその犠牲になった方たちもやはり非常に弱い立場の貧しい漁民であったり、あるいは工場労働者であったりしたわけです。そしてその現状があったにも関わらず、相変わらず政府の政策は、「知らしむべからず。よらしむべし。」なんですね。ですからとにかく情報は与えないと。そして恐ろしい被害が出るまでは放置する、という方針ですべての政策が行われています。この政策は、実は海外に対しても全く同じことを行うという結果となってあらわれています。例えばわたしたちの国は、戦後すぐに賠償と称して様々のお金を被害をかけた国へ、いろんな施設を建てるとか、そういう形で賠償を支払ったことになっておりますが、実際的には皆さんよくご存じのように、紐付き援助。すべて日本の企業だけが儲かるようなシステムになっております。おまけにそれによって作られたものが、何の役にもたたない、だれにも利用できないような施設である、というようなことが最近になって、次から次にわかってきました。お金だけはかけましたが、非常に面倒臭い操作を必要とする機械を入れる、その機械は当然それを動かす技師が必要、でも技術者を養成しないわけですね。機械だけ売ると。おまけにそれが無償援



助ならともかく、有償援助の場合には利子となって、10年後のそれらいろいろな国の子孫の方に掛かってくるわけです。その結果、その例えばその大きな建物を作ることによって、その国の森林を伐採して道を作って、その山奥になんかその建物だけに行くしか役に立たないような大きな道路を作ったりします。そのような形でわたしたちの国は自分の国を破壊するだけではなく、よその国も破壊し続けて来たし、今もしているのです。そしてまた、わたしたちの国の企業の中には、一部の企業にはきちんとしたところも当然おありだと思いますが、ある一部の企業は進出した先の労働者に、当然与えるべき、日本の労働者に与えているものとは比べものにならないようなひどい待遇を与えまして、そしてさらに実際にわたしが見てきた人から見せていただいたスライドによりますと、大変貧しい食事を、若いお嬢さんを朝から晩まで働かせて、変なお菓子のようなものしかお昼に食べる時間がない、というような条件で働かせたりですね、そういうことが、公然と行われている。つまり、戦前において、日本の若い女の子を農村から駆り集めて奴隷のような労働をさせた、それと同じような構図が今現在、東南アジアとか南太平洋とかのところで行われているわけです。

先程申し上げましたような環境問題というのは、これらを全部含んだ問題です。ですから非常に幅が広い。わたし自身の健康をも脅かす問題でもあり、更にわたしたちの生活を維持するための物資を買うお金を得るため、わたしたちは大きな会社から給料をもらっている人が多いと思いますが、あるいはその人たちによって支えられている、いろいろなものによって働いている人が多いのですが、それらは全部結果的には、先程申し上げたように、物を売りつける相手とか、あるいは勝手に進出していった工場で排出、たれ流される廃水とか、排気ガスとかによって、よその国の人々に被害を与える。

わたしたちは戦前から戦争中、ずっと悪いことをしてきましたが、戦後もやはり悪いことをしているわけです。20年前の公害紛争の後、たくさんの工場が一度に東南アジアに移りました。そしてその東南アジアに移ってからは、日本では法律で規制されたような公害を除去する設備をつけない工場を平気で作る。そしてあちこちで被害者をまた作っているのです。国内の日本人を殺しただけではなく、今では、海外の人の命も、更に作っている物質によってはその子孫の方たちの命をもあるいは、生活の幸せというか、そういうものも奪う、そういう形の現実が現にあるわけで、こういうことに対して何も考えない、見ないということが、わたしは正しい態度とは思えません。

例えばもう一つの例をあげますと、食べ物です。わたしたちは食べ物の70パーセント近くを輸入しております。そしてその輸入されている食べ物というのは、実はわたしたちが海老を食べる、カボチャを食べる、ただそれだけでもって、例えば、フィリピンのマングローブ林、ベトナムのマングローブ林、さまざまな場所のマングローブ林がわたしたちに売る海老を養殖するためにかり倒されています。ところが、マングローブ林というものは再生が簡単にできるものではありませんし、海老はそのような狭いところに飼いますと必ず伝染病になります。日本でもハマチの養殖とか同じ様に伝染病が起こりますのでそれを防ぐために大量の抗生物質をばらまくということが起こっております。

わたし供、ご承知のように病院に入りますと、MRSAという、とんでもない菌の脅威に晒されるわけですが、これはほとんどの抗生物質がきかないという、とんでもない菌なんです。ところが抗生物質がきいているときには、何の悪さも

しないおとなしい菌だったわけです。わたしたちは実はこの戦後50年間世界中どこでも抗生物質をめゃめちゃに使いました。そのために、菌の世界、病原菌の世界の環境は大幅に壊されました。病原菌の立場になってごらんなさい、みたいなもんですが、さんざんひどいめに合わされたので、対抗上、絶対に勝つぞ、というものが生み出されて来たわけです。人間なんかに負けていられない。そういうものが次から次に生み出されています。今では、ご承知かも知れませんが、さまざまな伝染病に抗生物質は利きません。そして結核もいよいよ有効な薬だったはずのヒドラジートとかパスとか、その手のものが利かなくなって参ります。細菌学者の方々はこれからはいよいよ、再び、中世の菌と戦う時代に戻ると言われております。もうその時代が始まっているんですけれども、こうなったのも、わたしたちが、大量飼育をするために動物の餌とか、海の中などにめちゃめちゃに抗生物質をまきましてですね、そしてそういう意味での、幸せに暮らしていた海の微生物の世界を破壊した、こういうことろから起こってきているわけです。わたしたちはやることなすこと、旨くいかないことを、ずーっと続けて参りました。そして何から何まで旨くいかなくなった最後の結果が、今の現状のこれからの見通しですが、ひたすら炭酸ガスが増えてしまうことが予想されております。というのは、わたしたちにとって、酸素を作ってくれる唯一の頼りがいのある植物、その植物のをかり倒して人間の住むところを作らなければならないのです。人間が増えるということは、植物の住んでいる場を奪うということです。奪わなければ暮らせません。ですから、このような現状の中で、植物はかり倒す、そして燃料のために何かを燃しますから酸素を使う。酸素は消費する、しかも製造者は殺すと、この二つが悪循環になっているわけです。更にもうひとつ、一番悲しいことですが、それが貧しい人の住んでいるところで行われるということです。貧乏と、そして環境汚染と、そして人口増加、この3つがですね、まるで悪の追い駆けっこの状態で今進みつつあります。ですから、わたしたちは例えば地球全体が80億人になるのがもうちょっと、もうちょっとなんです。ほんの2、30年で80億。その時に何が起こるかというと、わたしたち全員が平等に御飯が食べられなくなるのではなく、今貧しいところで、そしてもう既に苦しんで民族紛争とかやっていらっしゃるところがありますが、あれは他民族が憎いからではありません。紛争が起こるのは貧しいからです。貧しくなくて、物資が豊かにあって、皆で分け合うだけのものが大量に合う場所ではほとんど民族紛争は起こらないです。そのように、すべての原因は殺気から申し上げています、ある部分にお金がどんどんどんどん集まる。そしてある部分からはお金も物も、水や空気や土地の良さというか、そういうものまで奪われていく。これがわたしたちを待っている社会、未来の姿です。これを、もう遅いかもしれませんが、何とか止めるということが非常に大事だと思います。

なんか、しゃべりまくり。で、失礼しました。

（拍手）

パートナーシップ

三木メイ　パートナーシップの問題というのは、非常に多様な側面を持っておりますので、本当に20分という時間は短過ぎるんですけれども、精一杯やらせていただきます。先に中尾貢三子さんから。

中尾　貢三子

今ご紹介いただきました、書類上は大阪教区大阪聖パウロ教会になっていますけれども、いつも外では京都教区大阪聖パウロ教会と名のっています。事情はスチュワードの連中を見ていればだいたい分かると思います。

前置きはそれぐらいにしまして、わたしの生い立ちから、先ず話させていただきます。わたしは俗に言う「中の上」ぐらいの家の長女に生まれました。母に言わせれば、多分父に言わせても、わたしに反抗期というものはどうやらなかったらしいのです。だいたい妹が「ギャー」と言っている横で、「あんたおねえちゃんなんだから」と、言われなくても一切そういうことを言わなかったらしくて。はしかでもなんでもそうなんですけれど、大人になってかかるといかに怖いかということが良く分かるというものです。でも、わたしは心の中でまで良い子だったかというと、そうではなかったみたいなんです。適当におてんばでして、今でもそうですけれど、適度に真面目で、俗に言う人生のレールを、ある程度までは多分親の望んだように歩んで来た人間だと思います。

それをちょっと形にしてみたんです。ちょうどここに置いたお人形さんのように、あまりうまくないのですけれど、あんまり自己主張しないし、いてもいなくてもあんまり邪魔にも何にもならない。そんな感じでずっと来ました。しかも、わたしが今、お盆の上に置いてのは偶然ではなく、長女であって、しかも女二人ですから、当然家の跡取り、継がなきゃなんない家という程良い家だとはわたしは思わないのですけれど、その家の跡取りだという場所に置かれました。そのわたしが立った場所で、親ですとか、学校ですとか、周囲の人たちはいろんな言葉をわたしに向かって発してきました。例えば、結局は最終的には、いいお婿さんを見つけるために、という一言に結び付くのでしょうけれども、先ず、いい大学にはいるために、いい中学に入りなさい、いい中学に入って、いい高校に入って、いい大学に行きなさい。

おととと、傾いてしまった。(笑い)

一応浪人せずにうまく、担任の先生も「なんでお前が受かるんだ」と言うところに入ったのですけれど、そして4年、まあまあの成績で出たら、いい会社に就職しなさい。その間に落としごろになって参りますから、きれいな洋服を着なさい。わたしジーパンの方が好きなんですけれども。で、25才を越えましたからお肌も曲ってるんだからお化粧しなさい。その辺で皆さん、わたしがいつも走り回っているのをご存じでしょうけれども、ばたばた走らないで、そっと歩きなさい。あんたはやかましい、と良く

いわれるんですけれども、そういう感じでいろんなことですね。結局言ってしまえば、早くいい人見つけていらっしゃい、早く孫の顔を見せなさい、っていう感じで、いろんなことを言ってくれます。それで、その一番最後のしめくくりに必ずつく言葉があります。「あんたの幸せのためなんだから」。あんたの幸せのためなんだから、と言われたら、わたしは引き下がるしかなかったんですね。

でも、ある時、自分の頭で考えて、自分で行動しようとしました。そしたら、先ず手が動かないんですね。足が動かないんですね。無理して動くと首に掛かった、掛かってないな、これは掛かってないですけれど、のどに掛かったリボンが締まるんですね。苦しくって、どうしようかなって。やっぱり親がすごい期待しているのは分かりますから、これでも自分は親孝行のつもりですから、一応このお盆の中でなんとかしようって、すごい考えたんです。でも、どうしても不自由なんです。「わたしの幸せのためなんだから」って、言ってくれたリボンなんですけれども、わたしにはとっても、とっても不自由でした。

それで、ある時。(ガチャーン!!)

どうしてもやってられなくなって、人形になるのを止めたんです。……。リボンほどくことはできなかったんですけれども、ただ叩き壊したら、わたし自身もすごい痛かったんですけれど、……血が出てきたんです。その時にはじめて、わたしはお人形さんじゃないんだ、というのかしら、わたしは人間なんだ、ということに自分で気づいたのです。ただ、この流れ出した血というのは、わたしに何をさせようと流れたのか。そして、人形でいるのはとても楽なんですよ、自分で考えなくて済みますから。でも人間であることに気づいてしまったら、明日の食い扶持から考えていかなければならないですよね。自分で生きていくために、どうしよう。確かに、叩き壊して良かったなと、後悔はしていませんけれども。わたしは今、人形であることを止めました。

ここにいらっしゃる皆さん、お一人お一人にお尋ねします。あなたはお人形さんを作っている立場でしょうか。それともお人形さんにリボンをかけている立場でしょうか。お人形さんを叩き壊そうとしている、その声を聞いたことありますか。お人形さんが苦しがっているのを、聞いたことありますか。苦しみのあまり叩き壊そうと振り上げた金槌を、止めようとしてませんか。血が流れ出しているのを、なかったことにしようとしていませんか。そして、これらすべての起こったことは、自分の家庭のことじゃないからいい、と思っていませんか。お一人お一人、自分の心の中だけで結構です。一度考えてみてください。(拍手)

三木　メイ

わたしは教会における、女性と男性の関係性の回復ということについて、少しお話しをさせていただきたいと思います。

わたしは、教会における女性と男性のパートナーシップというものが、生れ出ることを願

い、祈っております。けれども、現在のわたしの目には非常に大きな壁が立ちはだかっていて、その関係の破ればかりが見えてしまって、その実現を祈り続ける力というものを失いがちになってしまいます。

ここにひとつの聖書の注解書を持って参りました。これは9年前、わたしが神学部に在学中にキリスト教書店で何気なく手にした註解書です。『旧約聖書略解』、日本基督教団出版局のものですけれども、もしかしたらここにいらっしゃる聖職の方々で昔手にいれて今も本棚にあるという方がいらっしゃるかもしれません。わたしはこれを何気なく読んでいたときにですね、創世記3章1節のところにこういうふうにあるのを見つけました。3章は楽園の喪失というふうに題名がついていてあって、例のアダムとイブの物語のところなんですけれども、その3章の1節の「へびは女に言った」というところの説明文に、「へびが女に呼びかけたのは、女性が単純で誘惑にかかりやすい餌食であるからだろう。」わたしはこれを見て本当に笑いました。驚きと同時にやっぱり笑うしかなかったのです。当然ここには、男性の方が女性よりも優った性質を持っていて、女性は男性より劣っているんだ、だからいつも罪深く、取ってはいけないと言われていた木の実を、いのちの実を取ってしまったんだ、ということだと思います。だけれども、これが、わたしたちはそういう時にこうやって笑って、ああ、しょうがないね、と言うんですけれども、そのわたしたちの心の中には、やはり外には出せない怒りと悲しみと痛みがあります。それを普段出すことはできないのですけれども、そのことをやはり見ていただきたいと思います。これは初版が1957年です。そして1986年までの約30年の間に約40版を重ねている註解書です。全く訂正もされずに30年間これは出版され続けているわけです。そして38年後の現在も書店で売られています。男性の6人の学者の名前が編集人としてあがっています。どの方がそれを書いたかということをわたしは追及しておりませんし、わかりませんけれども、別にそれは特別なことではなくて、キリスト教の歴史を振り返ってみますと、使徒教父に遡ってまで、とにかく教会は女性を男性よりも低い存在としてみてきたという事は明らかです。それは参考資料のほうを見ていただければ、お分かりになるかと思います。

いわば、教会は女性の人間の尊厳という「いのち」を、聖書の解釈という形で踏み躙っているという歴史を持っているということです。これは明らかなのではないでしょうか、違いますでしょうか。この教会の歴史への責任を、今ここにいらっしゃる方々、特にここにいらっしゃる、理解ある男性聖職者の方々に問いたいと思います。

どうか、女性の「いのち」、人間の尊厳としての「いのち」を回復してください。

今、教会の礼拝の中で、説教壇から語ることができるのは、聖書を開いて語ることのできるのはほとんど男性です。これからはもちろん女性にその道が開かれてほしいというふうに思いますけれども、現在、今の時点では男性が圧倒的に多いわけです。その方々に本当に意味で福音をわたしたちに語ってください。そうすればわたしたちは再び自分たちの「いのち」というものを取り戻す再生の力を与えられるんではないか、希望を与えられるんではないか、というふうに思います。

女性の司祭の問題も、女性の「いのち」の回復、女性の人間としての尊厳の回復というものと、決して異なる事柄ではありません。制度の改革ということだけではなくて、これは女性が霊性を持っている存在であると教会が認めるか認めないか、そういう問題だろうと思います。ずっとこれまで聖餐式の執行を男性だ

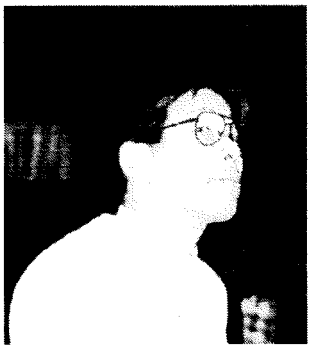
けに限ってきたのは、男性にだけにしか聖霊は働かないんだ、だから聖別は女性には許されないんだと、そういう判断を教会がしてきたということだというふうにわたしは受けとります。

教会の決断として、女性の霊性を認めていただきたいのですが、その決断をする、意志決定をする場に－それは総会でありますけれども－傍聴にいきますと、後ろから見ていますと、やっぱりこれは異常だと思います。真っ黒けの男性たちのダークスーツ、あるいは真っ黒な背広が並んでいる。6割ぐらいは女性の信徒なのにどうしてこういうことがずっと教会の歴史の中で起こってきてしまうんでしょうか。塚田司祭が会犠性が大事だと、皆で発言して皆で教会を作っていく、それが大事だと、それがキリストの体として大事なんだ、とおっしゃっていました。果たして、わたしたち女性は本当にキリストの体として入れられているんでしょうか。決定権を誰が取るか、今まで男性が持って来たところに女性を入れるということは、今まで決定権を握っていた男性のうちの誰かが退かなくてはならないのです。選挙で自然に決めるんだからそれでいいじゃないか、女性ががんばればいいじゃないか、そういうところには教会の変革は起こらないというふうにわたしは思います。どうかこの件も男性ご自身からわたしたちと一緒に考えていただきたいと思います。

もうひとつ最後に、具体的にわたしたちが悩んでいることの一つがあります。主教会の申し合わせ事項の中には、女性司祭あるいは女性主教を認めた外国の聖公会から、按手を受けた女性司祭が来た場合でも、日本聖公会として執事としてしか取り扱わない、という申合せ事項があります。そのためにその女性司祭による聖餐式を行いたい、陪餐を受けたいと思う時には、わざわざ教会以外のところへ部屋をとって、その式を行わなくてはなりません。これは何も総会で決められたことではないんです。もうだんだんと状況が変わってきていると思います。主教会の方々ももう一度その件について話し合っていただきたいですけれども、どうぞ、これを皆さん会議の中で考えて、本当に聖公会としてそういうふうな扱いをしていくのかどうか、ということを話し合っていただきたいというふうに思います。

それ以外にたくさんの大きな壁があるんですが、それは今はお話しする時間がありません。残念ですけれども。とにかく、わたしたちが力を失ってしまうような現実を前にして、どうやって力を得られるかというと、女性の「いのち」の尊厳の回復というものを目指す人たちで手をつなぎ合うことしかないんではないか、というふうに思います。お昼の時間にもご案内申し上げましたけれども、女性の司祭按手実現を目指すネットワーク、教区や教会の枠を越えて、女性の司祭按手の実現を求める者同士、互いに手をつなぎ合うネットワークを作って生きましょう。互いに情報交換し合い、励まし合い、勇気づけ合うきっかけがそこから生まれることを願っています。このネットワークに加わって下さる方は下記に名前を書いて、あるいはコメントをかいてそこの廊下の机の上に箱がありますので、書いていただければというふうに思います。そうやって手をつなぎあっていかないと、とてもこんな大きな教会を変えることはできるとも思ってはおりませんし、やはりいろんな方々との協力、教会につながる、特に教会の宣教というものを真剣に考えていく人たちと手をつなぎ合うということがとても大切だというふうに思っております。

（拍手）



障害者 II

司祭　佐々木道人

わたしは教会の司祭として障害者問題というものに関わっています。そして自分の果たすべき役割は何か、司祭の権威とは何か考えてきました。

ミニストリーを奉仕職と訳していますけど、今ひとつ伝わらない感じがあります。そこで自分の物語をしながらお話しします。

十数年前になりますが、わたしたち夫婦は、初めての男の子を事故で亡くしました。

三才でした。

初めてその時キリスト教のお葬式を体験したのです。わたしはその時まだクリスチャンでなかったのですが、妻の父が聖公会の司祭でした。つまり祖父に当たる者が孫の葬儀をしたのです。彼が式の中で何を話したか、どう司式したかはすっかり忘れましたが、唯一記憶にあるのは、義父が司式中、言葉が詰まり、立ち往生してしまったのです。そして、「こんなに悲しいお葬式は初めてだ」と涙したことです。

当時、わたしは知的障害者、大人の人たちの施設で働いていました。都の時長男の事故があったわけです。長男は難産で生まれた性か静聴が遅く2才になってもまだあるけなかったのです。そのこがやっと歩きだし、夫婦ともになりふりかまわず育てていこうと腹に決めた矢先に事故が起きたのです。

その葬儀の最中、司祭、キリスト教の坊さんが泣いてしまった、このことが非常にわたしの中で印象深かったのです。義父はもう晩年でした。謹厳実直で神学校で障害神学を教えていたような人でしたが、そのような普段の姿が全部崩れて、彼は泣いていました。

わたしはその姿がずっと忘れられません。わたしが司祭になる原点になっていると思えます。

司祭とはこの世で何の権威を持っているのでしょうか。

わたしは、今日はっきり次のように言いたいのです。それは、

「苦しんでいる人と一緒に、大胆に、立ち往生していい権威なんだ。主イエスの愛を信じるゆえに、地獄のような、また神も仏もないような地点に立っていいんだ。立ち往生して崩れていいんだ。それが司祭の権威であり出発点なんだ。」

「共生」という言葉を聞くと、わたしは常に聖書的には「共死」(こんな言葉はないかもしれませんが)、「共に死ぬ」という主イエスの姿と、言葉が全面に出て来てしまうのです。「共に死ぬ」ということを通さないとやはり、「共に生きる」ということは絶対ありえないし、イエス様の道はない。

「立ち往生」という言葉は普通、普段通りに行かないこと、挫折を意味し、電車が事故で立ち往生するとか、何か目的が完成できないようなネガティブな状況を指します。

本日は外国からのお客さんもいらっしゃる

ので、この「立ち往生」という言葉の物語をお話します。

旧約聖書に出てくるダビデとゴリアテのような英雄物語に似た話しが日本にもあります。その一人はダビデのような少年で牛若丸という、後に立派な武将になった人です。少年、牛若丸は、ダビデの敵ゴリアテと酷似した巨漢のすさまじい戦士、武蔵丸弁慶という坊さんと戦って勝利するのです。聖書ではゴリアテはダビデに殺されますが、弁慶は降伏すると、今度は忠実な家来になって生涯、相手の牛若丸を守るのです。幼年牛若丸は弔辞手義経と名乗り、ダビデと同様立派な武将になります。しかし、義経は時を得ず戦いに破れて脱走を重ねた結果、最後の戦い、衣川の戦いで終焉を迎えます。その時、敵の前に弁慶が傷だらけで立ちふさがったのです。彼は義経を守るために、敵の矢面に立ちふさがり、多数の矢を全身に受け、針鼠のようになってもまだ倒れず、なぎなたを杖に、目をかっと見開き敵を睨んだまま、立ったまま死んだ。「立ち往生」したのです。これが「弁慶の立ち往生」の物語なのです。

この話しで興味があるのは、弁慶は荒くれた武将でもあったが、もともとは坊さんであり、愛する者のために立ったまま死んだ。愛する者のために矢を受けて死んでしまった。非常に壮絶な死なんですけれど、我々の主イエスの十字架を思わせるものがあります。主イエスも十字架の上で「立ち往生」しました。

やはり主に従う我々の職務の原点はこれなんじゃないか。

世の苦しみにある人と共に大胆に「立ち往生」してしまっていいんじゃないか。

わたしたちは、この協議会も三日目、終りに近付いて、何とかまとめあげようとする雰囲気もあるんですが、話せば話すほどトンネルに入ったような思い気分で、きつい話し合いは大変です。正直のところ、普段の生活的な感じとは違うレベルの持続で、疲労の局に達していると思います。

しかし、こういう「立ち往生」している時こそ、わたしたちが話題にしている問題を投げ掛けている相手と、初めてつながれる地点に立ったのだ、とわたしは思います。

はじめて話しを投げ掛けている相手とつながれるところに立ったんだ、と僕は思いますのこの協議会で、立ち往生されている方々は、是非その状況をネガティブなものととらえないで、むしろ日常の我々の帰っていくべきところで必要なんだ、共に生きること、「共生・連帯」への手掛かりと思い返してほしいのです。

そういうことを思って「立ち往生の神学」というのを提示します。

（拍手）

質問と意見

竹田　眞： はじめてしゃべらさせていただいてほんとにありがたく、これで喜んで帰られると思います。

日高君が聖職候補生になった時に大変難航しまして、だいぶ時間が掛かったのです。分餐する時、分餐なんかできるのか、とか。つまり今の教会の状態に合わせて司祭職が執行できるかという観点で、司祭になれるかどうかということが議論の中心だったと思います。それでもいいのか、ということを日高君に決断を迫るようなことを最初していたと思います。しかし、途中から、やはり日高君のような方も

一緒に働けるような状態になるように、役割が取れることができるようにと、教区が変わらないと、と願いを持って、また祈りをもって、日高君を認可した訳です。

今日は21世紀の展望ということで、やはりこれからの21世紀の日本聖公会というのは、保護するために今の状態の中に入れるという、多様性というようなことを言っておりますが、いろんな方を、女性の方とか、今のままで入っていただくということではなく、やはり、基本的に構造が、昨日から構造の問題が出ていますが、教会の構造が変わっていかなければならないということが大変大事なことだというふうに思っております。女性の場合でも、先程コメンタリーに関して、女性についての考え方から言うと、間違っているということを三木さんは言われましたけれども、教会の中での我々のような指導者はやはりそれが当然のような解釈を、わたしは正直言ってしてませんけれども(笑い)、そういうようなことを皆さん常識として考えていらっしゃるということがまだあると思います。そのような中で教会が成立しているわけですから、本当の意味で女性が司祭になっていくためには女性が司祭になるということだけではなくて、法規が変わるということだけではなく、教会全体の構造が変わっていかなければならない。ですから、これは、わたしのような主教たちにとっては大変な問題になってくると思います。今の教会の状態を守るのか、そういう変革に向かっての指導者になっていくのかという決断をしなければならないと思います。そういう意味で、わたしも大変皆さんから疲れたような顔をしていると言われますが、今回のコンサルテーションは大変疲れまして、胃潰瘍がますます悪くなっていくような。ですけれど、わたしは同時に希望と感謝の気持ちを持っております。この状態がやはり本当に聖霊が与えられて、祝福されるようにわたしは祈りたいと思います。

どうも本当にありがとうございました。

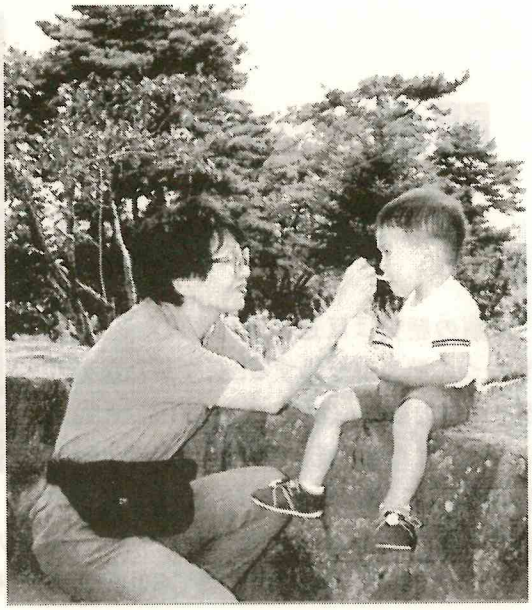
(拍手)

中原： 質問というよりも皆様にお願いがあります。女性をだまくらかしたへびは雌だったか雄だったか、考えてもらいたいんです。どうしても分からない人は明日分かれる前にわたしのところに聞きに来てください。内緒で教えます。

小川加代子： 昨日と今朝の祈りの集いの手話通訳をさせていただきました。

全国から集まっていらっしゃるので、21世紀の展望ということも含めてなんですが、聖餐式の口語式文の手話化ということをわたしたちはやっております。大阪教区の中でもそういう取り組みがあると聞いております。全国多分どこかにそういう方がいらして、手話をやっている方と手話を必要とされる方が共同でそういうものを作っていって、一冊の本ができて、それが聖公会全国どこにでもあって、聞こえない方がいらして手話が必要な場合にそれを使って聖餐式

ができるという夢を持っています。そのためには、聖餐式の式文を手話にするには、いろいろな意味とかあって、そのまましゃべっている日本語と手話とは文法的なこともあって違いますので、意味も含めて考えると、手話の必要な方と手話のできる者と、更に聖職の方々のご協力が必要なんです。全国的なもので、手話は地域性もありますけれども、でも今NHKのニュースでもやっていますように標準化ということも含めて、一歩一歩小さな力を集めてやっていきたいと思います。



それぞれの教区や教会に帰られて、必要な方、また手話のできる方があって、一緒にやりたいな、と思われる方は、東京教区の「障害者」プロジェクトの方へご連絡をいただいて、できれば近いうちに何人か集まって、相談会を開きたいと思いますので、杣取先生の方にご連絡をいただきたいと思います。多分どの教会の中にも、一人二人手話を少しやっている方、またお上手な方いらっしゃると思うので、ご本人がおっしゃらなければ、お声を掛けてどんどんやっていけるような体制作りを皆さんにご協力頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

（拍手）

閉会メッセージ

李　在禎　神父

人類の歴史は反逆の歴史と言えるでしょう。一つの勢力が登場すると必ず新たな勢力がその勢力をひっくり返します。韓国の近代史において私たちは既にこのような経験を何回も繰り返してきました。この時、新たな勢力は反逆の歴史を創り出します。

例えば、1945年、解放後に建てられた初めての政府は日本の植民統治下で独立のために苦難を受けた民族主義勢力を追い出してしまいました。このいきさつの中で、私たちは植民統治の誤った遺産を精算するのに失敗しました。1961年、軍事革命によって建った政府は30年間統治する中で過去の失敗を繰り返しました。この事は過去の歴史を評価し過去の過ちを精算することが出来なかったからです。だからこそ私たちは一つの時代を過ごした後には必ず過去の歴史を検討し評価する必要があるのです。

ここには評価の基準が何であるか、が問題です。ルカによる福音書の記者はこの点について歴史とは誰の力によって創られるのかを確認しなければならないと語ります。たとえ悪魔を追い出してもそのことがベルゼブルの力によるものだとすると結局新たな分争が起こります。しかし神の力によるものだとすると神の国は既に来ているのです。この事をほかの言葉で言い替えると現在私たちの世界が神の国の状況にあるとすると、私たちは神の力によって歴史を精算したのであります。だか、その反対に私たちがいまだに悪の世界に住んでいるとするならば、私たちは今においてもベルゼブルの力に頼っていると言えるでしょう。神は正義であり、神は愛であり、神は希望であります。反面、ベルゼブルは不正義であり、対立であり、欺瞞です。過去の歴史を正しく評価し精算せずに私たちは未来を決して見ることが出来ないでしょう。

創世記に示されたソドムの城の話しは歴史精算と共に私たちが進む道をあらかじめ示しています。決して後ろを振り返るな、と言います。この話しの中心は単純に過去の歴史を忘れる事ではありません。更に過去の歴史を懐かしく思ったり、そのことを繰り返してはならないのです。私たちがしなければならないことは過去の歴史を正しく評価し未来に対する新たな希望を持つことです。ここで私たちが注意しなければならないのは、この歴史の希望は神の命令に従うことによって成し遂げられる、という事実です。過去の歴史に心酔しその歴史を主導した勢力達が未だに歴史を左右するならば、その歴史はソドムの歴史のように滅亡の道を歩んでしまうでしょう。過去の歴史が完全に消えずには新しい歴史が来ることは出来ません。このような観点において日本が本当に救われるには過去の歴史を正しく精算しなければなりません。過去の植民統治勢力を神の名によって審判し、新しい希望を創り出

すことが出来る勢力を神の力によって興さなければなりません。このために日本聖公会は日本政府に対して赦罪宣言を要求しなければなりません。植民統治の罪悪は国家的罪悪であったため、国家が公式に明確にその被害者と被害国家に赦罪しなければなりません。そして日本は被害者個人個人に対してその被害に対する無限責任を負わなければなりません。その責任は単に物質的補償のみを要求するのではなく、名誉回復も含めなければなりません。このことが日本を救う道です。このことは今日の教会の歴史的責任なのです。私たちは今回の協議会を通して日本聖公会が過去の歴史についてどれほど苦しんでいるのかをよく理解することが出来ました。今日まで大韓聖公会と日本聖公会の相互交流を通して過去の歴史についての深い理解を求め、また互いの責任を痛感したのはとても幸いなことです。この経験を通して教会を新しく変化させ信仰を育てていくことが出来ます。神は大きな恵みを与えてくださるでしょう。

カンゲというある村に「あかんぼう」と言われる岩があります。この村にはとても心が悪い金持ちが住んでいました。この金持ちは隣人を搾取していじめてきました。また貧しい家門の出身の息子の嫁をとても嫌っていました。ある日托鉢をするお坊さんが訪ねて来ました。金持ちは彼を侮辱し追い出しました。嫁はお坊さんを追いかけて米を一皿こっそりと渡しました。嫁さんの優しい心を見たお坊さんは嫁さんにこれから起ころうとしていることを告げました。これからすぐに洪水が起こり家も田圃もみな水に浸かってしまうと…。その時この家は大音をたてながら水の中に崩れてしまう、と言うことでした。この時、あなたはあかんぼうを背負って裏山に逃げるようにと教えたのです。だが一つ、心にとめておくことは、どんなに叫び声があがり大きな雷鳴のような音がしても絶対に後ろを振り返ってはならないと言いました。…本当に数日後、大雨が降り出しました。人々が逃げる隙もなく一瞬にして家は水に浸

かってしまいました。この嫁さんだけはお坊さんに教えられた道を通ってあかんぼうを背負って安全に逃げることが出来ました。が、雷鳴のような大音がウルル、グァグァと響きました。この音に驚いて瞬間的にお坊さんに言われたことを忘れて嫁さんは後ろを振り返ってしまいました。するとこの嫁さんはあかんぼうと共に大きな岩になってしまいました…。

この話しに登場する嫁は創世記に出て来るロトの妻と同じです。滅びるソドムの城を振り返った彼女は塩柱になってしまったのです。これらの話しが示しているのは審判についてです。そして過去に未練をおいてはならないと語っているのです。過去は果敢に捨てなければなりません。滅亡しなければならない歴史に対しては振り返ってもならないのです。このことは日本の天皇制が犯した過去の過ちについて反省し、新たな時代のためには大胆な改革がなされなければならないのです。

ルカによる福音書の9章62節では「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言っています。私たちに与えられた使命は歴史の審判と共に未来を迎える智恵と信仰がなければならないと伝えています。韓国の教会は今年を『ヨベルの年』と宣布しています。このことは解放を迎えて50年になる今年は「喜びの年」としなければならない、ということです。このことには二つの方向があります。一つは過去の歴史を精算することです。そのためには、あらゆるものが本来の位置に戻されることを意味します。つまり神が創造し働かれる、その秩序を回復しなければならないのです。そのためには抑圧された人、追いやられた人、泣いている人、傷ついた人々が、みな元の場へと回復することが必要です。このようなことが審判なのです。もう一つは新たな世界を建設することです。これは平和と平等と自由がある世界です。解放が成し遂げられた世界なのです。これこそがヨベルの歴史です。ですからヨベルの年の歴史は奪った者にしても奪われた者にしても、みな共に受ける解放の喜びです。抑圧した者でも、抑圧を受けた者にも、みな解放の新しい世界を味わうことができるのです。なぜならばこの喜びこそ神の喜びだからです。しかし韓国が日帝統治の残滓を精算できない限りヨベルの年を迎えることは出来ないでしょう。同じように韓国がヨベルの年を迎えることが出来ない以上、日本も本当の解放を迎えることが出来ないでしょう。日帝統治の結果によって韓国の人々は50年の年月の間、南北分断と憎悪の歴史の中で生きなければならなかったのです。

今、全世界が冷戦の体制から抜け出し新たな歴史に向かっている中、私たちは未だに理念的な対決の中で血を流しています。50年前、広島に落とされた原爆は日本の早期降伏に導きながらも韓国は自力的独立を成し遂げることが出来ず、これを支配する植民統治の延長と南北分断と戦争を招きました。反対にアメリカは世界を支配することが出来る恐怖の国としてこの50年間、冷戦構造の中で威力を発揮してきました。明確なことは原爆は神の力ではなく、ベルゼブルの力であるという真実です。しかし、今、日本は再び過去の歴史を振り返りながらも元に戻ろうとしています。本当に日本が救われるためには過去の悪魔から解放されるために、その歴史を必ず精算しなければなりません。このために日本の教会は前に立って行かねばなりません。

解放の歴史を遂げるためには日本の教会は審判と精算を恐れず、このことを通して未来の希望の歴史を成し遂げなくてはならないのです。このことこそヨベルの年の歴史に対する私たちの宣教的課題なのです。

◇ゲストグループ報告◇

① 海外からゲストとして、この日本聖公会協議会に招きを受けたことに対し、心から感謝の意を表したい。この協議会は、日本聖公会の通っている過程の一部であると理解するが、我々ゲストは皆これを支援し、祈っていることを覚えて欲しい。

皆、日本聖公会がどのような考えを持ち、話し、これから何をしようとしているのかを知り、耳を傾けることを切望し、今回参加した。

② 教会は宣教のために存在するのであって、宣教は社会の変容のためにある。日本聖公会がその宣教の召命を新たにする努力をしていくことを期待したい。

③ 今日の宣教において、どの問題が優先されるべきかを見極めて、それらに早急に取り組むべきである。

例 戦争責任告白―日本聖公会は、戦時中に苦痛を与え、死に至らしめた人々に対して、神のみ前においてその罪を告白し、赦しを願い、また私たちの贖い主であるイエス・キリストの家族の一員として、他の国々の人々や教会との関係が癒され、新たにされることを訴える必要があると我々ゲストは認識する。

宣教教育

エキュメニズム

女性のミニストリー 等々

④ 日本聖公会の内部における分裂や意見の不一致などを心に留め、一致に向かって努力をしていくことを期待したい。

⑤ その他各ゲストの個人的な体験や考えの分かち合いがなされ、その例として

韓国のゲスト…韓国人が日本の侵略によって受けた傷は深く、政府レベルでの補償・赦罪に向けて、日本聖公会としての声明を出し、日本政府に働きかけることを望む。

フィリピンのゲスト…カナダ政府が日系カナダ人に対して赦罪・補償したように、日本政府からの補償を期待するが、同時に過去の責任問題だけではなく、「じゃぱゆきさん」等、現在直面している問題についても目を向けてもらいたい。また教会どうしの一致やエキュメニズム、草の根運動などにも積極的に取り組んでいくことを期待する。

その他の国のゲスト…それぞれの国との交流、パトナーシップをより深めるためにも、日本聖公会が公式声明を発表することは、自分達の国々が過去に犯した過ちを振り返るきっかけを作る一助を担うことにもつながる。

最後にこれら海外ゲストの声をグループに参加した竹田主教や飯田主教が他の主教達に伝えてもらいたい。今回の協議会に首座主教や主教の何人かが出席していなかったのは非常に残念なことである。

§ カナダ聖公会　テリー・ブラウン司祭の報告から抜粋 §

The Consultation was not without its confusions, misunderstandings and controversies. Because of its title, some initially thought it was a Partners in Mission consultation. Others thought it was a consultation on the evangelization of Japan. Within the NSKK, some, including a few, Bishops, opposed it, arguing that the NSKK has nothing to be ashamed of in its witness in World War II. Primate Bishop Yashiro declined the invitation to be Honorary Chair and did not attend the Consultation.

The event was highly inclusive, inter-generational and even cross-cultural. There was a very good mix of lay and clergy, men and women, young and old, even children, in a relaxed atmosphere. Everyone participated, especially the women. There were a large .and significant number of "disabled" (the Consultation argued about the term) participants. About 15 youth stewards, who had attended a pre-Consultation youth event, provided technical assistance, published a daily newsletter, videotaped the whole event, provided music, gave presentations and participated in the discussion. The inter-generational character of the event was symbolized for me by the juxtaposition of the major opening address by Dr. David Tsukada, President of Rikkyo (St. Paul's, the Anglican university in Tokyo) on the history of the NSKK's relationship with state Shintoism and, later in the Consultation, an equally well-researched presentation by Taro Aihara, a Rikkyo graduate student and anti-nuclear activist, on the history of the Rikkyo's nuclear reactor, a gift of the Episcopal Church in the late fifties. Aihara even produced the prayer that Bishop Arthur Lichtenberger, the Episcopal Church's Presiding Bishop at the time, used to dedicate it.

The Consultation was an educational and network-building event, in which Japanese Anglicans who have been working on justice and peace issues, most of which can be related to the Tenno System, could share their research and insights. The number of participants was originally set at 150 - 50 from seven NSKK national committees, including the Peace and Justice Committee and the Tenno System and Yasukuni Shrine Committee; 50 from the eleven NSKK dioceses; and 50 others - students, interested clergy and laity, persons with special concerns related to the Consultation. Participants came from all the dioceses (especially Tokyo, Osaka and Kyoto), the Rikkyo, the Central Theological College (CTC) and other Provincial institutions. Five NSKK diocesan bishops attended (Tokyo, Osaka, Kobe, Kyushu, Okinawa) while six (Hokkaido, Tohoku, Kita Kanto [the Primate], Yokohama, Chubu and Kyoto) declined. The Bishop of Okinawa, Paul Nakamura, a strong opponent of the Tenno System because of the brutal Japanese oppression of Okinawa, was Honorary Chall The broader Christian community in Japan was

represented by the General Secretary of the National Christian Council of Japan, Kenichi Otsu, and Roman Catholic participants.

The Consultation was organized by a planning committee consisting of representatives of Provincial committees and dioceses and others with expertise in the issues. Staff of the Central Theological College, especially Professor Izumi Ida, a specialist in twentieth century Japan-Korea church relations, played an important role in the event. (Prof Ida's new book a 800-page collection of documentation pertaining to Japanese church relations with Korea during the Japanese colonial period, has just been published. It took six years to prepare and was extremely draining emotionally.) The planners prepared an extensive workbook, distributed to participants beforehand, with documents pertaining to the Tenno System, Japanese colonialism and the NSKK, including the text of a proposed "apology". The planners were the new generation of the NSKK leadership, planning their first large national and international event, unfortunately without the support of the Japanese Primate, several of the other bishops and other older clergy.

However, the result was spectacular. Several times people said to me that the NSKK has never had an event like this one, in its size, diversity, inter-generational character, imaginative liturgy and diversity of international partners. It was clearly a NSKK event (all in Japanese, translation provided, although some participants spoke in Korean and English) dealing with the NSKK's agenda, at which a small number of overseas partners were very welcome (and, indeed, privileged) guests. There was none of the eagerness-toplease that one sometimes finds at Partners in Mission consultations. Lee Jae-Joung commented that he had never experienced such an event in the Anglican Church of Korea and was greatly impressed. My impression is that for many of the Japanese participants, this was the first time to be present at a church event with international partners.

The "Tenno System" and the NSKK's Response

Before describing the Consultation, I need to comment briefly on the "Tenno System". Westerners, accustomed to European monarchies, often do not understand what all the fuss is about. The translator for David Tsukada's address comments, "'Tennoh', often translated 'Emperor', is much more than emperor. 'Ten' is 'heaven' and 'noh' is majesty perhaps 'His Majesty from Heaven' might approach the meaning of this term and, therefore, the serious theological implications." The Tenno, descended from the Sun god, is himself divine and father of all Japanese. Those who are not Japanese (Koreans, Chinese and other foreigners) are not descended from the Tenno and not really part of the nation. Japanese who die for the nation in war (including Christian Japanese, against their will), are enshrined as gods at Yasukuni Shrine in Tokyo. (The Christian churches in Japan have been fighting this practice for some years.) Japanese internalization of the Tenno System (Japan's racial and cultural superiority) undergirded Japan's colonial expansion in Asia and its aggressiveness in

World War II and it continues to be the base of Japanese discrimination against non-Japanese and the exploitation of other peoples of Asia. - The Tenno System, state Shintoism, is a form of religious nationalism that results in exclusivism, racism, chauvinism, hierarchical social structures and militarism. Although Japan was defeated in World War II, the mind set of the Tenno System remains, causing many to fear the resurgence of Japanese militarism in the region.

The Consultation began late on the afternoon of August 28th with opening worship and introductory comments from Bishop Junichiro Furomoto of Kobe, Chaplain of the Consultation, and Bishop Paul Nakamura of Okinawa, Honorary Chair. The opening worship included a rather un-Japanese free-for-all exchange of the Peace while all sang "Seek Ye First the Kingdom of God" (in Japanese, of course). It felt like Holy Trinity, Toronto!

In the evening, Dr. David Tsukada gave the first keynote address on the NSKK's ambivalent relationship with the Tenno System, both past and present. The address was extremely comprehensive and is difficult to summarize. David began by noting the fundamental incompatibility of Christianity and the Tenno System and the difficulty that the NSKK has historically had in facing this issue. He then made a critical theological analysis of the NSKK's relation with the state from pre-War times to the present. He also suggested many future directions, both theologically and practically. At the end, he admitted his own personal frustration as a university president in dealing with the Ministry of Education on some of these same issues.

The NSKK refused in 1941 to go into the government-organized state church, the

Nippon Kirisuto-Kyodan (Japanese Christian Church) with its Tenno worship and total subservience to government policies. Defending Anglican apostolic order, two NSKK bishops and several priests went to jail rather than join the Kyodan. As members of an unlicensed religious organization, many NSKK members were harassed and placed under government surveillance. (The Japanese Primate's father, Michael Hinsuke Yashiro, then Suffragan Bishop of Kobe, was one of the Bishops who steadfastly refused to join the Kyodan; many regarded him as the saviour of the NSKK. He later became the Primate.) The NSKK comes out fairly well in this part of the story.

However, Japanese Anglicans were for the most part sympathetic to the Japanese government's goals. The NSKK prayed regularly for Japan's victory in the "sacred" war. NSKK missionaries, including a Japanese Bishop of Korea, worked in Korea, Taiwan and Okinawa in full support of Japanese colonial expansion. The NSKK prayed for the Tenno in words that seemed to recognize his divine character as Father of the Nation. Anglican schools allowed the installation of Shinto altars and visits to Shinto temples. Anglicans (including the Suffragan Bishop of Kobe) served in the Japanese Imperial Army. And finally, at the time of the formation of the Kyodan, three bishops and a significant number of priests and laity broke away from the NSKK, joined the new state church and consecrated more Anglican bishops within

the Kyodan. (Most Anglicans who joined the Kyodan retuned to the NSKK after the war and the extra bishops were a source of much difficulty.) There is much in the NSKK's history, in its general acquiescence to the Tenno System, to apologize for. David's presentation was followed by Ms. Hong's moving account of her childhood in Korea during the Japanese colonial period. While entirely fluent in Japanese, she spoke in Korean with a translator.

The next morning the Consultation broke into sections to reflect on the keynote address and Ms. Hong's witness. Intonational partners met in a separate group with the NSKK General Secretary, Fr. Nathaniel Uematsu; the NSKK PIM Secretary, Fr. Sam Koshiishi; Fred Honaman, Episcopal Church Missionary and Secretary to the NSKK Primate; Bishop Joseph Iida of Kyushu; and Bishop John Takeda of Tokyo. We discussed the goals of the Consultation and reflected on issues of repentance and apology. The group became a good experience of education, sharing and candid partnership.

Later in the morning, after a moving Bible study on Justice/Righteousness by Prof. Ida of CTC, four Japanese panelists spoke on "The Church Living History" - Ms. Umeyo Iwai of Tokyo, a member of the Society of Women Who Think of the Church, on her childhood education during the War; Bishop Nakamura on the need for the NSKK to make a confession for its war-time sins just as the Kyodan did 27 years ago; Koichi Kiyoshi, a high school teacher in Nagoya, on the difficulties of teaching history accurately in the Japanese school system; and Taro Aihara on the Rikkyo nuclear reactor. Small group discussion continued on the NSKK's responsibility for all this history and the NSKK's possible response. This time international partners spread themselves among the NSKK groups, accompanied by translators. Group discussion continued in the evening. The day's session (7 a.m. to 10 p.m.) ended with Rex's reflection on Japan and the Philippines and evening prayer.

The next morning began with prayer and the second keynote address, "To Transform Each and Every Place" by Dr. John Pobee. The address was a very comprehensive theology of mission with some general, but very careful, suggestions for the Japanese context. I had the impression that much of the material was new for some of the Consultation participants. Like Tsukada, Pobee warned against a church totally dominated by the bishops, a current problem in the NSKK. People then went back into sections to discuss the address.

In the afternoon, five panelists spoke on "Prospects for the 21 st. Century" - Fr. Michito Sasaki, Chaplain of St. Luke's Hospital Chapel, Tokyo, and Thomas Kosuke Hidaka, a first-year student at CTC, the Consultation's pianist and a blind person, on the experiences of disabled people in the church; Ms. Kumiko Yamada, Chair of the YWCA Asia International Environmental Conference, on the environment; and Ms. Kumiko Nakao of Osaka Diocese, one of the youth stewards, and Ms. Mei Miki, a mem-

ber of the Society of Women Who Think of the Church, on affirming the dignity of women in the church. Ms. Nakao's presentation was dramatic. She slowly wrapped a small doll in a ribbon, representing all the binding expectations of family and society on girls as they grow up: "Find a good husband quickly, wear make-up, dress well, walk slowly - it's all for your happiness". Finally, she decided her parents' expectations were too much. At that point in her presentation, Ms. Nakao brought a hammer down on the doll, crushing it to bits.

Tearfully she continued, "I am no longer a doll. I am a human being. I don't have to think of anything if I remain a doll. Are you trying to break the doll?" Ms. Miki spoke in support of the ordination of women to the priesthood, a very controversial issue in the NSKK. Small groups again met and prepared their input for the Consultation's final statement.

The heavy agenda was briefly relieved by a social evening with included jazz on the keyboard of Thomas Hidaka and vigorous dancing to an expanded version of the Lord's Prayer, led by the stewards. The youth also led the day's evening worship and sang a moving song on the history of Japan which they had composed during the Youth Pre Conference. The song concludes, "The official history of Nippon [Japan] does not teach us the truth. So what truth do you know? Do we know our own history, the history of Nippon?" (For the full text, see Appendix 3

.) Drafters of the Consultation Statement and Confession worked until 3 :30 a.m. when the word processors (a bit more complicated in Japanese than in English) took over. The proposed texts were finally ready at 5:30 a.m. on the last morning of the Consultation.

The final morning began with the Eucharist with Bishop Nakamura, ex-Kamikaze pilot turned Christian, presiding. Around the altar were Bishop Furomato of Kobe, the two priests from Korea and the Philippines and two of the NSKK's six women deacons. It was only the second time for me to see Japanese women clergy functioning liturgically. The Eucharist was very much a strengthening of the community before facing the difficulties of developing a final Consultation Statement and Confession in the final plenary session.

At the beginning of the morning session, one of the women participants announced that earlier in the Consultation, she and a group of the women had respectfully taken down the Japanese Hinomaru (rising sun) "national" flag flying over the conference centre. "Soldiers raised the flag on mountains of conquest and committed all their atrocities under it. It should not fly over this place." She circulated a petition requesting our hosts, the Kiyosato Educational Experiment Project (KEEP), a NSKK-related institution, to quit flying the Hinomaru flag.

The drafting committees then presented the proposed texts of the Consultation Statement and Confession. The Statement discussed the NSKK's failure to behave prophetically in World War II and its collaboration with the Tenno System and expressed the NSKK's need to discover and repent of its history. It discussed issues of discrimination, education, marginalized people, ordination of women to the priesthood and the environments. It urged the development of a workbook on the history of the NSKK to be used in Sunday schools so that Anglicans know their history, both good and bad. It urged the NSKK to develop a process of education leading to a full NSKK confession and to develop relations with the victims of Japanese colonialism in Asia. It urged the rejection of the Hinomaru flag, Kimigayo, the de-fact national anthem, and all other manifestations of the Tenno System. The Statement urged the formation of conferences and networks on these issues across the NSKK and expressed regret that the Primate and five other bishops did not attend the Consultation. Finally, it urged that Braille and sign language be prepared for the next General Synod. The text of the Confession I will discuss later.

The Consultation then spent two and a half hours in plenary revising the texts of the Consultation Statement and Confession. Because of the shortage of time and the desire of many to offer revisions, all had to be done in plenary. It was a process difficult to imagine in Canada. Participants offered everything from substantive changes, to entirely new subjects (including discrimination against lesbians and gays) to changes in Japanese language particles. Each proposal was submitted to the plenary and, unless there was violent objection, accepted. I cannot summanze all the suggestions. The final (at least until now) statement was not actually available in written form until the day after the conclu-

sion of the Consultation. An English translation will eventually be available. The final statement is stronger in its networking and advocacy suggestions. It is also clear in bringing the concerns of the Consultation forward to the next NSKK General Synod. There was less revision of the Confession.

The Consultation then moved directly into its final worship which had been shortened because of the long discussion. Lee Jae-Joung presented the final address, emphasizing the need to uncover fully the past, to realize the horror and destructiveness of it, to repent and then, freed from it, to move forward to transformation. (Throughout the Consultation, Jae-Joung maintained very strongly that unless the Japanese government made an absolutely clear and unambiguous apology for its brutal behavior in Korea and offered personal compensation to the victims, such as the so-called "comfort women", Japan would always lack respect and credibility in its present efforts to be a leader in Asia.) The gathering then joined together in the Confession, which offered the Consultation's repentance for the NSKK's prayers for the Tenno and the victory of Japan in the War, for all whose blood was shed through Japanese colonialism and warfare, especially in Asia and the Pacific, and for all discrimination, including that against women, the disabled, foreigners, buraku (outcaste classes), Ainu (Japan' s aboriginal people) and the people of Okinawa. "We should have heard their pain and cries." Bishop Furomato offered the absolution. The text of the Confession will eventually be available in English. We then said good-bye and went our ways rather quickly, in a rather Passover-like fashion.

A FINAL NOTE

As I travelled in Korea and Japan, I reflected frequently on the Anglican Church of Canada's partnership relations with those two countries. The relationship with Japan goes back more than a century. I was struck at the Consultation by how many of the speakers and participants had some connection with the Anglican Church of Canada, going back many years. I was struck that the Consultation was very much in the tradition of the Canadian Anglican missionaries' Student Christian Movement conferences and work camps and, indeed, that the Consultation was, at least in small part, the fruit of Canadian Anglican missionaries such as the Powleses, the Mutches, the Gorings, the Baldwins and many others. When I had a chance to bring greetings to the Consultation, I spoke briefly of this connection but also of the Canadian church's difficult decision in the seventies to impose a moratorium on long-term missionaries and funding to Japan. Partnership has continued without large numbers of missionaries or funding. There is certainly strong and good leadership in the NSKK, such as that displayed at the Consultation, despite the difficulties. I was also struck by how the return of missionaries from Japan to Canada enriched the Canadian church at a time when good leadership was needed. To quote the title of Bishop Michael Nazir-Ali's book on mission, "from everywhere to everywhere".

§ 英国CMS ピーター・リョン司祭の報告から抜粋 §

1995 is an important year for NSKK as the Church looks forward to its mission into the twenty first century. It is important for another reason; 1995 is the fiftieth anniversary of what the consultation organizers call "the end of the Pacific War, the end of the imperial colonial power of Japan". The "rationale" of the consultation was "for NSKK to examine its historical role in Japanese society, what the Church (NSKK) has done, and has not done, during those years of the military invasion of Asia". The consultation was also seen as an NSKK contribution to the Decade for Evangelism. "This should be the time of our own repentance as a Church for our historical faults and also the hope for the Church to become more conscious and responsible for its mission to the Society and the World".

The great significance of the consultation which was held with the approval and support of the Standing Committee of the General Synod, was the decision of the bishops, clergy and people present at the event to own what happened during those years of the rise of militarism and Japanese invasion of different parts of Asia as a part of the history of their nation and of their Church, and to bear the responsibility for what their government and the armies did to so many other peoples and countries. The decision was reached, in my observation, with much pain, agony, sadness and soul searching. Among the preparatory papers, there were documents with details of Japan's invasion of Asia, the massacres of Korean and Chinese people, and the NSKK's subjection to emperor worship and the military authorities' expansionist policies. The NSKK was alleged to have collaborated with the military authorities' attempt to turn the emperor into a majesty from Heaven to whom all Japanese people, including Christians, must submit themselves, and in effect submit themselves to the military regime's expansionist and colonial policies.

I have never attended a consultation or event which so truly touched the depth of my heart, and I believe many participants felt the same. There were tears and some wept quietly as they learned what their armies did to other countries and people in Asia and how the NSKK failed to exercise its prophetic role.

The participants agreed to issue an open statement with details of the deeds of the Japanese Government and of the armed forces during those years of the military expansion and evidences of the NSKK's failures. The statement is an act of confession and repentance.

In this statement the participants confessed before God and to all those who had suffered, and to those who had lost their loved ones, and asked for forgiveness. It will now go to the General Synod for acceptance and action. It will be translated into English to be sent to overseas partners and the Anglican Consultative Council for information and

consideration. In the statement the words "apology", "repentance" and "forgiveness" are used. It is more and deeper than an apology. This consultation will go down as a beginning of a new chapter of the life and witness of the NSKK. Without this confession, repentance and God's forgiveness, this new chapter could not begin. Indeed it should also be regarded as the NSKK's contribution to the Decade for Evangelism. It gives some new directions for the mission of the NSKK in the coming years.

The consultation did spend time discussing a number of concerns of the NSKK today. These included the purpose of education, the protection of the environment, and women's role in Japanese society and in the life of the Church. There are a number of schools, colleges and institutions of higher education related to the NSKK. The consultation regarded these institutions as great opportunities for education, or for truth in the light of its examination of past failures. Many Japanese people feel that they had been deceived by the military regime during those years. They were not given the truth, full information from the politicians and the military leaders about their schemes and the massacres committed by the armed forces.

The massacres did not come to the knowledge of the Japanese people until the post-war years. It was in the 1960s that Japanese magazines began to report such deeds. The common people were shocked by this brutality, and concern has remained until today that this ugly part of the history of Japan should be taught in the schools so that the Japanese people will not commit such acts against humanity again. One woman participant argued that a particular kind of political system, namely democracy, was imposed on the Japanese people right after the end of the war by the American administration. She argued that those postwar years should have been a time of reflection for the Japanese people about their responsibility in the war. But Japan was quickly drawn into the Cold War on the side of the Western powers.

Bishop Iida of the Diocese of Kyushu has concluded in his preparatory paper on The Fifteen Years of the War that the Japanese people must not allow themselves to be deceived in this way again. He agreed that war never happens unless there are those who deceive and those who are deceived. Those who are deceived have lost their ability to criticize, and entrust themselves in blind obedience to those who deceive them. The bishop added that "pilgrimage for peace is also the pilgrimage to recover the self-hood of each of us before God".

The consultation acknowledged the Japanese people's share in darnaging the environment in different parts of the world. Their wish for a higher standard of living and Japanese industry's need for resources in order to maintain its expansion, have led to other people living at a lower standard of living and to the destruction of natural resources such as forestry, the ocean and- the sea in some other people's countries. The youth participants at the consultation spoke against nuclear weapons and nuclear tests, and they

regretted the fact that the NSKK did not make their stand clear on such matters in the post-war years when many such tests took place.

One of the most moving presentations at the consultation was on the traditional role of Japanese women and there was an appeal for ordination of women. This longing for change was brought home by an act presented by a women participant. She sat next to a table and put a little doll on it. She then began to wrap the doll round with beautiful red ribbon. As she was doing this, she said with poise and a smile on her face, "Soon after my birth I am expected to be a pretty girl, to be an obedient daughter, to respect my elders, to have a good education., to find a good husband., to serve him and... " She then shouted, "I am not the sum total of the expectations of others. I have become rebellious, I want to be myself!" As she was saying this, she took a hammer and smashed the doll to the ground. The whole consultation was stunned by this dramatic act and there was complete silence. The young woman began to weep, and many other women participants were so moved that they wept with her.

The consultation ended with the participants saying together a long confession and intercessions drawn up and agreed by the participants themselves. I noticed some participants knelt down and some had tears in their eyes as they said their confessions together. This touched me personally very much indeed. As I looked around, most probably I was the only person of Chinese ethnic origin. I could recall what the Japanese army did to the Chinese people during those years of occupation of China. I felt the burden of the whole Chinese people on my shoulders, and the question whether we could be reconciled came right at me. I shared the tears of the participants and asked God to give us that forgiveness which we so much needed and his grace for mutual renewal. I prayed for justice between the Japanese people and all those who find it difficult to forget what they had experienced. I prayed for peace in our hearts.

By 1900 Japan was well on its way to achieving political and economic equality with leading European nations. The Anglo-Japanese treaty of 1902 signalled her acceptance as a major power in the world. Japan's defeat of Russia in 1904/5 was an early warning that the fate of Asia was not to be decided by the West. She used the 1914-18 war and the peace negotiations of 1919 to further her control of the Asian continent. She became the caretaker for, and then inheritor of Western interests in Asia. The annexation of Korea took place in 1910. The twenty one treaties of 1915 forced China to recognize Japan's territorial interests in Manchuria and in Mongolia.

It was from about 1849 that CMS came into contact with Japan. The first CMS missionary to Japan was George Ensor. He landed at Nagasaki in 1869. By 1938, there were 32 CMS missionaries in six different dioceses. Educational work, theological training, and work among women and girls in particular, were CMS' main involvement. In 1940 at the height

of the rise of military authorities, all CMS missionaries found it necessary to leave the country. The military authorities forced the churches to come together as a united church and to become independent of any foreign aid. A major part of the NSKK joined the united church. The rest refused and subsequently experienced great hardship and persecution. After the war, those who had joined the united church withdrew from it, and together with those who did not join, re-established the one church of NSKK.

CMS missionaries were most reluctant to leave. Britain and Japan had regarded each other as friends. One observation held that there was no wide cultural gap between the two countries. Japanese people were literate, polite and enterprising, both countries had a monarch as the head of the nation, and the climate was similar! The NSKK was founded in 1887. It could be said that it was the child of ECUSA, CMS and the SPG, and they all still have close links with the various dioceses of the NSKK today.

There were two main addresses given at the consultation, one was by Professor John Pobee, the director of the Theology Unit of the WCC, and the other by the Reverent David Osamu Tsukada, the President of St Paul University. Dr Tsukada' s address was a critical reflection on the history of the NSKK. He was critical of what he described as "the continuation of the colonial character of the Church, and "that the NSKK used the Church of England as their model" . The consultation organizers have described the NSKK' s expression of faith and witness as tending to be individualistic, pietistic and personally penitential. They added that "it may be a reflection of the dominant theology of the Western missionaries in the nineteenth century". Dr Tsukada's criticism and the organizers' observation cannot be ignored. Missionaries and mission organizations such as CMS who aim to serve the world church need to remember the bitter experiences of the churches in Japan during those years.

The disappointment of the consultation was the absence of six of the eleven bishops of the Province at the consultation. We were told two of the six were unwell. The bishops present were the bishops of Tokyo, Osaka, Kobe, Okinawa, Kyusu. We heard that some NSKK leaders did not agree to a review of the NSKK' s involvement during those years which might lead to an apology by the Church for what happened. There are also different views about the ordination of women. The external partners, and we are sure many participants too, earnestly hope that the NSKK leadership will listen to the voice from Kiyosato. The bishops, clergy and people gathered there wish to confess, to be forgiven, to be renewed, to be fit as God's witnesses in the twenty-first century. Bishop Iida wrote in his preparatory paper, "It is important to observe what has happened straightforwardly, without prejudice, as historical facts, and humbly to apologize what we had committed and to provide compensation for them." Indeed it is important for people outside Japan to know that Japanese people themselves have asked their own government for justice and compensation for what they lost in the war. They mourn their dead too. Starting from January, for many Japanese people 1995 has been a year of solemn and serious reflection.

§ フィリピン聖公会
レックス・レイエス司祭の報告から抜粋 §

Part II- The Mission Conference

This according to the NSKK PIM Secretary was the first conference of such kind in the NSKK, gathering more than a hundred Japanese Anglicans representing a cross section - an octogenarian and a one year old baby, professionals, farmers, conservatives, liberals, so-called anglo-catholics and evangelical, youth and women.

The Mission Conference dealt with main topics outlined in the Keynote Address of Revd. Dr. Osamu Tsukada, President of Rikkyo University. He delivered a speech on the history of Japan especially its role during World War 11 and the Tennoh System on Japanese society. He also presented some thoughts on the issue of "understanding mission". These were to be the foci of discussion for the next three days.

Of the eleven bishops, five were present (Tokyo, Okinawa, Kobe, Kyushu and Osaka). The Primate was noticeably absent.

The group discussions, panel presentations and debates centered on the following:

- Should the NSKK also apologies for the oppression Korea and the Philippines suffered during the War? Should and how could they urge the Japanese government to apologize and make up to the individual victims?

- What would be the shape of NSKK's mission and ministry in the next century considering the various issues such as ~ - ordination of women to the priesthood ~ women deacons were there). - environmental concerns - Japanese culture (The Tennoh System) - the ecumenical movement - liturgical renewal.

Our presentation dealt largely on the role of the ECP as a peacemaker, its brief history towards autonomy citing thereby a few lessons and an appeal for furthering partnership/ cooperation in mission. We also touched on the current situation in the Philippines in so far as the Japanese church and government ago concerned. John Pobee from Ghana, currently with the World Council of Churches dwelt on land ; suggested that the NSKK consider seriously the Gospel and Culture issue and cultural/religious pluralism in Japan. He added that since Christians comprise only 1% of the Japanese population, ecumenism is also a factor to consider. He was emphatic on education for mission.

Korea was more forthright as it demanded that NSKK apologies to Korea and that the Japanese government pay the victims i.e. the Comfort women and other victims of Japanese atrocities commode during the war. The Panel Presentations were reflections from Japanese Anglicans - clergy, senior citizens, youth, women, students and professionals.

On the last day, a draft resolution was presented at the Plenary. The draft to be presented to their Provincial Synod invites the Nippon Sei Ko Kai mainly, to:

- confess/apologize to the world for its participation during the war i.e. it kept quiet.
- to heed the cry of the women for equal opportunities in ministry
- to take on a more active prophetic role
- engage in liturgical renewal and education for mission

Another paper presented for ratification was a Litany by the Nippon Sei Ko Kai. In that prayer, they sought forgiveness for having prayed for the Emperor, for their role in the Pacific War and for praying for Japanese victory, for those who died and those who are alive but continue to suffer, for dis-aiminating against women, the people of Okinawa and the indigenous peoples. The prayer petitioned that ~as you loved us, (so) let us love one another~

Both documents were ratified by the Consultation, the latter used during the closing service. One foreign partner familiar with the NSKK said ~it was his first time to see the NSKK have this much of a consensus .

The closing service was made more impressive by a song rendered by the young people asking the Japanese: Official history of Nippon does not teach us that truth. So what do you know? Do you know our own history- the history of Nippon?"

Part III - Impressions and Other Highlights

The Consultation took place 50 years after World War II. The Nippon Sei Ko Kai is divided on the issue of whether or not to apologies for that War. What would they apologize for and what follows next? Add to this the issue of ordination of women to the priesthood and the demand for liturgical renewal. The Anglican Communion is also eager to hear from the Nippon Sei Ko Kai for obvious reasons. An observer from London, overwhelmed by the presentations, commented that the NSKK has literally stripped naked in front of the world, pleading for help as it goes into this process of self-introspection.

The Provincial Secretary revealed that the various groups have passionate discussions until late at night. He urged the non-Japanese group to say something to the NSKK. He summarized the general atmosphere - when the Consultation was conceived, approved by their Synod and finally took place, there was much excitement. Now," he said, "I am a little bit anxious of what is going to happen next.

Indeed, it was a moving experience to be with them as they tried to wrestle with the difficult questions facing the Japanese church today. To face the issues squarely is crucial for them. The Bishop of Okinawa said it could be a resurrection experience~. This is a tuning point for ~he Japanese Church. It is as it were a process of kenosis in order to achieve kairos. The tension is finally out to the fore.

At the outset, it seemed a very sorry event. Yet, one feels it should be a celebration for they were in a process of delivering a baby. That Korea and the Philippines as well as other partners were invited to be there indicate a serious attempt to hear what others have to say about/to them.

For us in the Philippines, the lesson is very clear: the NSKK is reaching out to us. We must do the same for it is recognized that we need one another. Another important point for us to consider is the fact that our brothers and sisters in the NSKK are not "successful Christians" as we may think. Like us, they too, are asking themselves difficult questions about what it means to follow and be obedient to the Gospel. Our partnership/cooperation with them must be seen in terms of what one can do to be in solidarity to strengthen the other. We must bear in mind that they are a very small section in the already small number of Christians in Japan, hence, the call for evangelism in their context is as urgent as it is for us in this nation. They too, are in search for effective cooperation with other Christians in Japan. Whatever step the NSKK will take is for them to take. Whatever happens to the NSKK as a result of this Consultation, they will have to face. Yet, we must be with them as they are with us in prayer and in service.

The leaders of the consultation are relatively young. They have taken on the mantle of leading their church into a retreat of some sort. Perhaps, it is not necessarily a dissatisfaction on their part that led to the consultation. Rather, they saw it as a Gospel imperative - a call to journey with Jesus Christ. It could be seen as an effort of idealists. Yet, it is more appropriate to understand it as a process towards being obedient to the call of the same Lord. Certainly, the NSKK is in a period of tension just as we are. But that is the way of the Cross. In that sense, we are never content with what we are and have but will always be pilgrims, constantly in search of the fulfillment of our having been cheated in God's image.

After the Consultation the NSKK will never be the same again and not without much pain. The upheaval that the Consultation will cause within the NSKK, their ecumenical community and their country should be properly understood as "turning things upside down" in order to inaugurate a new age. It causes anxiety yet it must be inaugurated.

And now to other highlights of the trip.

宣教協議会・礼拝式文
ー全体の目次ー

（第　Ⅰ　部）　礼　拝　式　文

開会礼拝		1頁
夜の祈りの集い		5頁
朝の賛美	＜２９日＞	7頁
	＜３０日＞	9頁
聖餐式文	＜３１日＞	１４頁

第　Ⅱ　部　　祈　　り

＜さまざまな機会のために＞　　１－１１頁

第　Ⅲ　部　　賛　美　の　歌

目　次	1頁
索　引	2頁
歌　集	3－２５頁

＊＜第Ⅱ部＞の種々の祈り、＜第Ⅲ部＞の歌集は定時の共同の祈りの時だけでなく、分団や自由時間など、さまざまな時に用いていただければと存じます。日本聖公会の宣教について、＜歴史への責任と２１世紀への展望＞を主題に、進むべき道を見いだそうとするこの協議会では多くの真剣な議論が交わされることでしょう。そうした中で、主題に沿いつつ、祈りと黙想と、また賛美の時が豊かに持たれますように。

礼拝式文および＜第Ⅱ部＞の祈りの多くは、世界教会協議会（ＷＣＣ）の礼拝資料はじめ、エキュメニカルな種々の祈りの本から訳出、またはそれらを素材としました。ここに感謝いたします。また挿絵は東京教区の佐々木道人司祭のもの、そしてAsian Women´s Resource Centre for Culture and Theologyの‘in God´s Image”誌より使わせていただきました。あわせて感謝を申し上げます。

開 会 礼 拝

１９９５年８月２８日（月）午後４時半

招きのことば

先唱者Ａ　聖霊の炎よ
わたしたちの心を暖めてください
わたしたちが隣人を愛することができますように

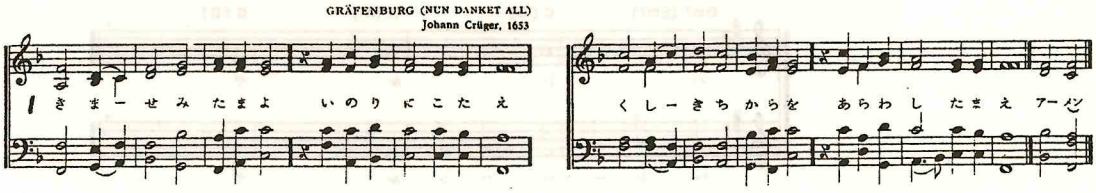
先唱者Ｂ　聖霊の炎よ
わたしたちの道を照らしてください
わたしたちが真実の中を歩むことができますように

先唱者Ｃ　聖霊の炎よ
わたしたちのただ中に
自由への情熱を燃え立たせてください

先唱者Ｄ　聖霊の炎よ
わたしたちを集めてください
あなたの命の賛美と祝いの中に

ＡＢＣＤ　聖なる恵みの神よ、ペンテコステの日に使徒たちに霊を送られたように、今日わたしたちの上にも、聖霊を送ってください。わたしたちをとらえて放さない神の国の希望を、祈りと行いで証することができますように。
聖霊をおくってください。

聖　歌　第１２４番（古今聖歌集）



２．あまつひかりよ　くらきを照らし　いのちの道に　すすませたまえ
３．きよきほのおよ　けがれをやきて　この身をにえと　なさしめたまえ
４．はげしき風よ　世のはてまでも　よきおとずれを　ひびかせたまえ
５．やさしきはとよ　愛のつばさに　みたみをおおい　なぐさめたまえ
６．きませみたまよ　祈りにこたえ　世をばみくにと　ならしめたまえ　アーメン

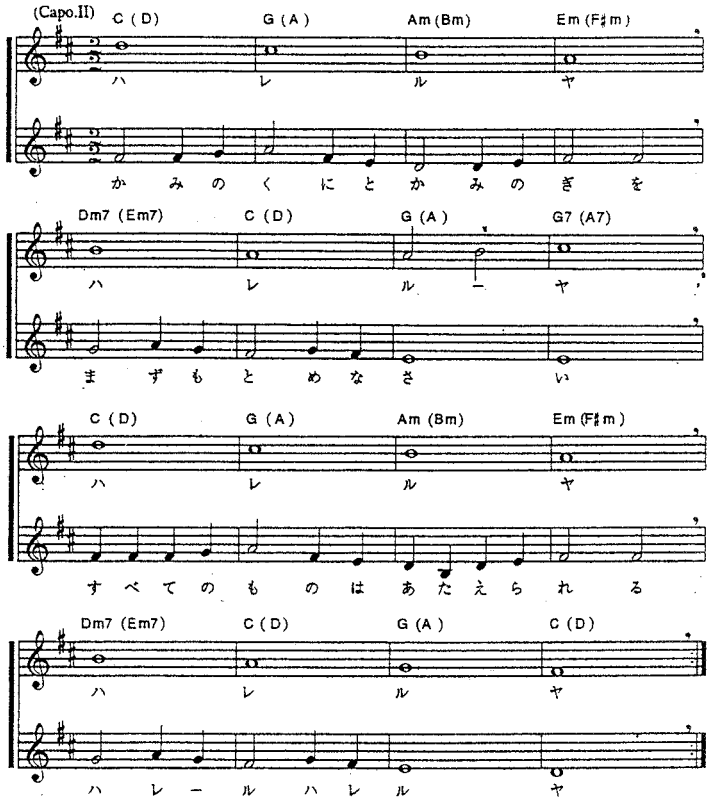
聖　書　朗　読

イザヤ書　第１１章１節から５節まで

黙　　想

参加者の出会い

＜次に参加者同士がお互いにこの協議会に寄せる希望を、身近の人と分かち合う一時を持ちます。はじめに「神の国と神の義を」を歌います。その後、隣り合った３人の方で、自分がこの協議会に寄せる期待・希望を短く語り合ってください。次にもう一度「神の国と神の義を」を歌う間に、出来るだけ移動して、また新たな３人の方々と組んでください。最後にまた「神の国と神の義を」を歌います＞



メッセージ

宣教協議会チャプレン　主教　古本純一郎（神戸教区主教）

祈　　り

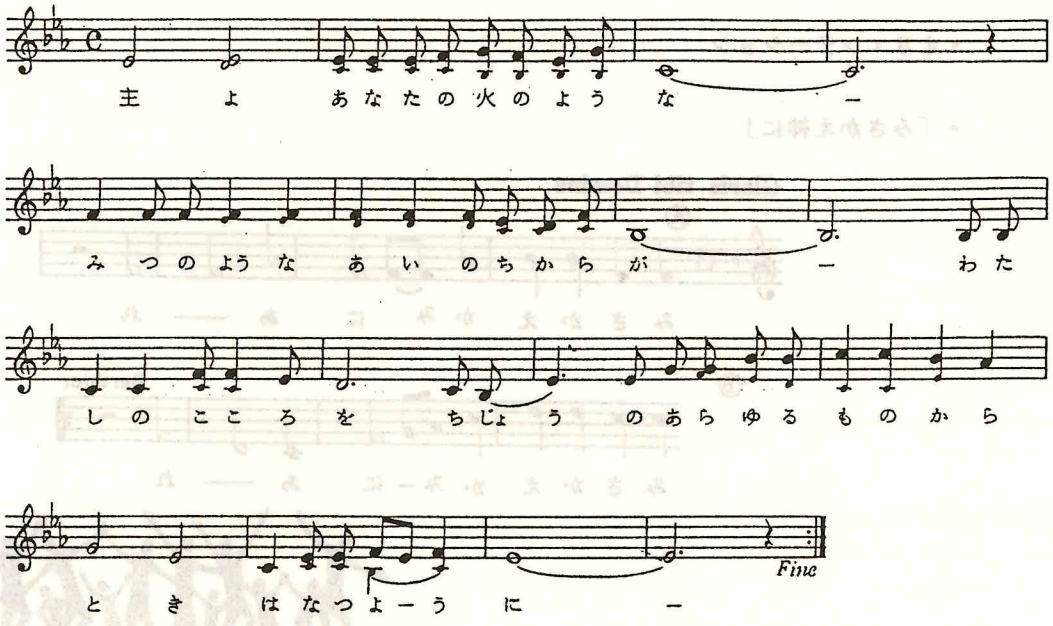
先唱者E　聖霊よ、とりなし主・慰め主よ
キリストは生きておられ、わたしたちを解放してくださると、あなたは宣言されます。あなたは思いのままに吹き、わたしたちを新たにし、息を吹きこんでくださいます。
そしてあなたは火のように、わたしたちを清めてくださいます。

先唱者F　聖霊よ、とりなし主・慰め主よ
あなたは世にある悪を明らかにされます。あなたは罪の世を裁かれます。
そしてあなたは火のように、わたしたちを清めてくださいます。

E・F　わたしたちを清めてください。狭い個人的な思いを越えたところへ、わたしたちを運んでください。あなたの創造されたこの世界と、その歴史の中で、わたしたちがあなたから与えられた使命を果たすことができますように。

全　員　聖霊よ、とりなし主・慰め主よ
あなたの火で、わたしたちを清めてください
主イエス・キリストのみ名によって　　アーメン

＜全員で歌う＞「愛のために」（1節のみ）



祝　　福

主　教　　愛を分かちあってくださった造り主なる神が
他の人々に対する　わたしたちの愛を強めてくださいますように

いのちを分かちあってくださった子なる神が
わたしたちも自分たちのいのちを分かち合うことができるよう
恵みを与えてくださいますように

そしてわたしたちの内に宿られる聖霊なる神が
わたしたちがいつも他の人々のためにあることができるよう
力づけてくださいますように

父と子と聖霊なる全能の神の恵みが
常に皆さんとともにありますように

全　員　　アーメン

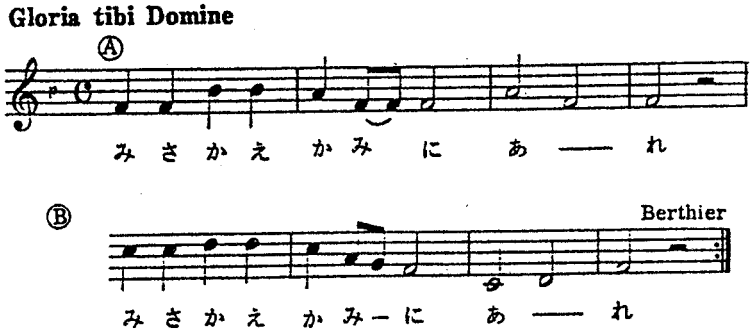
＊　　＊　　＊　　＊

• 開会宣言

宣教協議会会長　　主教　仲村實明（沖縄教区主教）

• オリエンテーション

• 「みさかえ神に」



夜の・祈りの・集い

１９９５年8月２８日（月）午後９時
２９日（火）午後９時

２８日はホン・マニ（洪　曼姫）さん（韓国）、２９日はレックス・レイエス司祭（フィリピン）の証言を伺いながら、夜の祈りと黙想の一時を持ちます。

集いのはじめに＜歌＞

（司式者は歌集の中から選択する。１曲以上でもよい）

証言を聴く前のリタニー

先唱者　光の霊よ、あなたの知恵をわたしたちの上に照らしてください

全員＜リフレイン＞主よ、わたしたちのうちにおいでください。
わたしたちを新たにつくりかえてください。

先唱者　沈黙の霊よ、この世界の中で、苦しむ人々と共におられるあなたの存在に、わたしたちが気づくことができますように

ーリフレインー

先唱者　勇気の霊よ、わたしたちの心の恐れを取り除いてください

ーリフレインー

先唱者　平和の霊よ、わたしたちがつくりだしてきた歴史の現実と、人々の体験を通して語られることばに、わたしたちの心と耳を開かせてください

ーリフレインー

先唱者　炎の霊よ、キリストの愛でわたしたちを燃え立たせ、悔い改める力をお与えください

ーリフレインー

全　員　　真理の霊よ、わたしたちすべてを
キリストの道に導いてください
主イエス・キリストのみ名によって　　アーメン

証　　言

＜２８日＞　ホン・マニ（洪　曼姫）さん（韓国）

大韓聖公会オモニ会前会長。戦中、父君が独立戦争で活躍、投獄された。１９９４年３月来日、「日韓の歴史を学ぶ会」で講演された。

＜２９日＞　レックス・レイエス司祭 Revd. Rex Reyes　（フィリピン）

北フィリピン教区／マウンテン・プロビンス（山岳州）出身。聖アンデレ神学校卒業。現在、フィリピン聖公会総主事。マニラ市郊外にて、主として北部ルソン出身の人々のためのコミュニティづくりを行っている他、東南アジア諸教会とのネットワークづくりに深い関心を持たれている。

沈　　黙

祈　　り

（司式者は自由な祈りをするか、また会衆から求めてもよい。
または本式文中の適切な祈りを用いる）

集いのおわりに＜歌＞

（司式者は歌集の中から選択する）

朝の・賛美

１９９５年８月２９日（火）午前７時半
３０日（水）午前７時半

招きのことば

先唱者　聖霊よ、おいでください
世界を新たにしてください

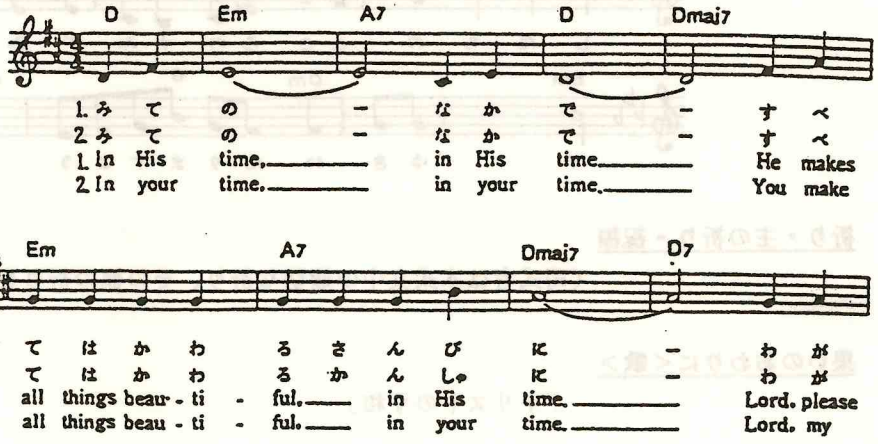
全　員　真理の霊よ、わたしたちを解放してください、
神の子として立ち上がれるように。
わたしたちの耳を開いてください、
世界の嘆きの声を聞くことができますように。
わたしたちの口を開いてください、
声なき人の声となれますように。
わたしたちの目を開いてください、
あなたの平和と正義を見ることができますように。
あなたの預言がもたらす勇気と信仰によって
わたしたちを生かしてください

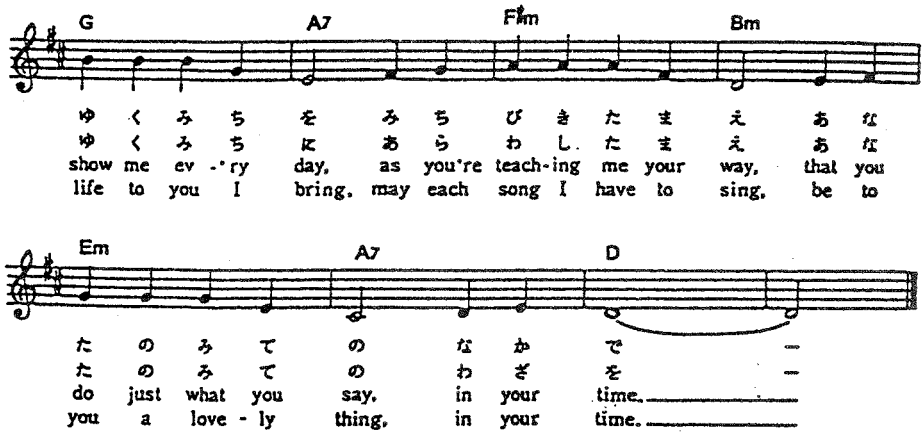
聖霊よ、おいでください
世界を新たにしてください　　アーメン

－２９日－

賛美の歌

「み手の中で」



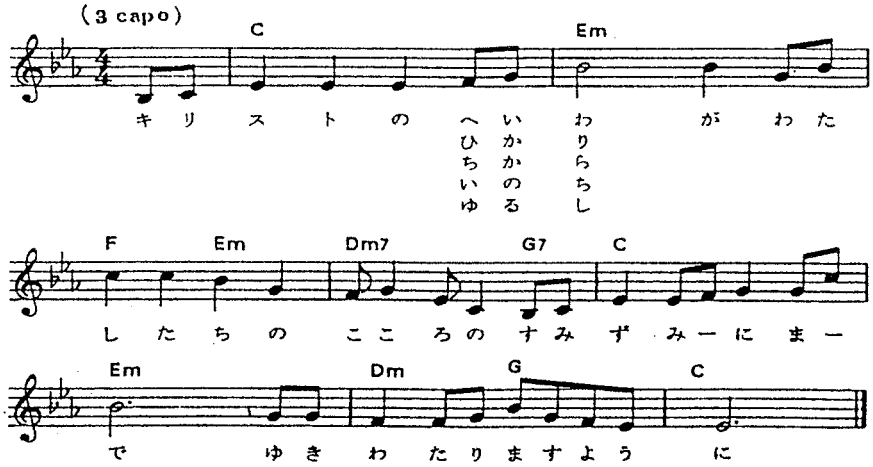


聖書朗読

「コロサイの信徒への手紙」第３章１５節から１７節まで

沈　　黙

＊「キリストの平和」手話コーラスで.



祈り・主の祈り・祝福

（司式者は本式文中の適切な祈り、その他の祈りを自由に用いる）

集いのおわりに＜歌＞

「キリストの平和」

ー３０日ー

賛美の歌

「あなたのいきを」

（答唱ー全員で歌います）

♩= 80 くらい　　ST ST

答唱　あなたのいきを　おくってください　すべてがあらたに　なるように

（先唱者）ー２節ずつ歌いますー

1. 神よ あなたの　ちから が　せかいに くまなくてり　は えて
2. あなたはいずみを　あふれさ せ　小川は山を はせ　く だる

7. 神よ あなたは　造ら れた　この世界の すべての　も のを
9. 神よ あなたは　手をひら き　かれらは みな　満たさ れる

10. あなたの息が　送られ れば　かれらは 生きたものと　なる
11. 神よ あなたに栄光と　さ んび　あなたのわざは 偉大な　もの

1. 天には光が　満ちあふ れ　地には水が流れ　うる おす
2. 野山のけものは　よみが えり　鳥も ほとりに巣を　つ くる

7. あなたのちえは　すぐ れ　地は あなたのわざで　満 ちる
9. あなたが顔を　かく せば　かれらはもとの　ちりと なる

10. 神よ あなたは愛の　い きで　すべてを造り　生かさ れる
11. 生きるかぎり わたしは　歌 う　あなたは わたしの神　世界の 神

「4つの生命のシンボルによるリタニー」

司式者　土と空気と火、そして水はいのちのシンボルです。彼らは話を聞いてほしいと訴えています。彼らは泣き叫んでいますが、人間たちはほとんど耳を貸しません。彼らは死につつあるのに、そのことを嘆き悲しむ人はあまりに少数です。声をもたない彼らの物語に耳を傾けましょう。今、静かに立ちどまり、彼らの声に耳を傾けましょう。

いのち　わたしは「いのち」。神の娘たちや息子たちが共に分かちあうよう、わたしは土を差し出します。

土　山や谷や丘や平野、わたしたち「土」から、神はさまざまな形でいのちを引き出されました。森を育て、平野には穀物をまかれ、すべての人のために食物を備えられました。しかし今、森は消滅し、わたしたち「土」は疲れきっています。

死　わたしは「死」。わたしは土と土地を多くの人々から奪いとり、少数の人々に与える。多くの人々が飢えていても、もはや疲れきった土は、食物を生み出さない。

司式者　神よ、わたしたちは土地を分かち合わず、土とわたしたちとの繋がりを断ち切り、「死」を選んでしまったことを懺悔します。わたしたちが「いのち」を選ぶことが出来ますように。

いのち　わたしは「いのち」。わたしは呼吸するための空気を差し出す。絶えることのない風のエネルギー、小鳥が飛びかい、草木の種が舞うように。

空気　わたしは「空気」。わたしたちには国境がありません。わたしたちはいのちの息を分かちあいます。雨をもたらすのもわたしたちの役目。しかし今、雨が降ると森や湖は死んでしまうのです。雨が酸でいっぱいになっているからです。

死　わたしは「死」。有害な物質で空気を汚し、宇宙の隅々にまではっていく。すべての人々がこの汚れた空気を吸っている。

司式者　この世に息を吹き込まれた神よ、わたしたちが空気をこんなにも汚してしまったことを懺悔します。あなたの創造の調和を、わたしたちは感じられなくなってしまいました。

いのち　わたしは「いのち」。明るさと暖かさ、清めと力のために「火」を差し出します。

火　わたしたち「火」は料理を作り、寒さから人々を守ります。わたしたちを囲んで、人々は唄を歌い、友情を語らい、暖かい鍋から食事をとります。しかし今、わたしたちは暴力のため、戦争のために使われています。

死　わたしは「火」を暴力の手段とする。森を燃やし、空気を窒息させ、富んだ少数の人々のために、この地球のエネルギーを与え、貧しい者には料理のための火さえ、与えようとしない。

司式者　聖霊降臨の炎よ、わたしたちのうちにあなたの正義と平和を求める「燃える火」の乏しいことを懺悔します。あなたの貧しい人々を愛される燃える情熱が、わたしたちのうちに分け与えられますように。

いのち　わたしは「いのち」。わたしは飲むための水、洗い清めのための澄んだ水を差し出します。すべての生き物たちは、わたしを求めて、水辺へと集まってきます。

水　主よ、わたしたち「水」は、すべての生き物のいのちを支えながら、創造の時から流れ続けてきました。今、川や湖、大海原でわたしたちは忍びよる汚染と戦っています。わたしたちの中に住む生き物たちが、生きのびることができるようにと戦っています。

死　わたしは鉱山や工場から流れ出る廃棄物で、水を汚している。汚れた水は魚を殺し、飲み水を苦くし、病気を運ぶ。わたしは土地から水を吸い上げて、緑の大地を砂漠とする。

司式者　水と霊とによって新しいいのちを与えられる神よ、わたしたちはひび割れた水がめのようになってしまいました。新しいいのちを与えられていながら、古い「死」をここでもまた選んでしまいま

した。

土と空気と火と水の神よ、わたしたちは今あなたのみ前に、わたしたちの古い姿を差し出します。わたしたちが「死」ではなく、「いのち」を選ぶことが出来ますように。会衆の皆さん、ご一緒に祈ってください。

全　員　**キリストよ、あなたと共に立ち上がることが出来ますように。この世界を創造され、「よし」とされた神よ、あなたの被造物とあなたの平和と正義とを、わたしたちが愛することが出来ますように。**
わたしたちを赦し、新しく生れさせてください。
主イエス・キリストのみ名によって　　アーメン。

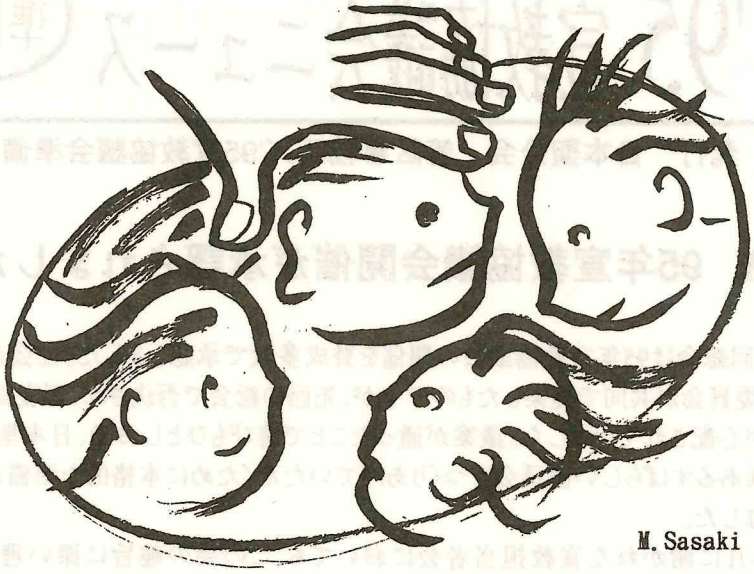
黙　　想

「わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい」（申命記 30:19-20a）

祈り・主の祈り・祝福

おわりの歌

（「キリストの平和」手話コーラス）



「私の母、私の兄弟とは誰か？……神の御心を行う人こそ、
私の兄弟、姉妹、また母なのだ」
（マルコによる福音書 3:33-35）

夜の・祈りの・集い

＜戦後５０年を覚えて－平和の祈り＞

１９９５年8月３０日（水）午後８時

閉　会　礼　拝

１９９５年8月３１日（木）午前１１時

メッセージ　　李在禎司祭（韓国聖公会・韓国聖公会大学学長）

３０日（水）の最後の夜の祈りと、３１日閉会礼拝はこの式文中の祈り、歌、その他を用いて、宣教協議会のプロセスの中で、皆様の参加、ご協力によって作りあげていきたいと思います。聖霊の導きをお祈りします。

'95 宣教協議会ニュース 準備号

発行　日本聖公会　管区事務所／'95宣教協議会準備委員会

95年宣教協議会開催が承認されました

第46回総会は95年宣教協議会の開催を賛成多数で承認しました。社会正義関係の七つの委員会が共同で提案したものですが、先回の総会で否決され、再度提案したものだけに可否が心配されていました。議案が通ったことで喜びもひとしおで、日本聖公会にとって本当に意味あるすばらしい協議会をつくりあげていただくために本格的な準備がスタートすることになりました。

また4月に開かれた宣教担当者会においても、この会の趣旨に深い理解が得られ、教区、教会においてみんながこれを覚え祈りを捧げ、献金する日を設けようという参加者の声に支えられて提案された「95年宣教協議会を覚え、献金をささげる日設定」も賛成多数で可決したことを感謝したいと思います。

私たちはこの協議会において「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」をめざして私たちの信仰の在り方を問い、教会の変革のために思いを一つにしたいと考えています。戦後50年を迎えるにあたって、戦前、戦後、戦中の教会の歴史を振り返り、主のみこころに本当に応えることができたのかと謙虚に反省し、その上に立って福音が私たちに今日何を語りかけているのかを聞き、私たちはクリスチャンとしてどうあったらよいかを考え話し合い、光を与えられ、新しい教会のビジョンをみんなでえがくことができたらと願います。

今まで準備委員会をつくって下記のようにある程度の方向や構想が話されてきましたが、総会を経ていよいよ実行委員会がつくられ、動き出すことになります。委員会には各教区の代表と七つの委員会の代表が入り、教区、教会の中で考え、担うことのできる体制を作りたいと思います。皆様にお知らせするとともに、ご参加、ご協力をお願いいたします。

テーマ　日本聖公会の宣教
—歴史への責任と21世紀への展望—

日時　1995年8月28日～31日

会場　清里　キープ清泉寮

聖公会宣教担当者会議を開催

ー１９９５宣教協議会に向けて
各教区の積極協力を訴えるー

さる４月１２日～１４日、ナザレ修女会にて、管区主催の「教区宣教・教育・広報担当者会」が開催された。各教区ごとの宣教部局の責任者を招集した会議は、過去にもあったが、定期的なものではない。特に１９９５年宣教協議会の総会議案提出を前にして、宣教協議会準備委員会が管区事務所に強く要望した経緯もある。準備委員会世話人の香山、八幡、鈴木が出席した。

一日目に、各教区からの報告。いずれの教区も、「教役者の不足」、「日曜学校の不振」、「信徒リーダーシップの育成の必要」などが共通して見られる現状認識。現状でよしとのんびり構えている余裕はどこにもないという様子がうかがわれた。その現状の根っこをどこに求めるかが、次の問題である。信徒数が何％増えたとしたら教会維持ができるからと計算して「会員拡大」を叫ぶだけでは、「宣教」とは呼び難いし、キリスト教会としてのヴィジョンも生まれないだろう。その意味では、この時代にあってキリスト教会は何をめざそうとするのか、を一定の文書の形で表明している大阪教区（「福音伝道の十年に向けて」）、中部教区（「主教書簡・実行計画書」）などは、少なくとも教区内における討論のたたき台がだされていると言えよう。

二日目には、そうした「ヴィジョンの欠如」した聖公会に向けて、小さな教団だが生き生きとした地域での活動を持っている在日大韓基督教会の李仁夏（イ・インハ）牧師が、チャレンジングな発題をして下さった。

在日大韓基督教会は、教団として１９７３年に「宣教基本政策」を討議してまとめ、そこで

1）教会中心主義の過去を反省し、在日韓国人同胞の「現実の周辺にさえふれてない」教会のあり方からの脱却

2）ともに苦しみ、抑圧からの解放のためにたたかう教会（この理解は、神学的な反発を招いたが、伝統的教会が通らねばならない道である）

3）「伝道・教育・奉仕」：差別教育でアイデンティティを喪失している同胞青年たちに勇気を与える教育として、またソーシャルアクションとしての「奉仕」　などの原則を掲げた。その背景には、エキュメニカルな宣教論の展開があり、それを在日韓国人の現実の中で受けとめようとしたものである。李牧師は、４つの宣教論のタイプを提示して、分析を加えた。

1）宣教目標を個人の魂の救いに置く宣教：

贖罪愛を福音の中心に置く敬虔主義運動として展開された。確かに、パーソナル（人格的）なキリストとの出会いは不可欠である。しかし福音をインディヴィジュアル（個人）化してしまうと、「エゴイズムからの救い」に収束して、自己完結に終わる危険がある。日本の福音主義は、多くこの欠陥に陥った。

2）社会的福音：

１９世紀～２０世紀初頭に起こり、これなくしては、ニーバー、ボンヘッファー、キングといった人々もなかった。当時の「神の国建設運動」は、構造悪を除けばやがて地上に神の国が建設できるとし、ヒューマニズムと変わらぬものとなって崩壊した。

3）教会形成：

土地の者が教会に参加することが救いであるとし、「教会成長の神学」として韓国にも大きな影響力を持つ。ユダヤ教的な排他主義や、植民地主義と結びつきやすい。イエスはむしろ、そうした宗教的・社会的枠組みからはずれた人々に個別的な関わりを持ち、「新たなイスラエル」を築いたことを思い起こさねばならない。

4）宣教の究極的ゴール：

終末論的な「神の国」に参与する宣教。神の国のイメージとしてのナザレ宣言（ルカ4·16-21）は、トータルな救いである。個人の魂の救いや教会成長のために祈るのでなく、「み国をきたらせたまえ」と祈るところに宣教の全てが表現されるのである。さらに李牧師は、川崎の在日韓国人の多住地域で自ら担ってこられた宣教活動の「実例」にふれた。日本人も受け入れる保育所を通しての地域

との関わり。日立就職差別事件にあらわれた「制度悪」としての在日朝鮮人差別とのたたかいでは、保育所の日本人父母とともに取り組んだ。この時期には信徒数は増えなかったが、数を数えることもやめていた。バルト神学を説教したが「普遍的な」福音であって、河川敷で暮らしてきた同胞の悩み・苦しみに触れる接点を神学的に持ち得ていなかった。聖書の生活の座と、現代の生活の座をかみ合わせながら、歴史の中で神の声を聞くことが大切である。神学生を教えていて、色々な教派の教会に行って説教をきいたレポートを書かせることがあるが、三分の一は、礼拝堂の入り口で入ることをしゅんじゅんした物語になる。いかに、教会が誰でも入れる教会でないか、ということ。五年かかって教会の方針への様々な反発を乗り越え、10年で教会全体が変わり始める。信徒が研修会・学習会に参加したいというときは、教会から旅費等を補助する。地域への奉仕を徹底的にやる。それが宣教の一環である。出会う人々が自ら変えられて入信することもあり、結果として教会の実り、祝福となる。こうして、川崎教会は「成長」してきた。

二日目の夜には、各教区宣教部局の担当者に対して、世話人が「１９９５年宣教協議会」の構想を分かち合った。八幡は、「なぜ宣教協議会か？」という意味づけとして、以下の観点をあげた。

1）「歴史・世界・社会・民衆の中に生きて働いておられるキリスト」の教会をめざすという方向性を確固とすること（李牧師が先の講演でその中身を示唆して下さった）。

2）日本のキリスト教が経験したもっとも大きな歴史的反省の基礎として、戦争への姿勢の問題がある。これは今日アジアとともに、また小さき者とともに生きる教会への悔い改めの実を結ぶことができるか、ということに直結する。戦後５０年という歴史的節目に、日本聖公会という共同体の歴史的反省に立った指針を提案することが不可欠である。

3）日本聖公会の閉鎖的・差別的体質が指摘されてきた。その体質改善のための訓練を提案する。

4）「宣教」を考えるレベルとして、教団としてのあゆみの総括、教区、個教会、キリスト者としての個人の生きざまが有機的に突き合わされる必要。

「我々は、教会を裏返さなければならない。教会は自らの外側で生きることを始めなければならない」

（ジョージ・ケアリー大主教）

続いて、準備委員会として協議を続けてきた宣教協議会の企画内容について、シェアし、各教区代表者の意見をうかがった。基本的構想にたいしてはコンセンサスが得られた（少なくとも強力な反論はなかった）ように感じた。むろん、李牧師がチャレンジされた「宣教理解」にたいしても、なんら「異見」は表明されなかったのだから、それが了承されたのか、黙認なのか、いずれにしても今後準備を進めていく過程で個教会の現実とのあいだで互いにチャレンジは避けられまい。この点では、教区での宣教方針が個教会からの反発にさらされながら討論を続けているという現実も紹介された（大阪）。

参加者の協議は、各教区からの参加を保障するために財政援助を管区レベルで考慮すべきであるという点についてまずなされた。各教会においてこの企画を覚えて信施を捧げるという提案がこの場でなされ、総会に提案されることになった。また総会議案可決後の実行委員会正式結成においては、教区代表を招くべきだとの意見も出た。教役者不足や日曜学校の不振という課題に応えるプログラムになるのか（沖縄）、との問いに対しては、宣教協議会では「教会をたてる理念・ヴィジョン」「いままでとりあげてこなかった福音の視点」にむしろ重点を置いてほしいとの期待も表明された（中部）。参加の前後に各教区レベルで取り組めるような「課題」「マニュアル」を提供することも検討してほしい（九州・横浜）、との意見があった。

第一回目の各教区との話し合いにしては、よいスタートだったというのが主催の島田宣教主事の感想である。今後とも、管区事務所には各教区の積極的協力を得られるように、コーディネートの役割を期待したい。

八幡明彦（準備委員会世話人）

聖公会神学院「プレ宣教協議会」報告書から

西原　廉太

去る2月20日から3泊4日にかけて、清瀬聖母教会を会場に、聖公会神学院『プレ宣教協議会』が開催された。これは、聖公会神学院の1993年度特別学期の一環として行なわれたものである。“小さくされた者の側に立つ教会を目指して”と副題がつけられたこの協議会は、先日総会でも正式議決された1995年「日本聖公会宣教協議会」に、聖公会神学院生もさまざまな形で参与していこう主旨のもとに計画されたシミュレーション的取り組みである。ほぼ1ヵ月間にわたり、3つのワーキンググループに分かれて準備が進められた。

実際の「宣教協議会」では、約６つの分科会が設定されているが、今回はその中から、①教会におけるパートナーシップを問う「女性聖職」グループ②共生社会を求める教会「マイノリティ」グループ③歴史に生きる教会「罪責告白」グループの３つの課題を選んだ。学生、スタッフがそれぞれのグループに入り、学習、調査、現場訪問等々の作業を経た上で議論を重ね、各グループの概略が、プレ宣教協議会に提出された。プレ宣教協議会では、各概略を集中的に討議し、最終文書を採択し、一冊の報告書としてまとめたのである。

歴史に生きる教会「罪責告白」グループは、とくに日本聖公会が、かつて信仰と生活の中心というべき祈祷書と公の礼拝を通して、天皇制軍国主義を支える祈りを祈った私たちの歴史的罪責を、真摯に告白する必要性を確認した。「公の礼拝と祈祷書にける日本聖公会の戦争責任の告白」および「特別共同懺悔」を作成し、いくつかの具体的提案も行なっている。

教会におけるパートナーシップを問う「女性聖職」グループは、女性の全人格的な存在と社会参与を抑圧してきた父権制社会に、教会もまた補完してきたことを問う。積極的に女性の司祭実現を求めて行くことは、父権制社会の差別構造を克服していく第一歩であり、それこそが教会の革新に向かう鍵であることを明らかにした。

共生社会を求める教会「マイノリティ」グループは、すべての人びとが共に生きることのできる社会の実現を願い求めることから出発する。グループでは、抽象的に課題を捉えるのではなく、日常的かつ具体的な「障害者」との関わりを中心にした。教会も「障害者」の生を規定している「社会常識」のフレームワークを決して越えていないこと、そして、「障害者」との具体的関わりの中にこそ希望があることを確認した。

プレ宣教協議会では、さらに「日本聖公会宣教協議会」に対し具体的提案もしている。「宣教協議会」を数日間の取り組みとして終わらせるのではなく、少なくとも２回の総会を含む、４年程度のプロセスを持つものとすること。信徒、ことに女性、青年の参加を保証すること。エキュメニカルなレヴェルからの助言を受けること、等々である。

この社会の中で排除され周縁へと追いやられている人びとと繋がり、その人びとの叫びを聴くことの中に、「この世から与えられた課題を担う教会」への転換の可能性がある。「宣教」とは教えを宣べ伝えることではなく、真に社会の、世界の痛みの現場へと自らが赴くことであることを、最終的に宣言しているのである。

'95 日本聖公会 宣教協議会ニュース 第1号

1994年9月25日発行　編集責任　前田　良彦（宣教協議会実行委員会広報担当）
発行者　日本聖公会　管区事務所／'95日本聖公会宣教協議会実行委員会
〒162　東京都新宿区矢来町65　03-5228-3171　03-5228-3175

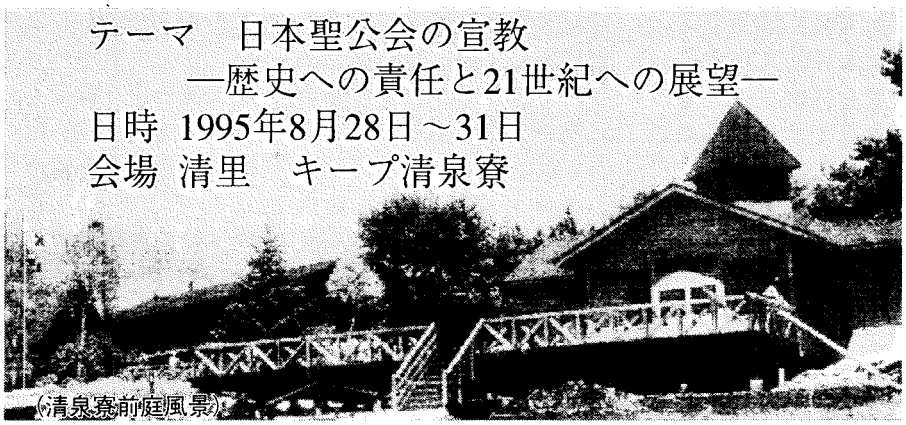
問い直そう！望み見よう！日本聖公会

「日本聖公会の歩みはこのままでいいだろうか？」

この問いは、いつの時代にも、どの教区・教会でも、問い続けられてきた問題であった。その度にこの問いへの真剣な応答が探し求められ、実行されてきた。今年の総会で、95年宣教協議会の実施が決議されたのも、このような真剣な問いかけが、今一度要請されたからであろう。今最も大切な課題が何であるかは、それぞれの教区・教会の状況によって少しづつ異なっているだろうが、ここで提案された「歴史への責任と21世紀への展望」という課題は、すべての根底にある最も大切なものであろう。来年1995年は、先の大戦後50年という記念すべき年となる。私たちの日本聖公会が、あの困難な時期、苦難の中でどのような決断をしていったか、その事実をしっかりとらえたい。来年の協議会はそのことが、今の私たちのあり方にどのような影響を与えているかをふりかえる、ある意味で最後のチャンスでもあろう。過去をふりかえることはそれだけにとどまらず、今を生きる自分を問い直すことであり、未来への望みをいだく信仰の行為である。

今私たちの目の前には、多くの宣教の課題が山積しているが、その課題に対して、決断し取り組んでいくときに、何を最も大切なこととして、誰のために決断を下しているのだろうか。そのことを問い直すのが、今回の協議会の目的とも言える。かつて日本聖公会は、コンサルテーション（宣教協働協議会）を開き、管区をあげて課題に取り組み、組織改革、あすの教会をきずく会の運動、訓練計画などに取り組んできた。

今回、その理念や方法は違うが、教区・教会をあげて全世界の聖公会が取り組もうとしている宣教の課題に目を向け、この世に生きて働かれる主イエス・キリストのみわざに参与する教会へと、召されていきたいと祈るものです。　（宮嶋 眞　大阪教区司祭　95宣教協議会実行委員会委員長）



（清泉寮前庭風景）

宣教協議会の目指すもの

９５宣教協議会―総会決議―について

日本聖公会は5月の総会において、95年宣教協議会の開催を決めました。総会決議はその目的を次のように記しています。

(1)　1988年ランベス会議にて決議された「福音伝道の十年」の中間年にあたり、日本聖公会全体、各教区、教会での福音伝道の在り方や取り組みを検討すること

(2)　私たち6つの委員会は総会の意を受けて立てられ活動してきました。共通の基本的姿勢として堅持してきているのは、「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」をめざしていることです。日本聖公会がそのような教会をめざして、戦後50年を経たいま、今後の管区、教区、教会が主のご意志にかなう確かな歩みに資する指針を見いだすこと

ここでいう「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」とは

1）苦しんでいる人々の声を聞く神
2）キリスト者の存在に先立ってこの世界で働き、救済の業を遂行する神
3）神の正義と平和が待望されているところへ我々を派遣する神

にきき、従う教会を目指すものです。そのために私たちは神の宣教とは何であるか、福音をどう理解するかを明らかにし、この世における教会の使命を改めて問い直し、21世紀に向けて展望を開くことを願い祈るものです。

もう一つのこの会の大きな課題は「戦後50年を経たいま」という言葉にあります。1995年は敗戦から50年目にあたる一つの区切りの年でもあります。

私たちの国は戦前、戦中に多くの人々を犠牲にし、他の国々、特にアジアの国々に堪え難い苦しみを与えてきました。私たちの教会も決してこの責任を逃れるものではありません。むしろ社会、世界の状況に無知であったために、また教会の存続を願うために、数々の戦争協力をし、神への祈りにおいてさえ戦勝祈願をしてきたことが歴史の掘り起こしから明らかにされています。更に戦前、戦中のみでなく、戦後50年を私たちはどう歩んできたのかを反省し、この協議会においては責任を不問にすることなく、神の前に深い懺悔を現したい、その上に立ってこそ、将来の教会の歩みに希望を与えられると考えています。以上二つのことは、聖公会全体の中でどう受け止められるかが今後の準備の中で大きな課題であり、実行委員会においても充分な協議を重ねていこうとしております。

聖公会組織成立100年を期して私たちは「私たちを平和の器にしてください」と祈り求めました。この協議会の趣旨はこの祈りの延長線上にあるものと受け止めています。また世界のキリスト教界の最近の動きを見るならば、平和、人権、環境の保全ということが重要な宣教の使命として確認されています。私たちは内的な魂の渇き、個々の信徒の悩みや苦しみ、教会の維持のための苦慮をかかえていますが、世界の多くの苦しむ人々、貧しい人々、戦火の中にある人々、人権を犯されている人々との共生を願う信仰の中で一つとされ、神の愛を求め、光を仰ぐものとされたいと願うものです。

（島田　麗子　宣教主事）

'95宣教協議会　日程案

時刻	8月28日（月）	29日（火）	30日（水）	31日（木）
7:0		起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食
9:0		礼拝・証言	礼拝・証言	礼拝・証言
10:1		休憩	特別講演 講演者未定 （調整中）	休憩
10:3		主題講演 塚田　理 （30分質疑応答）		分科会報告 全体協議（State Com.）
12:3		昼食・休憩	昼食・休憩	昼食・休憩
2:0		分科会紹介（各30分）	分科会III	声明採択 閉会礼拝
3:3	受付	休憩	休憩（Steering Com.）	
4:0		分科会I　※2	分科会IV	
4:3	開会礼拝			
5:3	夕食	夕食 （兼レセプション）	夕食	
7:0	聖書研究 井田　泉	分科会II	各教区シェアイベント など	
9:0	夕の祈り	夕の祈り	夕の祈り	
9:3	諸Committee　※1	Steering Com.	Steering Com. Statement Com. 分科会報告者作業	

㊟この日程は、検討のために事務局で作成されたもので今後の実行委員会で検討修正される予定です

分科会テーマ案

①歴史に生きる教会
②いと小さくされた者の側に立つ視点
③共生社会をめざす教会
④教会におけるパートナーシップを問う
⑤平和の器として
⑥アジアと共に生きる
⑦環境問題

現場に即した協議会へ向けて「神の宣教」と教区の現実は…

第一回宣教協議会実行委員会報告

1995年8月下旬に予定されている、日本聖公会1995年宣教協議会「日本聖公会の宣教—歴史への責任と21世紀への展望」のための第一回実行委員会が9月6日(月)から7日(火)、日本聖公会管区センターと牛込聖バルナバ教会(東京・新宿区)を会場にして行われた。

参加者は、各教区の実行委員11人と関係委員会の委員と事務局、島田麗子宣教主事、植松誠総主事の合わせて30人が顔を合わせた。

〈第一日目〉

開会礼拝、夕食後、宮嶋眞司祭(実行委員長)の挨拶、島田宣教主事からの総会決議を受けてから後の準備状況が説明され、準備委員会でとりまとめた資料(各教区の実行委員にあらかじめ送付済)を中心に質疑、討議、方向の確認を目的に会議は進められた。

各教区の実行委員の報告では、総会決議が各教区で内容的に十分に説明されていないことや、また管区から「宣教協議会」についてまだレポートがなされていないこと、あらかじめ送られている資料について、各教区として取り組みがまだ始まっていないなどの要素もあって、各教区の「95年宣教協議会」に対する受け止めが一様ではないことが明確になってきた。

各教区の実行委員の報告から主な声を拾ってみると

＊信徒獲得と結びつかないことを教会はすべきではない
＊このような協議会は草の根、手弁当でという意見もある
＊有意義な会なので、教区として強力な代表団を送りたい
＊共生社会を目指す教会として環境問題の取り組みが必要ではないか
＊現場に即した協議会を願っている
＊宣教協議会が一方的な方向に引っ張っているような感じがある。また「福音理解」が少し違うのではないか
＊教区としては協力的な雰囲気である
＊教勢、SS減少が課題
＊現実からスタートせざるを得ない
＊環境問題を取り上げたい

以上のような報告がなされた。

〈第二日目〉

二日目の午前中は、3つの分団に分かれて「宣教協議会」についての話し合いを行い、次のような意見がまとめられた。

①「神の宣教」についての理解が出来ていないので、もう少し説明する必要がある。分科会を検討して欲しい。
②預言者的に問いを投げかけるという意図はわかるが、テーマ設定をもう少し広くして欲しい。「神の宣教」・「いと小さき者の側に立つ」の理解を。
③分科会の主題を各教会に持ち帰るのが難しい。戦争責任のテーマは教会で考えたり、取り組んで来なかったテーマ

〈まとめ〉

第1回実行委員会のまとめとして、次のような確認がなされた。

(1)「神の宣教」という言葉と考えについて、各教区が自分の教区の現実と噛み合わせる必要がある。
(2)分科会の課題の中に「環境」の項目を設置する
(3)戦争責任告白について作業グループを設置する
(4)総会で決議されたこの協議会のための信施の日程は総主事が各教区との日程調整をする
(5)実行委員長を宮嶋眞司祭として承認する
(6)各教区の実行委員を確認する

北海道	広谷和文司祭
東北	影山博美司祭
北関東	金子　功司祭
東京	岡野　峻氏
横浜	相原俊次司祭
中部	渋沢一郎司祭
京都	原田文雄司祭
大阪	西田真哉司祭
神戸	桑原一郎司祭
九州	早川義也司祭
沖縄	鬼本照男司祭

(7)次回の実行委員会(95年1月16～17日)で、「神の宣教」・「戦争責任告白」議論をする。そのための作業グループを設置し、次回実行委員会までにその内容を事前に発送する。

(文責　司祭前田良彦)

'95 日本聖公会 宣教協議会ニュース 第2号

1994年12月25日発行　編集責任　前田　良彦（宣教協議会実行委員会広報担当）
発行者　日本聖公会　管区事務所／'95日本聖公会宣教協議会実行委員会
〒162　東京都新宿区矢来町65　☎03-5228-3171　FAX03-5228-3175

わたしたちにあるもの

伝道とは神がキリストを通して私たちに与えて下さった救いのみ恵みを感謝し、その喜びを言葉と生活によって人々に伝えることです。それでありますから、伝道はその恵みを受けた者、心から感謝して喜ぶ者だけが参加を許されることになります。

使徒言行録の第二章に、生れたばかりの教会の様子が記録されています。「毎日ひたすら心を一つにして神殿に寄り、家ごとに集ってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」とあります。

彼らは伝道とは何かと議論したり、方策を協議することなどありませんでした。とにかく感謝と賛美と喜びがあり、聖霊に満たされて一致があり、温かい愛の行動がありました。彼らをそのように変え、生かしたものは神の愛であり、救いの恵みでありました。伝道とは構えてするものでも、私たちの知恵や力や方策で出来るものでもなく、神が行われる業であって、私たちのその確かで素晴しい神の業に参加するに過ぎません。

「美しい門」という神殿の門で、施しを乞う生れつき足の不自由な男を、ペテロが「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ちなさい」と言っていやした物語は有名です（使徒言行録3章）。ペテロも、初代教会の信徒たちも、皆貧しい者たちで、人々の不足や欲求を満たす金も力も持っていませんでした。ただ、どんなに貧しく、苦しい境遇にあっても、感謝と喜びをもって豊かに生きることが出来る原動力を彼らは持っていたのです。「ナザレの人イエス・キリスト」です。何がなくても「この人のほかに救いはない」という信仰の確信が彼らにはありました。そして自分たちが人に与え得るただ一つのもの、しかもだれもが一番必要としているものは「キリスト」のほかにないと確信していました。現在の私たちに必要なのはこの<貧しさ>と<信仰と喜び>です。救いの確信と感謝と喜びの生活なしに、幾度集り、協議し、宣教方策を並べたてても無駄に終ることは明白です。

来る宣教協議会は、御言に聞き、互いに祈り励まし合い、自分たちの信仰と生活を深く省み、聖霊の導きと力に満たされる時であって欲しい。そしてその受けた恵みと喜びを参加者が各々の教区に持ち帰り、この会のために祈り支えた方々に分ち与えることが出来る、そのような宣教協議会であることを期待し祈っています。

（神戸教区主教　古本　純一郎）

（清泉寮前庭風景）

京都教区信徒の集い

日本聖公会宣教協議会が主の祝福の許に開催され、福音の喜びに照らされて各教区、各教会の現場に戻り、新しい「日本聖公会」を生み出すことが出来ますようお祈りいたします。

さて95年の開催に向け、各教区の諸情報を「宣教協議会ニュース」に掲載するに際し、京都教区からは去る9月に開催された「信徒の集い」について報告せよ、と仰せつかりましたのでひとこと、紹介させていただきます。

九府県(富山県、石川県、福井県、滋賀県、京都府、奈良県、三重県、和歌山県そして大阪府の一部)にまたがる広範囲を抱えた当教区は六伝道区が当番制で主催をし、各地の特色を活かして毎年の「信徒の集い」を開催しております。今年は京都伝道区が担当してこれを実施いたしました。

今年の集いには一つの際だった特色があった、と私は一牧師として感じました。それは準備段階から信徒のリーダーシップがとても強かった、と言うことです。勿論、信徒の集い、という名称ですから「それは当り前のことではないか」と言われればそれまでですが、今までにも増して(あるいは今までとは異質な)強いイニシアティブを感じた牧師は私以外にもいたと思います。

内容は、今まで殆どこの集会で支配的であった講師による基調講演が削除されました。そして信徒自身が大いに語り合いました。一人の特別な人の、いわば上からの「お言葉」を聞くのではなく、集った信徒の一人一人が「語り手」となり、同時に、一人一人が「聞き手」となる、というスタイルを終始一貫した集いでありました。

次のような分科会が用意されました。これは開催に先立ち、各教会にアンケート用紙を出し、話し合いたい事柄を提出してもらうことから作業が始められたことでした。以下に紙面を割き、その全てを列挙いたします。

・礼拝奉仕(ことに教役者の不在の教会)
・礼拝と音楽
・日曜学校の現状／情報交換
・教会におけるパートナーシップ(女性聖職)
・教会委員の選び方
・教会会計について
・聖書、祈祷書の勉強会について
・家庭訪問について
・信徒の教育
・信仰の継承(家庭内での)
・世代に応じた教会の対応(ジェネレーションギャップ／高齢化の問題)
・教会内での信徒、求道者問題のつき合い方
・クリスチャンとしての恋愛
・伝道パンフレットについて
・教会内外での奉仕活動
・歴史に生きる教会(平和の器として、戦争責任)
・いと小さくされた側の視点
・教役者の給与基準等
・教会と教区(支え合う力)
・教会での地域活動
・田舎の教会、都市の教会
・宣教の対象としての幼稚園
・言いたい放題(牧師、信徒)
・アジアと共に生きる
・命を分け合う(原発、環境、資源、死刑廃止)

列挙したこの課題を整理整頓せず、そのまま分科会にぶつけたことでした。多く集った部門、少なかった部門、様々でした。しかし、どの部門も信徒の活発な言葉が発せられた事は事実です。

ある人が講談に立ち、一つの言葉を全体(群れ)に語り、号令を発して群を統率する図式が採択されなかった集い、それも信徒の意思が強く働いてそうなりました。

牧師中心に形成されてきた教会のあり方を問う機会であった、と感じました。また聖職に抱いている信徒の思いがごく自然にこうした形を生み出し、メッセージされたのではないか、とも思っています。

(司祭　原田　文雄)

「神の宣教」「罪責告白」を学ぶ

―東京教区宣教委員会―

◎機構改革

東京教区では去る3月の定期教区会で教区機構改革案が承認された。「福音伝道10年」に呼応して、教区として何をなすべきかの議論の中から生れた結論は、各個教会と教区の働きとが結びついて教区が一体となって福音宣教の業に向う態勢を作ろうということだった。約2年余の検討期間の中で、各教会グループや今までの教区の働きに縁のなかった人達も作業に加わり、「教区とは何か」の議論から始まり、かつてない広がりをもった議論から始まり、かつてない広がりをもった議論が行われたことの意義は大きかったと思う。

4月から新体制への移行が始まり、各種委員会・プロジェクトチーム、宣教主事の設置などを経て、8月に宣教委員会が発足した。

◎宣教委員会

宣教委員会は教区全体の宣教活動を推進する役割を持ち、委員に各グループ代表が入っていて、宣教協議会の窓口の役割もこの宣教委員会が担うことになる。

9月27日開催の宣教委員会の席上、9月6～7日に行われた宣教協議会の趣旨やねらいを教区内に理解してもらうためには先ず宣教委員自身が理解する必要があるということから、次回宣教委員会で取り上げることにした。

内容は実行委員会で課題となっていた「神の宣教」理解および「罪責告白」に関して学ぶこととした。これを宣教委員会の臨席者である竹田眞主教に「神の宣教」、同委員の山野繁子執事に「罪責告白」についてそれぞれ発題を依頼し、10月14日の宣教委員会の席で学習会を行った。

◎神の宣教

竹田主教は「神の宣教」に関して、伝統的には『教会が神のことをまだ知らないこの世へ伝えること』を伝道と考えていたが、40年程前から『聖霊によって父は子を「この世」に遣わし、この世のあちらこちらに神の救いの働きは既にある』と理解するようになってきた。そしてその働きに奉仕することが教会の勤めである、と考えるようになってきたことを説明された。そして神は抑圧された者、群衆に関心を示され、弟子達はその群衆を充たすために奉仕する―とも話された。

◎罪責告白

山野執事は、まず旧約聖書の預言者エゼキエルが、罪を告白することは主を知ることであると理解いていることを指摘し、自分のありのままの姿を知ることなくて主を知ることは出来ない。罪というものを、今までは個人の内面的なものと狭く理解されてきたが、 イスラエルの時代の罪理解にもう一度学ぶことが重要ではないか、問題提起された。そして、1942年発行の基督教週報の記事を参考資料としながら、日本聖公会が紀元節大礼拝を開き、また積極的に戦争に協力していた事実、また戦後も祈祷書の公会問答で、天皇に従い「身分に応じた」勤めを尽くすことを教えていたことを指摘された。

宣教委員会では、つらい作業ではあるが聖公会全体が事実を認識し、この重い課題を受けとめていくことが歴史に生きる教会として大切であるとの意見が出された。今後は更に実行委員会から各教会に送られてくる資料をもとに理解を広げていきこととした。

（東京教区宣教主事
岡野　峻）

◇ミニ・ニュース◇

去る9月29日から10月6日、東アジア教会協議会(CCEA)主教会が京都で開催され、韓国、台湾、シンガポール、香港、マレーシア、オーストラリア、フィリピン、ミャンマーから16人の主教が参加した。10月2日夜に開かれた日本聖公会主催の歓迎レセプションで、挨拶にたった八代崇首座主教は、日本が戦中・戦後アジアの諸国で行ってきた軍事的・経済的侵略に触れ、日本聖公会が歴史と社会において何をしてきたか、また今後どうあるべきかを検討するための「宣教協議会」を1995年の夏に開催することを紹介した。またCCEA主教会の中ではこのことについて、日本聖公会からのオブザーバーとして参加した竹田眞主教によって説明された。(総主事)

主題講演講師はジョン・ポビー師に決定

ジョン・ポビー司祭は、アフリカ・ガーナ人の聖公会司祭で、神学者として聖公会だけでなく他教派からも高い評価を受けている。昨年1月、南アフリカ連邦共和国のケープタウンで開かれた全聖公会首座主教会議・全聖公会中央協議会(ACC—9)の全体会講演の講師として招かれ、『福音的で主教制の普公的キリスト教会の新しくされたヴィジョンを目指して』というタイトルで講演した(ACC—9報告書『A TRANSFORMING VISION—変容を起こさせるヴィジョン』参照)。現在は世界教会協議会(WCC)神学部門で活躍中。ポビー師の詳細な紹介は次号に掲載される。

'95宣教協議会　日程案

時刻	8月28日(月)	29日(火)	30日(水)	31日(木)
7:00		起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食
9:00		礼拝・証言	礼拝・証言	礼拝・証言
10:15		休憩	特別講演 ジョン・ポビー	休憩
10:30		主題講演 塚田　理 (30分質疑応答)		分科会報告 全体協議(State Com.)
12:30		昼食・休憩	昼食・休憩	昼食・休憩
2:00		分科会紹介(各30分)	分科会III	声明採択 閉会礼拝
3:30	受付	休憩	休憩(Steering Com.)	
4:00		分科会I　※2	分科会IV	
4:30	開会礼拝			
5:30	夕食	夕食 (兼レセプション)	夕食	
7:00	聖書研究 井田　泉	分科会II	各教区シェアイベントなど	
9:00	夕の祈り	夕の祈り	夕の祈り	
9:30	諸Committee　※1	Steering Com.	Steering Com. Statement Com. 分科会報告者作業	

㊟ この日程は、検討のために事務局で作成されたもので今後の実行委員会で検討修正される予定です

'95 日本聖公会 宣教協議会ニュース 第3号

1995年7月25日発行　編集責任前田良彦（宣教協議会実行委員会広報担当）
発行者　日本聖公会管区事務所／'95日本聖公会宣教協議会実行委員会
〒162　東京都新宿区矢来町65　03-5228-3171　03-5228-3175

マインドコントロール

沖縄戦終了50周年記念「ヨベルの巡礼」も有意義に終わり、いよいよ日本聖公会宣教協議会開催の日が迫ってきた。

「海ゆかば水づく屍、山ゆかば…大君の辺にこそ死なめ…」と歌って多くの若者が戦場で散り、帰らぬ人となった。大君のために死ぬことを無上の喜びと教えた皇民化教育、八紘一宇、米・英・佛・蘭などアジアを植民地としている国々を追い出し、アジアを解放するための聖戦と信じ込み、私は特攻に明け暮れていた。ヘッドギアーこそしていなかったが、今のオウム真理教の子どもと同じく、完全にマインドコントロールされていた。

張作霖爆殺事件（1928年）、盧溝橋事件（1937年）など、中国の軍隊が日本軍に発砲したから日中戦争が始まったと信じさせられていたが、何のことはない、何故日本軍が中国にいたのかを問題にしなかった。欧米列強のアジア植民地化に遅れをとったとのあせりから、オウム真理教の東京総本部への自作自演の爆破事件と同じく、日本軍が国際社会で自作自演を演じていたのである。その結果、沖縄で20万、日本全国で20万、アジアで2000万人もの貴い生命を失ったのです。

日本キリスト教団は1967年、「第二次世界大戦下における日本キリスト教団の戦争責任についての告白」が出され、去る4月10日には、カトリック教会、日本福音同盟など9団体が「戦後50年を迎える日本キリスト者の反省と課題」と題する声明を発表した。どうして聖公会だけがしないのだろう?アメリカもカナダも日系人に戦後補償をしている。日本の天皇と麻原教祖と聖公会は罪責告白をしないのだろうか?マインドコントロールされている日本人を解放することを宣教協議会の主目標にしようではありませんか。（仲村　實明・沖縄教区主教）

（清泉寮前庭風景）

歴史を振り返り未来を展望する

宣教協議会の課題にむけて

—宣教協議会事務局スタッフ
執事　香山　洋人—

宣教協議会の課題は、歴史を振り返ることと、未来を展望することです。これは、「過去のことはここでひと区切りを付けて、肝心な未来のことを考えよう」ということではありません。

今から半世紀以上前、戦争という未曾有の事態に直面した教会は、培ってきた福音理解、宣教論、教会論等の全てをかけてこの難局に立ち向かって行きました。その中で様々な小さな選択、大きな決断を積み重ねる中で、結局は「聖戦完遂、皇軍勝利」のために祈る教会へと変って行きました。

政治的、警察的圧力、あるいは世間の目など教会を取り巻く状況の困難さは今からは想像もできません。しかし、朝鮮植民地化である日韓併合を祝い、南京陥落を神に感謝していた教会、そして武勇こそが信仰者の本分と説き、この戦争は神のみ旨にかなっていると信じていた教会は、神と隣人を見失った瀕死の教会ではなかったでしょうか。戦場となった国々では、同じ聖公会の聖職や信徒が日本軍と闘い、殺されました。戦争に反対し投獄されたキリスト者、信仰を守るために権力に屈しなかった教会もありました。アジア全体の戦争犠牲者は二千万人以上といわれます。これが神のみ旨であったはずがありません。

こうした歴史を振り返り、戦争に荷担して平和の器となりきれなかった教会の姿を反省しようと動き出すのに、私達が戦後五〇年を要したことがあるいは問題かもしれません。

日本基督教団が戦争責任告白をしたのは今から二八年前のことでした。正義と平和、愛と和解を告げるはずの教会が、なぜ戦争協力をするに至ったのか、明治大正期以来の聖公会の姿勢、体質そのものを問い直すことはそれ自体大切な作業です。それ以上に、私達は教会の犯した過ちの重さを実感しなければならないでしょう。その過ちを率直に認めて懺悔することが必要ではないでしょうか。

「あのときはしかたがなかった」という受けとめからは教訓は生まれません。隣人との和解が神への献げ物に先立つことを覚え、悔いるものの砕けた魂を軽しめられない神に信頼し、新しい出発のために過去を振り返る必要があるでしょう。

一口に戦争といっても、年齢や経験したことがら、立場や歴史観など一人一人が違う思いをもっているはずです。

それらを一つの言葉にまとめ上げることは容易ではありません。しかし、少なくとも私達は、戦争による被害者、犠牲者の声に耳を傾けたいと思います。それは聖書の神が苦しむ者の声を聴かれる方であるからに他なりません。

協議会には、韓国やフィリピンなど海外からの証言者が招かれています。教会の歩みを振り返り、人々の証言を聴き、一人一人の思いを分かち合う中で、今この時点で、私達が歴史を振り返って得たことが何であるのか、そこから出て来る祈りがどんなものであるのか、何らかの形で歴史に留める努力をしたいと思います。

戦争中、総会の名によって出された決議は、総会によってあらためて反省される必要があるでしょう。祈祷書で、日々の礼拝で祈られていた事柄は、私達の祈りの言葉で悔い改められる必要があるかもしれません。表面的な「謝罪」がかえって歴史の真実を歪め、人々を傷つけるものだと考える時、真剣な取り組みと誠実さが問われているように思います。

聖公会だけでなく日本の教

会がなぜ戦争協力をし、しかもそのことを悔い改めることに速やかでなかったのか、福音理解と教会理解が問われてます。

私達のどこかに、教会や信仰を歴史や社会とは無縁の何かにしてしまい、霊的、精神的なことがらにだけ押込めてしまう傾向があるのではないでしょうか。様々な問題を個人の問題、私的な人間関係に還元してしまう傾向があるのではないでしょうか。そんな信仰、聖書理解に基づく教会が、今までの聖公会だったかもしれません。

しかし、聖書の民の歩みを学ぶ時、歴史と世界のただ中で、具体的にその御姿を顕わす神がいることを忘れることは出来ません。神が愛されたこの世界こそが私達教会の信仰の証しの場であり、主イエスがそうであったように、教会も世の人々のただ中で「地の塩、世の光」として生きることが求められてるのではないでしょうか。

教会の宣教は主イエスの業を引継ぐことです。主イエスは、社会の破れや人間の痛み、苦しみのただ中に神の国の初穂があることを教えられました。

私達の社会にも、様々な苦しみ、痛み、破れがあると思います。それらの多くが、あの侵略の歴史、戦争の現実と深いつながりがあることを知らされます。

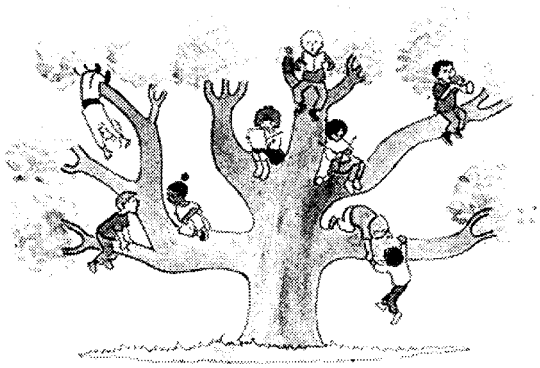
在日韓国朝鮮人の存在はまさに歴史の生きた証しです。在日の人々がいまだに差別を受けている現実は植民地支配の名残といえないでしょうか。また、利潤追求や快楽のためにアジアの資源や人々を利用している現実があり、この問題は「経済侵略」とさえ呼ばれています。また、国家や企業、学校といった大きな制度の枠組みの中で苦しみはじき出されたり、マイナスの存在とされている人々が叫んでいます。

これらの現実から目を背け、世間にほめられることを望み、強いもの、大きなものをたよりに歩んでいくのが私達の教会だとしたら、それはが戦時中に、挙国一致、大政翼賛体勢にまきこまれた教会と同じ過ちをくり返すことにならないでしょうか。

信徒の減少や財政難、その他諸々の課題の中で苦しんでいます。何よりもまず、自分自身をととのえて、維持と管理の目途を立ててから次の一歩を踏みだそうという姿勢になりがちです。

宣教とは何か、ということを神学者や会議の声明に学ぶことも時には大切です。しかし、私達の身の回りで既に始められている働き…たとえそれが小さなものであったとしても、教会の方向を指し示し、人々に希望を与える、そんな働き…があるでしょう。

私達の教会の毎日は、今回、宣教協議会が切り口として提示した「環境問題、共生、パートナーシップ」という課題からは掛け離れているように見えるかもしれません。信徒を増やすことや日曜学校を盛んにすることがなぜ課題にあがらないのか、という声もあるでしょう。しかし教会の働きの基礎となる理解、教会は大勢の信徒で何をしようとしているのか、子供たちに何を伝えようとしているのか、そんな宣教の中身、基本的な姿勢を、私達は後回しにしてきたのではないでしょうか。今の日本…東京の中で福音がどの様に響き、教会はどこに招かれているのか、私達が人々



の苦しみや嘆きに出会い課題と向き合う時、与えられるみ言葉があり、自ずと祈りが湧き上がることでしょう。

私達東京教区には、特に「共生—共に生きる—」をテーマにした問題提起、協議会全体への貢献が求められています。

「多様な会衆形成」を標語に歩んできた東京教区が今までの経験を分かち合いながら、日本聖公会全体のそして世界の聖公会の宣教の輪の中に自分自身を位置付けることができればと思います。

協議会の終わりには声明や提案が作られることでしょう。参加者全員が日本聖公会という一つの宣教の業を確認して、互いに励まし合うことができればと願います。

そのための指針を産み出すことが協議会の課題であると思います。歴史を振り返り未来を展望するということは、自らの罪を悔いて赦される出来事こそが、新たな歩みの基礎であることを確かめることではないでしょうか。

聖書の神の民がそうであり、そして私達一人一人がそのように歩み、生かされてきたように、日本聖公会にも、悔い改めと和解の恵みが、そして小さくされた隣人と共に歩む新たな視点が与えられるように、皆様のお祈りをお願いいたします。

（東京教区時報528号付録より）

宣教協議会日程表（日程が一部変更になりました。ご参照ください。）

時間	8月28日(月)	29日(火)	30日(水)	30日(水)
7:0		朝の祈り・朝食		朝の祈り・朝食
8:0				チェックアウト
9:0		聖書研究…井田司祭	特別講演 J・ポビー司祭	全体協議 まとめ…個人、全体
10:0		証言①…ホン・マニさん		
11:0		分団Ⅰ —主題講演を受けて、 内容の分かち合い	分団Ⅲ —特別講演を受けて、 内容の分かち合い	閉会聖餐式
12:0		昼食		
1:0				
2:0	実行委員集合	パネルディスカッション	発題…環境・共生・協働	
		ブレイク		
3:0	受付	分団Ⅱ —パネルを受けて… 日本聖公会の 「歴史への責任」	分団Ⅳ —発題を受けて… 日本聖公会の21世紀への 展望、提言、課題 の明確化	
4:0	開会礼拝			
5:0	オリエンテーション （分団）	自由時間		
6:0	夕食		夕食 …懇談会	
7:0	主題講演 塚田司祭 …質疑応答	分団Ⅱ—続き…		
8:0				
9:0	祈りの集い	祈りの集い 証言—R・レイエスさん	祈りの集い 黙想	

'95 日本聖公会 宣教協議会ニュース 第4号

1995年10月5日発行　編集責任前田良彦（宣教協議会実行委員会広報担当）
発行者　日本聖公会管区事務所／'95日本聖公会宣教協議会実行委員会
〒162　東京都新宿区矢来町65　03-5228-3171　03-5228-3175

変革への第一歩　—宣教協議会の三泊四日—

95宣教協議会は1995年8月28日から31日、清里、清泉寮において総勢182人の参加者を得て、大きな感謝の中に無事終了した。二つの総会を経て、4年に及ぶ準備の中、十数年ぶりに開催された聖公会の大会であり、敗戦後50年目の節目、ヨベルの年を意識した熱い思いと課題を担った協議会であった。そのため全教区から選出された実行委員会では、その性格と路線を巡ってかなりの緊張もあった。しかし、大いなる導きのもとに、私たちの思いをはるかに越える素晴らしい協議会となり、「宣言」によって歴史への責任を明確にし、21世紀への展望の課題をまとめることができた。「共同ざんげ」を採択し、閉会礼拝で戦中、戦後の責任を共に神の前に懺悔することができ、感激と感謝と涙の中に散会した。

協議会の主題は「日本聖公会の宣教—歴史への責任と21世紀への展望」であり、会長を仲村主教、チャプレンを古本主教、実行委員長を宮嶋司祭が務めた。

第一日目午後から開会礼拝の古本主教のメッセージ、仲村主教の開会宣言によって会はスタートした。その夜は早速、塚田理師による主題講演「日本の歴史と宣教理解」、2時間にわたる充実した内容に示唆を与えられ、更に韓国聖公会の洪蔓姫さんから戦中の歴史を踏まえた証言をお聞きした。

二日目は朝の礼拝の後、10の分団に分かれ、前日の講演、証言について分かち合いがされた。その日は井田泉師による聖書研究「正義を行うことへの召し」に啓発され、午後には「歴史に生きる教会」について岩井梅代（東京）、仲村主教（沖縄）、清公一（中部）、相原太郎（横浜）の4氏の発題者が自分の体験や取り組みの中から問題を提起した。その日は同じ分団で、ずっと歴史への責任を話し合い、夜はフィリピン聖公会のレイエス司祭のアジアの証言に耳を傾けた。

三日目はジョン・ポビー師による特別講演「あらゆる場を変革するために（To transform each and every place）」によって世界的な視野から、全聖公会の課題と展望を学び、午後には「21世紀への展望—思いを巡らし働き続けるために—」共生…障害者の問題を中心に、環境問題、パートナーシップ…女性と男性、の三つのグループから具体的な問題が発題された。分団で最後のまとめがされた後、夜は立食パーティーでの交流会が開かれ、海外ゲストの挨拶や参加者の交流、スチュワードの歌や踊りにみんなが巻き込まれ、あっという間に2時間が過ぎた。

最終日は早朝から厳かな聖餐式の後、全体協議で三日に渡って開かれた分団の意見をまとめた起草委員会の原案が提出され、意見や修正案が続々と相次ぎ、司会の宮嶋委員長が奮闘したが、大幅な時間延長の末、ようやく「宣言」の合意を得た。閉会礼拝には韓国の李在禎神父がメッセージを述べ、日本聖公会がこんなにも戦争の責任に深い反省を持ち、苦しんでいることに大変心を打たれたと語られた。採択されたばかりの共同の懺悔を深い感銘のうちに神の前に献げ、三泊四日の協議会を閉じた。礼拝委員会によって準備された諸礼拝は新しい賛美の歌と祈りによって参加者を一つの心とした。また若いスチュワードの陰の働きは素晴らしかった。事務局員は夜も眠らず献身的に会の運営を支えた。

こうして神様は私たちの心からの祈りと願いを祝福され、終始私たちと共に在し、新たな変革へと聖公会を導いておられるのを実感することができるような大会であった。心に灯された火をもって山を下りた一人一人の参加者によって21世紀への新しい教会の一歩が始まることを願い祈りたい。（島田　麗子）

日本聖公会 95宣教協議会　宣言(抄)

1)はじめに(略)

2) 日本聖公会の歴史への責任と応答

五十年前の1945年、わたしたちは、天皇制国家日本の敗戦と植民地支配の終焉という大きな歴史的転機に立ちました。総会も主教会も教区も各個教会もこのとき、戦時下に預言者的働きをなしえなかったことを反省し、日本が侵略支配した隣人へ心から謝罪し、それを通した真の和解の関係を模索する機会を、神から与えられていたのです。

しかし、日本聖公会は、1947年二十二回総会において、1938年版の祈祷書を正本として復活採用しました。その祈祷書には、「天皇のため」「紀元節祈祷」などの祈祷文がありました。さらに1959年改正まで、祈祷書の公会問答において「隣に対してなすべきことは如何」の答えとして「…天皇陛下とその有司(つかさ)に従い…」と教え、聖餐の前の全公会の祈りにおいて「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈り、早晩祷では天皇への祝福を唱和していました。

日本聖公会は、国家の意志を神の意志とする信仰の決断をしてしまったことについて、根本的な反省をいまだ表明していません。今回、協議会に集ったわたしたちは、教会として、歴史への責任を自覚する原点がここにあることを確認しました。

皇国臣民化政策の結果として引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、戦後は米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られ、1972年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄からの問いかけがありました。しかし、本土側が応答することを怠ってきたことを、反省しなければなりません。

この協議会において、韓国やフィリピンの聖公会に属する隣人たちから、民族的な苦難のなかでのいのちがけの信仰について証言を聞きました。わたしたちは、日本聖公会が戦争に加担した責任を痛みをもって自らのものとし、敗戦後、すみやかにこの責任を明らかに表明できなかった戦後責任を確認します。それゆえわたしたちは、日本聖公会が植民地支配と侵略戦争を支持・黙認し、戦後は被害者への国家としての謝罪と補償を実現する努力を怠ってきた事実を明らかにし、日本聖公会が全体として告白・謝罪・懺悔を行なう必要性を痛感します。

戦後日本聖公会は、隣人のいのちを脅かす差別、経済収奪、核政策、環境破壊などに対し、同調こそすれ、預言者的な声をあげてきませんでした。わたしたちが歴史を問うのは、そうした現状を変革し、未来へ向かう決断をするためです。

3)21世紀への展望

「福音伝道の十年」の中間年にあって、わたしたちは、教会が＜神の宣教＞のために存在することを改めて確認します。この場合の＜宣教＞とは、歴史の中で働く神の召しと導きのもとに、絶えず変革のプロセスを大胆に歩むことを意味します。人権・正義・環境は宣教課題の中心です。わたしたちは「小さき者」とおとしめられ、苦しんでいる人々の諸権利の回復をめざす教会となることを決意します。

第一に、礼拝、説教、聖書研究等が再検証され、より豊かにされ、また信徒使徒職の働きが、より認められるべきと考えます。

第二に、教会教育、神学教育の場における歴史教育、人間教育、生命の尊厳を保証する教育、すなわち＜宣教を担う者を育てる教育＞の実践が必要です。

第三に、教会は、在日韓国朝鮮人、被差別部落民、アイヌを

はじめとする先住民、沖縄の人々、滞日在日外国人、障害者と共に生き、声を聞く場でありたいと願います。

第四に、キリスト教の伝統が、長い歴史の中で女性差別の源となってきたことを反省し、女性の人間としての尊厳が回復されるために働くことを明らかにします。現状では、女性の教区教会の意志決定への参与は極めて不十分です。聖書の読み直しと機構的改革が必要です。さらに、女性の司祭按手の実現は、21世紀に向かう教会の変革において日本聖公会が直面する重要問題と認めます。

第五に、核をはじめとする環境問題へ関わり実践することは、とりもなおさずわたしたちの生活全体を変えることを意味します。

第六に、悔い改めと赦しにより救われた者として、また生命の尊厳の立場から、死刑囚に心を向け、死刑の速やかな廃止を願います。

上記の課題に取り組むためには、宣教課題、方策に関する情報を教区、教会間で分かち合い、各個教会・個人を励まし、支えるためのネットワーク、課題別のネットワーク等が考えられます。

4)提案事項

－主教会、各教区、各個教会で、戦争責任告白の必要性について協議を持つ。

－戦争責任に関する宣言を日本聖公会が表明するプロセスとして、

・歴史的事実の学びを各教区、教会で進め、歴史認識を共有する。

・日本聖公会の戦争責任を具体的に明らかにし、共同で用いる告白文案を協議、起草する。

・「特別共同懺悔」の式文を検討する。

・植民地支配、侵略の被害者に対して謝罪表明をする。

・戦後責任を明確にし、表明する。

これらを含めた日本聖公会としての戦争責任に関する宣言を教区、管区委員会などが、積極参加することにより起草し、次期総会議案として提出する。以上を促進するために、宣教協議会実行委員会がプロジェクトチームを選出する。

－各11教区が、日本が侵略した国の教会と姉妹関係を結び、積極的に出会いの場を作る。

－協議会の内容を共有し、主教会としてのフォローアップを検討することを求める。

－「歴史を生きる教会」ワークブックをさらに普及する。

－日本聖公会関係では元号、「日の丸」、「君が代」の使用、町内会費の神社への寄与分の支払いなど、天皇制への関わりを拒否する。

－アジア・太平洋の植民地支配と侵略戦争の被害者への国家による謝罪・補償の実現にむけ努力する。

－エキュメニカルな宣教に関わる人々をはじめ、アジアの人々と出会える場をさらに拡大すること。

－協議会後、教区間、課題別ネットワークを作る。

－総会等の会議では点字、手話、要約筆記等を必ず用意する。

－日本聖公会関係学校で、平和と人権の視点から教育の指針を作る。

－立教大学原子力研究所原子炉の稼働停止を求めていく。

－公教育（私立も含む）の内容に、国家の介入を許さない運動をする。

95宣教議会「宣言」全文および「共同ざんげ」をご希望の方は管区事務所までお申し出ください。

熱い議論を重ねて

宣教協議会を終える

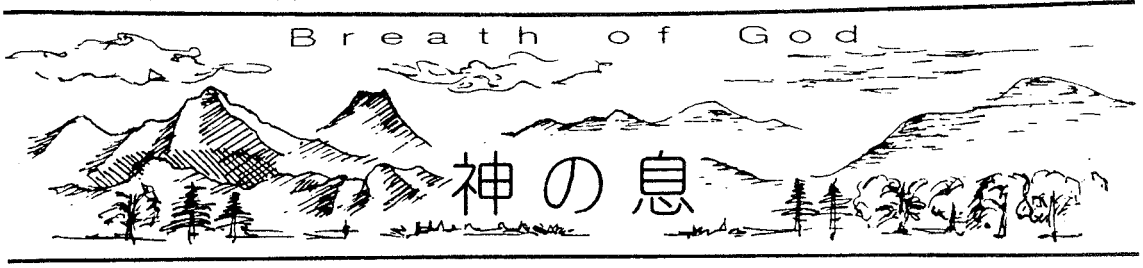
「全教区からの申込は大丈夫だろうか?」というのが宣教協議会事務局の一番の心配であった。なにしろ、一度は総会で否決されている、また、主教会は「自由参加」ということであった。協議会に出席する予算をあまりとっていないというきょうくもあるとの情報もあった。準備の実行委員会では、「このような形では各教区に帰っても勧めにくい」という声が上がり、全体のプログラムを大きく編成し直すという作業も必要となったりした。本当に心配したのである。協議会という性格から各教区の参加者、個人参加者に事前準備をお願いしなければならないと考えたが、これは各教区の実行委員によって昨年から宣教協議会を意識したプログラムを準備されていた。また、各教区の教区報では実行委員が宣教協議会について十分なお知らせをしていたように思われる。

宣教協議会の準備のためのワークブックを『歴史への責任』と『21世紀への展望』に分けてそれぞれまとめて参加者に送ったが、編集方針としてビジュアルなものを考えていたが、実際は活字が多く読みこなすのに時間のかかるものとなったことは否めない。

聖公会の出発から今日に至るまで、私たちの聖公会の歩みは順調な歩みではない。歴史への責任という視点からすれば、聖公会としての教団のあるかたが問われてくるような姿が浮かび上がってくる。このような姿を直視するのは忍びないことである。残念ながら、これが私たちの教会の姿なのである。これらの責任を先達たちだけに負わせるわけにはいかない。なぜなら、今の私たちも今日に至るまで責任的に歩んできたとは言えないからである。『21世紀への展望』ワークブックについても触れておかなければならない。このワークブックでこれからの宣教の課題を全面的に示しているわけではない。これまでの準備の段階で議論されたことの幾つかをはずさなければならなかった。いずれ違う形で提案できればと願っている。

協議会終了時に参加者に対して協議会についてのアンケートを求めた。全員が応えてくれたわけではないが『歴史への責任』ワークブックを読んで日本聖公会の責任を感じとってくださったことを記してくださった方がいる。「言い逃れが出来ない」と呟いた参加者もいた。同時に歴史資料の記述があまりにも惨いために読み続けることを拒否してしまった参加者もいた。編集の段階で躊躇したのも事実である。しかし、歴史の証言を無視することはできないのである。もしこれらを資料から省いてしまったとしたら歴史に目を閉ざすことに等しい。宣教協議会の今後の提案として『歴史ワークブック』を新たに編集して歴史学習のテキストとするように求めている。近いうちにその作業が始まるだろう。

協議会については、開会説教、主題講演、特別講演、各発題、礼拝の中で行われた証言、協議会の宣言を取り纏めて報告することになっている、これらの報告が各教会・各教区の宣教の働きに沿うものであるよう願っている。(司祭前田良彦・事務局)



180人を越す大所帯
ー宣教協議会始まるー

今回清里に集まるのは、オブザーバーも含めて、63人の司祭と8人の執事、525人の主教を含む1825人。その内、女性が1058人、女性が524人で全体の三分の一を切る男性が残念。各教区やいろいろの委員会から参加の他に、他教派から参加のグスト2人、海外聖公会からのグスト11人、個人参加2人、ゲスト19人を含む大所帯だ。

この会議で開催決定以降春の総会目的や概要は実行委員会事務局から出されてきた「宣教協議会ニュース」や、各教区の広報などで紹介されてきた。

まだ全体像が見えないという批判や、参加者それぞれの受けとめや期待があるのだろう。管区の委員会がもとにして、一年前から各教区から選ばれた11人の実行委員が話し合い、課題や狙いについて様々な準備がなされてきたのだが、実際にこの協議会に中身を与え方向性を導き出すのはここに集った参加者たちだ。三泊四日のプログラムはグループを基本に進められる。A～Jまで13～14人のグループが10設けられた。講演や発題、礼拝などの経験は全てこのグループで分かちあわれ、フィードバックされていく。いわば宣教協議会の基本単位だ。ここで様々な経験を持つ人々と出会うことで、今後の働きのネットワークが広げられればすばらしいだろう。

開会礼拝説教要旨

説教　神戸教区　古本純一郎　主教

全国からこの清里の地に集まることができたことを感謝します。背後にあるお方、すべてのものを一つにされる主なる神様を賛美します。ヤコブの手紙からいろいろのことを学びたいと思います。一つは語ることよりも聴くこと。主イエスが弟子たちを優先させること。連れて山に登られたのは、宣教方策を論じるためではなく、祈るため、神に聴くためでした。

人間の智恵は浅はかなものです。神のみがすべてを知っておられます。まず聴くこと、学ぶことを大切にしたい。意見を異にする人々にも十分に謙虚に耳を傾けたい。二つ目は、聴くだけではなく、御言葉を行なう人になること。語るだけ、聴くだけに終わってはなりません。決議することだけでは、教区、決りたことは、教区、そして参加者それぞれの生活の場で実践が為されなければなりません。この協議会が日本聖公会にとってきのネットワークが広げられればすばらしい会うことで、今後の働

全国青年大会実行委員会がスタート

8月25日から27日までプレ青年大会（総合司会　松本誠　大阪・芦屋）が長野県野辺山で開かれ、来年開催が予定されている全国青年大会の実行委員会が選出された。この年大会の準備会としてプレ青年大会が開かれたもので、全国から青年達が持ち寄った企画案をもとに話し合った。26日には発題として、3人の講師から「震災から見えてきたもの」「戦前・戦中・戦後」「新興宗教とキリスト教」というテーマで話があった。その後分団で、テーマについて話し合ったのち、実行委員会で実行委員長を決定した。実行委員長は橋本周二郎（東京・三光）。今回の宣教協議会のスチューワードはプレ青年大会に参加したうちの1人。

特別講演　講師　ジョン・ポビー師到着

ジョン・ポビー司祭（Revd John Pobee）
アフリカ、ガーナの聖公会司祭。
1993年、南アフリカ連邦共和国ケープタウンで開かれた全聖公会主催主教会議、全聖公会中央協議会の全体講演の講師として招かれて講演した。現在は世界教会協議会（WCC）神学部門で活躍中。

28日14時、特別講演講師であるアフリカ、ガーナ聖公会司ダ

ジョン・ポビー師が会場に到着した。

お知らせ

資料をご利用ください

メシモリにはテーマに関係する資料を販売するコーナーがある。聖公会出版も書籍を抱えて参加しているのでご利用願いたい。

宣教協議会中配布される印刷物は例理想科学提供の印刷機を使用しています。

理想科学印刷機を提供

宣教協議会に関わる人々1

福音とは

江種 寅夫さん 80才

（東京・聖アンデレ教会）

今回の宣教協議会では最高齢の参加である江種寅夫（えぐさとらお）さんにお話をうかがいました。ゆっくりとした口調ではっきりと、いまの聖公会を冷静にそして真剣に語ってくださいました。

聖公会は、宣教活動に積極的ではないように感じます。たとえば部落解放のことで十何年も話し合われているがいつスタートするのか、と言われたことがあります。弱い立場の人たちが礼拝・行事に何名出席しているのでしょうか。聖公会には近寄りにくい雰囲気があるのでは。3代・4代と続いている信徒が多いということは、そういった人たちに対して、壁があるのではないでしょうか。イエスキリストは弱い立場の人たちに実際に出掛けていって接触しています。福音はそのように具体性をもって広めるものです。歴史の過程をふりかえることは、立派なことだと思います。言葉で表現されていても、取り組みなされなければ、意味はありません。もっと大衆の中に積極的に関わってゆくことこそ、福音を広めることではありませんか。

一方、最年少は

西原 来（むぎ）ちゃん（7カ月）

スチュワード登場！

参加者の皆さん、この宣教協議会の各会場にて、様々な働きを担っている青年達の姿を見かけたでしょうか。彼らは、この協議会の準備や会議をスムーズに進行させるために、言わば裏方の働きをするスチュワードの青年達です。具体的には受付、会場づくり、資料作成、記録作成など様々な役割を果たしています。彼らは、25日から昨日まで行われた「プレ全国青年大会」に参加した後、この清里に参集し、昨夜は、明け方まで会場準備などに取りかかってきました。教会関係の国際会議では、必ずといっていいほど、青年達によるスチュワードの活躍を見ることができます。青年達にとっては教会の具体的な働きに接する機会でもあり、また会議の運営について学ぶ良い機会にもなるだろうと思います。そして、この体験は来年の全国青年大会の実施にもきっと生かされるでしょう。ただ、彼らも若いとは言え、連日のハードスケジュール（睡眠3～4時間）で彼らの多くが非常に疲れていますので、もしお会いになりましたら、ぜひ、励ましていただければ幸いです。そして、来年の青年大会を応援して下さいますようお願いいたします。因みに、この「神の息」も青年達の手で発行されています。

スチュワードシップを語る

今朝未明、スチュワードが宣教協議会の準備作業中、スチュワードルームに乱入、スチュワードシップについて熱っぽく語った。

「オレが神学生の時ここ（清泉寮）でスチュワードっぽい事をしたことがあってさ。全国教役者会といってオレたち神学生は全員招待されたんだよ。（途中略）君たちは恵まれてるよ。この宣教協議会は100年たっても語り継がれる。全国教役者会は歴史に残らないが、これは残るんだから。」N司祭の体験に基づいた話は、それまで責任の重さに緊張していたスチュワードらをリラックスさせた。

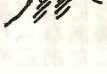
スチュワードが語る おすすめポイント

今朝五時五十五分、八ケ岳の絵を描きに外へでた。太陽はすでに昇っていて明るく、空気はすんでいる。

吹きさらしの大地から見上げる八ケ岳はまさに迫ってくるよう。風に薙ぎ倒されそうになるのをこらえて、八ケ岳の頂上にうずめいている大きな雲をみた。

神の息だ！

反対側を見ると、まさにさっきの動の世界とは、うってかわって静の世界があった。静かにたたむ山の連なりの奥にほのかなピンク色を帯びた富士山が浮かんでいる。富士山の足元にはうすいふじ色の海がある。富士山が一つの島のようにみえた。

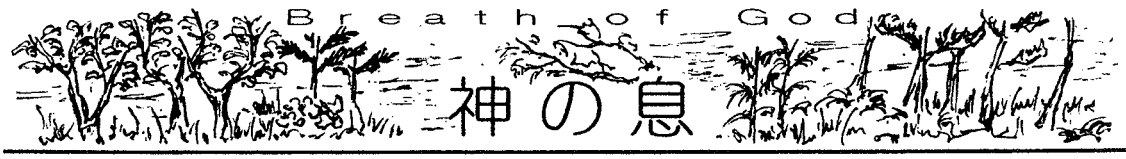


あっ！　十字架の上に日の丸が！？

日本聖公会の全国の人々が、教会の歴史への責任を話し合おうとしている、ここ清里の清泉寮のメインポールに、日の丸が高く掲げられた。しかもアンデレクロスの上に、教会のシンボルを押し潰すように、堂々と旗めいている。

戦争中の教会も、このようにして十字架を日の丸の下に屈伏させてきたのだろうか。何か、象徴的な光景ではある。聖公会の関連施設でこうした光景を見ることは、あまりうれしくないと思うのは私だけであろうか。

もっとも人によっては、ただのマルとバツにしか見えないという意見もあるが・・・。しかし、それにしても日の丸がマルで、十字架がバツというのは、キリスト者にとっては、あまり気分の良いものではないが、皆さんは、あの日の丸、どのように感じますか？



わたしたちは隣人を見失っていなかったか

大韓聖公会の洪曼姫（ホン・マニ）さんが、かつて日本による植民地支配に抗して闘った父上の経験を含めて証言。隣人が苦しんでいたあの時、わたしたちの教会は何を祈っていたのだろうか。

本当に苦しんでいる人

「日本語が上手ですね。」協議会が始まる前ホン・マニさんと話していた時に、私はホン・マニさんにそう言いました。しかし、祈りの集いでホン・マニさんの証言を聴いていて、私は「あーっ」と思いました。すっかり忘れていたのです。日帝時代に、私たち日本人が朝鮮民族の言葉を奪っていたのを。「歴史を知っていますか？」と、ホンさんが語りかけます。ホンさんの小学生の時の話、家族の話、教会の閉じこめられ殺された朝鮮人の話、食糧が何もかも奪われたお百姓の話。聴いていて私は、自分が日本人であることが辛くなりました。しかし、忘れてはいけないのは、私は奪った側の殺した側の人間であること、本当に辛いのは私ではないことを。

ホンさんが苦しめられていた時、私たち日本人が何をしていたのか、教会が何を祈っていたのか、本気で歴史と向き合わなくてはなりません。「何を謝るのですか？」と次に問いかけられたことに、私たち自身の言葉で、今こそ答えられるように。洗礼を受けるとき、罪を自覚し、罪を悔い改め、罪を告白した時のように。

資料は活かせるか

事前に配付された「歴史を生きる教会ワークブック」は89頁「21世紀への展望ワークブック」は26頁。頁を捲るだけでも、もちろん内容を読みこなすのは容易ではない。しかし、これだけ聖公会に関わる資料が、しかも貴重な史料や証言も含めてまとめられたのは初めてのこと。それでも使いこなしてこその資料。会期中に資料を読み合う時間はとりにくいかもしれないが、想像力を働かせつつ、日本聖公会の歴史の振り返りのために、どこかでじっくりと取り組む必要があるだろう。

協議会の運営は

運営委員会

広谷和文司祭、鬼本照男司祭、西田真哉司祭、山野繁子執事、原田文雄司祭、竹内紀久子さん、谷昌二司祭、宮嶋真司祭、島田麗子さん、加藤博道執事、前田良彦司祭が全体の運営委員として活躍。このほかにも各分団には司会と報告者が割り当てられ役にあたる。よろしくお願いします。

礼拝のための

多彩なリソース

今回の協議会の礼拝のために様々な祈りや歌が集められた。「これだけでもりっぱなお土産」とは準備にあたった某氏の弁。今後この四日間に与えられた祈りも加えて日々の礼拝をさらに豊にするためにそれぞれの場で用いられることだろう。

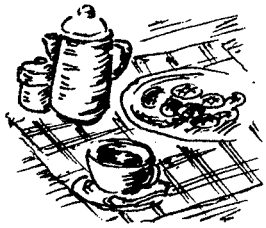
新人記者

安易な取材で大ミス

昨日の本紙での記事「宣教協議会に関わる人々」に重大なミスが発覚。江種さんを「最高齢参加者」と紹介したが、本当の最高齢参加者は、北海道教区の藤井清さん83歳（北海道・札幌キリスト教会）だった。しかも参加申し込み第一号もこの方だった。藤井さんは北海道教区の総会代議員として永年活躍されていた方で、編集部には記事のまちがいを指摘する参加者からの声がさっそく寄せられた。誤報を詫びるK記者に藤井さんは「これは若い協議会だから若くまちがわれるのは大いに結構」と優しいひとこと。藤井さん、それから江種さん本当にすみませんでした。

もっとコミュニケーション

今回は日本語、英語、韓国語を使う人たちが集まっているのだが、常時提供される通訳は日ー英だけ。しかしこの日ー英だけでもりっぱなお土産」とは準備にあたった某氏の弁。今後この四日間に与えられた祈りも加えて日々の礼拝をさらに豊にするためにそれぞれの場で用いられることだろう。



今日の天気

晴れときどき曇り

主題講演

「日本の歴史と宣教理解」

講師　塚田理　司祭

日本聖公会の歴史は基本的に「天皇制国家によって押収されてきた」と言っても過言ではない。何よりも歴史への検証がなされるべきである。日本聖公会は国策へ迎合したこと、への反省をしていない。唯一あるとすれば、1945年12月の第21臨時総会において佐々木鎮次主教が「総会告示」の中で、「国策への迎合」「教会の使命の忘却」「主教の権威への不服従」等に言及したこと位であろう。日本聖公会は、佐々木主教の反省と総括を踏まえて自らを冷静に点検評価し、これを通して戦後の再建の出発点とすべきであった。合同問題が持っていた本質的課題についても反省、検討することをしてはこなかった。「皇国聖公会」の標榜、「神社参拝への加担、「天皇のため祈り」等々、何一つ反省していないのではないか。日本聖公会は神が示す地ではなく、日本国の示す地に赴いた。拡張・発展のみに集中してきた日本聖公会。それは「植民地的教会」の体質の継続でしかない。日本聖公会は、学問、文化に関しても、他宗教との関連性においても、キリスト教の真理性についての研究を十分に果たさず、そのために聖書の意味と真理性を十分に明らかにすることもできていない。日本聖公会は教会の本来的使命を回復し、歴史に向き合い、戦争責任を明確に告白しなければならない。過去を忘れたならば、現在も未来も見ることはできない。過去から目を離すことなく、現実を忠実に見つめて、未来の希望に向かって歩むこと。未来を見る人のみが過去を反省することができるのである。

塚田立教大総長、文部省解体を訴える!!?

今日の文部省会談で表明か?!

昨日の主題講演において、塚田理氏は、戦争中の天皇制国家主義教育が、キリスト教学校や教会のいのちを奪ったことに触れ、「戦後も国家管理教育が続いている。行政改革は先ず文部省をなくすことから始めるべきだ」と述べた。私立学校総長の立場での勇気ある決意表明に、会場は一時どよめいた。同氏は、本日、文部省の役人その会見を予定しており、その場でもこの主張を貫かれることが期待される。とくに青年は、管理教育の被害当事者として、「断固支持」の声を挙げている。なお、このニュースは、文部省に明朝一番でFaxされるとの噂もある。戦前の構造の如く「私立学校の許認可権を握られているから・・・」などと弱気なことを言わず、キリスト教学校が歴史を真と摩に振り返り、国家に対しても言うべきことを言える教育姿勢をもつようにエールを贈るとともに(「日の丸」「君が代」強制にも屈するな!)日曜学校で次世代に「歴史への責任、21世紀への展望」を課題とするような教育を行なうことの大切さも感じさせられた。

「日本の歴史と宣教理解」～塚田理司祭の主題講演を聞いて～

「あたりまえ」って何だろう?頭の中が?でいっぱいになる講演だった。教区の境目が都道府県やや地方単位で区切られていなくても何とも思わなかったし、教役者の服装はあいうもので、もっと他にいろんな可能性があるとさえ、思わなかった。

それと同じように、キリスト教にまつわるいろんなものごとは、そういうものだ、と何の疑いもなく思い込んでいるこわさ。これは教会がそういうものだ、と教会自身、特に日本聖公会自身が何の疑いもなく、鵜呑みにし、教えてきたことをご自身の自戒もこめて、塚田先生は発題してくださった。

自分の思う「あたりまえ」が、どのくらい前に「あたりまえ」になったのかを知ること、つまり、自分の今いるところを正確に知るためには、どういう道をたどってきたのかを知る必要がある。それが本当に「あたりまえ」かどうか、「あたりまえ」として次に伝えていっていいのかを確かめること。「聖書の開示」によって、自分たちのものとなった「福音理解」が、それを確かめるときの道具になるだろう。

ちょっと立ち止まってみよう/足のうらにふれる地面を感じるために(どこにいるの?)/自分の歩いてきたあしあとをふりかえるために(何をふんできたの?)/そして/次の一歩をふみだすために(どこへ行くの?)

宣教協議会に関わる人々 2

誰かにインタビューをしようと勇んで編集室を出るとホールから音楽が聞こえてくる。ホールに入ると、日高さん(東京教区・聖職候補生)のジャズっぽいステキなピアノと、黒田さん(京都教区・聖職候補生)と加藤先生(東京教区・牛込聖公会　聖バルナバ教会執事)のギターの音があった。

しばらくぼーっと立ちつくしていたように思う。我にかえって思わず「これだ!」インタビューに挑もうと思うと何を聞きたいのか自分でもわからず、また演奏会が始まっていた。明日の礼拝の練習から始まったそうですが、今後も夜に演奏会をするそうです。

Breath of God
神の息
編集室：カンファレンスセンター1F
内線　181

Breath of God

神の息

真実の姿の痛み
レックス・レイエス司祭語る

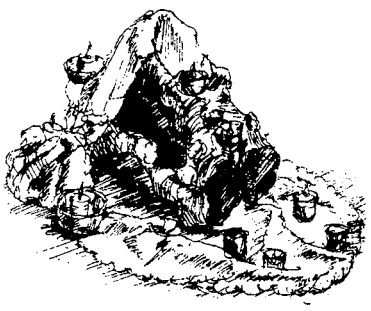
二九日の夕の祈りの集いにおいて、フィリピン聖公会総主事のレックス・レイエス司祭は、ご自身と「日本」との関わりから語り始めた。そこで語られたのは日本軍、バターン死の行進、戦争の記憶を拒否する日本人観光客、漁場からねこそぎ魚を奪　ていくトロール船だった。

カトリック国フィリピンで小数派である聖公会は、山岳州を中心に宣教活動を行ってきた。イゴロットに代表される山岳民族はフィリピンでは被差別者だ。レックスさんは少数者の人権を課題として勢力的に働いているという。

フィリピン政府がダム開発を決め、聖公会の村に立ち退きを迫った時、人々は闘い、ついには流血の惨事をも招いた。マルコス時代にはこんな話は珍しくなかっただろう。しかし、そんなトラブルの原因となっているダムの多くが日本の「援助」によって作られていることを考えると、もしかしたらわたしたち日本国民の税金が、廻り回ってフィリピン聖公会の人々に苦痛を与え、血を流させたのではないかと、考え込んでしまう。

レックスさんは、かつてスペインとアメリカの絶大な影響下にあったフィリピンが独自のアイデンティティーを回復することの大切さを語った。フィリピンの歴史を振り返ると、フィリピン聖公会は加害者の立場にあったと。レックスさんは語った。

歴史を受けとめそれに学ながら過ちを克服しようと苦悩するフィリピン聖公会の歩みを証しするもの。「真実の姿を知ることで解放されるたとえそれが痛みを伴うものであっても。」この言葉は私たちの教会にも大きな励ましだったのではないだろうか。

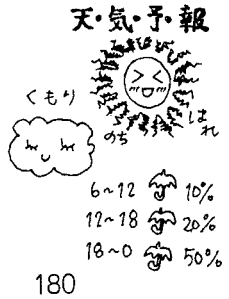


プレ青年大会の夜

ほとんどのプログラムが終わり、あとは帰るだけになった。2日目の夜、酒を呑み交わしながら、前回の全国青年大会のビデオをみていた。見ながらそのビデオが終わり、少し話をしていると、何処からともなく、音楽が流れてきた。キャンプファイヤーの大好きな京都教区の人々が踊りだした。他の教区の人は最初は照れているのか，それとも、京都教区のノリについていけないのかどうかわからないけど、だんだんみんなノッてきてくれてファイヤーがないがキャンプファイヤーのような盛り上がりだった。あっという間だった。みんな、肩の力が抜けたかのようにみんな変わっていった。

この本、ここでしか買えないかも・・・・

メインホールとなりに突如現れた書籍販売スペースでは、おなじみ聖公書店が神学書を中心に書籍を販売している。中には、今回の講師やメンバー、スタッフが書いたもの、翻訳したものが含まれている。面識のある人が著者や訳者の本は親しみが湧いて読みやすいもの。サインをねだるのも今がチャンスだ。そして同じ部屋で並んで売られているのが、「聖公会人権声明集」や「ACC報告」など管区の関係委員会などが翻訳、発行した資料。これは一般書店では買うことの出来ないもので、しかもわたしたちの教会に直結している大切な文書ばかり。日本聖公会の宣教を考える人にはぜひ読んでいただきたいものばかりだ。



日本聖公会の歴史への責任と応答

発題をうけて

岩井梅代さんの発題は、教育の重要さと同時に危険性を痛感するものであった。ご自身の個人史をふりかえっての発題は、戦前から戦中にかけての皇民化教育の歴史的な証言でもあった。そして、一九六七年秋、GFS訪韓使節団の折り，公園での男性たちによる問いかけが、自分の受けた教育を見つめなおすきっかけとなった、というくだりでは、韓国と韓国人キリスト者に対する日本とその教会の行いについてほとんど知らない私たちへの問いかけでもあることを強く思った。

岩井　梅代　さん

仲村實明主教は、天皇の罪責問題に集中することは、私たちの悔い改めの大きな問題であると述べられたが、このことは「本土」の教会が、真に沖縄とその痛みに出会い、自らの問題を意識してゆくことと密接な関係があるのではないだろうか。例えば、私たちが礼拝のなかでおこなう懺悔と赦しの祈りを沖縄の歴史的な文脈のなかに置いてみることは私たちの生とキリストの十字架を見つめ直すことになろう。それにしても黄門サマよろしく西暦表記のパスポートを仲村主教がさしだしたのにはインパクトがあった。デカデカと印刷された「菊の御紋」はあまりにも皮肉だが…

仲村　實明　主教

清公一さんの発題では、受験体制のなかで、生徒たちが近・現代史を学ぶ機会を実質的に奪われている現状が報告された。ただ、一方で五〇パーセント以上の若者があの戦争を日本の侵略戦争と認識しているアンケート結果には希望をもてる。しかし、その歴史観も「就社後」にはほとんど台無しになってしまう。そして、そこにカイシャの論理に迎合してきた教会・牧師の姿とが見いだされるという問題提起は教会の責任についての重要な視点だと思う。さらに、資本主義からの解放の神学に希望があるのではないかという指摘は今後の教会の担うべき課題であろう。誰もが天に吐かれた唾が迫ってくる光景を頭に描いたのではなかろうか。

清　公一　さん

ところで、私たちがほとんど知ることのない事実として、立教大学の原子炉建設がある。この問題について発題をしてくれたのが相原太郎さんである。この原子炉は米聖公会ワシントン教区よりNSKK一〇〇周年記念として「プレゼント」されたもの。ところで、この建設地・武山は、住民の強制退去や朝鮮人の強制労働などの犠牲の上に成り立ってきた歴史をもつ。そして、現在にいたる歴史のなかで日本聖公会はどこに立ち、立とうとしてきたのか、と問う。原子炉が贈られたその時、そこで神は苦しんでいたのではないか、とも。

一九八八年ランベス会議は、神の宣教の場は「汚染された世界」である、と述べている。神は、経済的な繁栄と構造的な暴力のなかにではなく、虐げられ踏み台にされている人間の側にいるのである。貧しい人たちと一緒に考えられるNSKKになってほしい。

相原　太郎　さん

以上四名の方の発題に共通するのは日本聖公会が歴史のなかでどこに立ってきたか、ということができると思う。そして、それは未来の日本聖公会のありようについての重要な示唆でもあった。

宣教協議会に関わる人々 3

夕食のときに知り合ったMiss Bronwen P. Sagayoへフィリピン聖公会Vに、お話をうかがいました。Sagayoさんは、日本の研究の修士論文を書くために今回の宣教協議会に出席されたそうです。英語の中に日本語をもり込みながらゆっくり話して下さいました。

心理学者になりたくて、大学時代勉強したけれど、納得できず、続けて心理学を勉強したかったけれど、今は日本の勉強をしています。なぜ今、日本の勉強をしているかは自分でもよくわかりません。神様が私に何かをさせるために、日本の勉強をしなさいとおっしゃっているのです。

日本の勉強をし始めた頃は、とても辛くてやめたくなることが何度もありましたが、その度に、神様が私に勉強をするようにと息をふきかけ、押し出して下さいました。日本の研究を続けていくなかで、フィリピン人と日本人との間で沢山の誤解が生じていることに気付きました。それは、文化、言葉、歴史、システム（教育、経済、公害）の違いによるものだと思います。これらの違いを勉強することにより、フィリピンと日本のかけ橋になりたいのです。いろんな誤解があるけれど、日本人とフィリピン人が互いに理解し合うことが、大切な目標のひとつであると思うのです。そうしていくことにより、同じアジア人として、またクリスチャンとしてひとつになれるのではないでしょうか。今回の宣教協議会は、フィリピンと日本のかけ橋のひとつになったと思います。

そして、最後に、日本の人たちは、自分たちを責めすぎているように思う・・もっと、これからどう仲良くしていくかを考えていくべきではないかという意見を頂きました。

そして、sagayoさんは今年の一二月結婚されるそうです。おめでとう！みなさん、見かけたら一緒に喜んであげてください。

「正義を行う」ことへの召し
―聖書研究を受けて―

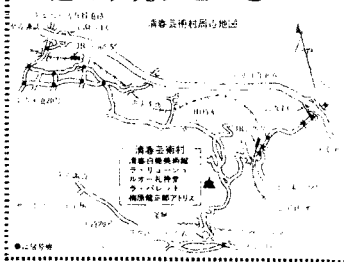
井田　泉　司祭

「正義」という言葉は、人間的な、あるいは政治的な言葉としてあまり教会になじんでこなかったかもしれない。しかし、アブラハムに与えられた召命の言葉「主に従って正義を行え」は、キリスト教信仰の根幹に関わる大切な言葉だ。しかし一方、正義という言葉が災いをもたらしてきた事実もある。大日本帝国も戦争を「正義」の闘いと言っていたし、様々な侵略や暴力が「正義」という名目の下に行われてきたことをわたしたちは知っている。それを語る者の意のままにどうにでも弄ばれてしまう「正義」という言葉の危険性に、教会は尻込みしてきたのかもしれない。しかし、わたしたちは聖書の示す正義の意味が、権力者や宗教者の独善を鋭く批判する言葉であることを学んだ。虐げられた者の叫び、カインからゼカルヤに至る、義のために闘って苦しんだ人々の叫び声に耳を傾けることが、すなわち正義を求めることになるのだ。わたしたちは人々の叫びによって何が正義であるかを知るのだ。正義は数的な平等や公平を意味しない。虐げられた尊厳、傷つけられた命の側に立つことがすなわち神の求める正義だ。ところで教会は、こうした招きに応えてきたのだろうか。いや逆に、不義を行い、人々を虐げてすら来たのではなかったか。その人たちの声、訴えの声は神にとどいている。アベルの血は叫び声となって神の耳にとどいている。教会は、人々の叫びに応えて生き、ついには十字架で殺されたイエスに従うものであるはずだったのに、全ての民の祝福の基として建てられたはずだったのに。

日帝支配下の朝鮮のキリスト者たちが求めていたという「命がけの説教」とは何だったのか。み言葉に従うことが命への道であるという希望に満ちた確信が「命がけの説教」をなさしめるに違いない。み言葉に反して百年生きるよりは、いくたび死んでもキリストに従いたいと祈った牧師がいたという。わたしたちの教会はどうだったのか。「非国民」と呼ばれ「敵性宗教」といわれることを恐れキリスト者こそ最も愛国的で天皇に忠実であれと説いたのではなかったか。わたしたちは教会のあるべき姿を取り戻したい。祝福の基となる神の民の姿に立ち返りたい。そのために、神に従い正義を行うものの群れでありたい。そこからこそ、わたしたちに命の道が示されるからだ。そこにこそ真の救い、囚われからの解放があるからだ。アブラハムに与いう希望に満ちた確認し祝福を求めて歩んでいこう。

清春白樺美術館
長坂駅からタクシーで五分

宣教協議会後、ゆっくり帰ろうと思う方に。小さな美術館ですがセザンヌ、ゴッホ、ロダンの他梅原龍三郎、高村光太郎、バーナードリーチなどの作品が展示されています。ちょっと寄り道してみませんか。



スタッフより ひとこと！

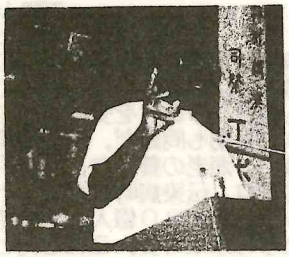
多くのことが色々なことでつながっていることと思います。▼少なくとも戦争責任のことはきちっとしたいと思います。▼講演会・発題・分団等の時間が短かった。プログラム終了後に交わりが深められ良かった▼神様、この次は参加者になりたい▼参加者は熱心に参加し準備の努力が報われます。▼歴史のなかで働かれる神様は今回の宣教協議会を歴史のなかに組み込んでくださるのでしょうか？▼生活がゆったり人らしくできれば平和が来ると思います。▼合意は納得のいく妥協。妥協は見せかけの合意。協議会は祝福に満ちた合意であってほしいなあ。▼私は三十才生きているうちに日本聖公会がもっと生き生き活き活きとなりますように。

すべての場所を変革する

特別講演要旨　　ジョン・ポピー司祭

宣教はこれだと定義することは出来ないほど、多様に理解されてきた。しかし、宣教を構成する諸要素として以下のことは指摘できるだろう。

宣教は：共同体の中に共同体を建設する、過程であり、イエスキリストの出来事を告知することであり、弟子を養成することであり、社会的に行動することであり、神の国の先取りとなることである（そして犠牲的愛、真理、義と公正、自由、和解、平和が神の国の指標である）。これらは内に集中しつつ、また外に広がりつつ進められることになる。これらを含んだ包括的なものというのが宣教の性格として大切である。全ての場を、それぞれの場から変革することが宣教であり政治、経済、宗教などと世界の現実を分割する考えをは異端だといいたい。　教会の職務は全て宣教に向けられている。日本聖公会の初代主教ウイリアムスの例の様に、主教は宣教のために立てられた職務。宣教における職に注目し、宣教の前線で働く人々に仕える者としての教役者の指導性をは宣教のために働く信徒に者であるが、教役者と信徒は相互責任と互いの信頼関係の中で支え合っていくリーダーシップとは何かを考えたい。我々はすべての信徒の祭司



日本聖公会がどう遣っていくか、日本における宣教は何か、これらは全て日本聖公会自身にしか答えられない問題である。アメリカやイギリス、ガーナーの経験がその答えを導き出すことを助けることは出来ないだろう。日本聖公会についての問いかけは、日本聖公会自身の経験と歴史からその答えが導き出されるものだ。英国や米国をモデルとすることは出来ない。

ではこれからどうやっていくのか、その課題について。宣教と文化：宣教は文化を移植することではない。聖書とそして生活こそが人々と社会を変革する信仰生活の源となる。多元主義：人口の1％のキリスト者として、日本の教会は考えなければならない。キリスト教社会の様な多数者としての宣教と日本での少数者としての宣教の違いは大きい。そこでまず、「残りの者」という聖書の言葉を考えてみたい。そして神の似姿としての人間という点を考えたい。宣教における他教派との協力と教会一致の展望、そして暴力と死の現実の中で、命を宣言する宣教という点を考えたい。

そしてこれらを考える上で、大変重要なのが教育、宣教教育の問題である。神の民に対する宣教のための教育が大変重要だ。

・宣教と文化の関係について、その文化が神の国の指標から見てどうかという点が重要。文化的伝統が人権を抑圧するならば、わたしたちはそれを受け入れることは出来ないだろう。文化が反福音的であるならば、それは変革されなければならない要素として対峙されるべき。福音は慰めそして裁くものだからだ。しかし、音楽のように文化そのものが信仰を奮い起して聖霊の働きを助けるものもある。西洋式の礼拝が人々の心を奮い立たせるとは限らない。文化の中に与えられているものを大切にすることだ。

・神学と行動の一貫性が大切。困難な課題に直面して、それを神の国の指標から判断して決断しなければならないことがある。信仰は自らを完全に保つことではなく人間になる過程といったボンヘッファーに賛成する。

アジアの中の
日本聖公会の青年

8／25～27にかけて行なわれたプレ青年大会の中で青年達自身の中から核の問題、従軍慰安婦の問題、在日韓国朝鮮人、被差別部落の人々への差別について等、私達の生活の中からの具体的な課題が出され、参加者同志の思いを分かちあうことが出来ました。これまで私達青年は、あまりに歴史を知らされず、また考え行動することを放棄してきたように思います。それはこの現代世界に希望を見出すことの出来ない青年の生き方の結果だと思うのです。私達は自分以外の人との関わりの中で人格が形成され成長させられます。私達青年は自分の生きている場がどういう場なのかを知り、どのように生きていけばいいのかを模索し始めています。そして様々な価値観に出会い、認め合い、豊かにされて来ています。

プレ青年大会においてアジアや世界中の青年達の活動に思いを馳せる機会が何度かありました。私達はアジアをはじめ、世界中の青年達と出会うことによって多くのことを問われ、自分たちの価値観が揺さぶられることと思います。私達は来年の青年大会のテーマを（仮称）「歴史（に○を）生活る教会青年～今、私・私達に委ねられているもの～」としました。95宣教協議会に参加している私は塚田司祭による主題講演とホン・マニさんの証言を中心とした夜の・祈りの・集いを通してアジアや世界の青年達と出会いたいという思いに強くかられ、歴史に対する責任を問われました。私達の生きている場を、最も抑圧されている人々の視点から見、キリストの奉仕の業に加われますようにということを願って、そして様々な価値観を受入れあう中で豊かにされることを願ってアジア青年大会実現に向けて世界中の青年達と計画出来たらと思います。

（小林　聡）

Breath of God

神の息

発題：２１世紀への展望

３０日午後、２１世紀への展望と題して５人の方からの発題があった。私たちはこれをどう受けとめたのか。もう一度ふりかえりたい。

＜「障害者」の立場から＞

日高実則さん：実習で静岡聖ペテロ教会に行った。ここには障害を持った方が幾人もいた。ある精神障害者は礼拝の前に鐘をつく。今日は聖書を読んで落ち着いて鐘がつけたとか、いい音だったとか、とても喜んで教会に来ていた。ここでは皆が自然体。障害者は保護の対象ではなく友達なのだ。子供にもお年寄りにもやさしい建物であれば、彼らが主体的に動け、教会は彼らが主体的にいられる場所になることができる。ゆとりがあってやさしい時間が大事。みんな共に生活して行けるのが共生。

＜環境＞

山田久美子さん：環境破壊はすべて産業革命以降のもの。人口が多すぎ、一部の人に富が集まることが問題。一部の富める人とはわたしたち。今、人口は５６億。富が集中し貧しい人弱いものがシワ寄せを受ける。公害問題でも、犠牲者は貧しい漁民、工場労働者。

日本の援助も問題だ。環境問題とはこれら全部を含む。加害責任は戦前戦中だけではない。海老の養殖などで多用される抗生物質によって菌が強くなり結果、再び中世の様な、伝染病時代が来るだろう。人は微生物の世界を壊してしまった。人類は２～３０年で８０億人。その時、まず貧しい人たちから食べ物が奪われる。これが私たちの未来の姿。これを何とか止めることが必要。

＜パートナーシップ＞

中尾貢三子さん：お人形さんのように自己主張しないできた自分。周囲の人も決まり切った「幸せ」押しつける。「あんたの幸せのためだよ」と。ある時自分で考えて行動しようとしたが手が動かない。「お人形」のリボンが首を絞めてきた。「しあわせのため」のリボンがどうしても苦しい。ある日！！「人形」をやめた。「人形」を叩き壊す時は痛く、血が出た。その時はじめてわたしは人間なんだと気付いた。「人形」を叩き壊した今、後悔はしない。あなたは「お人形」をつくっているか。リボンを首に巻いているか。「お人形」を叩き壊そうとしているか。壊すのを止めようとしているか。血が流れ出して痛いのをただ眺めているだけか。これらがすべてを、自分に無関係だと眺めているだけか。ひとりひとりの心の中に聞いてほしい。

三木メイさん：ある聖書の注解書に、へびは『女性が単純で誘惑に掛かりやすい』からエバを誘惑したとある。教会は聖書解釈で女性の尊厳を踏み躙ってきた。男性聖職者に問いたい。女性の人間としての尊厳を回復せよ。女性の命の回復、尊厳の回復、女性の霊性を認めよ。総会もほとんどが男性。会犠牲の重要性はどこに行ったのか。男のだれかがしりぞけなければ女は入る余地はない。自然に増えることを待つことではない。たくさんの大きな壁がある。わたしたちが力を失ってしまう現実が。女性の尊厳の回復に向かって働くひとたちと一緒に働くしかない。

＜障害者＞

佐々木道人さん：１６年前、３才の息子を事故で亡くした。教会の葬式で司式した妻の父は、こんなに悲しいお葬式は始めてと泣いた。キリスト教のぼうさんが本当に悲しんで泣き崩れ立ち往生していた。司祭の権威とは何か。苦しんでいる人と共に大胆に立ち往生出来る権威だ。共生は、共に死ぬということから始まる。わたしたちは立ち往生していいのだ。私たちが立ち往生したときにそれをネガティブに考えずにしっかり立ち往生しよう。そこから新しい命が始まるのだから。

「日の丸」を降ろす

昨日の昼すぎ、清泉寮玄関脇のポールに掲げてある「日の丸」が今回の参加者有志の手によって降ろされた。

天皇制・靖国委員長は「私たちが今この宣教協議会で真剣に取り組んでいる課題を、”日の丸”の下で行なうことは、あまりにふさわしくないな。大体、私たちの清泉寮に”日の丸”は似合いませんね」と語っている。

スタッフのひとこと

協議会／青息吐息／神の息▼御苦労様はいい／役立てて下さい▼この協議会での全会一致・文句なしの合意事項は、「スチュワードの皆さん御苦労様！！」でありましょう！▼主と共に死に／主に生かされて／まことの隣人に出会い／まことの隣人となれますように▼クールは岳でホットになりたい▼「<信徒の奉仕職と職制>を多くの方が読んで下さいますように。」▼ひとつひとつ／消化できたら／告白し／おのがもち場に／たずさえ行かん▼この素晴らしい協議会を計画準備して下さって関係者に感謝します▼日本中から、世界から集まった参加者の中心に主イエス様がおられるのを感じます。▼多くの人たちの愛に支えられこの協議会が開けたことに大きな感謝！

▼Be creative, be ready to be transformed by the power of Holy Spirit. ▼わたしたち一人一人が歴史を作っているのね。▼二つの基調講演大成功でホッ！▼ここちよいつかれをいやすため、Ｋｅｅｐの庭を歩く。協議会の成功という　たしかな果実を心の内に味わえるから・・・うたた寝に見た夢でした。▼本当に自分たちの生活と体験の中からの祈りと歌をもっとうたえるようになりたいですね。▼まだ、プロセス・されど、プロセス

ナイトハイク決行される

オプショナルプログラムとして企画された、夜の清里体験は激しい雨の中二名の参加者の熱意をもって決行された。案内人と共に約一時間森の中を散歩し、本当に真っ暗な闇の静けさを　堪能したようです。ただ、伯父さんばっかりのわびしさを補うため、缶ビール一本が特別配布され森の中でのソロ体験がさらにゆたかになったとさ。

いつビデオをみるの？

ロビーには３台のビデオが設置されている。事務局の考えでは、休み時間に「マギー牧師の証言」「沖縄線・未来への証言」等をみてもらいたいと企画。ところが、あまりにもスケジュールがきついため参加者から「いつビデオをみればいいの？」との声。せめてビデオ１本くらい見るスケジュールがあれば……。

海外ゲスト積極的に参加

今回の協議会には海外から１０名以上の参加者があるが、海外ゲストの分団では、塚田講演、ポビー講演をめぐって活発な話し合いとなった。また、各分団にも参加をして交流を深めている。また海外参加者たちから「何人かの主教、ことに主座主教が参加していないのはたいへん残念。」との声も上がっているという。

「清里に来たのです！歩きましょう」

３０日昼食の時、事務局からのお知らせがあった。「早めに帰る人はタクシーを利用してください。２時すぎの電車を利用する人はゆっくり山を歩いてお帰りください！」

昼食を終えた某大学総長は「要するにお世話はしませんよ、と言ってるんだなー」と事務局の真意を鋭く見破ったのでありました。

ポール・ラッシュ記念館

清泉寮の西側約１０００ｍの所にポール・ラッシュ記念館があります。聖公会の戦前、戦後の歩み、歴史でもある、同博士のキリスト者としての生きざま、行為、精神の一端が伺うことができます。是非お立寄りください。　　（正木）

全体会で議論は頂点に

今まで講演や証言、祈りを通して与えられてきた内容は、分団での真摯な協議を経て起草委員会へと託された。起草委員会は明け方まで作業を続けたが、これは十数人が集った十の分団が豊かに、深く取り組んできた事柄がいかに重く深いものであるかを証明している。語句の訂正もそこに表現される思いがあるだけに深刻だ。このまとめの作業は、協議会参加者たちのそれぞれの思いを反映するためのまさに産みの苦しみにほかならない。信徒が教役者が、我々の日本聖公会にこれほど真剣に関わろうとしている姿は胸をうつ。四日間の経験は完全ではないが、しかし確かな重みがある。ここでの経験を広く分かち合おう。その課題の中心は歴史への反省、日本聖公会の戦争責任の表明と懺悔だ。そのことを踏まえることの出来る教会の働きは、イエスと共に被差別者と共に歩もうとする「宣教する教会」として結実することだろう。

Like a Happines

協議会も三日目を迎え、参加者の表情からも疲労の色がぬぐいきれない３０日夜、分団最での熱いディスカッションの後「交流会」がメインホール食堂において開催された。「シックでアダルトな清里の夜」をテーマに演出されるはずの同交流会は、当初の予想と期待とは裏腹に「ディスコin清泉寮」と化した。

この一大イベントの文字どおり火付け役を幸か不幸か担ったのは日高実則氏。オリジナルの「Like a Happines」の演奏に入るや否や、会場にこだまする手拍子とダンスに雰囲気も最高潮。会場には「あの人が踊ってる」、「え、あの牧師さんがダンス？」との驚きとも疑問ともつかないつぶやきが囁かれた。面を喰らったのは司会進行役を無理矢理（イヤイヤ…）担当したＮ司祭とＹ執事。しかし参加者の楽しそうな表情に「まっ、いっか。」過密スケジュールの中にあって「清里の聖公会の熱い夜」はふけていったのでした.

編集部また大ミス

神の息　５号でお伝えした発題－２１世紀への展望において編集部のミスで発題者５名というお伝えをしましたが、正しくは6人です。申し訳ありませんでした。杣取司祭の発題を下に掲載します。

＜「障害者」の立場から＞

杣取司祭：今日の発題の中心は日高さんだが、佐々木道人司祭とわたしが、東京教区の「障害者」プロジェクトの仲間としてお話しする。

この協議会に高田馬場から日高さんと一緒に来て２日間過ごした。気になることは建物の階段の多さ、複雑さ。この建物自体は目の不自由な方にとって使いづらい。もうひとつは協議会の時間の問題ちょっとした移動に時間がかかるのでどうしても時間に少し遅れてしまう。これらのためだが日高さんは非常につかれている。この協議会がぱっぱと動ける人にとってしか参加できないプログラムになってしまっているのではないかと思ってしまう。

宣教協議会　吸う息、吐く息

あるスチュワードの告白

ある分団で、「今の気持ちを」、と聞かれた１君。「うーーん。プレ青年大会から、思ってるんやけど、今の自分ではあかんような気がする。何というか、地に足がついてないというか、、、。取り敢えずできることは、まず自分の教会からしっかりやっていこうかな、、、、」。言葉にならないうめきが、神様によって揺さ振られているんだなあと感じて１君のことが素敵に見えました。（J）

神の息編集部員ついにダウンか

３１日の朝から「神の息」のスタイルが変わった。
昨日から調子の悪かった神の息編集部員（鈴木）だったがついにダウン。編集作業ついにストップ！というわけにもいかず。虫の息編集部が３１日朝刊を受け持つことにした！？

グルメスポット　「これが本当のソバだ！」

「翁」長坂ー宮島・西田さんおすすめの店

清春白樺美術館（４号参照）の裏に、日本そばのおいしい店がありあす。「翁」という名前の店で、「黒」と「白」の二種類のみ。手打ちでとにかく美味しい。客の多くが関西・関東からと言う。協議会の帰りに寄ってみたい店の一つ。

宣教協議会に関わる人々　４

三木　メイ姉　　（京都教区　聖三一教会）にお話をうかがいました。
今回の宣教協議会で女性が男性の３分の１を切っていることをご存じかと思います。
メイさんは、女性の参加を大切にしたいと思うと同時に、青年の場も大切にしたかったそうです。
私（黒崎）の意見としては、青年にスチュワードという場をあたえて下さったことに感謝しています。
「私たちがこうして全国から一ヶ所に集まりました。私たちは点であり、つながりが線となる……点と点を結ぶと線となるからです。宣教協議会に来た人たちだけで終わらせずに、自分たちの場に戻って広められたらよいと思います。」三木さんの言われるように青年の私としても自分の場でこの宣教協議会での出来事を広めていきたいと思います。

根本さんありがとう

朝から晩まで深夜まで、この協議会の印刷を担ってくださいました。それが仕事とはいえ、本当にお疲れサマでした。ここで感謝の気持ちをこめてコマーシャルスペースをプレゼントします。

理想科学より一言

協議会おつかれさまです。リソグラフについて簡単にお知らせします。
1．速い・・・・毎分１２０枚のスピード
2．きれい・・・写真、細字も鮮明、裏写りもほとんどありません
3．簡単・・・・コピー感覚の操作性
4．安い・・・・１００枚のプリントだと一枚当たりわずか０．５円
（カウント料金はかかりません）

＜価格＞
シート機（ＧＲ１７０）　￥１１，５００－／月額（５年リース）
ブック機（ＧＲ２７１）　￥１５，７００－／月額（５年リース）
コピー（ｺﾋﾟｰ、FAX,ﾌﾟﾘﾝﾀの三役）　￥６０００－／月額（５年リース）
紙折機（Ｒ－３１Ⅱ）　￥１８５，０００－（買取）
＊理想科学は印刷機の専門メーカーで全国の約七割をしめています。

教会文書課　根本　政之

ハレルヤ 主と共に行きましょう！

スチュワードから見た宣教協議会

＜分団＞

・みなさんの熱意が伝わってくる話し合いだった。語るだけに終わらず、行動に移していければ・・・ぼくたち青年もしっかりと働きかけていきたいと思う。（分団C）

・自由な立場、自由な気持ち、自由な態度、自由な意見、教会がこうだといいなぁ。（分団H）

・みなさん一人一人が、すばらしい自己主張をもっているので色々な話が聞けていい勉強になった。（分団G）

・物事には、色々な視点からの見かたがあるということを強く感じた。（分団B）

・けっこう密度の濃い時間が続いた。さまざまの立場の人が集まって、その生活の座からの発言は説得力があるだけに、合意に達するのがどのくらいたいへんか、と。たった１３人でこれなんやから、総会提出までにいったいどのくらいの時間と根気と労力が必要とされるのか、と、気がとおくなる思いだった。But, continue to walk forward.（分団J）

・聖公会のさまざまな問題点が見えてきたように思います。この問題点を解決していくのが今回の宣教協議会の参加者に与えられた責任だと思います。ところで、今井烝治先生が分団の中で推薦された本　住井すゑと永六輔の「人間宣言」（じんかんせんげんと読みます。）はなかなかおもしろいそうです。私も昨日買ってしまいました。（分団E）

・教会は「運動体」だ！このことを強く感じた分団でした。しかし実際の教会には子どももいます。子どもも運動体の一員になれる共同体として教会が歩めるようになっていきたいです。そのためには難しい言葉や机上の空論ではなく、具体的に一人ひとりのその人らしさが大切にされているのかということに真剣に向かい合っていきたいです。（分団F）

・新聞の編集作業が忙しくなり、分団への参加は２９日のみでした。しかし、その内容はたいへんショッキングでした。とくに戦中の体験談をきくと、「自分の気持ちを人に伝えることができないのはとても辛い」と感じました。（分団D）

・議論の内容はさておいて、私自身も含め日本人は「議論の仕方」というものが、そもそもわかっていないと思った。　そのような教育がされてこなかったからなのだが、今からでも学ぶべきだと思うし、あとの世代への教育の方法を考える必要があると思う。
　以上のことは、そのまま教会の中にも言えるだろう。

・自分が足元ばかり見ていましたことに気づかされました。方向を見るために、顔を上げることを忘れていました。（分団I）

とっても「自己満足」な発題

中尾貢三子

昨日の発題の中で、視覚にうったえる形での発題をやった。白いちいさな人形、赤いリボン、リボンを人形に巻きつけて蝶々結びにすること、その人形を叩き壊すと赤い液体が流れだすこと。すべて、これは目の見える人間のことしか考えていない発題であった。このことに対して、日高さんは、解説してくれる人がいたから、今回はわかった、とは言ってくださったが、発題者としては、今後に大きな課題を残すことになった。

「戦争を知らない」わたしたち？

中井珠恵

昨日の交流会は、たいへんお騒がせいたしました。シックで、アダルトな雰囲気をすっかりかえてしまいました。しかしこのように感じたことをそのまま表現できるのは、私たち青年の持ち味であろうかと思っています。来年そんな青年たちが全国から集まる大会を開くことになりました。「歴史に生きる教会青年（仮）」をテーマにしようと考えています。私たちの後ろにある日本の歴史を、一人ひとりが、目で視、耳で聴き、肌で触れ、鼻で匂って？そして心で感じ、自分たちが立っている場所にしっかりと足をつけて歩んでいきたいです。そしてもう私たちは「戦争を知らない！」と胸を張って言わないようにしたいです。なぜなら私たちの歴史なのですから。

藤井さんがおっしゃったように二度と途切れることなく青年が集まっていきたいです。そのはじめの一歩を踏み出していきましょう。

◇キリスト教新聞

—95年9月16日・2454号— から

日本聖公会は八月二十八日から三十一日まで、山梨・清里の清泉寮で「日本聖公会の宣教歴史への責任と二十一世紀への展望」を主題に宣教協議会を開催した。各教区から協議会に参加した約百八十人の参加者たちは、戦中から戦後にかけての日本聖公会の歴史を検証するとともに、次世紀に向けた宣教の本質などについて協議、最終日の三十一日に戦争罪責の告白を盛り込んだ宣言文を採択して閉会した。

この宣教協議会は日本聖公会の七つの委員会が提案し、昨年の総会で開催を決議したもので、沖縄教区の仲村實明主教が会長を務める。協議会には司祭や信徒ら約百八十人が参加し、仲村主教のほかに竹田眞(東京教区)、高野晃(大阪教区)、古本純一郎(神戸教区)、飯田徳昭(九州教区)の各主教も参加した。協議会初日に「日本の歴史と宣教理解」と題する主題講演を行った塚田理司祭(立教大総長)は、日本聖公会が戦時中に「皇国聖公会」として神社参拝に協力し、「天皇のための祈り」を祈祷書に盛り込むなど当時の国策に迎合したことに言及しつつ、戦後もこの祈りを祈祷書から削除せず、反省を怠ってきたと指摘し次のように語った。「日本聖公会は神ではなく国が示す地に赴いた。(戦後も)教会の拡張と発展のみに集中してきた。これは、『植民地的教会』の体質の継続でしかない。日本聖公会は非主体的に問題に直面することから逃避し続けてきたが、教会としての使命一を回復し、歴史に向き合い、戦争責任を明確にしなければならない」この主題講演を踏まえ、二日目には四人の発題者による問題提起と分団での話し合いが行われた。発題者の一人、立教大学大学院生の相原太郎氏(逗子聖ペテロ教会信徒)は、横須賀市の立教大原子力研究所が米国聖公会ワシントン教区の寄贈によるものであることを報告。さらに米国聖公会の「原子炉奉献のための祈り」なども紹介し、参加した信徒たちからは驚きの声も聞かれた。ほかにも教育や天皇制の問題、資本主義社会の問題といった視点から発題がなされた後、参加者たちは分団ごとに提起された問題や各教会の課題などについて話し合った。また、協議会三日目にはWCC(世界教会協議会)の神学部門を担当しているジョン・ポビー司祭(ガーナ聖公会)が特別講演を行い、同氏自身の宣教論や宣教理解、そして現代における宣教の課題について「あらゆる場を変革するために」と題して講演した。ポビー司祭は「宣教はイエス・キリストの出来事の告知であり、神の国の建設である。これらは内側に集中しつつ、外側に向かっても進められ、内と外とを包括するものであることが宣教にとって大切なことである」と語り、個人の内面だけでな

1995年9月16日 第2454号

日本聖公会宣教協議会

聖公会の戦争責任を検証

「戦後も根本的反省なく…」

告白と謝罪を表明する宣言文作成

キリスト新聞

キリスト新聞社

く、外側にある社会のすべての場を変革することが宣教であると語った。そして、最終日の三十一日、講演や発題、各分団での話合いをまとめた宣言案が提出され、参加者全体による協議の結果、宣言案に加筆と訂正を加えたものを「宣教協議会宣言」として発表した。宣言では、日本聖公会の歴史を振り返り、教会としての預言者的務めを果たし得なかったことを明記。戦後の歩みについても、「根本的な反省をいまだ表明していない」と記し、これらの罪責を神のみ前に告白するとともに、被言国の人々への謝罪と懺悔を表明している。そして、宣教課題の中心に人権・正義・環境の問題を据えて、これらへの取り組みのために教会間、教区間のネットワークを形成していく必要性を訴えている。

なおこの協議会の宣言の内容は、来年五月に開かれる総会に議案として提出される予定。

◇聖公会新聞

—95年9月25日・500号—から

八月二八日から三一日までの四日間、山梨県清里のキーブ清泉寮を会場に95年日本聖公会宣教協議会が開催された。この協議会には全国から聖公会の聖職者、信徒、関係団体、またNCC（日本キリスト教協議会）、日本カトリック教会、海外からは米国聖公会、カナダ聖公会、英国CMS、英国USPG、フィリピン聖公会、大韓聖公会等、総勢一八二名が参集した。協議会では、戦後五〇年を節目に、大戦中における日本聖公会の戦争責任の取り方や近隣アジア諸国に対する謝罪内容の在り方、戦前戦中における日本聖公会の歴史的検証等多岐にわたる課題が検討された。

第一日目の午後七時から、立教大学総長塚田理司祭による主題講演「日本の歴史と宣教理解」が行われた。師は、戦時中天皇制国家主義教育が当時の政府の国家権力の巧みな政策によって教会ならびにキリスト教学校の思想を踏みにじり奪ってしまったことに言及し、戦後も国家による管理教育が続いていると指摘。また、日本聖公会のこれまで歩んできた歴史についても基本的には天皇制国家権力によって押収されてきたと言っても過言ではないし、戦時中は「皇国聖公会」のもとで神社参拝に協力したこと、「天皇のための祈り」を祈祷書内に盛り込んだことや、戦後もこの祈りを削除しないままでいたことに言及。「日本聖公会も国策へ迎合したことへの反省が十分なされていない。このことを通して何よりも歴史への検証がなされるべきである」と語った。

The Seikokai Shimbun　1995年9月25日

聖公会の歴史を検証
次世代への宣教展望
清里清泉寮に一八〇人参集

八月二八日から三一日までの四日間、山梨県清里のキーブ清泉寮を会場に95年日本聖公会宣教協議会が開催された。この協議会には全国から聖公会の聖職者、信徒、関係団体、またNCC（日本キリスト教協議会）、日本カトリック教会、海外からは米国聖公会、カナダ聖公会、英国CMS、英国USPG、フィリピン聖公会、大韓聖公会等、総勢一八二名が参集した。

協議会では、戦後五〇年を節目に、大戦中における日本聖公会の戦争責任の取り方や近隣アジア諸国に対する謝罪内容の在り方、戦前戦中における日本聖公会の歴史的検証等多岐にわたる課題が検討された。

第一日目の午後七時から、立教大学総長塚田理司祭による主題講演「日本の歴史と宣教理解」が行われた。師は、戦時中天皇制国家主義教育が当時の政府の国家権力の巧みな政策によって教会ならびにキリスト教学校の思想を踏みにじり奪ってしまったことに言及し、戦後も国家による管理教育が続いていると指摘。また、日本聖公会のこれまで歩んできた歴史についても基本的には天皇制国家権力によって押収されてきたと言っても過言ではないし、戦時中は「皇国聖公会」のもとで神社参拝に協力したこと、「天皇のための祈り」を祈祷書内に盛り込んだことや、戦後もこの祈りを削除しないままでいたことに言及し、「日本聖公会も国策へ迎合したことへの反省が十分なされていない。このことを通して何よりも歴史への検証がなされるべきである」と語った。

また、日本聖公会のこれまでの歩んできた歴史については基本的には天皇制国家権力によって押収されてきたと言っても過言ではないし、戦時中は「皇国聖公会」のもとで神社参拝に協力したこと、「天皇のための祈り」を祈祷書内に盛り込んだことや、戦後もこの祈りを削除しないままでいたことに言及。「日本聖公会も国策へ迎合したことへの反省が十分なされていない。このことを通して何よりも歴史への検証がなされるべきである」と語った。

主題講演の後、午後九時からは祈りの集いの中で、洪曼姫（ホン・マニ）さん（大韓聖公会）による証言がなされた。ホンさんは、「私は現段階では日本のこれまでの韓国に対する謝罪について、何を謝罪すべきかも不明確な状態での謝罪では無意味であるし何よりも日本国民が自分たちが何を何故謝罪すべきかもわからない状態で謝ることは納得できない。」と語った。

二日目は午前九時よりA～Jの一〇班の分団協議に入った。

分団の後、井田泉司祭の〝「正議を行う」ことへの召し〟というテーマで聖書研究が行われ、旧約聖書の創世記一八・一八－一九、イザヤ書一一・一～五その他エレミヤ書を主なテキスト箇所に選び学びの時を持った。

午後一時から、「歴史を生きる教会」というテーマで仲村實明主教、岩井梅代、清公一、相原太郎各氏による発題が行われた。この中で清氏は、今日の受験体制の中で、学生たちが近・現代の歴史を学ぶ機会を実質的に奪われている現状が報告された。

夜のセッションでは祈りの集いの中でフィリピン聖公会総主事のレックス・レイエス司祭による証言が行われた。師は、「カトリック国フィリピンで少数派である聖公会は、山岳州を中心にこれまで宣教を行ってきたが、イゴロットに代表される山岳民族はフィリピンでは被差別者として扱われている。私は現在これらの少数者の人権問題に取り組んでいる」と語った。また、師は自分自身と過去の日本との関わりについても語った。大戦中の日本軍、パターン死の行進、現在においてもフィリピンでの戦闘で犠牲になった現地人の遺骨や遺品の展示見学や、その当時の記憶を話すことを拒否する日本人観光客の実体、漁場から日本の消費者向けに根こそぎ魚を奪っていくトロール船の話に及んだ。

三日目の午前九時からは「あらゆる場を変革するために」というテーマでアフリカ・ガーナ聖公会司祭ジョン・ポビー師の特別講演が行われた。ポビー師は講演の中で、「宣教はイエス・キリストの出来事の告知であり、プロセスであり、非常に忍耐を必要とし、神を待望する過程である。宣教の定義はもろもろの共同体の中の共同体を建設することであり、その共同体はキリストの弟子たちを作っていくことである。また、宣教というのは個人の内面部のみならず外面部にある社会の全ての場を変革するものであり、包括的なものでれければならない」と語った。その後特別講演を受けての分団での分かち合いが行われ、「二一世紀への展望」と題しての発題があった。発題者は、日高実則（東京教区聖職候補生志願者）、山田久美子（日本YWCA常任委員）、三木メイ（女性司祭の実現を検討する委員会委員）、佐々木道人（聖路加国際病院チャプレン司祭）各氏で、環境問題、障害者問題、女性聖職問題等をそれぞれの視点から語った。三二日目の最後の夕食では交歓会の一時が持たれ、日高実則氏らの楽器演奏も行われ親睦の時が持たれた。協議会は八月三一日午前の全体協議の後、宣教協議会宣言文が発表され閉会礼拝を持って正午に終了した。

（宣言文については次号に全文掲載予定）

アンケートの声

誠に充実した企画、内容でした。私個人の無意識に犯していた罪、知ろうとしなかった罪、おこたりの罪を心から懺悔します。今後の信仰生活、教会生活、宣教活動の中で、今回学んだことを活用し、神の民の宣教共同体として、いきいきするよう頑張ります。

シッターの立場としての大変さはもちろんありますが、それ以上に何より子どもたちへのシワ寄せを懸念して提言したいと思います。ベビーシッターというものを設けるのであれば、事前に人数、年齢、個別の把握のもとに充分な準備ができること、人数に応じて必要人員を確保することなど、子供への負担のかからないような態勢は不可欠であると思います。大きな協議会にとっては小さなことかも知れませんが、大事なことの一つではないかと思います。

礼拝式文・さまざまな祈り・賛美の歌をいただき、今後教会やさまざまなところで活用したい。準備してくださった方々に感謝します。朝の祈り、夕の祈りの方法は女性の感性を取り入れてなされたようです。私たちもお手本にさせていただきたいと思いました。

宣教協議会に参加できましたこと、大きな喜びです。とにかく「しっかり聞いて来よう」との思いで来ました。次々と届く資料をしっかり読みました。そして私は、私の思いと違う面を見つめ、少しとまどいを感じたのも正直な思いです。宣教とは何か?私はこれからどうしたらいいのか?私の心はここに参加するには不適当…等々清里へ来るまで迷いの思いで一杯でした。一日一日と少し過密なスケジュールを一所懸命学びました。私と違う面、反対の思い…と言って逃げていてはいけないと思いました。私の心は少しづつ解けていき、少しづつ理解することができました。苦しみ悩む人、部落差別、韓国問題。障害を持つ人、この隣人の痛みを分け合いたい。そしてこのみんなの総意は行動に移さねば…という思いでおります。キリスト者として当たり前のことと思います。しかしもう一つ私には思いがあります。天皇制、戦争責任、アジア問題、その他、こうした共に集い共に痛みを分け合うのはもちろんのことですが、大切な教会、宣教21世紀に向けて、しっかりと足下を見つめることも大切と思います。この会議が上記のことだけである思いがしました。教会で反対の意見を持っている人のことも考えてあげてほしいものです。教会の高齢化、日曜学校、聖書の学び、他いろいろ、もっともっと堅実に考える問題があると思います。信仰を宣べ伝えるということは上記のことだけではないと思います。地に足をつけて教会を考えることも宣教と思うのです。違うでしょうか?

来るまではこの協議会にかなり悲観的に思っていました。総会決議であるにもかかわらず、半数に満たない主教しか出席しないということは何を意味するのだろうか…そこで語り合われることは日本聖公会のこととして認められるのだろうか…などなど。けれども三日間の学びと語らいの中から見えてきたことは、とにもかくにも、ここに集まって来た者たちにとって私たちの歴史を直視し、何が誤りであり、そのために赦罪することは何であるか、またそれを阻んできた、そして今もいる、ものは何であるか、かなりよく見えてきたと思います。ですから、このことを第一歩として、この協議会での共通の認識と決意を(全)日本聖公会に向けて発信すること、公のものとしても、

私自身が教会の一人一人に語りかけることによって歩み始めることが大切と考えるようになりました。教会の中のpartnershipということについての語り合いが少し足りなかったのでは?というのが私の思いです。でも時間の制約でやむを得なかったのかも知れません。ここに来なかった、来れなかった聖公会員にどのようにmessageを送り続け、全体の合意を得、行動に移していくことが最大、そして最も困難なことに思えます。

この協議会で参加者一人一人が率直に思いを語り、聞くことができたと思います。宣教のプロセスの中でそれぞれの場で充分に聞き、勇気を持って語ることができるよう、日々願い求め、また大胆に行動してゆきたいと思います。

参加する前はどのような宣教協議会になるのか全くよそうもできませんでしたが、参加していく中で21世紀へ向けて日本聖公会が新たなる歩みを始めることができるようになる第一歩を示す会議であったのではないかと膚で感じました。この宣教協議会で作った戦責告白文が日本聖公会の戦責告白となって実現する日が一日も早く来ることを祈ります。

協議会が終わってから新たな取り組みを始める務めが待っています。教区、教会で、自分の場で、21世紀に向かっての宣教をどう語り、仲間を増やし、連帯の輪を造っていくか課題は多くまた困難さが待っています。ここに集う人々のために祈りに支えられることが一層必要です。どうぞ互いに祈り合い支えられる協働が始まりますように。また対決ではなく対話の関係を造り出すことが出来ますように。これからのプロセス、待望しつつ、忍耐のうちに務めたいと願っています。

田舎から出てきた者にとっては(一信者として)中央との問題意識の差に驚きました。私たちの勉強不足も悪いが、もっと信者どうしのネットワーク作りが大切に思います。戦争赦罪の問題では決して戦後生まれの者は責任がないとは言いませんが、当時の体験者からこそ真の赦罪の声があがるべきと思います。また女性司祭問題にしても普通の女性信者が第一に考えるべき問題であり、賛否いずれにしてもそのことを小さな教会に至るまで問題意識を高めるように盛り上げていくべきと思う。いづれにしても声をあげないところに発展はないし変革もない。一番残念に思ったのは首座主教様はじめ何人かの主教様がおいでにならなかったことです。このような重要なイベントには是非出席していただくことをお願いしたい。

実行委員長、事務局、管区事務所職員、その他の皆様の周到な準備と奉仕とによって有意義な協議会が無事終わることができ感謝しております。そこで話し合ったこと、ことに自分が主張した事柄を良く記憶され、そのおかれた教会と地域社会において実行することがこれからの私たちの課題と思っております。このような会が日本聖公会の総会の決議によってその支援によって開くというようなことではなく、提唱者が広く聖職、信徒に呼びかけ、自主的自力的に行うようにしてはどうかと思う。従って、協議会の会長やチャプレンを形式的に主教を立てるということもは出来るとしても考えるべき事柄だと思う。いずれにしろ、ここに集まった問題意識を明確に持ち、現在の教会機構の変革の必要性を感じておられる私たちが、その所属する教会、教区において積極的かつ大胆に発言、行動を起こ

すことが何より大事であろう。主教の出席が少ないことが問題になっているが、もちろん出席すべきだとは思うが、宣教協議会の方でももっと積極的に出席を要請し、主教と共にこの協議会を持つプログラムが必要であったのえはないかと考える。

歴史認識について戸惑い複雑な心境も語られ、その中でも現実を見つめ赦罪しなければならないという戦前派の方々の話、痛みを覚えつつ、神に従うための選択であると思いました。女性の参加も多かったが、婦人会が（団体として）これからの宣教を考えるこの場に出ていないのが残念であった。婦人会もこれからの宣教団体としての道を模索している時、聖公会全体と共に歩めたらと思う。小さいお子さん連れの参加者がいた。どのような会議にも子どもを連れて集まれる環境があれば若い女性（子どもを育てる人）の参加が増え、信仰の継承も自然になされるだろう。また若い女性も母親の声を反映してもらいたい。青年達の協力に心から感謝します。その力、大でした。

今回スチュワードとして多くの青年が参加できたことが良かった。参加費五万五千円は青年にとって負担が大きすぎます。もし未来を語るなら青年の存在ははずせないし、若い人を育てるにはお金と多くの人の支えが必要です。今回多くの若者と歴史に触れ、考えさせられ、揺り動かされました。貴重な体験です。どうかこれからも青年を支えて欲しいと思います。

分団での話し合いは、日を追うごとに深い話し合いが出来て嬉しく思います。参加した者一人一人がここでの学びをこれからどのように生かしていけるか、重い課題です。最後の夜に歌われた青年たちの「歴史の歌」、感動しました。あの青年たちに期待したいと思います。

歴史の反省も大事ですが、次の時代を目指してどう進むかよく考えなければならないわけですが、21世紀まで5年、この間の全聖公会のプログラムをたてて運動していくことをやるべきです。今回を起点として。

日程はとってもきつかったが内容の濃い協議会であったと思います。なかなか方向を変えたり新しくなるには時間がかかると思いますが、ぬるま湯につかっているのが赦されなくなったように思います。しかし神の真実に生きようとする人々の熱意には関心していますし、怠慢な自分も今回はとっても知らされたように思います。これからどういう方向に進むかわかりませんが、今回の協議会のことを忘れずに心の中にしまい込んでおきたいと思います。

このたびの協議会にお招き頂いたことを大変嬉しく思います。私は今回の協議会の過程で得た教訓を韓国の聖公会の信者とともにわかちあうつもりです。特にこのたびの協議会を通して日本聖公会の皆様と、個人的な深い交わりを分かち合うことが出来たことも大きな収穫です。協議会に対する私の意見は次の通りです。

①このような協議会を継続して開けば良いでしょう。そして歴史の被害者から直接証言を聴くことと、理論的で体系ある過去の歴史についての教育プログラムが必要です。

②礼拝はとても印象的で特に手話で通訳するのがよかったと思います。

③参加者たちが真摯、誠実にすべてのプログラムに参与したことに対して賛辞を送ります。

④進行チームが全て若い世代に変わったのを見て今後に大きな期待を持ちます。

⑤交わりを分かち合える時間がもう少し長ければ良いでしょう。そして主題を単純化し、もう少し深みのある研究と省察の時間になるようにすれば良いでしょう。

⑥全体的に見るとき本当に素晴らしい(A+)協議会です。

◇資料紹介◇

—参加者資料—

これらの資料は参加者の皆さんに配布されたもので、残部はありません。コピー等を利用して活用してください。

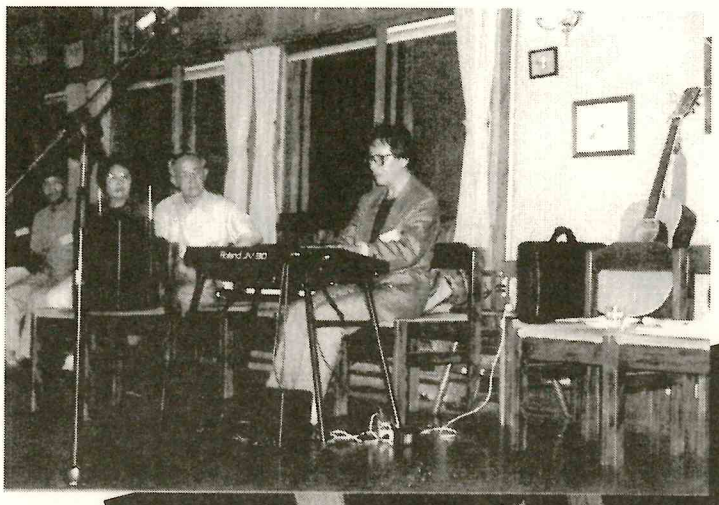
歴史を生きる教会　ワークブック
21世紀への展望　ワークブック
祈り　～さまざまな機会のために～
賛美のうた

—その他の資料—

主よ、御もとに立ち帰らせてください　I
—私たちの歴史と福音理解—
(聖公会管区事務所　500円)

主よ、御もとに立ち帰らせてください　II
—罪責問題を中心に—
(聖公会管区事務所　500円)

変容を起こさせるヴィジョン・ACC—9 1993
—神の世界の苦難と栄光—
(聖公会管区事務所　1300円)



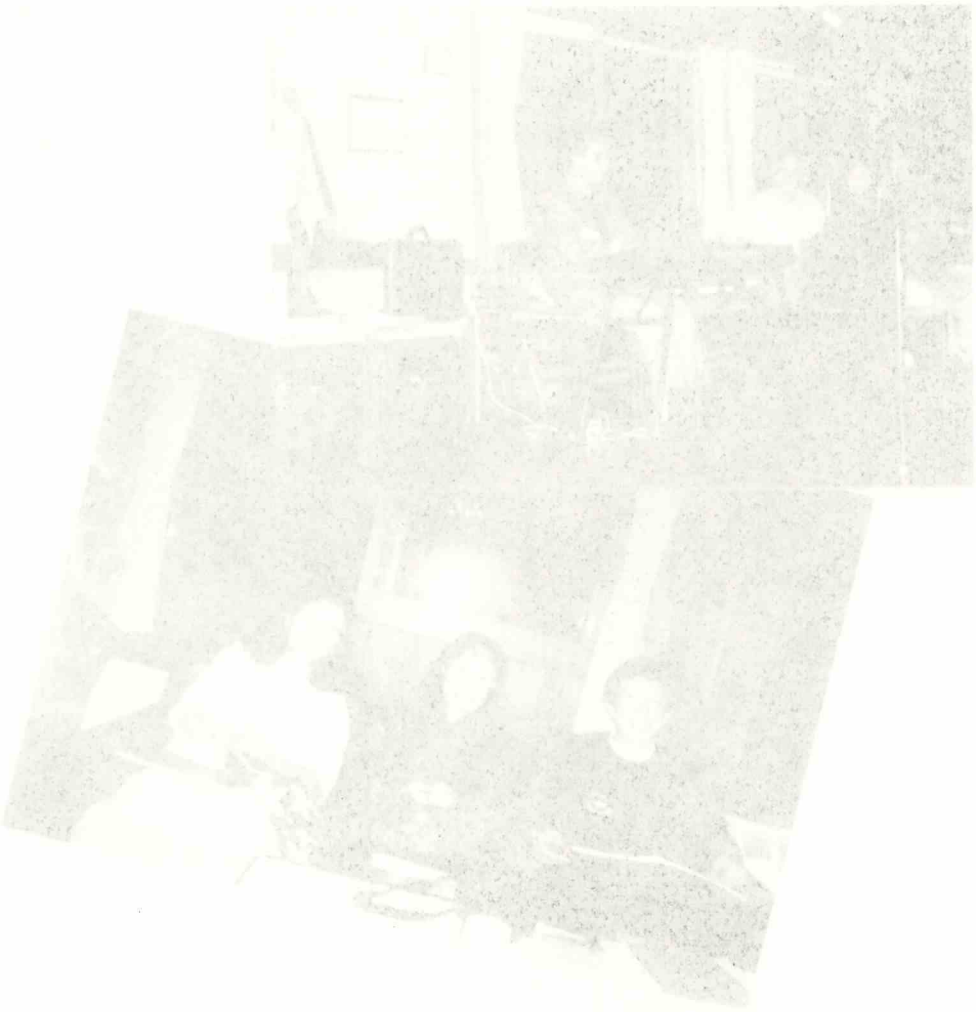
‘95年宣教協議会

日本聖公会の宣教

—歴史への責任と21世紀への展望—

報　告　書

発行年月日　1995年11月20日　(1500部)
編　集　　日本聖公会‘95宣教協議会実行委員会
発　行　　日本聖公会管区事務所
〒162 東京都新宿区矢来町65　☎03－5228－3171
FAX03－5228－3175



歴史への責任と21世紀への展望　95年宣教協議会報告書

日本聖公会管区事務所